
オモイノチカラ

ブナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイノチカラ

【Nコード】

N1004X

【作者名】

ブナ

【あらすじ】

とある不思議な力を持つ少女サリア。ある日、彼女が謎の人間たちに攫われてしまう。幼なじみであるカリクは、旅立ちを決意し、彼女を助けに町を発つ。

彼女の力に隠された秘密は何か。そして、カリクはサリアを助け出すことができるのか。

“心の力”を巡る、ファンタジー。

(以前モバゲーに挙げたものの大幅改変したものになります)

プロローグ 『幼き日の記憶』 (前書き)

・呼んでる。俺のことを、呼んでる。・

プロローグ『幼き日の記憶』

小さな町の中心に、広場があつた。真ん中には噴水があり、地面には全面に白のタイルが敷き詰められている。夕焼けの赤に染まっていた。昼間は賑わうこの場所も、親と一緒に子供たちが帰りだす時間となると、人影はまばらだった。

子供たちが帰っていく中、噴水の前に、まだ五歳に届いていない少年と少女がいた。二人も、親の迎えを待っていた。少年の方が口を開く。

「あか。サリアは“か”だよ」

しりとりをしていた。サリアと呼ばれた少女が、口元に手を当てて、考え込む。

「じゃあねわたしはね……」

彼女は長く黙り込んだ。しばらくしてから、隣に座る少年の方を向く。

「どう、カリク？」

少女は少年の名前を呼んだ。しりとりの解答はない。そのはずなのに、

「カラスかー。じゃあ“す”だね」

しりとりが、続いた。少年が一人で勝手に進めているわけではない。しかし、少女はしりとりの返事をしていない。少女は、口に出さずに自分の解答を少年に伝えたのである。トリックがあつたわけではない。それが彼女の『力』だったのだ。二人共、まだその異常さに気づいていない。少年は、彼女が他の子供から避けられていることも理解していなかった。子供たち本人の意志ではなく、その親の意志なのだが。

二人の両親ももちろんその異常さを知っていた。ただし他と違っていたのは、彼らはその『力』の正体も知っていることだった。

「ねえ、カリク」

「なに、サリア」

「わたし、このあいだこわいゆめをみたんだ」

少女は不安そうな顔をしてうつむいた。

「どんなゆめ？」

少年が尋ねる。彼女の顔を覗き込んだ。

「ひとりぼっちになったゆめ。カリクといっしょにいたのに、だれかにひっぱられて、なんにもみえないまっくらなところにおいてかれたの」

声が震えていた。思い出した光景が怖ろしかったのか、彼女は自分の身体を抱きしめる。

「だからね、わたし、いまもこわい。くらいとくに、ひとりぼっちになっちゃいそうで」

目に、涙が溜まっていた。

「だいじょうぶ！ そのときは、ぼくがサリアを助けてあげる！」

そんな彼女に対し、少年は立ち上がると、本で見たヒーローの動作を真似してから、大きな声で言い切った。

「ほんとに？」

「ほんとに！ サリアがひとりのときは、ぜったいたすけてあげる！」

「じゃあ、ゆびきりしよう？」

少女が小指を立てて、少年に向かって出した。

「うん！ やくそくするよ」

少年も小指を絡めて応える。

「ゆびきりげんまーうそついたら、はりせんぼんのーます。ゆびきつたー！」

指を離し、子供たちは笑い合った。それから、しりとりを再開する。

これが、カリク＝シェードという少年の、一番古い記憶だった。

一章『招かねざる者たち』

学生で溢れる放課後の通りで、金髪黒目の少年が空を飛ぶ鳥を見ていた。足を止めて、目で動きを追う。そのうち鳥は見えなくなつた。

目標を見失い、カリク「シールドは前に向き直つた。生まれつきの金色の髪は、肩には届いていないが、前髪が目にかかつている。その間から、黒い目が覗いていた。体格はやや小柄。ただし、体つきはしつかりしていて、非力ではない。年齢は、今年で十七になる。高等学校の生徒だつた。明日からは夏休みが控えている。

周りの学生が通り過ぎていく中、立ち止まっているのは、人を待っているためだつた。ほどなくして、後ろから声をかけられる。

「カリク、何してるの？」

振り返ると、空を思わせるような青い瞳が、カリクの目に映つた。同い年で幼なじみである、サリア「ミュルフのものだつた。肩より長い黒髪を風になびかせている。カリクには及ばないものの、女子にしては背丈は高い。穏やかで柔らかい雰囲気を纏っていた。

目の合つたカリクは、うつむき気味になりながら、問いかけに答える。

「ちょっと用事があるから、待つてたんだよ」

「用事つて、私に？」

首をかしげたサリアに対し、カリクは頷いた。黒髪の少女が、苦笑する。

「わざわざ帰り道の途中で待たないで、学校で言うてくれればよかったのに」

「帰り出してから思い出したんだよ。だからここで待つてただけだ」
少し、口調を強くする。これは嘘だつた。本当は覚えていた。むしろ、一日中頭にあつた。

「じゃあ、そういうことにしといてあげるね」

それを察したのか、サリアはもう一度笑った。

「じゃあつて……。まあ、いいや。話は帰りながらするよ」

カリクは肩をすくめてから、歩き出した。サリアも横に並ぶ。カリクは、ほんの少しだけ間を空けた。

二人は家が近かった。しかし、最近はまだ一緒に帰っていない。原因はカリクにある。難しい理由ではない。ただ、気恥ずかしいからというだけのことだった。

カリクたちの住む国は、ラスタージ共和国という。世界に三つある大陸の一つにあり、その大陸の中では一番大きい国だった。三方が別の国と隣り合っているのだが、唯一南側は海と面しており、他の大陸との貿易も行われていた。

ラスタージ共和国は五つの都市を中心に発展している。東のニケア、西のルクス、南のレンバー、北のミリシアはそれぞれ東西南北の大都市だった。中央に位置する首都セルゲンティスは、さらに巨大な都市である。

二人が住んでいるのは、ニケアの近くにあるキュールという町だった。

「それで、用事って何？」

サリアが話を振った。黙り込んでいたカリクが、口を開く。

「そのまあ、明日から夏休みだろ」

「そうだね」

「その前に言っておきたいことがあってな。一回帰ったら、“例の場所”に来てくれないか」

「いいよ。帰って着替えたら、すぐ行くね」

「ああ」

カリクがうなずき、また口を閉ざす。サリアが呼びかけてきた。

「カリク、色々話そうよ。最近、あんまり話してないし」

彼女はカリクを真っ直ぐに見つめてきた。口元には、穏やかな笑みを湛えている。カリクは、拒否できなかった。目は合わせずに、頭をかきながら、返答する。

「……そうだな」

「ありがと、カリク」

お礼を言われ、彼は頭をもうひとかきした。

それから二人は、他愛のない話をしながら、家路を歩いた。

カリクとサリアの後方に、人影があつた。ポロシャツにジーンズという簡単な私服を着た、二十代くらいの男である。細心の注意を払いながら、二人を付かず離れず追っていた。誰にも聞こえないようにつぶやく。

「あれが今回の任務の目標か。本当に力なんて持つてるのか？」

視線がサリアを捉える。男の目的は、彼女にあつた。しかし、続けてカリクにも目を向ける。

「それに、カリクか。あれが、あの人の息子なわけね」

ぶつぶつ言いながら、男は尾行を続けた。

カリクとサリアの家は、すぐ近くだった。先に彼女を家まで送った後、カリクは急いで自宅へ帰った。玄関のドアを勢いよく開けると、

「おお！ 帰ったか、カリク」

坊主頭の老人がいた。カリクは一瞬動きを止めてから、おもつきりドアを閉め、ノブを強く握った。内側からガチャガチャと回されるが、必死に抵抗する。

「おい、カリク！　なんでドアを閉める！」

老人が叫び声の中から聞こえてきた。こちらは努めて冷静に返す。

「うるせえよ、ジジイ。今度は父さんに何を頼まれてきたんだ」

「誰がジジイじゃアアア！」

さらに大きな声が上がった。ドアの内にいる老人は、トルマ＝シエード。カリクの祖父であった。

「だいたい、今日は話をしにきただけじゃー！」

「父さんに頼まれたのは否定しないわけな」

テンシヨンの落差が激しいやりとりは、しばらく続いた。

トルマは、元軍人で現役を退いてからも、数年前までは軍属で、次世代の指導をしていた。カリクの父であるニツク＝シエードも軍人なのだが、指導側になる前からトルマは彼に軍人としての教育を施していた。その成果なのか、ニツクは現在進行刑でエリート街道を進んでいる。

そんな祖父を、カリクは苦手にしていた。理由は、父が受けた訓練を自分もさせられたからである。時たまやってくるたびに、指導された。幼い頃は疑問も抱かずに従っていたが、成長するにつれて嫌になっていった。父のことは嫌いでなかったが、彼は軍人になる気などなかった。祖父の指導が苦痛になったのである。ただ、数年前にカリクは“ある問題”の存在を理解したため、拒否することとはなかった。抵抗は、多少するが。

祖父との小さい戦いは、母のマリー＝シエードの介入により、終了していた。結果として、

「まったく。目上をなんだと思っとなるんじゃ」

カリクはトルマから小言をもらっていた。

「まあまあ、お義父さん。それくらいにしてあげてくださいな。ほら、カリクも謝った方が早いわよ」

マリーが割って入る。栗色の短髪で、背は女性の平均より低い。物腰は柔らかかった。

「悪かったよ。でも、今日は訓練はなしにしてくれ。友達との約束があるんだ」

母のフォローに乗っかり、カリクはそう訴えた。早くしないと、サリアを待たせてしまう。

「なんじゃ、用事があるのか。それを早く言え。人を待たせるのはよくないからの」

「ありがと、じいちゃん」

引き留めてたあなたには、言われたくない、と思っていたが、口には出さなかった。

「あら、お友達と遊びに行くの？」

マリーが首をひねる。

「まあ、そんなとこだな」

カリクは曖昧に答え、約束の相手がサリアであると、言わなかった。彼女のことは母と祖父もよく知っているので、変につつかれたくなかったのである。

「そう。あんまり遅くならないようにしなさいね」

「それ、高校生の男に言うか？」

「高校生でも子供は子供だもの。男の子は男の子で、危険はあるのよ」

カリクがつっこむも、マリーは涼しい顔で返した。肩をすくめる。ただの男子高校生でも首をひねる言葉ばかりか、彼には普通の高校生と違う部分がある。上の服を被せることで今は隠れているが、脇腹に“それ”はあった。強制的に祖父に持たされているものである。といっても、母は存在を知らないなので、それで反論しようとはしなかった。

「とにかく、着替えたらすぐに行くから、話は帰ってからにしてくれ」

「分かったわい。早く行ってこい」

トルマがしっしつと手を振る。カリクは肩をすくめて、自分の部屋に向かった。二階にあるため、階段を上がっていった。

カリクを見送ってから、トルマとマリーが話を始める。

「何か知りませんが、よかったですか、先に話さなくて」

口火を切ったのはマリーだった。トルマは肩をすくめてみせる。

「大丈夫じゃろ。約束を破らせるわけにもいかん。帰ってきてから、ゆっくり話す」

「そうですね。なら、いいですけど」

トルマの返答に、マリーはあっさり退いた。別の話題を始める。

「そういえばのう、ニツクの奴、首都から遠ざけられたそうじゃ」

「えっ？ どこに行かされたんですか」

寝耳に水で、マリーは目を見開いた。ニツクは、トルマの息子であり、マリーの夫である。彼は長く首都軍勤務をしていたので、マリーは他に移るとは思っていなかったのである。

「東都市のニケアじゃ。異例の若さでの少将昇進で、おまけに東軍統括じゃと。我が息子ながら、恐ろしいもんじゃ。裏がなければ、素直に喜ぶとこなんじゃがな」

トルマは、かなり引つかかる言い方をした。マリーが、眉をひそめる。

「裏があるんですか」

「あると見て、まず間違いない。首都から離されたのは、単にニツクがいると邪魔だからじゃろう。だからこそ、ニツクはわしをここによこしたんじゃ。カリクへの話も、その裏事情に関係することじやよ」

彼女の問いに、声を落として答える。軍を退役しているものの、上層部に食い込まんという地位にいる息子の存在があったので、そ

こが情報源としていた。ゆえに、かなりきな臭い情報も多く仕入れている。ニツクの異動に裏があるとの予測は、そこからきていた。

「ミッドハイムめ。昔から、危うい奴だとは思っていたが」

一人つぶやく。怒りと後悔とが、混じっていた。

声が聞こえたのだろう、マリーは何か言いかけたが、ドアの開閉と階段を駆け下りてくる足の音を聞いて、口を噤んだ。

「なんで二人して、まだ玄関にいるんだよ」

カリクである。制服から私服に着替えていた。トルマたちが、未だに帰ってきたときと同じ場所にいることに対し、首をひねっている。

「ちよつとした立ち話じゃ。それより、早く行け。友達が待ってるんじゃろ」

「言われなくても、行くつての」

トルマと軽口を叩き合ってから、

「じゃ、行ってくる」

カリクは二人の間を通り過ぎた。

「本当に早く帰るんじゃぞ」

トルマに背中から声をかけられ、

「分かってるよ」

カリクは、扉を開けながら応えた。

カリクを見送ってから、トルマがつぶやく。

「慌ただしいのお。誰に似たんじゃか」

「……それ、本気で分かりませんか」

マリーは苦笑いを浮かべた。彼女の反応に、トルマは首をかしげた。

カリクの言う“例の場所”とは、幼い頃サリアと二人で遊んでいた。

た広場だった。昔は何度も来ていたが、育つにつれてあまり一緒に遊ぶことは少なくなり、今ではまったくなくなっていた。

ただ、それがサリアに対して酷いことだという自覚はあった。彼女はある特殊な“力”を持っていたために、カリク以外の同世代には気味悪がらて近づかれなかったから、カリクがいなければ、独りになることがほとんどだった。また、彼女の両親は子供への愛情が薄く、いい親とは言い難い。ゆえに、もっとそばにいたべきだった。分かっていたのに、気恥ずかしさから避け気味になってしまっていた。彼女への用事というのは、そのことへの後悔も関係している。今更、何をしたところで埋め合わせになるとは思っていなかったが、何もせずにいることはできなかった。

広場に入ると、少し古びてしまっていたものの、今も中央にある噴水が綺麗に水しぶきを飛ばしていた。昼過ぎという時間帯のためか、いつもならたくさんいる子供たちの姿はない。昼ご飯か、昼寝かというところだろうと、カリクはあたりをつけた。

噴水の前には、既にサリアが立っていた。白のインナーに桜色の薄い上着を着ていて、下は白のロングスカートだった。遅れてしまったと思ひ、走って近づく。

「悪い、遅れた」

まず、謝った。サリアが邪気のない笑みを浮かべる。

「謝らなくて大丈夫だよ。私も今来たところだから」

「なら、いいけど」

さほど長時間は経っていないので、カリクは信用した。

事実カリクは、サリアの到着からさほど遅れていなかった。そうでなければ、未だに彼らをつけていた謎の男が動いていたから。直前にカリクがやってきたので、いったん止まり、二人から見て噴水を挟んで反対側に移動していた。

「それで、用事って何？」

「あー、なんていうか……」

サリアに促され、カリクは切り出そうとしたが、言い淀む。頭をかいた。幼なじみの少女は、微笑みながら言葉を待っている。

その後ろで、謎の男は携帯に連絡を受けていた。

「もしもし」

『まだ目標は確保できていないのか。できるだけ早くという指示なのは、貴様も分かってるだろう』

耳に入ったのは、固い口調の声だった。ただし、女性のものである。

「分かってるよ。でも、人がいないときでもいいんじゃないですかね。帰り道とか」

男の返事は、いかにも気だるそうだった。敬語も、わざとである。

『“お前がそれでいいならな”』

相手の女が、意味ありげな言葉を返した。

(見透かされてるか)

男はその意味を察し、舌を巻く。さらに女が続けた。

『人払いは、ノーザンが既に行っている。奴が暴走を起こさないうちに、さっさとやることをやれ』

「へいへい」

また軽口を返そうかとも考えたものの、男は指示に従うことにした。ただし、

「でも、あと三十秒待って。今、すごいいいところだから」

すぐに動く気はなかった。

『……勝手にしろ』

呆れ声がして、電話は切れた。男は携帯をしまい、再び少年と少女に関心を向ける。

「さて、早く本題に入らないと、邪魔しちまうぞ」

一人で、つぶやいた。

一方のカリクは、なかなか本題に入れなかった。「えつと……」とか、「その……」を繰り返している。サリアはまったく急かすことなく、穏やかに微笑みながらこちらが話すのを待っていた。ただ、それが余計にカリクから余裕を奪っていたりする。

(早く、切り出さないと)

気持ちは焦るのに、言葉は喉で引っかかって出てこなかった。そうしているとき、水をさされた。

「サリア、ミユルフだな？」

自分たち以外の声に二人は反応し、持ち主の方を見ると、二十代くらいに見える私服姿の男が立っていた。そこで、ようやく広場に自分たちと男以外の姿が見えなくなっていることに気づく。

「誰だ、あんた」

カリクは素早くサリアを庇うように、彼女と男の間に入った。睨みつける。

(突然のことにも、冷静に対処しろ)

祖父からの教えが、頭によぎった。

「へえ、冷静だな」

彼の対応の早さに、男が感嘆を漏らす。カリクは、何も言わない。「うちの部下も、これくらい冷静だと助かるんだけどな」

いきなり、関係のないことを口にしてきたが、無視する。

(相手の言葉に惑わされるな)

これもまた、祖父の教えだった。

どうやら男は、脈絡のない話を振って、カリクに動揺を誘うつもりだったようで、頭をぼりぼりとかいた。

「ああ、これも空振りか。いい教育を受けたみたいだな。さっきのは本音だけだ」

「生憎、英才教育を受けてるからな」

カリクが軽口を叩く。強気な態度だった。

「さすがに、ニックさんの息子っただけはある」

「何……!?!」

しかし、続く男の発言には、動揺を見せてしまった。瞬間、男の拳が顔目掛けて飛んでくる。

「でも、こっちも仕事なんでな」

「くっ!？」

カリクはすぐ防御のために、顔の横に腕を出した。

「ぐっ!」

だが、拳の衝撃は予想以上だった。右手側に吹き飛ばされる。

「さあ、サリア」ミユルフ。俺たちと一緒に来てくれ。素直に従えば、悪いようにはしない」

間に立っていたカリクがいなくなったため、男はサリアに近づいた。懐から、銀色の物体を出す。

「ひっ」

サリアが小さな悲鳴を上げた。男の手にあつたのは、小型のナイフだった。それを見て、横に吹き飛ばされていたカリクは、その場で即座に自分の脇腹に隠し持っているものに手を伸ばした。

「サリアに近づくな」

低く、尖った声が出た。彼の手には、黒く光る拳銃が握られていた。

「あらら、ずいぶんなもん持つてるのな。未成年の所持は認めてないはずだぜ」

「強引に持たされたんだ。捕まえるなら、家族の方だな」

「ああ、そうかい。ずいふんとクレイジーなご家庭でお育ちのよう
で」

「個人的には女の子を誘拐しようとしてる奴よりも、マシだと思うけどな」

「はっ、そりゃ違いねえな」

男が苦笑したところで、沈黙が訪れる。男はサリアに対してナイフを向け、彼にカリクは銃口を向けている。状況が膠着した。

（間違いなく、サリアが殺されることはない。怪我をさせられるくらいはあるかもしれないが、それならナイフよりいい獲物がある。

たぶん、あくまであれは脅しのためのもんだろう)
冷静に分析をする。

(つまり)

「ああ、そうか。これ、俺が危ねーじゃん」

思考を、男の言葉が遮った。そして男は、手にもっていたナイフをカリクに投げつけてきた。

「なっ!？」

腹部に向けて放たれた刃物を、彼は反射的に横へ避ける。銃口がぶれた。

(しまっ……)

その隙について、男はサリアではなく、カリクに突っ込んできた。

「実戦経験不足だ。出直してこい」

脇腹に蹴りを入れられ、続けざまに手首に強い手刀を喰らう。銃が手から滑り落ちた。最後に、裏拳を顔面にもらった。身体が宙を回り、うつ伏せに地面へ倒れる。

「がはっ……!」

息が漏れた。さらに身体へ重みがかかる。彼の上に、男が乗っていた。ナイフは複数持っていたようで、さっきのとは別のものを首に突きつけられる。

「お前に動かれる方が厄介なんだな。それに、交渉にも有利だ」

「交渉だと……」

上から被さるように聞こえてきた声に反応する。相手の狙いに気づき、カリクは顔を歪めた。

「サリア!! ミュルフ。君が俺たちと来ることを拒むなら、こいつは殺す。君次第だ。どうする」

男の狙いは、サリアが従わざるをえない状況を作ることだった。カリクの首に刃が当てられ、冷たさが伝わる。

「カリク!」

サリアが叫んだ。彼女は、この状況で自分の身を一番に考えられ

る性格ではない。

「ダメだ、サリア！　すぐ逃げる！」

カリクが、声高に叫んだところで、曲がったりはしない。胸に手を当てて、彼女は男へ訴えかけた。

「あなたに従います！　だから、カリクから離れて」

「何言ってるんだ、サリア！　俺なんて無視しろ！」

カリクが叫ぶ。それに対し、サリアは「ごめんね」と、微笑しただけで、彼の言うとおりにする様子はなかった。男は満足げに微笑んで「いい子だ」とつぶやき、携帯を取り出す。何者かへ、電話をかけた。

「もしもーし。目標確保。俺は手が放せないんで、車回して」

親しげな口調だった。カリクとサリアに、電話の声は聞こえない。

「ああ、広場のまんまだ。どうせ、ノーザンも回収するんだし、ちよーどいいだろ」

かすかに、電話口から相手の声が漏れ聞こえる。どうやら、女性のようにだった。

「分かってるよ。いいから、早く来てくれって。よろしくな」

男はそう言って、通話を終えた。携帯をしまう。

「さて、しばしご歓談だ。“しばらく”会えないんだから、挨拶は済ましておけよ」

それから男は、先ほどまでとは一転し、重々しい口調で言った。

「ごめんね、カリク。カリクを見捨てるなんて、私にはできないの」

先に発言したのは、サリアだった。押さえつけられたまま、カリクは声を荒げる。

「ふざけんな！　お前がこいつに従う必要なんてない！」

感情的だったが、この言葉には根拠があった。

（もし、本当に俺を殺す気があるのなら、さっさと殺してサリアを連れて行ってしまえばいい。そうしないで、わざわざ交渉を持ちかけてるのは、俺を殺すと何かしらの不都合があるからだ。だから、サリアが逃げても、俺が生き残れる可能性は大いにある）

考えはしつつも、口には出さない。言ってしまったら、男が作戦を変えるのは明白で、その中身が予想できない。なので、サリアが逃げられる今の状況を壊したくなかったのである。

「分かってる」

唐突に、サリアが言い放つ。カリクの考えは、意味がなかった。なぜなら、

「分かってるけど、カリクを危険にさらしたまま私だけ逃げたりできない」

彼女は、すべて理解したうえで、動くことができていなかったからである。

「お前……っ」

その意図を察し、カリクは顔を歪める。優しさがために、目の前の少女は自分を切れないのだ。

「なるほど。ますます気に入った。精々“あがけよ”」

男の声は、どこかご機嫌だった。

そこへ、

「どんな状況だ、これは」

呆れた感じの高い声が飛び込んできた。カリクはなんとか視界の端に、声の主を捉える。

二十代くらいで、金髪をポニーテールにして頭の後ろでまとめている女性だった。分かりづらかったが、背は高めだった。顔立ちがよく、綺麗な海色の瞳が覗いている。ただ、今はじと目になっていた。

「見てのとおりだ。車はどこにあるんだ」

「すぐその通りだ。それより、説明をしろ。これはなんだ」

一応、男の質問に答えてから、女は同じ問いを繰り返した。

「んー、こいつを人質にしての脅迫だな」

男はかなり軽い調子だった。女はそれで状況を把握したらしく、頭を軽く抱えた。

「……まあ、いい。その貴女、ついてこい。おとなしくしていれ

ば、悪いようにはしない」

しかし、彼女はそれ以上、状況について何も言わなかった。サリアが抵抗なくうなずく。女の方へ歩き出そうとした。その背に、カリクが叫ぶ。

「行くな、サリア！」

悲痛な呼びかけに、彼女は立ち止まった。振り返り、声は出さず口だけを動かす。

「ごめんね」

また、謝罪だった。前に向き直り、女を真っ直ぐに見据えた。

「貴女に従います」

「いい目だ。ただ、これは許せ」

女は敬意を表しながらも、サリアの後ろに回り、銃を脇腹に押し付けた。銃口の感触がしたからか、サリアは微かに表情を歪める。

「先に行く。そちらの少年は、お前がどうにかしろ」

「りょーかい」

男の返事を聞いてから、女はサリアを伴い、広場を出て行った。後に残ったのは、男二人である。

「さて、お前のことは任されちゃったわけだが、どうしたもんかね。男が楽しげに言った。対照的に、カリクは敵意を剥き出す。

「あんたが俺を離れたら、すぐに潰してやる」

「おー、怖いね。こりゃ、簡単に離せなそうだ」

あくまで男は軽い態度を変えない。

「だから、動きを封じさせてもらうな」

その言葉の後、首の後ろに衝撃が走って、カリクの意識は飛んだ。

「まったく。さすがに“あの人”の息子だけあるな。今から、将来有望なこった」

広場には、倒れ伏した少年と、二十代くらいの男性の姿がある。

少年は、意識を失っていた。

「さてと、戻るか」

男を置いてきぼりに、男は仲間が乗っている車へ向かう。

車は、先ほど女が言っていたとおり、広場のすぐ近くに停められていた。迷いなく、運転席へ乗り込む。後部座席でサリアを捕縛している女から声をかけられた。

「一応、労は労っておこう。お疲れ様だ、ガヌ」

「こりゃどうも、シルラちゃん」

彼女に対し、ガヌ「ロード中尉はバックミラー越しに笑ってみせた。同じく中尉であるシルラ「マルノフスが、眉根を寄せる。

「誰がシルラちゃんだ。ここで撃ち殺されたいのか、貴様」

「いいえ、滅相もない」

ガヌは大袈裟に両手を胸の前で動かした。シルラは深いため息をつく。

「まったく、なぜ貴様のような奴の方が今回の任務の責任者なのだ。まだ犬の方がマシな頭をしているというのに」

「優秀だからじゃないですかね」

「よっぼど、風穴をあけてほしいらしいな」

「怒るなよ、シルラ。冗談なんだから。シワが増えるぞ」

「誰のせいだ」

シルラの冷たい視線と声を受けつつ、彼女の隣にいる少女へガヌは目をやった。サリア「ミュルフ。彼が上から聞いた話では、不可思議な力を持っているということだった。

「そっぴえば、“例の少年”はどうしたんだ？」

「ちよつと眠ってもらってきた。安心しな、なんにも怪我はしてない」

最後はサリアに向けて言った。反応に困ったのだろう、彼女は複雑な表情を浮かべただけだった。

「それを言うなら、ノーザンはどうしたんだ。さすがにあの図体が隠れられるほど、この中は広くないぞ」

今度は、ガヌからシルラに問う。

「別行動だそうだ。この車で首都に行くのは、私たち三人というこ

となる。本当なら、今すぐ出るべきなのだが貴様は無駄話に時間を使ってしまっているわけだ」

彼女の言葉には、明らかに棘があった。しかし、ガ又は気にしない。

「そうか。じゃー、早く行くとするか」

「……いつか鉛玉をぶち込んでやる」

彼女は毒を吐いた。ガ又はやはり気に留めず、エンジンをかけた。アクセルを踏み込み、車が動き出す。

ガが再びサリアを見ると、窓の外をじっと見つめていた。儂げな表情で、一心に誰かを想っているようだった。

と、

『カリク、絶対に助けに来て。きつと、きつとだよ』

突然少女の声がした。サリアのものであったし、状況からして内容も特に不思議ではない。ただ、

『私、信じてるから』

彼女は“口を開いていない”。耳を介して聞こえたものではなかった。

「これは……」

「……マジもんかよ」

シルラとガが、それぞれ驚愕を示す。サリアはしゃべっていないはずなのに、言葉が直接、心に飛び込んできたのである。

これが、彼女の“力”だった。

「オモイノチカラ」、か」

力の名称を、シルラが口にする。彼女の方に、サリアが肩を震わせ顔を向けた。目が見開かれている。

「本来は、あの少年にだけにだけ伝えようとしたのだろうが、思いが強すぎて漏れだしたようだな」

「どうして、それを知って……」

シルラの分析に、サリアは自分の思いが漏れたことよりも、隣にいる金髪の女性がなぜ力の存在を知っているのかという疑問がよぎ

ったようだった。声に困惑と警戒が混じっている。

「上の人間から聞いただけだ。正直、半信半疑だったがな。実際に体験しては、否定のしようがない」

「まあ、“あれ”がありなら、ありだろ」

シルラの言葉に続き、ガヌが口を挟んだ。頭には、ある人物の姿が浮かんでいた。心に浮かぶイメージは、畏怖。

「あまりトップを“あれ”呼ばわりしない方がいいぞ。聞かれて気分を悪くされても困る」

「いいだろ別に。隠してても、意味がないしな」

肩をすくめた。頭から今浮かんでいる人物を消すために、話題を変える。

「にしても、こっからまた首都まで二日か。しんどいねー」

よりによってばやきだった。今現在、最も早い移動手段である車を持ってしても、首都までは時間がかかるのである。シルラが眉をひそめた。

「仕方がないだろう。歩きでないだけ、マシだと思え。それに、交代で私も運転はするんだ。今から嘆いてどうする」

「そりゃ、そうなんだがな」

(首都に戻ってからが、戦争だからな)

後半は、思うだけで口に出さなかった。

雑談に興じる“軍人”二人と、さらわれた少女を乗せ、車は首都へと向かう。

サリアは人知れず、もう一度、幼なじみの少年を強く想った。

二章 『旅立つ少年』

『カリク。助けに来てくれるよね。貴方なら、きっと……』

頭に、いや、心に、優しく悲しげな声が響いた。しかし、姿は見えない。幼なじみの少女が、どこにもいない。探そうとしても、まず身体が動かせなかった。深い暗闇の中にいながら、もがくことすらできなかった。締め付けられるような胸の苦しさから、叫ぶ。

「サリアーツ！！」

そこで夢は途切れ、カリクは地面の上で跳ね起きた。

「ああつ……？」

意識がはつきりしない中、辺りを見回す。制服姿の警察官が何人か彼のそばにいた。右手側には、噴水がある。広場だった。

（何が……）

「き、君。大丈夫か」

警官の一人が尋ねてきた。カリクは多少どもってから、「はい」と、簡単に返す。

そこで、記憶が次々と雪崩のような勢いで蘇ってきた。

（そうか。俺は気絶させられて……）

唇を噛み、拳を握る。あまりに自分が情けなかった。

「どうかしたのかい。怖い顔をしているが」

「いえ、別に。それより、どうして警察の人がここにいるんですか」

「何を言ってるんだ。こっちは、どうして君がいるのか不思議なくらいだよ」

警官に疑問を疑問で返され、カリクは眉をひそめた。状況を把握できていないのを察してくれたのか、警官が説明を始める。

「この広場に爆弾が仕掛けられたという情報が入ったんだ。たぶん嘘だとは思うんだが、偽物の警察官が騒ぎ立てたらしくて、大騒ぎになっててね。仕方ないから様子を見に来てみたら、君が倒れていたんだ」

「爆弾……」

すぐさまカリクは、それが人払いのためだという考えに至った。サリアを捕らえるために、わざわざ広場から人を遠ざけたのである。ただ、それだと疑問も浮かぶ。

(どうして、こんな面倒なことを)

こんな目に付きやすい場所で誘拐を決行した意味が理解できなかった。深夜を待って、サリアの家に押し入った方が、目立つリスクを減らさねばならないのである。それに、あの男女は知り得なかっただろうが、サリアの両親は、自分たちに危険が及ぶかもしれないのなら、簡単に娘を切り捨てるような人間だった。

(俺の素性を知っていたのと、何か関係が?)

となると、思い当たる理由はカリクである。男の方はなぜか、カリクを知っていた。ただ、確証はない。

「いったい、何があつたんだい?」

考えを巡らせていたところで、警官の声が入り中断させられた。

正直に話しても、無駄だと判断した彼は、

「それが、僕にもよく分からなくて。いきなり後ろから殴られて気を失ったんで、あまり覚えてないんです」

ためらいなく、嘘の話を始めた。

「後ろから殴られた? 本当かい。犯人の顔は覚えてないか」

案の定、警官は食いついてきた。だが、嘘なので、詳細など答えられない。

「いえ、それがいきなりなこと覚えてないんです。ごめんなさい」
そう言って、うやむやにした。騒ぎの犯人は先ほどサリアを誘拐した男たちの仲間には違いないので、存在したのは間違いない。あとは、見ていないことにすればさほど厄介なことにはならないと踏んでいた。

「そうか。でも、とりあえず話だけは聞かせてもらえるかい」

「かまわないですけど」

もちろん、何も与えられる情報は持っていない。解放されるまで、

さばど時間はかからなかった。

警察での証言捏造を終え、カリクは日の暮れた道をひた走った。

警察よりも、誘拐犯の情報を持っていそうな人物に心当たりがあったのである。彼らは、車を持っていたが、徐々に普及してるとはいえ、キュールで持っている人間はまだ少なかった。複数行動で銃も所持しており、“サリア”を狙ってきたことから、普通の人間ではなく、何かしらの組織の者たちであることが予想された。

ともすれば、警察よりも“彼”の方が知っている可能性が高い。いや、そもそも今日訪ねてきた原因そのものが、この件と関係しているのではないかという予測もあった。

自宅にたどり着いたカリクは、走ってきた勢いそのままに、玄関のドアを力任せに開け、思い切り叫んだ。

「クソジジイ!!!」

家全体、もしかすれば近所に届いたのではないかというくらい、強烈な音量だった。ただ、

「誰がクソジジイじゃあ!!!」

負けないくらいの声が、家の中から聞こえてきた。歳を感じさせない、屈強な老人が大股歩きで奥から出てくる。その後ろから、何かと目を丸くしてマリーが顔を覗かせている。

「いったいお前は、祖父をなんだと思ってる……」

「サリアが攫われた！ 知ってることをあらかた話せ！」

説教を始めようとしたトルマを遮り、カリクは再び叫んだ。瞬間、祖父と母の顔色が変わった。後者はおそらくサリアという名前に、前者は“それ以上”のことに驚いたと判断する。

「知ってるんだろ、ジジイ」

目を据え、真っ直ぐに見つめる。強い怒りと一緒に、悔しさと辛さが涙となって彼の頬を伝った。

「カリク。それは、本当か」

「嘘でこんなことは言わねえよ。いいから、情報を寄越せ」
剣幕は凄まじく、今にも祖父に飛びかかりそうだった。

「まさか、こんなに早いとは」

その祖父は、意味深な言葉とともに、顔を歪めた。

「やっぱり、事情を知ってるんだな」

カリクが詰め寄る。

「ああ、知つとる。今日はその話をしにきたんじゃからな。これほど早くに動きがあるとは思わなんだ」

一つ前の言葉と同じ内容を、もう一度繰り返す。トルマにとっても、想定外のような話だった。

「おそらく、サリアちゃんを攫ったのは、軍に関係する人間じゃ。もし違つたとしても、軍の息がかかっていると考えると問題ない」

「軍……」

祖父の話は、カリクの予測の中で最も悪いものだった。サリアを連れ去つたのは、祖父がかつて在籍し父が属する軍の関係者だといふのである。

「根拠はいくつかある。まず、サリアちゃんを狙ってきたこと。“力”の存在を知るものは、世界にほとんどいないんじや。にも関わらず知つとるとなると、それだけの諜報能力があるということになる。それから、ニツクの左遷じや。お前さんにはまだ話しとらんかったが、首都から出されてニケアにやられた。おそらく、上層部に探りを入れていたからじやろう」

「父さんが、上層部に探りを？」

初めて聞く話だった。順調に軍でエリートの上昇を上がっている父が、そんなことをしているとは思っていなかったのである。

「ああ。本当は、単純に国のために軍人として育てていたんじやが、サリアちゃんがこの町に来たことで状況が変わつた。軍の上部からきな臭さを感じ始めたんじや」

「ちよつと待つてくれ。サリアがこの町に来たって、あいつは生ま

れたときからここで育ったんじゃないのか？」

幼ない頃からずっと一緒だった少女についてのことで、カリクは問いを口にした。トルマは、首を横に振る。

「いいや。あの子は外から来た子じゃ。二つか三つだったときにな」
初めて知る事実だった。同時に、疑問に思い至る。

「じゃあ、サリアの親も外から来たってことなのか？」

「それは違うの。今のあの子の親は、本来の親ではない。わしとニツクとマリーで頼み込んで、育ててもらったんじゃ。わしらの目の届く場所で、なおかつ完全に手元ではない位置ということだな」

「どうして、そんなこと」

「あの子の力が、それだけ希少なものだったからじゃ。わしですら、都市伝説のようなものだと思っていたからの。だから、口も開いていない女の子の感情が伝わってきたのに、かなり驚いたわい」

「当時を思い出しているのか、祖父は遠い目をした。すぐに、そんな状況ではないことを思い出したようで、カリクに向き直ってくる。」「とにかく、軍内部では力の存在を信じ、悪用を考える輩も少なからずおった。だから、完全な監視下ではないものの目の届く場所においておいた訳じゃ」

「なるほどな。前に言ってた、サリアがいつか狙われるかもしれないっていうのは、そいつらのことか」

説明を聞き、カリクは理解した。彼は、サリアの“力”がいつか狙われているかもしれないというのは以前から伝えられていた。ゆえに、“サリアを護るため”という理由から、祖父の訓練に文句を言わず従事したのである。その懸念の理由は、この時点で既に、軍にあったのだ。

「そうなるの。だが、状況は今より悪い。ニツクに追わせたかぎりだと、今回の首謀者はかなりヤバいんだ」

「上層部が関わってるのか」

サリアの情報はかなり少ないはずであるので、彼女を知ることができたという時点で、容易に想像ができた。しかし、祖父の出した

名前は、一步上の人間のものであった。

「上層部どころじゃない。今回の首謀者は、おそらく“軍王”じゃ」
「なっ……」

息をのんだ。とんでもない人物を表す称号だったのである。

“軍王”。議会を持ち、総理大臣の席があるにも関わらず、事実上ラスタージ共和国の頂点に君臨する者の称号である。本来の階級名は元帥なのだが、国政も担っているためにそう呼ばれていた。数代前からの体制なので歴史は浅いが、この国の軍事色はその数代の間にかなり濃くなった。

「現在の“軍王”であるクラカルⅡエルⅡミッドハイムは、わしが一番最初に持った部下なんじゃが、“力”の存在を信じ、かなり固執しておった。頂点に上り詰めた結果として、専門の研究施設を作ったという情報もあるくらいじゃ。首謀者である可能性は、かなり高い」

トルマの口調は苦々しかった。行いそのものも気に入らないのだろうが、かつての部下を止められなかったという負い目もあるようだった。

「じゃあサリアも、その施設に？」

「ありえるの。ただ、わしの知っている奴の性格のままならば、確実に手元に置いておくはずじゃ。どの施設かはともかく、十中八九、首都に連れて行かれたとみて間違いないじゃろう」

「首都……」

カリクが噛み締めるようにつぶやく。首都セルゲンティス。軍の本部もある、強大な町である。サリアは、そこに連れて行かれた可能性が高い。考えたことは、一つだった。

「行ってやる」

「なんじゃって？」

「首都に行くんだよ。サリアを助けるために」

自分が首都に行き、サリアを取り戻す。それしかなかった。いきり立つ中、トルマが苦言を呈してくる。

「簡単に言うが、そう甘いものではないぞ。お前がいながらサリアちゃんを攫われたということは、相手はお前以上じゃ。おまけに、軍王もある。首都に行ったところで、どうにかなるとも思えん」
「だからって、何もしないでいられるかよ。こんな手段を取るんだ。何をされるか分かったもんじゃやない。それに、軍の上層部が関わってるなら、正攻法で警察とかに訴え出ても潰されちまう。俺が自分で動くしかないだろうが」

カリクは祖父の言い分を突っぱねた。さらに言葉を重ねる。

「なにより、理屈じゃない。俺はあいつを助けたい。いや、助けなといけないんだ。理由なんて問題じゃない。じつとしてらんねえんだよ！」

心にあるのは、幼い頃に交わした約束だった。サリアを一人にしないと、彼は言い切ったのである。根底には、彼女への特別な想いがあった。それはとても単純な感情でありながら、強く激しい原動力として彼を突き動かしていた。

「確かに俺は、サリアを攫いに来た奴ら相手に、歯が立たなかった。軍王にかなうとも思えない。でも、それでサリアを諦める理由にはならない。生きてるかぎりには、何があってもあいつを諦めるわけにはいかねえんだ」

拳を握りしめた。爪が食い込むほど、強く、強く。

「だから、止めないでくれ。もし止めるなら、反抗しないといけなくなる」

目を据え、保護者二人を見た。

「止めはせんよ。さすがじゃな。それでこそ、わしの孫じゃ」

祖父からの反論は、なかった。肩をすくめながら、笑みを見せる。カリクからすると、意外な反応だった。

「お前のことじゃから、軽い気持ちではないじゃろ。なら、わざわざ止める必要はないわい。わしが手塩をかけて育てたんじゃから、自分から動いて当然じゃ」

「じいちゃん……」

話がまとまりかけていたところで、

「ちよつと、待ってくれないかな」

柔らかさの中に、しっかりとした芯を感じさせる女性の声が聞こえた。

「母さん？」

マリーだった。いつもの穏やかな表情はなく、厳しい顔つきをしている。

「二人だけで話を進めないでください。カリクは、私の息子です」
彼女もまた、強い目をしていた。

「貴方たちの言っているような危険な場所に、おいそれと行かせられません」

二人の方へ近づいてきた。カリクがトルマから指導されていたのは了解していたし、その目的とサリアの力についても知っていた。しかし、願わくば危険なことにはあつてほしくないと考えていた。

こちらの会話を黙って聞き流すわけにいかなかったのだろう。

「母さんの言葉でも、俺は従えないぞ」

間に入ってきた母親に対しても、カリクは睨みを利かせた。

「性急なことを言わないの。絶対に行くなどは、言いません」

彼女も負けじと強い目つきを返してくる。

「貴方がサリアちゃんのことをどれだけ想ってるかくらい、私はよく知ってます。だから、止めるのは残酷なものも分かる。けど、送り出すには条件があります」

「条件？」

「なんじゃ、その条件というのは」

カリクに続き、トルマも反応を示す。やはり、祖父はカリクを送り出す気だったのである。

「誰か、力のある人と一緒に首都に行くこと。例えば、お義父さんやニツク。せめて、そのくらい強い人がいないと、私は貴方を送り出せない」

「だったら簡単じゃないか。じいちゃんも一緒に来ればいい」

カリクはすぐさま横にいる祖父へ目を向けた。しかし、その表情は固かった。

「それは、無理じゃ」

絞り出すような声だった。明らかに、様子が先ほどまでと違う。

「既に、上にニツクが探りを入れていたことがバレておる。ここが狙われんともかぎらん。ニツクとの交渉に使えるからの。だが、わしがいれば多少の抑止にはなる。だから、ここから離れるわけにはいかんのじゃ」

「な……」

カリクの顔から血の気が引く。他にトルマレベルの人間となると、心当たりがなかった。父親であるニツクでは、軍に属するためさらに動くのは厳しい。本格的に、母と対立しなければならなくなった。「なら、無理ですね。ニツクも二ケアに勤務地が移ったとはいえ、離れるわけにはいかないでしょうから」

マリーの口調は、冷たかった。カリクは突っぱねる。

「だから諦めろっていつのか。だいたい、なんでじいちゃんや父さんが一緒ならいいんだよ。軍王には、どちらにしろ届かないだろ。俺一人と変わりゃしない」

つまり、一人でも行かせろということだった。どれだけ母に止められようとも、ここに留まる気はない。

「実戦経験に乏しい貴方を、一人送り出すよりはマシだわ。見込みもないし、具体的な策も計画もない。それじゃあ、首都にはやれない」

マリーも譲らない。間に立たされているトルマが、口を挟む。

「まあ、さて、マリー。こいつはまだ甘いが、わしとニツクが動けないとなると、サリアちゃんを助け出しに行けるのは、現状カリクだけなんじゃ。なんとか、目をつぶってくれんか」

「ダメです。お義父さんの頼みでも、ここは譲れません。この子の母親として」

彼女は折れそうになかった。親の愛情を引き合いに出されては、

反論もしづらい。真正面から言い合っても無駄だと判断したカリクは、

「もういいー!」

話を切り、自分の部屋へ向かった。母の許可が必要だとは思えなかった。

(明日の朝一で、家を出る)

決意は固かった。

少年のいなくなった玄関先で、マリーとトルマは佇んでいた。

「……どういっつもりじゃ、マリー」

「どうもこうも、言ったとおりです」

「本当に、行かせないつもりか」

もう一度トルマからかけられた言葉に、今度は応えなかった。

翌日。まだ、太陽がその姿をすべて見せきらない時間にカリクは、まとめた荷物を持ち玄関へ下りていった。そこには、一人分の影があった。

「……母さんか」

マリーだった。扉へ行くのを塞ぐように立っている。彼女の前でカリクは足を止め、鋭い目を向けた。

「……俺は、行くぞ」

堂々と言い放つ。迷いはなかった。

「考えは、変わらないのね」

「当たり前だ。今のサリアの親は、あいつを助けようなんて思わな
いに決まってる。学校の奴もあいつを避けてる。じいちゃんと父さ
んは動けない。そしたら、俺が助けるしかないだろ」

言いながら、心が締め付けられるのを感じていた。理由は違えど、
自分も最近サリアを避けていたのだ。そばにいてやるべきであっ

たのに、彼女を一人にしてしまっていたのである。後悔の念は、とても振り切れない。

だから、今度はもう間違えるわけにはいかなかった。

「サリアを、一人するわけにはいかない」

わずかにうつむき、自然とこぼした。心の底からの思いが、そこにあつた。

「……昔ね」

マリーが、ぼつりとつぶやいた。声からして、何かを話し出そうとしていたため、カリクは黙る。ただ、また止められたら、もう無視して家を出ようと考えていた。

「私、いじめられてたことがあるの。中学生のときかな。無視されたり、度の越したいたずらされたり、毎日苦しかった」

「母さんが？」

初めて耳にすることだった。

「ええ。中心になっていじめてきてたのは一部だけど、他のクラスメイトは見て見ぬ振りをしてた。親は私に冷たかったし、先生も厄介事になるのが嫌だったみたいで黙認していたから、私は一人で泣いてたわ」

内容とは裏腹に、彼女に辛そうな様子はない。むしろ、穏やかに笑っていた。

「でも、ある子が私を救ってくれたの。それも転校してきた初日にね。驚くくらい、真っ直ぐだった。代わりに、初日から周りを全部敵に回したんだけど、私はとっても嬉しかった。私を救ってくれる人はいないものだとあきらめてたから」

彼女が笑っているのは、いじめられた記憶自体は辛くとも、その先にある救われた記憶が強い輝きを持っているためだった。陰となるはずの記憶が、光に吞まれている。

「まあ、その転校生の子っていうのは、お父さんなのだけだね。昔は正義感の塊みたいな人だったの。なにしろ、知り合ったばかりの女の子のために、わき目もふらずに駆けずり回って、私の世界を

「変させちゃったくらいなもの」

「あの冷静な父さんが？」

カリクにとつては、信じがいことだった。母の思い出の中にいる父の姿が、描けなかった。

「カリクには確かに意外かもね。でも、あの人は今も根っこはそういう熱い人なのよ。ただ、相手がいじめっ子から国になったから、戦い方を変えてるだけ。本当は、今すぐにも軍王さんのところに乗り込みたがってるに決まってる。それが、あの人だから」

話す母は楽しげだった。自慢しているようにも聞こえる。

「貴方はあの人そっくり。付き合い出してから、あの人にどうして私を助けてくれたのか訊いたのだけど、たぶん貴方と一緒にだもの」「俺と？」

「『最初は可哀想と思ったから。でも、途中からはただ単純に好きだから護りたくなっただんだ』って。あなたがサリアちゃんを助けたと思う理由とおんなじでしょう？」

「それは……」

カリクは答えるのをためらった。肯定に等しい、ためらいだった。「貴方もあの人も、思ったら一直線なのよね。カリク、サリアちゃんのご両親のところは何度か乗り込んだことあるでしょう。そのことも知ってたのよ、私。止めなかったけどね」

マリーに柔らかな微笑みを向けられ、カリクは口を開いて固まった。彼女の言ったとおり、何回かサリアの両親のところへ乗り込み、「サリアを嫌うのは勝手だが、あいつの身に何かあったら、許さない」などと、何度か釘を刺したことがあるのだ。

「昨日はああ言ったけど、本当は止める気なんてなかったのよね。ただ、貴方がどれだけ本気なのかを確かめたかったの。生半可な覚悟じゃ、だめだと思ったから。でも、心配なさそうね。私の制止を振り切って、出ようとしてるんだから」

彼女はカリクの肩を掴み、目線の高さを合わせてきた。

「けど、一つだけ約束して。絶対にサリアちゃんと生きて帰ってき

なさい。サリアちゃんだけじゃだめ。あなたも帰ってくることにいい？」

彼女の願いは、その一つだった。“誰も死なないこと”。サリアを助けるために、命を投げてはいけないと言っているのだ。

「分かっている。あいつを助けても、その後も俺が護ないといけないんだ。絶対に死なない」

カリクは回答に迷わなかった。今まで避けてきてしまった時間を、埋め合わせるために、死ぬわけにはいかないと自覚していたのである。

「いい答えだわ。きつと貴方は、地力が上の人ともたくさん戦わないといけない。絶対に勝てないような状況にもなるかもしれない。それでも、死んじゃだめ。恥ずかしい逃げを選ぶことになったとしても、生き残ることが大事。それに……」

一度言葉を切り、

「貴方には、強い想いの力がある。サリアちゃんのために生きようとする意思があれば、きつと生き抜けるわ」

彼女ははつきりとした力強い口調で、カリクに告げた。肩から手を離し、すつきりとした表情を見せる。

「さあ、行つてきなさい。二人で帰ってくるために」

「ああ、行つてくるよ。サリアと一緒に帰ってくるために」

母親の目を見つめ、カリクは強い想いを込めてうなずいた。必ず生きて、サリアと帰ってくる。心に、深く刻み込んだ。

母親から目をはずし、玄関へ行く。外への、大切な幼なじみの少女を助けるための旅への、扉のノブを掴む。

と、そこに男の声が飛び込んだ。

「待て、カリク」

振り返ると、そこにいたのはトルマだった。廊下を真っ直ぐにこちらへ向かって歩いてくる。カリクの前で立ち止まると、何か黒い物体を差し出してきた。

「こいつを持っていけ」

「これは……」

「お義父さん、それは……」

「わしが手入れたものじゃ。お前に合わせて改造してあるから、びったりくると思うぞ」

一丁の、拳銃だった。驚くマリーを横目にカリクはためらいなく受け取る。鈍い輝きを放っていた。確かに、手に馴染むように思えた。

「約束を違えるなよ、カリク」

「……ああ」

祖父にもうなずいてみせたカリクは、今度こそノブを回す。開いた扉から差し込む光に包まれながら、彼は元気よく声を上げた。

「行つてきます！」

ここに、救出行は始まった。

三章 『案内人』

キュールを後にしたカリクは、まず東の都市であるニケアを目指すことにした。目下問題となるのは、移動の手段がないことだった。車は上流階級の乗り物で、鉄道はまだ首都周辺にしかない。数年後であれば、首都と東西南北の主要四都市に路線があつたかもしれないが、まだ存在していない。必然的に、馬車か徒歩しかなかった。そんな背景があり、彼は二、三時間ほど馬車に揺られ、ニケアにたどり着いたのであつた。

東の大都市、ニケア。首都には劣るものの、東部軍の本拠地があり、大きめの建物も数多い、発展した街だった。メインの通りは石造りで横に広く、車もそれなりに目につく。また、機械や建築に使われる部品を作る企業、ひいてはその工場が多く、“産業のニケア”という通称があつた。ちなみに他の方面の都市にも特色があり、北は“観光のミリシア”、西は“食物のルクス”そして南は“貿易のレンバー”とそれぞれ呼称されている。

街の入り口で馬車から降り、中心部の東部軍基地へ伸びる灰色の大通りを見つめてから、カリクは家から持ってきたものでは足りないのであろう食糧を買い足すため、買い物へと出た。

敵の目がどこにあるか分からないため、軍との接触は避けたかった。だから、父親に会う気は、なかつた。

長旅向けの商品を扱う店で食糧を購入し、カリクは店先で足を止めて口元に手を当て、あることを考え出した。

（さて、こつからどうするか。やっぱり、馬車しかないのか？）

なぜ悩んでいるかといえば、真っ直ぐに首都へ向かう馬車は意外に少なく、回り道をして最終的に首都へ向かうものが多かったから

である。時間が惜しい彼としては厄介だった。かといって他の手段は今のところない。

と、身体に軽い衝撃が伝わった。軽くよろける。

「つと……」

「おつと、悪いね」

何かと思えば、同い年くらいの少年とぶつかったのであった。背丈はカリクよりも低く、体型は平均的なものだった。彼は軽く頭を下げ、その場を離れようとする。

しかし、

「ちよつと待て」

カリクは少年の腕を掴み、強引に引き止めた。

「ちよつ、なんだよ」

驚いた顔を向けられたが、“ごまかされない”。

「何か聞かないと、分からないか？ 盗人」

言い放つと、少年は目を見開き、それから微笑んだ。

「へえ、やるなあ。でも、俺っちとしては捕まるわけにいかないんだよねえ」

「なんだと？」

カリクが眉をひそめたのもつかの間、少年が銀色に鈍く光る何かを右手に持ち、カリクの腕目掛けて振るってきた。反射的に手を離す。先ほどまで腕があった空間を切り裂いたのは、小振りのナイフだった。

「やつぱり、反応いいね。でも、気づくだけじゃ駄目だぜ。じゃーな！」

周囲がナイフを見て騒然となっている中、肩を解放された際に少年は逃げ出した。

「ちつ、待て！」

すぐさまカリクも後を追う。さすがに、街中で銃を抜くわけにはいかないため、そうするしかなかった。

これからのことを考えると、財布を取り返さないわけにはいかな

い。

「あんた、いい加減、しつこいぜー！」

「お前が足を止めたら、あきらめてやるよ！」

二人の少年は、街中で壮絶な追いかけて展開していた。二人ともなんてことのない様子だが、人混みの間を縫ってかなりの速度で走っているため、実際はどちらもとんでもないことをしている状態だったりする。

付かず離れずを保っていたが、スリの少年はやがて街の郊外に建つ、寂れた屋敷へと逃げ込んだ。横に広く、二人の背よりも高い門の脇に空いた穴から、敷地内へと入っていく。

（廃虚か……。奴の住処か？ それとも、罾か？）

迷いつつも、カリクはそれを振り切って同じ穴を通っていく。前を行く少年は、既に屋敷の扉を開き、建物の中へと入って行っていた。

「逃がすか！」

罾だとしても、追うのをやめるわけにはいかない。サリアを助けに首都へ行くには、どうしても必要なものなのだ。

堂々と正面から入り込むと、薄暗さと埃っぽい空気に包まれた。

二階建てで、前には上へつながる大きな階段があり、真ん中の踊り場から二つに分かれていた。上がりきったところからは左右に廊下が伸びており、何より目立つのは二階につけられている四つ並ぶ大きな窓である。また一階も左右と斜め前の左右に他の部屋へ通じているのであろう扉があった。

そして、

「ここまで招いたのは、あんたが初めてだよ。ただもんじゃないね！」

スリの少年は、二階へ続く階段の途中にある踊り場に立っていた。

仰々しく両手を開いている。

「そりゃどうも。生憎、鋭才教育を受けて育ったんでね」

昨日、サリアを誘拐した男にも言った言葉を返した。不敵に笑ってみせる。

「へえ。奇遇だな。俺っちもおんなじようなもんだ」

すると、少年も同じような表情を浮かべた。ゆつくりと、獲物を手にする。銀色を放つそれは、ナイフだった。

「何本あるんだ、それ」

「さあ。とりあえず、たつくさんとだけ言っとくよ」

「ああ、そうかい。そういう認識にしておく。まあ、こっちも武器を使わせてもらうけどな」

軽い調子の少年に、肩をすくめてみせてから、カリクも銃を抜いた。余裕の表情を崩さなかった少年が、わずかに頬を引きつらせる。

「えーと、うちの国って、未成年が銃持ってよかったでしたっけ」

「そんなもん、決まってるだろ」

カリクは銃口を上へと向けた。

「もちろん、違反だ。でも、そっちもスリだから、犯罪者なのはおあいこだろ」

ためらいなく、引き金を引いた。甲高い銃声が響く。狙いは、少年の足。

「いった!」

見事に当たったが、弾は足の皮にも届くことなく、乾いた鉄の音を上げさせただけだった。

「……足にまでナイフを隠し持ってたのかよ」

「言っただろー、たつくさん持ってるって。それより、いったいんだけど。ヒリヒリする」

「それで済んで良かったな。本当なら、穴が空いてたんだ。ナイフに感謝するんだな」

言葉を交わしつつ、次に狙う場所を考える。彼は足を撃つことで、命には別状ないようにしようとしていたのだが、無理そうだった。

かといって、他にどこを狙えばいいかも分からない。

（そもそも、あいつが逃げない理由が分からない。街中でなら、騒ぎを起せば乗じて逃げられたかもしれないのに）

「どうしたんだよ。こないなら、こっちからいくぜ」

照準を合わせかねていると、少年が高らかに宣言した。どこからともなく手品のように複数のナイフを出し、指の間に挟んで構える。

「おらっ！」

その中の二本を、的確にカリク目掛けて飛ばしてきた。階段下にいたカリクは、横にステップを踏んで避ける。

が、

「あめえ！」

「なっ!?!」

そこにもナイフが飛んできた。脇腹を捉えている。

「くそっ！」

仕方なく、銃で対処する。銀の物体を弾いた。床にちょうど刃先が刺さる。

「へえー。やっぱりやるねー」

「お前がそれを言うかよ。ただのスリにしては、レベルが高すぎるぞ」

楽しそうに見下ろしてくる少年に、カリクは吐き捨てるような口調を向けた。

（俺が避ける方向を読んでたんだろうな。まさか避けたところにも放っているとは思わなかった）

実際のところ、相対している少年は、あまりに手慣れすぎていた。銃を持った相手にそれほど尻込みもしていないのも、ただの孤児とは思えない。何かしらの訓練を受けたことがあると考えるのが自然だった。

「でも、いつまで保つかな？ どんどん行くぞ！」

第二陣が放たれる。たった一本だが、避けた先にもくるのは予想がついた。

「ちい！」

手の内を理解しつつも、まずは“見せ”であるナイフを左に避ける。次に来るであろう攻撃を予測し、横へ銃口を向けた。しかし、予想外の光景が、彼の目に飛び込む。

「三本！？」

向かってくるナイフが三本に増えていた。縦に列をなすように並んでいる。とても、拳銃一丁で対応しきれない。とりあえず、一番上にある肩口を狙ったものを撃ち落とす。他二つはどうしようもなく、身体に受けた。

「ぐっつ……」

呻き声が漏れる。脇腹は隠して巻いている銃のホルスターで、ダメージを軽減させたが、右足の膝辺りに深く刺さった。ズボンに血が滲む。

「悪いなー。俺っちってば、ちょっと訳ありな人間だから、ここまですっかり顔を覚えられると、厳しいんだ。だから、不本意だけどあんたには死んでもらわないと困るわけ」

カリクヘダメージを与えたのを見て取ったからか、少年が口を動かす。どうやら、姿を覚えられては不都合な事情があるようだった。「そうかよ。そりやまた、運がないな」

痛みを堪えながら、脇腹のナイフを引き抜く。足のものは、出血が酷くなるのが目に見えていたので、刺さったままにせざるをえなかった。

（どうする。獲物がナイフだから、あつちは確実にトドメが指せるくらいにこつちが動けなるまで、この戦法でいくつもりだろうしな）少年の方を睨みながら、カリクは頭を回転させる。こんなところで死ぬわけにはいかない。かといって、財布を諦めるわけにもいかなかった。それに、目の前の少年はただ者ではない。場合によっては、戦力にできそうだった。

（このまま、同じことを繰り返してもギリ貧になるだけだ。武器切れを待つわけにもいかない）

「言っておくけど、逃げられはしないぜ。背中を見せたら、そこであんたは終わりだ」

手元でナイフを弄びながら、少年は微笑を浮かべる。元から引く気のないカリクには、ちつとも役に立たない警告だった。

(仕方ないな……)

カリクは、腹を決めた。肩から提げたカバンを、左手で掴む。

「さあ、またいくぜ！」

三度ナイフが飛ばされる。今度は、避けずに自分目掛けてきたのを真っ先に撃ち落とす。

「甘いね。あんたも、その程度か」

少年が冷たい声を出す。奥にもう何本か別のナイフがあったのである。先ほどと同じく、縦に三本並んでいる。さらには、左右にも一本ずつ放たれていた。

(きた！)

しかし、“計算通り”だった。まず正面の一番上を飛ぶナイフを右手に持つ銃で撃ち落とす。残るは二本。

「よっ！」

声とともに、カリクは前へ飛び、身体の前にカバンを回した。下のナイフは飛び越し、彼の腹部を捉えていたナイフはカバンに刺さる。

「なっ!?!」

カリクが銃だったからだろう、突っ込んでくるとは思っていなかったように、少年は目を見開いて驚きを示した。ほんの僅かな間ながら、動きが止まる。それでも、カリクには充分だった。階段を一気に駆け上がる。

少年が我に返り、迫るカリクへ攻撃を仕掛ける。両手から一気に四本を横に列を作って放ってきたが、

「甘い。狙ってる軌道が見えすぎだ」

動揺している相手の攻撃を見切るのには、造作もなかった。真ん中二本の間に身体を通す。そのままの勢いで、間合いを詰めた。

「くそっ！」

少年が連続で何本か放ってきたが、カリクは神がかったスピードで、自分の進むルートのものをすべて銃弾で床に落とした。それも段を上りながらである。

少年の手元には、ナイフがなかった。後退しつつ、武器を取ろうとしていたが、

「ずいぶんと余裕なさそうだな」

カリクはその隙を逃さない。最後の一詰めをする。

「終わりだ」

そして彼は、引き金を引いた。ただし狙いは、少年の身体ではない。銃口は、相手の靴を捉えていた。

「おわっ!?!」

けたたましい金属音が響き渡る。“刃物を仕込んだ靴”で蹴りを入れようと、足を上げていた少年は、銃弾を受けた衝撃で、背中から床に倒れた。容赦なくカリクは敵の腹を踏みつけ、銃を向ける。

「チェックメイトだ。全身にナイフを仕込んでるお前なら、靴にも何かあると思ってたぜ。残念だったな」

少年を見下ろしながら、カリクは表情を崩さずに告げた。全身に武器が隠されているのなら、追い詰めたとき一番注意が疎かになりやすい足の方にもあると考えたのである。予想通りだった。

「ぐっふ。や、やっぱり、ただもんじゃないな、あんた」

足蹴にされながらも、少年は笑ってみせた。抵抗しないことを示すため、手を上げている。笑みは硬い。

「とりあえず、まず財布の場所を言え。話はそれからだ」

「わ、分かったよ。ケツのポケットだから、このまんまじゃ取れないぜ」

「そうかよ。じゃあ、やっぱり順番を変える」

「いつ?」

少年の頬が、さらに引きつる。

「どうしたよ。足をどかした瞬間に何かするつもりだったか。それ

ともポケットに何か仕掛けでもしてたか」

「い、いやいや。滅相もない」

(絶対になんかあったな……)

まだ油断できない相手であることを再認識する。ただ、だからこそしたい話があった。

「俺は今、首都に向かってる。軍の上層部と戦わないといけない。

お前も一緒に戦ってくれ」

「はあ？ いきなりなに言ってるんだ」

少年が素っ頓狂な声を上げた。無視して、続ける。

「お前も訳ありなんだろ。警察の世話になりたくなければ、協力してくれ。安物でよければ、食事もこっちで持つてやる」

とても協力を頼んでいる光景ではなかった。少年も、口を空けて固まっている。

「早く答えろ、こそ泥」

眼下にある腹を、さらに強く踏みつけた。少年が呻きを漏らす。たまらず、うなずいた。

「わ、分かった分かった。でも、一個だけ条件」

「聞くだけ聞いてやる」

「なんで軍のお偉いさん方を敵に回すことになったのかぐらいは、教えてくれない？」

真つ当な質問だった。カリクはしばらく考えて、

「それくらいならいいだろう。事情は知ってもらっておいた方がいいしな」

そう言うってから、今の自分の状況について話し始めた。

「オモイノチカラ」……」

カリクが話し終えたところで、少年が真つ先に口にしたのは、その単語だった。

「ああ。軍の奴はその力を狙って、サリアを誘拐した。俺からしたら、なんの得があるのか分からないが、間違いなくろくでもないことに決まってる」

たった一点を除いて、普通の少女であるサリアが、どうして陰謀に巻き込まれたのかということと、彼女を連れて行かせてしまった自分の不甲斐なさへの怒りで、荒っぽく吐き捨てた。

一方の少年はといえば、どこか上の空だった。手は挙げたままだが、カリクに意識が向いていなかった。

「で、協力はするの？」

話しかけると同時に軽く足へ力を入れ、強引に気を戻させる。少年は、やや顔を歪めてから応じてきた。

「にわかには、あんたの彼女が持つてるっていう力が信じられないけど、軍を敵にしているっていうなら、俺っちと一緒にだ。いいぜ、協力しても。タダでご飯も食べさせてくれるんだろ？」

今度は、ニヤリと笑ってみせる。コロコロと表情が変わる少年を見て、今更になって不思議な奴だとカリクは思った。

「ああ。それは約束してやる。ただし、財布は返せよ」

「へいへい」

銃口を少年から離す。妙な動きをすればすぐに撃てるように、警戒は怠らないがなんとなくもう攻撃はされない気がした。手を挙げることがなくなった少年が、お尻のポケットからカリクの財布を素直に取り出す。

「ほら、財布」

カリクに投げしてきた。気を引かせて攻撃かとも思い、警戒したが、何もしてこなかった。

「中身だけないとかいうことはないよな」

銃を持っていない左手で、受け取る。少年は右手を自身の胸の前で振った。

「ないない」

「そうか」

「あ、でもやつぱ確認はするんだ」

カリクは少年のツッコミを無視して、中身を確認する。どうやら、何も盗られていないようだった。

「しっかし、本当に強いよなあんた。いったいどんな教育受けてきたんだよ」

「その言葉は、そっくりそのまま、お前に返してやる。ただの家なし子にしては、戦い慣れしすぎだ」

「それもそうだな。まあ、ちょっと特殊な育ちをしたからね、俺たちは」

「特殊な育ち方、な。俺も特殊といえば、特殊か」

「それどころか、はつきり普通ではない。しかし、少年はそんなカリク以上に、何かがありそうな雰囲気であった。」

「そういえば、あんた名前は？」

「カリクだ。お前は？」

「俺たちはレイン。よろしく頼むぜ、カリク。主に食費を」

「安物でよければな」

「問題なしだ。食えるってだけでも万々歳だし」

互いの紹介をし、無表情に近いカリクに対して、スリの少年ことレインは笑顔を見せた。

「けど、驚いたねー。まさか、自分の財布をすった奴に協力を頼んでくるとは」

「相手がデカいからな。なんのしがらみのなさそうな、お前みたいな奴の方が味方として都合がいい。それに……」

銃を服の中に隠れているホルスターへしまっ。言葉を切ったので、レインが続きを促してくる。

「それに？」

「お前の戦い方は、ほとんど我流だが、根底に軍人の基礎を思わせるものを感じた。だから、何か因縁でもあるかと思ってな。そつちのしがらみなら、あっても困らない」

「……なるほどね」

彼はどこか意味ありげな反応だった。おそらく、どこかしらは合っているのだろうと、カリクは踏む。

「じゃあ、行くぞ。これから、首都に行く手段を考えないと。誰かさんのせいで、余計な時間をくったからな」

とはいえ、協力してもらえらるならレインの事情に興味はなかった。さっさと廃屋を後にしようとする。

「えっ、ちよっ、もつと訊くことないの？」

「ない。それより時間が惜しいんだ。お前の詳細はどうでもいい」「……さいで」

一度、レインはカリクを呼び止めてきたが、肩をすくめただけだった。

「でも、荷物を用意する時間はくれよー。さすがに準備くらいはさせてくれるだろ？」

「……逃げるなよ？」

「逃げないって。あんたの話、“面白かった”しな」
話はともかくとして、彼は旅の準備をしに、二階の奥へと走っていった。カリクは、踊り場で待つことにした。

五分ほどで、レインは戻ってきた。小さなリュックを背負っている。

「何入ってるんだ、それ」

「んー、だいたいナイフ」

「……そうか」

訊いておいていながらというところではあるが、彼は軽く流した。頭の中で、荷物確認は絶対に避けると、注意事項を書き入れる。元々、銃のせいで身体検査がアウトなのだが、比較的行われやすい手荷物の方もまずいとなると、色々と気を使わないといけなそうだった。

「んじゃ行くこうぜー。ああ、俺たちの加入祝いでもいいぞ」

「それはない」

「即答!？」

レインの軽口を一刀両断し、カリクは廃屋を出た。謎の少年を、協力者に引き込んで。

それから二人は、まず古着屋へ行き、レインの服装を安物で整えた。家なし子にしてはまだ綺麗な身なりだったが、やはり普通よりは汚れていたもので、違和感を消すにはそれが一番手っ取り早かったのである。結局、上は赤と黄色の派手なチェック柄のワイシャツ、下は膝や腰の部分に余裕のある迷彩柄の長ズボンという出で立ちになった。選んだのはレイン本人である。できるだけ目立ちたくないカリクは反対したのだが、

「片方が目立ってれば、もう片方はあんまり覚えられないぜ！」
という、本当かどうか際どい意見を盾に押し通された。

店を出て、街の中央付近にある役所へ向かう。キョールに出入りする馬車の情報を扱っている、交通局というところに用があった。その道すがら、カリクはレインの格好に対する周りの反応を見ていたのだが、意外にもあまり注意を引いていなかった。それどころか、上下がピンクと淡い青とか、たまにもつとんでもない格好の人がいたりで、あまりレインが派手に思えなくなってくるほどだった。

「今は、派手なのが主流なのか？」

「主流ではないと思うぜ。でも、前より増えてる。くそー、なんか負けた気分だ」

勝っていいことがあるのかとカリクは疑問に思ったが、伝えなかった。

そうこうしているうちに、役所にたどり着いた。二階建てながら、縦横の面積が大きい建物で、くすんだ白の外壁のあちこちに窓がある。だが、隣にある黒一色の建物の存在感に圧倒されていた。四階建ての建物に、演習場まで敷地内にある東部軍基地と並んでいたの

である。

「レイン、交通局の場所は分かるか？」

「知らねー。だいたい、俺っちが役所に用があるわけないんだから、分かんないに決まってるじゃん」

「……どつかに案内図くらいはあるだろ」

ただ、今は基地に用はない。とりあえず、役所の中へと入った。

中は、混んでいるわけでもなく、空いているわけでもなく、そこに人がいた。さすがに、レインの姿が浮く。隣を歩く彼へ、

「やっぱり、買い替えないか、それ」

そんな提案を試みるが、

「えー？ パスで」

あっさり断られ、カリクは肩をすくめた。

「おっ、ほらあつたぜ、カリク」

カリクに構わず、レインは楽しげに右前を指差した。その先には、“運行情報”と書かれた掲示板があり、近日中の馬車の運行情報が記された紙が所狭しと張られている。

「なんだ、首都行きはたくさんあるじゃん。よりどりみどりだぜ？」

何が楽しいのか、レインはニコニコしていた。カリクは自分の額を押さえる。

「そりゃ、首都に行くのはたくさんあるだろうよ。問題なのは、遠回りなのがほとんどだったことだ」

「遠回り？ おっ、本当だ。レンバー経由とかもあんのか。すげーな」

もう一度掲示板を確認したレインが、驚きを示した。それから、カリクの方を向いてくる。

「遠回りじゃ、ダメなのか」

「できれば避けたい。一刻も早く行きたいんだ」

首を横に振り、真っ直ぐにレインへ目を合わせる。すると、眼前の派手な少年はニヤリとした。

「じゃあ、俺っちにいい案があんぜー」

瞬時に、カリクの頭の中で警報が鳴った。

「ここだぜ、カリク君」

「ああ、そう……」

二人がいるのは、ニケアの郊外だった。眼前には、多くの産業廃棄物が山となっている。産業で発展している街の、裏の姿だった。オイルとサビの混じった悪臭が漂っている。

レインが胸を張って解説を始める。

「たまーに、失敗作の車が、解体されて必要な部品だけ抜き取られた状態で放棄されてるんだ。で、車からは抜き取られたパーツも、別のときにまだ使えるのに放り出されてたりするんだ。実際、前に見たし」

ようするに、車を見つけようということだった。カリクは難色を示したが、もし馬車を選ぶなら一日の猶予があったため、あまり期待を持たずに探しに来た次第である。

「見たことがある、か。仮に本当に車とそれに必要な部品があったとしても、動かないと意味ないぞ」

「大丈夫大丈夫！そこは俺っちにまっかせなさい」

どこから来るものなのかさっぱりだが、レインはやけに自信満々だった。逆に、カリクは不安がじわじわと増していく。

「まあ、とにかくまずは探すしようぜ。話はそれからだ」

「はあ……。そうだな。とにかく、探してみるか」

ため息をつきつつも、カリクは同意した。二人で、ゴミ山の散策を始める。

「で、ずいぶん俺たちは神様に愛されてるらしいな」

数十分後、カリクとレインの前には、廃棄された試作車があった。白いボディの小型車で、ボンネットは全開にされている。レイン曰わく、部品がいくつか抜かれているものの、足りないものもうまくいこと調達できたとのことだった。

「いやー、まさかこんなにうまく行くとはなー」

レインにとつても予想外だったらしい。ご機嫌に声を上げた。

「で、組み立てはどうすんだ？ 俺は車の作り方なんて分からないぞ」

そんな彼へ水を差すように、カリクは尋ねた。しかし、レインは元気なままで、こともなげに答えを言う。

「もち、俺っちがやるぜ。あと、運転もまっかせなさい！」

「仕方ない。馬車にするか……」

「待った待った！ 俺っちのこと信用してなさすぎだろ！ 共闘するんだから、仲良くしようぜ」

とは言われても、そもそもは財布をすってきた相手である。戦力としては信用できても、他の部分では無条件で信頼はできない。

「むむむ。見てろよ。俺っちの技術はすごいんだからな」

カリクの内心が伝わったのか、レインは覚悟しろと言わんばかりに、左手を腰に当て、右手で指を指してきた。

「期待しないで待っててやる。馬車が出る明日の昼まではな」

「うっしやあ！ 目にももの見せてやるからなー！」

冷たい反応にもめげずに、彼は両手を上げて雄叫びを發した。それを見て、カリクは肩をすくめる。

「まあ、せいぜい頑張れ。俺は場所を確保して、眠らせてもらう」

「おう！ って、ええっ！？ そこ、そばで待ってくれるとかじゃないの！？」

「誰が待つか。一人でやってろ」

「っ、冷てえ……」

その後も文句を垂れ続けるレインを完全に無視し、寢床を探しに廃棄物の山を離れた。

翌朝、日が出掛かっているぐらいに、カリクはレインの様子を見に行った。昨日別れた場所に着くと、周囲に転がっていた部品が消えていて、ボンネットの閉められた車のそばで、昨日出会った少年がタイヤ辺りに背を預けて眠っていた。

「これは……」

半信半疑ながら、車へ近づぐ。見ただけでは動くかどうかが分からなかったので、

「起きろ」

「ぶふっ!?!」

傍らで目を閉じているレインの頬を叩く。足で蹴ろうかとも思ったのだが、さすがにやめておいた。

「車の修理はできたのか?」

「うー……。もう少し、愛情ある起こし方がよかったぜ……」

「叶わない願いを口にする暇があったら、さっさと訊いてることに答えろ」

なで声を簡単に流し、カリクは先を促した。不満げに口を尖らせながら、レインが答える。

「できてるよ。もう試運転もしたし」

「……本当か?」

「本当だよ! 見てろよー!」

寝起きとは思えないほどに、元気のいい反応が返ってきた。そのままの勢いで、彼は車に乗り込む。カリクは少し車から離れた。

そして、窓越しに見えている少年がハンドルを掴み、足元を一度見た。

「へえ……」

ほどなく、タイヤがゆっくりと転がりだした。車が、動いていた。少しだけ進んですぐに止まり、レインが鼻息荒く降りてくる。

「どうよ、カリク君！　しっかり直してみせたぜ！」

「そうだな。文句なしだ」

素直に彼の手腕を認めた。ますます何者なのか怪しんでもおかしくないところだが、あくまでカリクは気にとめない。いくつか、車に関する質問をする。

「で、運転もできるんだよな」

「もち！　でなきゃ、こんな提案しないって」

「じゃあ、燃料はどうするんだ？」

「そりやお前、決まってるだろ。俺っちたちが買えるわけないんだから、方々からちよつと拝借すんのだ」

二つ目への答えに、カリクはため息をついた。正直、どうせそんなことだろうという予想は持っていたのだが、実際にうなずかれると、頭を悩まさざるをえなかった。

「まあ、他に方法がないから、仕方ないことではあるんだけどな」
手を額に当てながら、つぶやくように言う。車の免許を取れるのが十八歳から、それも今は上流階級の人間でないとそうそう取得者がいないのだ。バカ正直にガソリンを買いに行ったところで、売ってもらえるわけがなかった。

「なに。俺っちたちがちよつと盗んだくらいで、不利益になつたりしないって。捕まらなきゃいいだけだし」

さもたいしたことではないかのような言い草だったが、時間の惜しいカリクとしては一度たりとも捕まるわけにはいかないため、かなり重大なことである。少しづつ遅くなるだけでも、サリアの安否は確実に怪しくなっていくのだ。また、なにより捕まらなければいだけというのが、そもそも一番大変な点なのである。

とはいえ、同じく時間を考えると、ガソリンを盗難するリスクを加えてなお、車で移動した方が効率的だった。腹を決める。

「仕方ないな。俺も盗人になってやる。お前も、捕まるなよ」

犯罪を犯さないことよりも、サリアを助けられるかどうかの方が、彼には重要だった。

「合点！」

レインが明るく返す。顔には満面の笑みがあった。

こうして二人は、薄汚れた白の小型車に乗り、ニケアを後にした。首都へとたどり着くために。

四章 『囚われの少女』

時は、カリクとレインがニケアを出て数時間経ったくらいであった。場所は移って首都セルゲンティス。サリアは、茶髪の大柄な男と金髪のスラツとした体型の女、二人の軍人に連れられて、街への入り口へとたどり着いていた。ひたすらに高く白い壁が続いて、中には監獄があると言われても納得してしまいそうだった。その中に、街へと続く二枚並びの門があった。

今、車は止められている。セルゲンティスは、さながら国境のごとく、入る者への厳しい審査があった。軍人であっても免れることはできない。

「これはこれは、ガヌ中尉。ご苦労様です」

サリアたちの乗る車を止めた入都管理局の人間が、降り出たガヌに敬礼をする。シルラは、サリアの隣に座ったままだった。

「まさか、逢い引き中だったのですか？」

「逢いび……っ！」

その管理局の男は、車の扉越しにシルラの姿を見つけたらしく、ニヤツとした。サリアの隣に座ったままの彼女が顔を引きつらせる。一方、車外で直接言葉を受けたガヌはというと、

「いやー、そうだったらよかつたんだけど、残念ながら任務だ。それも超特殊オーダー。ほれ」

軽い調子で流し、一枚の紙を示した。サリアからだど、よく見えない。

「これは、軍王様の勅命書じゃないですか。どんな任務なんですか？」

管理局の男は、やや声色を高くした。どうやら、紙は勅命書のようだった。

「バーカ。こんな紙がもらえるくらいだ。極秘に決まってるだろ。いいから、早く入都許可出せ。車の中にもう一人も任務がらみ

だから確認は不要だ」

「了解しました。今、門を開けますから、車内で待っていてください」

ガヌの催促を受け、管理局の男は門の横に引っ付いている守衛室へと小走りで戻っていった。やがて、門が開く。開き切ったのを確認してから、ガヌが運転席へ戻ってきた。

「さ、行こうぜ、シルラ」

「……ああ、そうだな。行くでしょう」

サリアから見たかぎり、シルラはもう平時の調子を取り戻したように思えたが、

「あつれー？ シルラちゃん、もしかして逢い引き発言、まだ気にしてる？」

「なっ！ そんなわけないだろう、この阿呆が！」

からかいに対して、声を高くしたことから察するに、それは勘違いのようだった。

(仲いいなー)

攫われたにしては、かなり危機感に欠けた感想が、サリアの頭には浮かんだ。

当初こそ、サリアは当然ながら自分を強引にカリクから引き離した軍人二人を警戒していた。しかし、どうにもガヌとシルラを、完全に敵と位置付けることができなかった。理由は、大きく分けて二つある。

一つ目は、二人がサリアをいたわってくることだった。任務上そうしなければならぬのか、それとも単純に二人の人柄なのか、首都へと向かっていた二日間、ことある事に気を使われたのである。

「何か食べたいものある？」とか、「しんどくない？」とか、「もしあの男に変なことをされたら、すぐに言え。容赦なく撃ち殺す」

などと言われたのだ。

二つ目は、彼らの会話だった。一例を挙げると、

「なあ、シルラー。首都まで、あとどんくらいだー？」

「それはさっき話題にしたばかりだろうが。あと一日は絶対にかかるよ、何度も言っている」

「遠いなー。なんかこう、ワープとかできない？」

「そんな便利な能力があれば、とっくに使っている。貴様は我慢が足らなすぎだ」

「えー？　すぐに銃口を向けてくるどっかの凶暴女よりはマシだろ」

「さて、誰のこと言っているのかさっぱりだ」

「いや、現在進行中で俺に銃口向けてる方がいらっしやるじゃないですか。やめようぜー。今はお前が運転なんだから、ちゃんと前見ようって」

「……貴様から注意を受けようとは、私も堕ちたものだな」

こんな感じだった。サリアがいるにも関わらず、二人はかなりリラックスした様子で、コミカルな会話を幾度も交わっていたのである。そこから感じる彼らの人柄の印象がよかったので、二つ目の訳と合わせ、どうしても敵視できなかつた。

入都の門をくぐり、セルゲンティスへと入る。中で一番に目に入ったのは、中央に位置する本部基地だった。大通りの先に位置し、圧倒的な威圧感と存在感を放つ、黒の建物だった。何階建てかは、遠くて分からない。

街並みに注意を移すと、こちらもすごかった。入り口付近こそ、二ヶアとさほど変わりない風景だったが、大通りを進むにつれて、建物の大きさが増していった。おまけに、かなり煌びやかである。ただし、どれだけ華やかだろうと、この街を囲う高い壁と併せて見てもしまうと、違和感が拭えない。逆に、無機質か荘厳な感じの建物

は、とても自然に溶け込んでいる。

「相変わらず、なーんかちぐはぐした街だよなあ」

「そうだな。私としては、ジャラジャラ飾ったものがなければ、もう少しマシな気分になるのかな」

「あー、まあシルラさんはお堅いですからねー。でも、あの壁は嫌だと思わない？」

「あれは仕方ないだろう。何十年もかけて造った、我が国の絶対的な防御壁だ。防衛という観点から見ても、あれをなくすわけにはいかん。好きか嫌いかわかると問われれば、後者だな」

おそらくここに住まいを持つ二人でも、この街の景観には否定的なようだった。

そんな街の中を、三人が乗った車は進んでいく。

やがて、遠くに見えていた黒の建物の真下へとたどり着いた。首都軍の基地、すなわちこの国の中枢へと。

「あー、憂鬱だな。あの人とまた会うのか」

「文句を言うな。特殊任務なのだから、当然だ。それに、閣下を慕っている人間は多い。あまり滅多な口をきかない方がいいぞ」

「分かっているよ。だから、今のうちに言っているんだ」

基地の門でまた勅命書を見せ、建物の横にある駐車場を目指した。サリアは窓から外を覗いてみたが、左側にはひたすら黒壁の建物、右側には灰色の壁が続くだけだった。しばらくしてから左折したところで、ようやく前に軍の車両が所狭しと並べられている空間が見えた。奥には演習場の類いと思しきものがある。

駐車場にガ又は車を止めた。一番始めに降りると、後方のドアを開け、

「どうぞ、お二人」

執事のように恭しく頭を下げた。気障っぽい動作だった。

「……サリア。貴女を今から軍王のところへ連れて行く。申し訳ないが、身体検査を受けた後、目隠しをしてもらうことになる」

そちらを無視し、シルラはサリアにそう説明をした。

「……別にかまいません」

サリアは素直に従う。ここで抗う意味がないし、二人をあまり困らせたいとも思わなかった。

「ありがとう」

了解を受け、シルラは礼を口にした。

「……いいから、早く降りようぜ」

置いてきぼりのガヌが、ぼそりとつぶやいた。

身体検査を終えたサリアは、目隠しをされ、シルラに手を引かれてどこか分からないところを歩いていった。ところどころから、「なんだ、あの子?」「さあ?」というような囁きが聞こえる。軍人ばかりの場所を目隠しをされた少女が歩いているため、浮いているらしい。

建物のどの辺りかさっぱり分からなくなってからしばらくしたくらいに、シルラの歩みが止まった。彼女から声をかけられる。

「止まって」

緊張が含まれていた。どことなく、張り詰めた空気も感じる。そんな中で、シルラが大きな深呼吸をした。

「よし」

と、意を決したような言葉を小声で出したところで、ノックの音がした。

「ガヌ」ロード中尉です。シルラ」マルノルフ中尉もおります。件の少女をお連れしました」

シルラは、何もしていない。ノックをしたのも、言葉を発したのも、ガヌだった。ただし、相変わらずどこかだるそうであった。

「どうぞ、お入りなさい」

男性の声が聞こえた。聞こえ方から察するに、部屋か何かがあるのか、その中からのようだった。

「貴様……」

「ほらー、シルラちゃん、嫌そうだったから。それより、さっさと入ろうぜ」

驚きを見せるシルラに、ガ又は軽い調子で返し、

「失礼します」

彼女の返答を待たずに、どこかの部屋へ入る扉を開けた。

「……まったく」

呆れたような声を出したシルラに手を引かれ、サリアも室内へ入る。

「一旦、目隠しをとるぞ」

そう呼びかけられ、ようやくサリアは視界が戻った。明かりが眩しく感じる。

徐々に慣れてきた目で、部屋の中の様子を確認した。“たった一人”のためにあてがわれているにしてはかなり大きく、サリアの身近なもので表現するなら、学校の教室を二つくつつけたくらいの広さがある。床には赤の絨毯が敷かれていて、壁は白い。右側にはおそらく電報を打つのであろう機械が机の上に置いてあった。また、多くの人間の顔写真が上の方に飾られている。逆側には本棚と、なぜワインの入れである棚があった。この部屋の主のものだろうか。トロフィーが無造作に乗っけられている。部屋の奥の方には軍旗、国旗が並び、グラスの入った小型のケースも置かれていた。額縁に収められた賞状が、その頭上にある。

そして、

「ご苦労様です。ガ又中尉、シルラ中尉」

中央から奥よりにある大きな机には、白髪が多い老人の姿があった。柔和な笑顔に反し、醸し出す雰囲気は厳かで緊張感がある。何か、得体の知れない恐怖を、サリアの身体は感じとっていた。

「その子が、“オモイノチカラ”を持つ少女ですか」

細い目が捉えてくる。サリアは、なぜか背筋に冷たさを覚えた。

(なんだろう。この人、なんだかすごく嫌な感じがする)

そう“心の内”で思ったのだが、

「すごく嫌な感じがしますか。申し訳ないですね。なにしろ、命のやり取りを何度もしていると、どうしても知らず知らずに対面している相手に重圧を感じさせてしまうんですよ」

目の前の老人は、それを読み取った。サリアの表情が硬くなる。

(どうして、私の考えることが分かるの?)

「人の考えてることは、すぐに分かるんです、私は」

またしても考えていたことを、口に出される。

(まさか……)

「ええ。そのまさかです。貴女と毛色は違いますが、私も“オモイノチカラ”を持っているんですよ。サリア“ミュルフさん”

サリアの予感はずだった。目の前にいる老人も、特殊な能力を持っているのだ。

「おっと。まだ名乗っていませんでしたね。私はクラカル“エル”ミッドハイムといいます。階級は総督ですが、“軍王”と言った方が分かりやすいでしょう」

「“軍王”……」

ラストージ共和国の頂点に君臨する者の称号を、サリアは繰り返す。目の前にいる人間がまさに、当人であるミッドハイムだった。

「ええ。驚かれたでしょう。国のトップが私のような老人で」

彼は自分に関してそう言ったが、ただの謙遜にしか思えなかった。素人目にも、隙がない。

「……そんな方が、私になんの用ですか」

サリアは明らかに警戒を表に出した。しわを寄せて、睨む。

「警戒されていますね。当然ですが、残念なところです」

言葉と裏腹に、老軍人の様子に特別残念な感じはない。

「まあ、本当は貴女が私をどう思おうと、問題はないんですが」
自分で言ったことを、あっさりひっくり返す。サリアの考えていることに、深い興味はないらしかった。

「重要なのは、あくまで貴女の持つ“力”。大変でしたよ。少ない

情報から、力についての予測を立て、その持ち主の居場所を把握するのは」

柔らかな笑みを崩さないまま、軍王が告げてくる。

「つまり、用があるのは、貴女ではなく、貴女的能力です」

一個人をまるで無視した言葉だった。彼にとってサリアは、ただ単に力の所有者なのだ。

「貴女のオモイノチカラは、私のものと違って、特殊な部分がありますからね。じっくり研究させてもらいますよ。今日はただの顔合わせです。貴女の心の中から、力を持っていることは確信が持てましたし、もう退出していただいてかまいませんよ。地下の特別室に連れて行ってください、ガ又中尉、シルラ中尉」

「了解です」

「はい」

まだ笑みの裏にある表情を見せることなく、ミッドハイムは退室を命令した。部下二人が返事する。

「行くぞ、サリア」

シルラに手を再び掴まれた。彼女は逆の手で目隠しを出す。サリアの視界は、再び真っ暗になった。

「待ちなさい。シルラ中尉」

「はっ。なんででしょうか」

そのまま部屋を出ようかというところで、ミッドハイムがシルラを呼び止めた。

「疑問を持つというのは、人として当然のことですが、中には持つてはいけない疑問というのがあります。なにより、遥かに上の階級の者がやることに逆らってはいけないものです」

「……はい」

「ますます裏を感じますか。まあ、どうしようとも貴女は貴女ですから仕方ありませんね。ただ、余計な詮索や邪魔は御法度ですよ」

「上辺だけの返事は必要でしょうか」

「いいえ。本音との違いで私を笑わせたいというのなら、話は別で

すが」

「……失礼します。行くぞ、ガヌ」

意味深な会話を交わしてから、シルラはガヌを促し、部屋を出た。サリアは自分の手を掴むシルラの手が、少し汗ばんでいるように感じた。

扉を閉めた音がした後、シルラはその場から離れた。手を引く彼女は、少し足早になっているようにサリアは思った。

「シルラ。ここらへんまで来れば大丈夫だ。そんなに焦って歩くなよ。サリアちゃんがついていくの大変そうだぞ」

ガヌも同じことを思っていたようで、階段を下りたあたりで後ろの方から呼びかけた。

「っ……」

言葉にならない声を発して、シルラが足を止める。掴まれている手は、強く握られていたために少し痛かった。

「話なら後でいくらでも聞いてやるから、今はとりあえずゆっくり歩け。な？」

「ガヌ……」

常の毅然とした口調と違って変わり、どこか泣きそうだった。

「大丈夫だつて。別になんにもしてきやしないさ」

「だいいいが」

「ったく。いつもは強気な態度のくせに、打たれ弱いよな、お前つて」

「うるさい。どっちも私の性格だ」

「ああ、そうかい」

ガヌの声は、優しくかった。シルラはシルラで、手の力がほぐれる。サリアは自分の置かれている状況が、とても安全とは言えないと分かりながらも、二人の関係に考えを傾けずにはいらなかった。

「ガヌ」

「んー？」

「お前に言うのはあまり気が進まないが、今日のところは礼を言っ

ておく。ありがとう。ノックの件も含めてな」

「引つかかる言い回しだけど、どういたしまして」

続けての会話を聞いていて、サリアはとてもカリクに会いたくな
った。

(カリク。きつと、助けに来てくれるよね)

彼の積んできた訓練の数々を、サリアは一部しか知らない。しかも、戦い方を学んでいるからといって、助けに来てくれるという確証はない。それでもサリアは、疑わなかった。きつとカリクは、自分を助けに来てくれるに間違いないと。

冷静さを取り戻したシルラに連れられ、サリアはまた基地の内部を移動した。今度は何度も階段を下りていたのに加え、少し涼しい空間へ出たので、おそらく地下だろうと予想した。

長い廊下を直進したり曲がったりを繰り返して、しばらくして、

「ここだ」

というシルラの声がしてから、扉を開ける音が響いた。辺りがとても静かなので、不気味さがあつた。閉める音も、同じ感じに耳へ入る。完全に閉まりきつたところで、目隠しをはずされた。

「うわぁ……」

さつそく開いた目に飛び込んできたのは、手狭な部屋だった。しかし、思わず感嘆を漏らしてしまうほどに、綺麗な室内である。床は赤い絨毯が敷かれ、右奥には真っ白なシーツのベッドがあり、真ん中には花瓶を乗せたテーブルが置かれていた。下手な宿泊施設より、レベルが高い。

「貴女には申し訳ないが、ここにずっといてもらうことになる。言葉を選ばなければ、監禁と言ってしまうって差し支えない」

あけすけな表現だった。ガヌが肩をすくめる。

「まあ、そういうことだな。出れても研究所に行くくらいだろう。」

会えるのは俺たち軍人か、変な研究者共くらいだ」

「だろうな。ついでに伝えておくと、部屋の内外に監視も一人ずつつけさせてもらう。ただし、内側については、私から必ず女性にしてみらえるよう取り計ろう。私もできるかぎりはいれるようにする。貴女は嫌かもしれないが」

彼女らの言葉は、とても誘拐犯という悪人に思えないものだった。思わず、

「いえ、そこまでしていただかなかなくても」と、遠慮してしまうくらいに。

「いいや。できりがきりはさせてもらう。貴女は気にしなくていい」「そうそう。こっちが勝手にやるって言ってるんだ。ただでさえ強引に連れてきたんだし、埋め合わせにはならないだろうが、素直に受け入れておいてくれ」

やはり、悪人には思えなかった。

「ただ、今日のところは私たちは失礼させてもらう。色々やることがあるのでな。貴女も休むといい。ゆっくりとは言わないがな」

「は、はい」

口調は堅いが、思いやりのある彼女にサリアはうなずいてみせた。そこで、外から声がした。

「ガヌ中尉、シルラ中尉。お待たせいたしました」

監視の人員である。ガヌが部屋の扉を開けると、男女が一人ずつ、外に立っていた。

「おー、ご苦労さん。行こうぜ、シルラ」

「ああ。ではな、サリア」

ガヌの呼びかけに応え、シルラはサリアにあいさつしてから、二人で扉へ向かった。去り際、シルラは監視の二人組に、

「上客だ。困らせるなよ。手荒な真似もするな」

そう言い聞かせた。

「……過保護だねえ」

隣では、ガヌが苦笑していた。

要人を匿うための地下室を後にして、シルラはガヌと肩を並べて廊下を歩いていった。

「で、何を考えてたんだ。あいつになんか言われたろ」

あいつとは、ミッドハイムのことである。切り出したのは、先ほどの総督室を出るときのことだった。

「ああ、あれか。ずいぶんとあっさり、あの子との対面を終えたなと思っとな」

「あー、確かに誘拐させるほどご執心なわりには、特に目立ったことはなんにもしなかったよな」

「そうだろう？　まるで、今のあの子には用がないようだった」

「用がない？　どういうことだ」

ガヌが訝しげな表情を浮かべた。

「はつきりとは説明できん。なんとなく、そう感じただけなのでな」彼の問いに、シルラは首を横に振った。

「なににせよ、あの子にこれからいいことが起きると思えん。せめて、人間として扱ってもらえればいいが……」

心配そうに、歩いてきた廊下を振り返る。ガス灯が怪しく並んでいた。

「人間としてっていうのは無理だろうが、貴重な人材だ。研究者共も“いつもみたく”乱暴にはしねえさ。それに、させたくもないんだろ？」

「当たり前だ。せめて、私が手を出せる範囲は救ってやりたい。それに、お前も見ただろう。彼女を攫うときにいた少年を。彼と引き裂きたいと思うか？」

熱い口調だった。同時に、研究者たちへの嫌悪感も混じる。傍らを歩くガヌの目を見つめた。

「んあ？　い、いいや、思わないな」

彼は、一度目線を泳がせたが、最終的には目をしっかりと合わせて答えてきた。

「お前はいなかったけど、あのとき奴は銃を向けるのをためらわなかった。余程、大事な存在なんだろうな。“引き金を引く覚悟”があるかどうかは、まだ分からないけどよ」

シルラから目を離し、前を向く。少年のことを思い出してか、顔には微笑みがあった。横顔に、シルラは尋ねた。

「……あの子を、救えると思うか？」

「それは分からない。分からないが、俺は賭けてるぜ。何かしてくれるってな」

表情を変えずに、強く言い切った。

「そうか。なら、私もそう考えておくでしょう。どうせ……」

シルラは自嘲気味に微笑んだ。一度言葉を切り、横目で後ろを見る。

「私たちが何かを起こしても、どうにもならないのだからな」

ガ又とシルラが地下を後にしてどれくらいたっただろうか。サリアは、女性軍人の監視の下、できることもなくベッドに横たわっていた。外が見えないので、時間が分からない。かといって、見張りをしている軍人に訊く気にもならなかった。

心の中は、不安でいっぱいだった。これからどうなるのか、まったく分からない。ミッドハイムのこと、不気味だった。一体、何をされ、何をさせられるのか、皆目見当がつかない。

(カリク……)

幼なじみの少年の名前を、心中で呼ぶ。彼女の場合、本当に彼へ届くかもしれない呼びかけだった。ただし、どういう条項が満たされていれば伝わるのかが分からないため、望み薄の行為である。

と、そこで地下室に訪問者が現れた。

「邪魔するぞ」

「お、お疲れ様です。シルラ中尉」

シルラだった。監視をしていた軍人が、慌てて頭を下げる。

「ああ、お疲れ様。悪いが、少し彼女と話したいことがあるから、席をはずしてくれるか？ 三十分ほど、休憩にしている」

「休憩、ですか？ しかし、今は私の監視時間帯で……」

「いいから、行ってこい。私が勝手に代わると言っているだけなのだからな」

「わ、分かりました」

渋る部下の肩を叩き、シルラは微笑んだ。そう何度も上司の頼みをつっぱねられないと思っただろう、部下は承諾した。「失礼します」と言ってから、部屋を出る。サリアとシルラだけが残った。

「……何か用事ですか？」

「敵意はなく、ただ純粹な疑問だった。」

「用事だな。ただし、個人的な話だ」

シルラは、部屋の真ん中にあるテーブルの椅子へ腰を下ろした。背もたれに体重をかける。

「個人的な話？」

彼女からの個人的な話とはなんだろうかと、サリアは首をひねる。思い当たる事柄がなかった。

「ああ。メシアで貴女を強引に連れ去ろうとしたとき、少年があの場にいらさう。彼のこととちよつとな」

「カリクのこと……？」

ますます、どんな話をする気なのか分からなくなる。カリクの話というのはなんなのか。彼とは、関わりがないはずである。

「そうだ。私はちらつと見ただけだが、彼は貴女を護ろうとしていたのだから？ ガ又はナイフを持っていた。なのに、あの少年は貴女を護るために、奴と対峙した」

「それが、どうかしたんですか？」

彼女が何を言わんとしているのかが、見えてこなかった。

「特別どうというわけではない。ただ、彼にとって貴女が、命懸けで護りたい大事な存在だというのを確かめたかっただけだ」

サリアの問いに、シルラは微笑む。その瞳に、ある感情が浮かんでいる気がして、尋ねた。

「シルラさん、羨ましいんですか？」

瞬間、眉が動き、彼女は目を見開いた。まさかとサリアは思っていたのだが、間違っていないかつたらしいと思い直す。シルラの瞳に浮かんでいた感情は、羨望だった。

「羨ましい、か。そうだな。私は、あの少年に命を張ってもらえる貴女が、羨ましいのだと思う」

今度は言葉でも認める。続けて、サリアへ訊いてきた。

「貴女から見て、あの少年はどんな存在だ？」

軍人としてではなく、一人の女性としての質問に、サリアは思えた。ゆえに、同性の一人として答える。

「大切な人です。家族とは違うけれど、とても特別な位置付けにいる人。それが、私にとってのカリクです」

「ふん。恥ずかしげもなく、よく言ってくれるものだ。憎たらしくなってくる」

頬杖をつきつつ、シルラは苦笑した。穏やかな空気が流れる。自分が捕らわれの身であることを、思わず忘れてしまいそうだった。

「シルラさん。私からも、一つ訊いていいですか」

「なんだ？」

「ガヌさんとは、どういう関係なんですか」

その雰囲気に乗じ、ずっと気になっていたことを訊いてみる。ここまで彼らと場所にいて感じ取ったかぎり、ただの同僚には思えなかった。

シルラは、最初こそポカンと口を開けたが、

「ガヌか。別に、あいつはただの同僚だ」

すぐに素っ気ない言葉を返した。ただ、表情には寂しさがよぎった。恥ずかしさでも、動揺でもなく、寂しさである。何がある。直

感が告げていた。

「本当に？」

試しに、追い討ちをかけてみる。今度の返答は、早かった。

「本当だ。他に何かがあるわけでもない。たまたま同期で、たまたま同じ任務にあたるのが多いだけだ」

強い否定だった。だが、表情との総合を考えると、サリアはそのままの意味で受け取れなかった。

「シルラさん……」

はつきりとした言葉にはせず、その一言に思いを詰める。向こうも察したようで、

「詳しい事情は分からないが、ガヌは何かを背負っている。近づいたと思っても、真に深いところまでは踏み込ませようとする。誰にもな」

短くも、的確な表現を紡いだ。詳細は伝わらなくても、彼女の想いは感じ取ることができた。

「だから、私も隣に行けない。行こうとしても阻まれる。どうしたらいいのか、もう分からない、私は」

肩をすくめ、彼女は天を仰いだ。サリアに向き直り、話しかけてくる。

「貴女は、軍のトップが関わる陰謀の中心に置かれていながら、見たところ絶望していない。なぜだ？　なぜ、そんなに輝いた目をしてられる？」

なされた質問は、サリアには簡単に答えられるものだった。一瞬、目を細め、口を開く。

「シルラさんとガヌさんが、誘拐犯らしくないから、っていつもの”ありますね。でも、一番大きい理由は……」

一呼吸置き、堂々と言い切る。

「信じているからです。きっと、カリクが来てくれるって。どんなに困難でも、どんなに相手が強大でも、カリクなら、きっと」

疑いはなかった。証拠のない自信だが、それがサリアにとっての事実なのである。

「信じているから、か。なるほどな。それが、絶望を打ち消す方法か」

シルラは、口元をわずかに緩ませる。どこか、すっきりした感じだった。

「礼を言う。私も、貴女と一緒に信じてみよう。もう少しだけ、な」

「……はい」

（信じてるよ、カリク）

揺らぐことなく、輝き続ける。

五章 『闇での遭遇』

少し、時間は巻き戻る。サリアが首都で、地下室に入れられたくらいだった。

原っぱの真ん中を貫くように伸びる、とりあえず道として整備されたオフロードを、一台の車が走っていた。白の車体のそれは、カリクとレインの乗っているものである。二人がニケアを出て半日以上が経ち、太陽の位置は低くなっていた。

「首都まで、あと丸一日くらいか。確実に燃料不足だなー」

「……別に、今更念を押さなくても、やるときはやる。手段を選んでいられないって言ったはずだ」

助手席に座るカリクは、ハンドルを握るレインの顔を見ることなく言葉を返す。いかんせん、免許を取得できる年齢に達していない二人は、免許など持っていないのだから、燃料は勝手に拝借するほかない。

「悪かったよ。まあ、金を置いていくつもりだっただけで、良心的だと思っぜ」

レインが唇の端を持ち上げる。横目で見てきたので、

「前見る」

と、冷たく言い放った。

「へいへい。つれないわねえ、カリク君は」

気持ち悪い口調で文句を垂れ、レインは前に向き直った。と、何かに気づいて、ブレーキを踏む。助手席のカリクは前につんのめった。体勢を直してから、隣の少年を睨む。

「なんだ、急に」

「ああ、悪い悪い。あれが目に入ったもんで」

まったく誠意の感じない謝罪の後、前方を指差した。そちらに目をやると、

「なんだよ。ただの立て札だろ」

二方向に割れた分かれ道と、どこに続くかを表記した木の札があった。片方は、首都セルゲンティスへ向かう道。もう一方は、長くは北のミリシアへ繋がっている道だった。あとは、最寄りの町の名前と、だいたい距離が書かれている。

「あれ自体はな。書かれてる、最寄りの町が問題なのさ」

レインが、言いながら車を降りる。首をひねりながら、カリクも続いた。二人で、札の前に立つ。

「このミリシア方面に書いてある、シャズって町だ。ここに、確かに軍の秘密の施設がある」

「秘密の施設？ シャズに、軍の施設なんて、なかったと思うんだが」

顔をしかめた。成り立てとはいえ、少将の父を持つカリクですら、そんな話は聞いたことがない。

「そりゃ、秘密だからな。俺っちが知ってるのは、境遇と偶然のせいでよ。首都の研究所と軍の、かなり上の方の人間じゃないと、普通は知らない」

軽い口調のレインだが、話している内容はかなりとんでもない。

少将クラスよりも上の人間しか知らない情報を、なぜ知っているのか。

「お前、何者だ」

素直に思ったことをぶつけてみる。

「この国の被害者、かな？」

含み笑いから真意を見出すことは、カリクにはできなかった。

「とにかく、シャズには間違いなく施設がある。見つけられるかどうか分からんけど、痕跡があれば俺っちが探し出せるかもしれない。どう？ 寄り道になるけど、探ってみるか」

自分についての話を切り、レインはそう尋ねてきた。カリクは、黙考する。寄り道なので、時間が無駄になってしまいかもしれない。しかし、父親も知らない情報が手に入る可能性もある。ほぼ、何も知らない現状では、かなり重要なものになるのはまず間違いなかつ

た。

サリアを助けるために時間を無駄にしないか、それともサリアを助けるために寄り道をするか。しばらくして、カリクは結論を口にした。

「……シャツに行く。早く出るぞ」

「おっ、即断即決とは素晴らしいね。さすがカリク君」

カリクは無視して、車へ戻る。後ろから、

「もう少し相手してくれても、いいと思うんだけどなー」

と聞こえたが、気のせいにした。

三十分ほど車を走らせてたどり着いたシャツの町は、カリクの家があるキュールよりも、さらに小さなところだった。ほとんどが農業と畜産業を生業にしているので、感覚としては村に近い。

人工的なものが少ない、緑と土と空が存分に見られる景色を眺めながら、カリクがつぶやく。

「……家と人と、牛と畑しかないな」

「いやいや。牛乳と牛肉とチーズもあるぞ」

「飲食物が増えただけだろ、それ」

すかさずつぶやきを拾ってきたレインに、気のない言葉を返す。

「おお……」

すると、彼は完全に横を向いてきた。目を見開いている。何事かと一瞬訝しみ、すぐにあることに気づいた。

「どこに目を向けてんだ！ 前を見る、前を！」

「あ、ごめんごめん」

指摘され、慌ててレインは前へ顔を戻す。特に何も起きなかったが、場合によっては大惨事になっていてもおかしくない行為だった。声を荒げる。

「何してんだよ！ 下手したら、事故だぞ！ 誰か轢いたら、シャ

レにならない！」

「悪かったつて。いや、まさかカリク君が、俺っちの発言に、ツッコミを入れてくれるとは思ってなかったんで、びっくりしちまってさあ」

一方のレインは、あまり脇見運転自体には動揺していない。別の事柄に驚いていた。彼の言い訳を聞いて、思う。

(雑に流した言葉がツッコミ扱いとは……)

いちいち驚かれています、命に関わるので今後はもう少し反応してやろうかと、本気で考え出すカリクであった。

「それにしても、お前の言ってる施設はどのあたりにあるものなんだ？ 町の規模が小さいにしても、しらみつぶしに探す余裕はないぞ」

一旦、ツッコむツッコまないを脇に置き、施設についての話題に移る。

「んー。見当をつけるとしたら、廃屋だな。人が住んでないのに、人の出入りした跡があれば、限りなく黒だ。軍内部でも一級品の機密事項を扱ってるところなんだから、あんまり人が近づかない場所にあつて然りだろうさ」

「廃屋か……。探してみるしかないな」

この小さな町なら、合致する建物はさほど数多くなさそうだった。まずは役場などがある、町の中央へ車を走らせた。

「今のところ、一番怪しいのはここかな」

かすれた文字で、『宿泊施設・ジャツジ』と書かれていた。郵便受けを見たところ、ジャツジはファミリーネームらしい。

町中を回った結果、廃屋はやはり数少なく、その中でレインが目をつけたのは、かつて宿泊施設だったのであろうこの建物だった。一階建てだが、敷地が広く、おそらく潰れてから年単位は経ってい

そんな様子である。

「施設にするなら、ある程度の広さが必要だから、ここが一番怪しいか。確かに、見方としてはありだな」

カリクは入り口を少し見つめ、中へいこうと足を前へ動かした。

「動き出すの早いな」

後ろからそう言ってきたレインへ、

「時間が惜しいからな。何度も言わせるな」

横目だけを向けた。すぐに前へ戻す。「へいへい」と気のない返事ののち、相棒となっっている少年は横に並んできた。

中は薄暗かった。まだ夕日が差し込んでいるものの、仄かな橙色は、不気味さを演出している。あちこちにホコリが溜まっていた。

「長いこと使われてなさそうだな」

天井の隅に張られている蜘蛛の巣を見上げながら、カリクはそう口にした。

入ってすぐにある、ロビーらしき場所だった。宿泊施設のロビーだが、見た感じは病院の待合室に近いものがある。受付が左にあり、あとは右隅に至るまで五人がけくらいの長椅子が、三列ほど並んでいる。廊下は、正面と左の二方向に伸びていた。

「いいや、そうでもないかもしれないぜ、カリク君」

「何？」

自分の言葉に対するレインの返しに、耳を疑った。

「ホコリの積もり方に、なんか差があるんだよ。例えば、こことか」

彼が示したのは、受付の内側へ入るためにある、小さな地面から浮いた扉だった。細い扉の上部を見ると、ホコリの濃さが違って見えた。一度なくなっただけからまた積もったという感じである。

「なるほどな。誰かが一回触って、積もり方の差が出てるわけか。

でも、近所の子供が遊びに来ただけかも知れないぞ」

「そーだなあ。でも、俄然やる気出てきたぜ」

「なんのやる気だ」

先ほど頭に浮かんだ考えのとおり、気のない感じながらも言葉を

返す。するとレインは、振り返ってきて、

「なんか、宝探しみたいで、ワクワクするじゃんか」

活き活きとした表情をした。カリクは、肩をすくめただけだった。やり取りもそこそこに、二人は探索に移る。

「うーん。ここもはずれかな。なんの形跡もないし」

「じゃあ、次だな」

レインの発言を受け、カリクは先に部屋から廊下へ出る。「ほいほい」と、レインも続いた。

二人は一緒に行動して、廃屋の中を探索していた。分かれてもよかつたのだが、万一口ここに施設があり、何者かがいたら危険だという判断だった。日が沈みかけており、灯りもないというのもある。

回り方としては、ロビーから左に伸びていた廊下の方へまず行き、一部屋一部屋確認しながら、一週してロビーの方へ戻るといようなやり方にした。五部屋程度確認は終わっており、今のところ何も発見はない。

「ん、廊下が二手になってる」

おそらく半分あたりと思われるところで、レインが足を止めた。廊下が真っ直ぐと右折に分かれていたのである。徐々に面積を増している暗闇の中、ホコリをかぶった案内板のかすれた文字を目を凝らして読み取ったところによると、直進すると食堂と浴場があるらしい。

「先にこっちに行くか」

「あいよー」

特に後回しにする理由もない。二人は直進した。ほどなくして、右手に両開きの扉が現れた。扉の上を見ると、“大食堂”とある。ただ、食の字はほとんど判別できなくなっていた。

「では、失敬」

レインがカリクの前に出て、扉をゆっくりと内側へ開ける。錆びた音が響いた。中には、乱雑に椅子が寄せられた机が並んでいる。二人とも中に入り、カリクが後ろ手で扉を閉めた。

「……一層汚いな、ここは」
カリクがつぶやいた。廊下よりも、空気がまずくどんよりとしている。

「そうだな。でも、ここは当たりかもしれないぜ、カリク君」
室内を見回していると、レインが閉めた扉の方を向いて屈み、床を見ていた。

「どういうことだ？」
「入り口とおなじだよ。ホコリが薄いところがある。つい最近に、扉が開け閉めされた痕があるし」
「何？」

彼の言葉を聞いて、カリクは隣にしゃがみ込んだ。確かに、入り口よりもはつきりと、ホコリの濃さが違っていた。

「誰かがここに入ったってことか」
「そういうこと。しかも最近だ。下手したら、ついさつきかもしれないぜ」

説明しつつ、レインは腰を上げる。顔には、いたずらっぽい微笑を浮かべている。

「ついさつき、か」
もし本当に秘密の施設がここにあり、扉を開けて食堂に入った人間が施設に関係しているならば、見つかるのかならずい。秘密裏にされている場所なのだ。親切に、玄関まで送ってもらえるとは思えない。

「慎重に探るぞ。お前の見立てが正しいなら、敵と遭遇するかもしれない」

「あいよ」
声を抑えたカリクの言葉に、レインが呼応する。それから二人は、食堂内を隅々まで確認していったものの、壁にも床にも、怪しい痕

跡は見られなかった。

「あつりー？ こりゃ、はずしたかな」

一番右隅の壁におかしなところがないのを確認したレインが、首をひねった。危機感なく、声を響かせる彼に、カリクは眉根を寄せ
る。

「敵がいるかもって言ったよな。あんまり、でかい声を出すな」

「いや、もう、むしろ見つけてもらった方が楽だと思っぜ。無駄な
時間と労力が省ける」

「敵にやられて、時間が止まるかもしれないけどな」

身体を伸ばしながら、暢気な発言をしたレインに、皮肉を込めた
言葉を贈る。今のところ他の人間の気配は感じないが、痕跡があっ
たのだから、油断はできない。

「確かにそうかもしれないけど、あんまり気を張りすぎてもどうか
と思うぞ、カリク君。現に、今俺っちたちは生きてるし、敵の姿も
見てない。見えないものに気を使うことほど疲れることはないぜ」
しかし、対する少年は気楽なものだった。笑顔を見せる余裕すら
ある。

「……ずいぶんと樂觀的だな」

「んー、そうか？ まあ、そうなのかもな。“そうじゃないとやっ
ていけなかったし”」

カリクがジトリとした目を向けると、レインは調子を変えること
なく、そう言った。いかにも、意味ありげに。

「ああ、そうかよ」

カリクは短い言葉を口にしただけで、今の話題を切った。もちろ
ん、レインの言い回しは気になっていたが、掘り下げる必要性はな
いという判断をしたためである。

気持ちを探索に戻す。食堂はもういいだろうと思っただカリクの目
線は、奥にある厨房に向いていた。食堂と直でつながっており、二
人の位置からも中を窺うことができる。錆だらけで、鍋がひっくり
返っていたり、包丁類が乱雑に置かれていた。落ちている、と言っ

た方が適切かもしれない。

「あの中も見てみるか」

「ん、厨房か。そうだな、一応見てくか」

カリクの案に、レインも乗っかる。二人で、食堂端から厨房へと入った。

内側から見ると、中の荒れ具合はより酷かった。人が三人は通れるであろう通路があり、床は油染みや錆が覆っていて、やはり食器類や調理器具が散乱している。手前には水場があり、その隣には火を扱うのである場所がある。どちらも、今は使えそうにない。一番奥には、人間二人は突っ込みそうな大きさの冷凍庫が見えた。

「こりゃひどいな」

惨状という言葉を使ってもいいであろう光景に、カリクはそう漏らした。隣のレインもうなずく。

「そうさな。ずいぶんと荒れ放題なもんだ」

「とりあえず、見てみるか」

観察もそこそこに、本格的な探索に入る。戸棚なども丁寧に見て回るが、特に不審な点はなかった。

「うーん……。ここにも、なんもないのか。俺っちから提案しててなんだけど、気が滅入ってくるぜ。汚いしー」

レインが、水場の周辺をいじくりながら嘆く。冷凍庫のそばにいたカリクは、たしなめる。

「元々、機密なものなんだ。簡単には見つからないだろ。もしかしたら、見つからないまま終わるかもしれないんだ。もう少し辛抱強く探せ」

「そうは言うけどよー。正直しんどいぜ……」

文句は言いつつ、手は止めない。言葉ほど、我慢が利かないわけではないらしい。カリクも、黙々と作業を続ける。冷凍庫を開けようと、手をかけた。手前に引っ張る。その感触に、眉をひそめた。

「ん……？」

「どうかしたのか、カリク？」

レインが気づき、後ろにやってきた。肩越しに覗き込んでくる。「いや、この冷凍庫、長いこと放置されているにしては、簡単に開きすぎる気がして……」

しゃべりつつ、開く。生肉や魚、またその鮮度を保つための氷類もなく、空っぽだった。一見、おかしいところはない。しかし、今度はレインが気づく。

「なあ、底のところははずせるんじゃないか。妙に綺麗だぜ」

「確かに、そんな感じがするな。ちよつと待て」

カリクがしゃがみ、冷凍庫の底をいじってみる。すると、動く感触があった。

「当たり前だな。上か下に押すと、横にスライドさせられるみたいだ」
言いながら、実際にやってみせる。完全に動かし終わると、さらに深い闇へと誘うであろう、下り階段が待ち受けていた。

「地下への階段、か。よくまあ、こんなもんを作ったもんだ」

「だな」。でもまあ、首都の奴はやることがぶつ飛んでるから、想定範囲内ではあるけど」

二人で、ぽつかりと口を開けた闇を覗き込む。先はほとんど見えない。

「さすがに灯りがいるな。レイン、お前なんか持つてるか」

「いや、俺たちは持ってない。でも、廊下にガス灯ならあったと思うぜ。付くかどうかは分からないけど」

「試す価値はあるな。行くぞ」

「あいよ」

単独は危険だという意図を汲み取り、レインが同意を示した。一旦キッチンを離れ、食堂を通り抜けて廊下へ出る。ガス灯は、壁から伸びた台座にくっついていていた。

「ん、固定されてる」

「関係ない。とりあえず、離す」

レインの言葉を弾き、服の内に隠していた銃を抜く。ためらいなく、壁とガス灯をつないでいる部分を打ち抜いた。甲高い銃声が響

く。ガス灯が、床に落ちた。レインが口笛を吹いて、「過激だねー」と軽口を叩く。

「敵さんを警戒するんじゃないの？」

「でかい声を出してたお前に言われるとはな。別に、構わないさ。あの隠し戸を開けた時点で、地下に音は響いているだろうから、今更、感づかれることを警戒する必要はないだろ」

「そんなもんか？」

カリクはガス灯を拾うと、火がつくかどうかを試した。問題なく、仄かな紅い光が灯る。首をひねっているレインに呼びかけた。

「行くぞ」

「あいよー」

灯りを片手に、暗闇への入り口へと戻った。踏み込む前に、カリクは傍らの少年へ問いかける。

「準備はいいか、レイン」

「もち。そつちこそ、ひびるなよ」

「ふん」

返ってきた答えを聞き、カリクは満足そうに鼻で笑った。今から潜る黒を真っ直ぐに見つめ、

「じゃあ、下りるぞ」

「よしきた」

カリクを前にして、二人は階段を下りだした。

「本当に真っ暗だなー。ただでさえ夜だっていうのもあるけど、上の光が全然届いてねーや」

数十段進んだところで、レインが後ろを横目で見た。カリクも声につられて、振り向く。それほど実感はなかったが、既にそれなりの深さまで潜ってきていた。

歩み続けると、やがて階段が終わり、開けた空間に出た。端っこは目視できないが、足音の反響音でなんとなくの広さを想像する。

「けっこう広そうだな」

「だな。ちよっと、壁際を見てみようぜ」

レインに促され、壁づたいに部屋の左端へ行く。カリクの手中にあるガス灯が、“それ”を照らし出した。

「……なんだこりゃ」

あつたのは、多くのボタンやレバー類だった。簡単に言えば、巨大な機械が設置されていた。

「へえー。これ、首都でも限られたところにしかない、“パソコン”ってやつだぜ」

「パソコン？　なんだそれは」

聞き慣れない単語だった。

「俺っちも詳しくは理解してないんだけど、なんでもいろんな情報とかを保存したり解析できたりするらしい。ざっくり言うと、すごい機械って感じだな」

「一ミリも分からないな。とりあえず、こいつは今、使えるのか？　説明されてもピンとこなかった。話題を変える。」

「いんや、たぶん大本のエネルギーが供給されてきてないみたいだから、使えないと思う」

「その大本のエネルギーって、なんだ？」

「そこまでは分かんない。首都の研究所にあつたやつは、原理は理解できなかったけど、風とか火とかから動力を作ってるのかなんとか聞いたな」

「風に火？」

ますますわけが分からなかった。その要素からこの機械を動かすというのが、腑に落ちないのである。“電気”というエネルギーがこの国で発見されてから歴史が浅く、カリクが科学分野の知識を持っていなかったたので、当たり前のことだった。

「まあ、細かいことはメシアの工場のことでも調べてみなよ。多少なりとは、学べると思うぜ」

しゃべりながら、レインは眼前の機械をあちこち触りだした。しかし、反応はまったくない。

「んー、やっぱだめか」

「それはもういい。こだわる理由もない。他に何かないか探るぞ」
頭をかく彼に、カリクはそう声かけをした。時間がもつたいないというのもある。大きな機械から光源を離し、別の場所を見ようと振り向いた。

「右に避ける、カリク！」

と、不意にレインが叫んだ。反射的に言われた通りの方向へと避ける。その数瞬後に、機械の方へ何かめり込んだ。カリクはわざわざ振り向いて確認したりはしなかった。疑いなく、銃弾に間違いなかったのである。敵に場所が丸分かりになってしまふと考え、ガス灯の光を消した。完全に近い暗闇が、身体を包み込む。

しばらく、音すらも消えた。カリクは、見えざる敵に位置を悟られまいと黙って、物音も立てないように息を潜めているのだが、レインと見えざる敵も、同じことをしているらしかった。

それから一番に耳に入った音は、低く重たい男の声だった。

「よくできたガキどもだ。動いたら危険なことを、よく分かっている」

カリクの中でもレインのものでもない、敵の声。口を開いたわけが痺れを切らしてか、それとも余裕からかは判断できなかったが、とにかく聴覚で敵の位置を探りにかかる。

「それにしても、お前ら何者だ？ ただのガキなら、こんな冷静な判断はなかなかしない」

カリクは、何も答えなかった。レインも、黙っている。

「返事もなしか。ふん、本当によくできた奴らだ。それとも、怖くて動けないだけか？」

男の言葉が続く。

（ちつ。だいたいの方向の予想ができるくらいか。位置が全然分からねえ）

しかし、場所の予測が立てられない。内心でカリクは悪態をついた。

そのとき、近いところから何か風を切るような音がした。聞いた

ことのあるものだった。

「ぐつ!？」

男が突然、苦しげに声を漏らした。何が起きているのかはまったく見えないが、先ほどの音から察する。

(さっきのは、“刃物が風を切る音”だ。レインが攻撃したか) 納得できる解答を引き出すと同時に、疑問も生まれる。

(けど、どうして敵の位置が分かるんだ。ある程度、暗闇でも目の利く俺すら、なんにも見えないっていうのに)

「ずいぶんと、厄介なことをしてくれるものだな。暗闇で正確に、位置を当ててくるか。数ヶ月前に、火事に乗じて“ジーニアス”から逃げ出した子供がいたと報告をもらっているが、お前がそうみたいな」

(“ジーニアス”?)

ひそかに首をひねる。耳にしたことのない単語だった。おまけに、火事や報告といった、気になる言葉も混じっている。

ただ、当の本人はやはりしゃべらない。口車に乗って、うっかり場所を知らせまいとしているのだろうか。

「らちがあかないな。奇襲も失敗しているし、そっちがこっちの場所を把握できるなら、この状況にこだわる理由はあるまい」

彼の対応を受け、敵の男がそう言うと同時に、急に明かりが点いた。ガス灯ではない、何か人工的な光だった。

「あら、電球つすか。まいったね、こりゃ」
姿が晒された時点で、レインはすっぱり黙るのをやめた。敵へ目をやる。カリクも、彼と同じ方向を見た。

立っていたのは、大柄な男だった。筋肉質で、岩のような出で立ちをしている。重厚という言葉が、カリクの頭に浮かんだ。黒の軍服を着ていることから、軍の関係者であるのは、疑いようがない。男は、右手に黒く光る拳銃を手にしていた。

「さて、これで心置きなくしゃべれるだろ。好きに話すでしょう」
男の顔に、嫌らしい笑みが浮かぶ。下品な感じだった。

「あんだ、軍の人間か」

カリクが口を開いた。まず、確認する。

「そうでないとしたら、何に見える？」

相手は、わざとらしくそう答えた。まどろっこしい言い方だが、軍人で間違っていないらしい。

「それにしても、もうずいぶん前に捨てた施設に、まさか侵入者がいるとは思わなかった。お前ら、何をしに来たんだ？」

「さあてね。なんでだと思っ？」

レインがうそぶいた。しかし、敵の男は特に怒る様子もなく、

「想像もつかないな。情報が足りない」

冷静な返しをした。肩透かしをくらった気分なのだろう、レインは眉をわずかに潜めた。

「それに、分からないなら分からないでもいい。お前たちの目的がなんだろうと、やることは変わらないからな」

彼の反応を気にとめず、男は手にある銃を、二人に示してきた。

「ここで、死んでもらう」

抑揚なく、言い放つ。殺すということへのためらいが、欠片も見られなかった。カリクとレインが、声を揃える。

「断る！」

カリクもためらいなく、まず銃を持つ敵の手を狙って発砲した。

狙いを瞬時に察せられ、寸前の間で避けられる。

「ちっ」

軽い舌打ちをしながら、カリクは敵から目を離さずに、左へ走った。男との間に挟めそうなものは、何も無い。ゆえに、身を隠せるものがあるかもしれない、男が来た方向に抜けたかった。入り口に戻ろうとしたところで、狭い階段では狙い撃ちされるのが関の山なのである。

「ビックリしたな。まさか、ガキが銃を持つてるとは」

「最近の子供は進んでんだよ」

カリクが適当な言葉を返す。

「そういうこつた！」

それにレインも乗った。同時に、ナイフを飛ばす。男は、ナイフを軽いステップでかわす。ひそかにつぶやいた。

「二対一、か」

カリクは相手の銃口から目を離さないように、男から距離をとる。(押し切れる。相手の方が地力は上だが、俺とレインの力を合わせれば、勝てないことはない)

考えを巡らせていると、声が挟まった。

「二人で押せば勝てる。そう思っているだろう」

凶星の指摘だった。しかし、なんとか動揺は押さえ込む。男の表情をうかがった。

「甘いな。もしそうなら、二人いっぺんに相手したりしない」

気味の悪い微笑があった。思わず、背筋が凍ってしまうほどの。

そして、トンと、この場にいる三人のものではない足音が、静かに、しかし確かに響いた。方向は、男の背中に見える廊下のような方からだった。

「複数かよ……」

意味しているのは、別の人間の存在。カリクの計算を、たやすく崩してしまう要素だった。

「おいおい、これはヤバげだぜ、カリク君。どうする？」

ナイフを構えるレインも、当然その足音に気づいている。口調の軽さとは裏腹に、うまく笑えていなかった。

「……決まってる」

問われたカリクは、敵の方へ見つつ答える。そんなに難しいことではない。本来の目的を考えれば、一択だった。

(こんなところで終われるわけがないだろ)

選択肢は、逃走しかなかった。ただ、大きな問題として、入り口へ戻る場合、完全に背をとられてしまうことがある。そうなれば、まず間違いなく簡単に命を落とすことになってしまう。

(どうする……)

必死に頭を活動させる。

(どうする！？)

自分たちがいるのは、開けた空間。遮蔽物になりそうなものはない。入り口に通じる階段と、先の見えない廊下がある。上には、光を発している物体が五つほどぶら下がっていた。その刹那、答えが閃く。

「レイン、援護しろ！」

「何を！？」

叫び返されたことを無視し、カリクは銃を構えた。敵にはない。

「何を……？」

狙いが分からないようで、敵の男は顔をしかめた。こちらも意に介さず、弾を放った。直後に、ガラスの弾けたような音が響き渡った。

「な……」

「なーるー！」

男とレインが、それぞれ反応する。カリクが撃ったのは、五つある電球のうちの一つだった。光源をなくすつもりなのだ。

「させるか」

心外だと言わんばかりに、男は言葉を漏らした。カリクに銃口が向く。

しかし、

「させるかをさせるか！」

陽気な声とともに飛んだナイフによって、狙いはズレた。その間に、カリクは二つ、三つと光源を破壊していく。

「無駄なあがきを……」

「無駄かどうかは、やってから判断してください！」

レインの攻撃が続く。そして、ついにすべての電気が消え去った。再び、暗闇がすべてを包む。

「レイン！ 俺を引っ張れ！」

「ほいきたー！」

その中で、声だけのやりとりを交わした。敵の声が被さるように響く。

「逃げられると思うな！」

おそらく、攻撃しようとしたのだろう。かすかな音が耳に入った。しかし、いつまで経っても、銃声はない。

「逃げてみせるっての！」

レインが、攻撃を途絶えさせていないからだ。目視はできていないが、彼はナイフを投げていると、手を引かれるカリクには、音となんとなく伝わる動きから想像がついた。そのまま、入り口へと通じる階段を上がり出す。威嚇で、カリクは一発撃った。

「さて、こつからどうするんだカリク君？ 後ろから撃たれたら終わりだぜ」

先を行くレインから問われた。こともなげに答える。

「問題ない。上がりきるまで、下に弾を打ち続けてやれば、向こうは階段を上がってこれないはずだ」

同時進行で、引き金を何度も引く。床に着弾した音が何度もする代わりに、敵からの攻撃はこなかった。

しばらくして、一番上に薄い光が見えてきた。太陽やガス灯を光源としていない、夜という灯りである。

「あと少しだぜ、カリク君！」

レインが叫んだ。耳には入れているものの、特に返事はせず、下方へ撃ち込み続ける。数秒して、ついに一番上へとたどり着いた。

「車まで走るぞ。まず、この場から離れる」

「承知！」

カリクとレインは、一目散に車へと走り出した。キッチン、食堂と通り過ぎ、廊下へ出る。足を止めずに、さらに駆けていく。玄関にたどり着いた二人は、外に出ると、すぐさま車に乗り込んだ。

「カリク、あいつは来てるか？」

運転席に滑り込んだレインに問われ、カリクは助手席へつく前に廃屋の入り口を見た。

「いや、まだ来てない。とにかく、さっさと行くぞ」

誰の姿も見えなかった。席に腰を下ろし、レインを促す。

「あいあいさー！」

それを受け、彼は元気よく返事をする。エンジンかけた。アクセルを踏み込む。カリクは万々にそなえ、後部座席から廃屋の入り口方向へ銃を構えた。徐々に離れ出す。

しかし結局、再び男を見たりはしなかった。

「巻いたか……」

肩から力を抜く。一旦は脅威から逃げ切ったと考えてよさそうだった。後部座席から、助手席へと戻り落ち着く。

「いやー、危なかった、危なかった。さすがにびびったぜ」

ハンドルを握るレインが、ほっとした表情を浮かべた。カリクは、厳しい視線を向ける。

「お前、何者だ？ 本当ならどうでもいいところだが、サリアが攫われた理由と関係があるなら、話が変わるぞ」

珍しく、レインは黙り込んだ。口元は笑ったままだいるのだが、明らかに様子がこれまでと違う。

「答える、レイン。お前は何者だ？」

さらに追及すると、彼は一度息を吐いてから、

「何者ってわけでもない。ただの、被実験対象者だったってだけだよ」

嫌々といった感じに、口を開いた。

二人の少年が去った、謎の地下施設。男はまだそこにいた。

「逃げられたな。たいした奴らだ。ガキだが、元気な分、対応しづらいもんだ」

男は一人でつぶやいていた。暗闇に、声が吸い込まれていく。

「しかしまあ、こんなところまで来てることを考えると、そのうち

に会う機会があるかもしれないな」

一旦言葉を区切り、この場所を出るために男は“それ”へ呼びかける。

「行こうか、父さん」

闇の中で、何かが蠢いていた。

第六章 『施設』

「実験？」

夜を走る車中、カリクはレインの発言に眉を寄せた。

「そうだよ。あの施設は、首都に本部がある、“ジーニアス”ってところだ。聞いたことないだろ」

「ないな。そのジーニアスとやらは、なんの研究をしてるんだ」

「“オモイノチカラ”」

「はっ？」

彼から放たれた単語は、意外なものだった。

「カリク君の彼女が持つてるっていうやつさ。その研究をしてるんだ」

いつもの朗らかさはまったく見えない。いつの間にか、笑みも消えていた。

「研究って……。何をどうするっていうんだ？ あんな力を持つ人間なんて、一握りもないだろ」

「ああ、数はまったくいない。ただ、“力”の持ち主はいる。カリク君の彼女とは、かなり性質が違うものっぽいけど」

カリクの指摘に理解を示しつつ、力の持ち主がいることを言及してくる。誰のことなのか、察しがつかなかった。

「“力”の持ち主って、誰のことだ」

知っている人間かどうかはともかくとして、まず尋ねる。そして、彼の挙げてきた名前は、

「“軍王”、ミッドハイムさ」

「ミッドハイム！？」

あまりにも有名で、にわかには信じられないものだった。

「奴が、“オモイノチカラ”を持つてるっていうのか？ そんな馬鹿な。だったら、どうしてサリアを攫ったんだ。もう“力”はあるはずだろ」

「詳しい事情は、俺っちにも分からない。ただ、ジーニアスを設立したのはミッドハイムだし、秘密裏に諸々の調査を行わさせてるって話もある。なんかの事情で、“オモイノチカラ”にご執心なのは間違いないと思うぜ」

話しつつ、レインが車の速度を落とす。一応の脅威からは逃れたという判断らしい。

「理由は分からないが、とにかく“力”を求めてるってことか。奴自身の“力”はどんなものなんだ。サリアとは、違うんだろ」

「ああ。人の心に声を届けるわけじゃない。ちらつと聞いた話じゃ、こつちの考えを読み取ってくるらしいぜ」

「考えを読み取る？」

サリアという普通ではない例を何年も目の当たりにしてきたのに、も関わらず、カリクの口からは訝しむような声が出た。

「そうらしい。あくまで、研究者たちとか、たまにくる軍人たちの立ち話を盗み聞きしてただけだから、正確さはないけど、話しぶりはマジっぽかったぜ」

「マジっぽかった、か」

理解はしたし、おおいにありえることであるのは分かっているのだが、素直には受け入れられなかった。ただ、仮にミッドハイムが本当に“オモイノチカラ”を持つのなら、力の存在を知っていた理由は簡単になる。自身が宿していたからだ。

「それで、お前はどんな実験に利用されたんだ？」

「あー、なんかよく分かんない実験さ。“後天的にオモイノチカラは発現できるか”とかいうやつだった」「力の発現か。ずいぶんとまた、ありがちなこつた」

カリクは肩をすくめた。続けて問いかける。

「実験の内容は？」

「やったこと自体は簡単なもんさ。軍王の血を、注射したんだよ。要するに、血を被験者の体内に入れたわけ」

レインの口振りだと、たいしておかしくないことかのようなだった

が、とんでもないことだった。

「そりやまた、お手軽でイカれた実験だな。それで、お前に“力”はついたのか？」

行為の愚かさに、カリクは訝しげにまぶたを半分ほど閉じる。レインは、ニヤリとした。

「ああ。ついたぜ。いろんな人の心の声が聞こえるようになった」「嘘つけ」

「あははは。まあ、分かるよな。カリク君の思ってるとおり、複数いた被験者の誰にも、力は発現しなかったよ」

カリクがツツコむと、あっさり本当のことを口にした。ふんと、鼻を鳴らす。

「だろうな。そんなお手軽に、“力”が手に入ったら、今頃そこらにゴロゴロしてるだろうよ」

それから、考えがサリアのことに及んだ。

「待てよ。じゃあ、サリアもその研究とやらに利用されるのか？」

「さあね。俺っちも、そこまでは分からない。一ヶ月前には、施設をもう逃げ出してたし。まあ、何かしらへ利用しようとしてるんだろうけど」

レインの言葉に、カリクは押し黙った。イカれた人間たちによる実験に巻き込まれるかもしれないというのは、不安要素としては大きすぎる。サリアが貴重な人材であることから、無理な扱われ方はしないだろうという予測があっても、拭い切れない。

「そういえば、あの施設はどうする？ 資料とかは、もうどうせ回収されてるだろうけど、俺っちの話よりも詳しく、あの施設がどんなものかくらいは見られると思うぜ。明日になっても、まだあの軍人がいるかもだけど」

カリクがしゃべらなかつたからか、レインから話を振ってきた。しかし、カリクは首を左右へ動かす。

「少しくらい、何か掴めればと思ってたが、時間が惜しい。このまま行って、どこかで休んでから、首都に向かおう。ただ、首都への

道に乗つかるのは、明日の朝になってからだ。あの男も車で移動してて、俺たちが休んでるところを襲われたらどうしようもない」

「あー、それもそうだな。じゃあ、町から出る位置を、首都方面とは別のところにするか」

カリクの提案に従い、レインは車の向かう先を変えた。

しばらく走り、二人は町の外へ出た。ただし、首都とは別方面である。

「ここらでいいかな？」

「たぶんな。でも、交代で見張りをつけるくらい、やり過ぎな警戒をしてもいいかもしれない」

誰が映るでもないバックミラーを覗き込みながら、カリクはレインへの回答と提案をした。敵が未知数であるため、油断ができない。

「そうかー？ さすがに気にしすぎじゃねーか？ 後から足音が聞こえたのが研究者なら話は別だけど、あれも軍人なら、たぶん他の任務中だから、そっちを優先すると思うぜ」

「確かにな。お前の言うとおりだ。だが、奴らを“普通”の枠に入れて、予測を立てるのは、個人的な見解としていい気がしない」

気にしすぎではというのは、カリク本人も思っている。しかし、一番大事なのがサリアを助ける前に死なないことである以上、考え過ぎな行動を選ぶのが安全策だった。

「ふーん。別にいいけどさ。でも、あんまり気を張りすぎると、いざつてときに疲れが出ちまうぜ。少しは、肩の力を抜いてみたらどうだ？」

「抜けたらな。とりあえず、今日はもう休む。先にお前から寝ろ」

レインの話を受け流し、休息を促す。

「あれ、俺っちからでいいのか？」

「運転手が疲労で事故なんて、ごめんだからな。しっかり休んどけ。こっちが困る。それに俺はハンドルを握らないんだ。最悪、お前が運転してるときに休む」

「ああ、そっか。でも、途中で交代はするんだろ？」

「そのつもりだ。さすがに、夜通しは厳しい」

レインの問いを肯定し、カリクは銃を取り出した。

「……何すんの？」

「点検するだけだ。お前を撃とうってわけじゃないから、安心して寝てる。明日も、また運転してもらわないといけないんだからな」

「へいへい」

休息するよう口を酸っぱくすると、レインは微笑した。座席を倒し、目を閉じる。

「じゃあ、お言葉に甘えて、先に休ませてもらいますぜ。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

賑やかなレインの声が消え、カリクは静寂に包まれた。辺りの闇をときたま見ながら、銃の簡単なチェックを進めていく。

（本当は、解体してメンテナンスもしたいけど、さすがに敵を警戒してるときにそれはないか）

一人、頭を回す。知らず知らず、思考はサリアのことに移っていた。

（今頃、何してるんだろ。おかしいことをされていないといいんだが）

途端に、気持ちが焦り出す。早く助けなれないという感情が沸き上がってきた。ただ、頭は冷静なため、なんとか焦りを打ち消して落ち着こうと、自分と戦いだす。

（ダメだ。ここから首都までは、まだ距離がある。すぐさま助けには行けない。落ち着け）

深呼吸し、なんとか気持ちを抑えて現実に自分を戻す。

（だいたい、なんで奴らはサリアを攫ったんだ。本当に研究のためだけなのか）

そのうちに、根本的な疑問へ考えが及んだ。なぜ、今なのかも気にかかった。

（ミッドハイムが軍王になってから、五年は経ってる。タイミング的な問題なのか、それとも何か別の理由が……？）

しばらく考え込んだが、答えは出そうになかった。また、サリアの身を案じ始める。

「サリア……」

思わず、少女の名を零した。心の内が、また荒れ出す。

「ずいぶんと寂しそうだな、カリク君」

すると、右側から少年の声が挟まってきた。当然ながら、レインである。寝る体勢になってから、さほど時間は経っていないため、起きていてもなら不思議はない。油断していた自分に、カリクは軽く舌打ちした。

「ずいぶん、可愛いところがあるじゃないの」

「うるせえ。悪かったな、女々しくて」

「誰も女々しいなんて言っていないだろ。いいじゃんか。そういう風に、心から心配できる人間がいて」

「からかい口調のレインだが、それでいてどこか真剣さを感じさせるものがあった。疑念をそのまま言葉にする。」

「お前にはいないのか。そういう人間は」

「……俺うちには、いない。孤児だからな。物心ついた時には、もう施設の中だったし」

常は軽薄な態度の少年だが、今は少し寂しげだった。何かを隠しているように感じる。

「そうかよ」

しかし、踏み込んで尋ねようとは思わなかった。一言で、話題を切る。

「なあ、そのサリアちゃんて、どんな子なんだ？ ちゃんと聞いたことがなかったから、気になるぜ」

話自体は終わらず、レインが別のことを挙げる。カリクは、軽くため息をついた。

「俺、寝ろって言ってるよな」

「分かってるけど、気になって眠れないんだよ。カリク君がサリアちゃんがどんな子か教えてくれたら、すっきり眠れると思うぜ」

声に棘を含ませたが、利き目はなく、額を押さえた。

「なー、いいだろー」

まったく嬉しくない猫なで声を聞き、銃を構えるかどうか迷ったものの、今はメンテナランス中であることを思い出し、その選択肢は捨てた。仕方なく、折れる。

「……分かったよ。でも、聞いたらすぐに寝るよ」

「了解、了解！」

レインは清々しさすら感じる笑みを浮かべた。どうにも子供っぽい。

「はあ……。なんでお前にこんなことを話さないといけないんだか」

「まあまあ、いいじゃんいいじゃん。焼きが回ったってことで」

「それは、お前が言うセリフじゃないだろ」

もう一度額に手を当てて、ため息をつけてから、ぽつりぽつりとカリクは話し始めた。

「あいつとは、サリアとは物心着く前からずっと一緒だった。正確には生まれたときからじゃないらしいが、ほぼ同じようなものだろう」

「幼なじみってわけか」

「そういうことだな」

「でも、ただの幼なじみじゃないんだよな、もちろん」

意地悪い笑みとともに、レインが目を輝かせる。

「好きに言ってる。わざわざ俺から話すようなことじゃない」

カリクは突っぱねるような態度をとったが、答えをはぐらかせてはいない。むしろ、明確に示してしまっているとも言えた。

「ふーん。そっかそっか。じゃあ勝手に解釈させてもらうぜ、カリク君」

「ふん」

調子づくレインに対してできたのは、鼻を鳴らすくらいだった。

「で、その幼なじみってどんな子なんだ？」

「そっだな……。ひたすらに穏やかで、優しい。素直だし、純粹で

もある。俺と真逆だな。空気が柔らかいんだ、あいつは」

何もかもを包んでしまえそんな雰囲気醸し出す少女の姿が、頭に浮かんだ。そして、彼女の特徴はもつと深くにある。

「けど、それだけじゃない。サリアは、どれだけ邪険に扱われても、誰かを悪く言ったりしなかった。絶対に恨み言を持っていたはずなのに、俺にも言わなかった。誰も恨まないって、決めてるから。あいつは、強かった。きっと、今でも強い。俺なんかより、ずっとなそれは、“強さ”だった。特別、何かの訓練を受けたわけではない。生まれつきの能力はあるが、それとはまったく関係のない意志の強さ。

「なるほどなあ。カリク君がどれだけその子を大切に思ってるか、よく分かるぜ」

聞き手である少年は、どこに納得がいったのか、首を縦に何度か下ろした。

「何を基準に言ってるんだ、お前は」
理由を問いただしてみると、彼はいつそう楽しそうに声を弾ませた。

「おつ、やっぱり無自覚か。簡単なことだよ。カリク君、俺たちの“どんな子か”って質問に、性格的なことしか答えてないじゃん」
納得せざるをえないその理由に、カリクは返す言葉を見失った。

「俺たちは、外見のことも含めて訊いたのに、そっちはさっぱりだぜ。長いこと一緒にいると、そうなるもんなのか？」

続けての問いかけにも、明確な答えは出せそうになかった。なんとか、

「知らねえよ。比べる対象もないし」
そんな言葉を口にした。

「ずっとサリアちゃん一筋ってか。言ってくれるね」
レインが大袈裟に両手を開く。カリクは片手を顔に当て、息を吐いた。

「……やっぱり、お前には話さなけりゃよかった」

「後悔先に立たずだぜ」

「お前が言うな」

レインのおでこを軽く叩くと、いい音がした。「あいたっ」と声を上げ、少し頬を膨らませながら、さすり出す。

「もういいだろ。話は終わりだ。早く寝ろ」

「へいへい」

不満げに口を尖らせていたが、外見のことをしつこく尋ねてきたりはせず、彼はまた寝る体勢になった。

「ったく」

ようやく解放され、カリクは肩の力を抜いた。銃の調整を再開する。

黙々と作業を進めていき、数分後には終わった。ホルスターへ武器を戻し、一息つく。隣では、早くもレインが寝息を立てていた。振る舞いは元気だったものの、やはり疲れていたらしい。

「当たり前か」

長時間の運転に、廃屋でのやりとりである。疲弊しない方がおかしかった。

（俺も、なんだかんだ疲れてるしな）

ずっと気を張ったままである自分の疲れを認識する。確かに、レインに言われたとおり、このままではいざというときに動けないかもしれない。

（まあ、いいか。首都までの道はゆっくりさせてもらおうさ）

そしてカリクは、朝まで見張りをすべく、車を降り、すぐ横でイメジトレーニングを始めた。座っていたら、眠ってしまうと思ったのである。

「レイン、起きろ」

翌朝、早い時間にカリクはレインを起こしにかかった。「んあー」

などとうなりながらも、ゆっくりとまぶたが開いていく。

「なんだ、交代かー？」

目をこすりながら、彼は身体を起こした。かなりぼんやりとしていたが、

「って、もう朝じゃん！？ どういうこと！？ 起こしても起きなかつたの、俺っち！？」

朝日の光が既に降り注いでいる光景を窓の外にみとめ、急速にギアが入った。黒目が大きく見開かれる。

「起こさなかつただけだ。それより、燃料を補給するのを忘れていた。この町に補給場所があるかどうかは分からないが、早朝のうちに探しに行くぞ」

そちらはどうでもいいと言わんばかりにさらりと彼の問いに答えると、カリクは話題を変えた。

「お、おう。それは分かったけど、お前寝なくて平気なのか」

「お前が運転してる隣で眠らせてもらっさ。早く行くぞ」

レインの発言はほとんど話半分くらいにしか聞かず、さっさと返す。

「そうか？ ならいいけどさ」

押し切られる形で、寝起きですぐに覚醒させられた彼は、エンジンをかけた。車が振動を始める。

「ていうか、供給場所があるとして、どこにあるんだ。どこ目指して走らせればいいの、俺っち？」

「中心よりは外周だな。ちよつとした補給なら、そこに建てた方が効率的だ。町の出入り口を徹底的に当たるべきだろうよ。万一なくても、次の町まで持つか？」

「ん、それは大丈夫だと思うぜ。この町、狭いし」

ハンドルを握るレインは軽く返し、アクセルを踏んだ。

「じゃ、いっちょ探しに行きますか」

二人を乗せた車が、また走り出す。

「いやー。そこまで厄介なことにならなくてよかったな、カリク」
「そこは同意してやる。下手な抵抗もされなかったから助かった」
「だな。金払ったし」

「通報はされるかもしれないけどな」

カリクとレインが乗る車は、燃料を満タンにして、再び首都へと向かう道を進み出していた。

補給場所には一人が駐在していたのだが、カリクが銃を突きつけ、その間にレインが燃料を拝借した。脅しをかけているのに、代金は払っていったのだから、ずいぶんと奇っ怪に思われただろう。

「こっから首都まで、あとどれくらいだ？」

「あと一日かかるか、かからないか、かな。順調に行けば、明日の昼には絶対着くぜ」

不思議な事件を起こして町を出たところで、カリクは首都までの時間を確認する。レインはこともなげに答えた。

「それも、施設にいたから分かるのか？」

「ちよつとした疑問をぶつけた。」

「ん、まあね。実験が主だったけど、軍人としての教育もしてたから、あそこは。武术も学問も、けっこう叩き込まれたぜ」

「養成学校みたいなもんか」

「いや、もつとキツイとこだな。本当なら違法な訓練もたくさんあったし。卒業したら、裏部隊ルートが大半だし」

「どうやら、俗に言う暗部の人員を育てる場所らしい。」

「裏部隊、か。じゃあ、サリアを攫った連中もその類いの奴らなのか？」

「大事な少女を連れ去った二人組を思い出す。」

「かもな。でも、微妙なとこだと思うぜ。本当にそいつらが暗部連中なら、カリク君を殺してるだろうし、なによりカリク君から聞いたような時間には行動しないと思うぜ」

内部をいくらか知っているレインの言葉には説得力があった。加えて、カリク自身も、キュールで会った男女二人が暗部系の人間という考えにじっくりきていなかった。

「ただ、昨日会った奴は、間違いなく施設上がりの奴だ。醸し出す空気で分かる」

「あいつか。結局、奴に関しては何も分からなかったな」

昨日に接触した軍人のことへ、話題が移る。こちらは、何も知らないカリクすら、暗部の人間としか思えなかった。纏っていた雰囲気、あまりに危険だったのである。

「まあ、個人の情報はさっぱりだけど、用事自体は情報を消しに来たつてところだろうさ。秘密の施設の後処理なんて、いかにも裏の仕事だろ」

レインがもつともらしい意見を上げたが、カリクは首をひねった。それを見て、レインが尋ねてくる。

「何か、おかしいか？」

「いや、お前の意見は可能性として充分にあり得るんだが、あの建物は放棄されて久しそうな様子だっただろ。今更、残ってる資料なんてあったのか」

「あー、そつか。でも、全部を回収、処分できなかつただけで、残してあった資料に用があつたとか、そんなんだつたのかもしれないぜ」

どちらの考えも、ありえそうだった。確定するには情報不足で、これ以上突き詰めるのは無理だと判断し、「分からないな」とカリクは首を振る。

「なんにせよ、あの施設が“オモイノチカラ”の研究をしていたなら、あの軍人も力に関わっているのかもしれない。また会うことになるかもな」

「そりゃ、ごめんこうむりたいねー」

続けて口にしたことに、レインはあからさまに顔をしかめた。いつでも軽い態度の彼ですら、冗談抜きで昨日の男とは関わりたくない

いらしい。

「同意見だ」

カリクも、できれば二度と遭遇したくない相手だった。具体的な理由云々というよりは、直感的に危険を感じたからである。

「にしても、“オモイノチカラ” ってのは、なんなのかね。特に害がある力ってわけでもなさそうだし。研究して、どうするつもりなんだか」

この疑問に、カリクは口を開かなかった。一番根本的なものであるのに、最も解答が見えないのだ。予測すらままならない。

（そうだ。どうしてサリアを誘拐したのかの前に、“力”の研究をしてどうするのが問題なんだ。稀有なものなのは確かでも、軍のトップへ何か恩恵をもたらすとは思えない）

首都に、施設に行けば、分かるのだろうか。カリクは、眼前に伸びる道を睨んだ。首都はまだ見えるわけもなく、道と原っぱの中を進むばかりだった。

それでも、二人を乗せた車は、着々と目的の場所へと近づいていた。

七章 『それぞれの想い』

多くの軍人が、平時に勤務する本部基地。その中に、陸軍第二部隊という表記のプレートが掲げられた場所があった。辺りには、他部隊の表記も見受けられる。各部隊に与えられているデスクスペースだった。一人に一台、デスクは振り当てられている。そして、「まったく。軍人っていうのは、もっと現場重視の仕事場だと思ってたぜ」

自分のところで、溜めた書類と戦っているガヌ＝ロードの姿があった。紙の山は、デスクの一角を完全に占拠している。サリアの誘拐は特別任務であり、裏部隊の所属ではないのだ。

「溜めるお前が悪いのだろう。その場その場で処理していれば、そんな量にはならん」

文句を口にする、背後から反応があった。振り向くことなく、言葉を返す。

「うっせー。俺はお前ほど、要領よくも真面目でもないんだよ」

「貴様のその言い訳は聞き飽きた。別の言い回しでも考えたらどうだ」

「あー、また今度な。それより、これ手伝ってくれませんか、シルラ様。なんか奢るから」

身体を捻って、会話相手を見る。その相手は、金髪のポニーテールの女性軍人、シルラ＝マルノルフである。彼女はガヌと別の部隊だが、デスクの位置は謀ったかのように、すぐ後ろだった。

「お前の仕事だろう。お前でなんとかしろ。それに、私もこれから“仕事”だ」

彼女は、壁にかけてある時計に目をやった。示している時間は、午後六時半。ガヌは、それだけで何かを察する。

「ああ、そうか。そっちがあるのか」

口には出さなかったが、サリアの見張りのことである。

「仕方ないな。じゃあ、明日はどうだ？」

「自分でやれ！」

頼る気をなくさずに、提案してみたものの一喝された。そのまま彼女は背を向け、歩き出す。

「つれないねー」

ガ又は一人で肩をすくめた。姿勢を直し、再び書類の山と対峙する。

「頑張つてやりますか」

と、やる気を出そうとしたところで、

「ガ又中尉」

低く重たい男の声が降ってきた。ため息をついてから、顔を左上に向ける。

「なんの用だ。わざわざ、“普通”の部署まで顔出すなんて」

「いえ、少し報告したいことがありますね」

がっちりとした体躯で、岩を思わせるような男が、濃い顔に合わない微笑を浮かべる。階級は准尉だが、彼の属する裏の部隊では、位などあつてないようなものだった。

名前は、ノーザン＝ジャッジといった。

「で、報告つてなんだ。さっき見たとおり、俺は忙しいんだが」

「そのようですね。まあ、僕もあいうちまっこいものは嫌いですが、あそこまで溜まったことはないのです、どの程度かは想像の域を出ませんが」

ノーザンは遠回しに皮肉を言ってきた。多少かんに障ったものの、時間が惜しいので流す。

「分かっているなら、さっさと済ましてくれ」

「了解しました」

屈強な男は、意地の悪そうな笑みを浮かべた。理由もなく、悪寒

を覚える。早く、この場から立ち去ってしまいたかった。

「では、ご注文のとおり手短に済ませましょう。単刀直入に言いますと、レインに遭遇しました」

しかし、会話に出てきた名前を耳にして、その気は失せた。一度、目を大きく開いてから、軽く首を振って問う。

「どこでだ」

「シャズの町です。そこでの任務中に出くわしました」

「シャズだと？」

ガ又は、顔をしかめた。シャズの町は、特に何も無い小さな町のはずだ。とても裏部隊の人間が、任務で赴く場所に思えなかった。あつてせいぜい、殺さなければならぬ人間が隠れ住んでいるとか、そのくらいである。

「ええ。あなただからお話ししますが、あそこには“ジーニアス”の施設があつたんです。今はもう稼働していませんが、その資料処分を任されたので、足を運んだんです。そうしたら、彼と遭遇しました」

本来なら秘匿すべき情報を、ノーザンはためらいなく話す。理由は察しがついた。

(俺の反応を見たいんだろうな)

短い付き合いではあつたが、目の前の男は自分の楽しみを優先させるタチであるのを、ガ又は把握していた。その上で、また尋ねる。「それで、レインをどうしたんだ」

声には敵意がこもっていた。向こうが面白がるだろうとは思つたが、隠すことができなかったのである。

「どうもしてませんよ。殺そうとしましたが、取り逃がしてしまいましたからね」

逃がしたという単語に、ガ又は一旦肩の力を抜いた。同時に疑問も抱く。

「取り逃がした、か。いくらジーニアスにいたとはいえ、お前が高校生そこらの歳の奴を逃すとは思えないんだが」

「ええ、まあ。自分で言うのも変ですが、レイン一人なら、始末できていたと思います」

「一人なら？ 誰か他にいたのか」
心当たりがなかった。

「ええ。同い歳くらいの少年が一緒でした。何者か分かりませんが、僕に対して冷静な態度だった上に、銃を所持していて腕もよかったですから、ただ者ではないかと」

「銃の腕がいい、か」

「誰か心当たりでも？」

「いや、ないな」

ノーザンの話を聞き、ガヌの脳裏にはキュールで出会った少年が浮かんだ。しかし、レインと一緒に行動するような経緯が想像できず、その考えを打ち消す。

「とにかく、その少年とレインの二人を取り逃がしました。ですが、おそらくあの二人は“ジーニアス”に何かしらのアクションを起こそうとしている。遠からず、首都にも来ると思いますよ」

「“ジーニアス”にねえ。一度逃げてきた奴が、そうのこのこ戻って来るもんか？」

抱いた疑問を口にする。ノーザンはせせら笑った。

「戻って来ますとも。現に奴は、元とはいえ“ジーニアス”の施設に来た。それも、何かの目的を持っているのだろう少年と。大きな流れに、人は抗えやしない。もう、すべてが流れ出しているんですよ、ガヌ中尉」

意味深だった。意図は読めないが、気味の悪さだけは十二分に伝わる。

「それに、あなたの場合は首都に“来てほしくない”んでしょう？」
続けてされた指摘に、ガヌは息をのんだ。何も言うまでもなく、その反応が答えになってしまっていた。

「では、僕は失礼します。面白い反応も見れましたしね。それでは」

満足そうな様子で、ノーザンは歩き去っていった。一人、ガ又は取り残される。

「レイン、戻って来ないでくれよ……」

独り言は、廊下へ吸い込まれていった。

同刻、地下にシルラの姿はあった。サリアの捕らえられている部屋の前にたどり着き、外の見張りをしている男の部下へ声をかける。

「お疲れ様」

「ああ、シルラ中尉。お疲れ様です」

「あの子の様子は？」

「さあ……。自分は、中の様子を見ていないので、なんとも」

「分かった」

うなずき、部屋への扉を叩く。

「私だ。シルラだ」

しばらくして、中から女性の部下の顔が覗いた。

「お疲れ様です、シルラ中尉」

「お疲れ様。交代の時間だ。帰るといい」

「はい。ありがとうございます」

彼女は礼儀正しく頭を下げると、

「それでは、お先に失礼します」

地下室から離れていった。入れ替わりに、シルラは部屋へ入る。

「サリア」

後ろ手で扉を閉めると、中にいる少女へ声をかけた。ベッドの上で、横になっている。返事がない。眠っているようだった。音を立てないように、忍び足でそばへ行く。可愛らしい寝息を立てていた。思わず、頬を緩める。

「カリク……」

しかし、次に彼女が発した寝言に、シルラは固まった。目の前の

少女は、それほどなんともないように見えていたが、不安を抱えていて当然なのだ。

（私は……）

軍人は、上の命令を聞かなければならない。士官学校では、そう教わった。シルラは絶対に守ろうというほど正しさを信じていたわけではないが、今は守ることが正しいとは考えられなかった。

（私は、どうすれば）

表立って動く気はなかったのに、心は揺れ出していた。

任務を受けたのは、一ヶ月ほど前だった。仕事中に、いきなり呼び出されたのである。初めて軍王の座する執務室へ行くことになり、扉を叩くことにも酷く緊張した。

「シルラ＝マルノルフ中尉です」

「どうぞ、入りなさい」

「失礼します！」

返事が上擦ったのだが、恥ずかしがる余裕すら持てず、とにかく中へ入った。するとそこには、

「あれ、シルラも、ですか」

ガヌの姿があったのである。

「な、なぜ貴様もここに」

「呼び出されたからに決まってるだろ」

驚いていると、肩をすくめられた。彼の言い方にむっとすると同時に、安心感も覚えていた。

「ええ。私が呼んだのです」

軍王、クラカル＝エル＝ミッドハイムの声が挟まった。シルラは慌てて彼の机の前へいき、ガヌの隣に並んだ。

「あなた方は、我が軍の中でも、特に優秀な若手と聞いています。

そこで私は、今回あなた方に特別な任務を言い渡そうと思ったので

す」

「特別な任務、ですか」

ガ又は気のない反応だった。彼は、どんなときでも彼だったのである。

「ええ、そうです。なので、あまり乗り気ではないにしてもやっていただきますよ」

ミッドハイムがにこやか微笑んだ。すると、ガ又はわずかに眉をひそめた。シルラも、目の前にいる軍のトップに、恐怖感を抱いた。「あなた方に頼むのは、ある少女の誘拐と、監視です。それ以外は、何もありません。簡単な仕事でしょう」

「誘拐……」

汚い仕事が多く存在している中で、なおかつ軍王からの直々の依頼だとそういう系統の仕事の可能性が高いと知っていたものの、それでもシルラは、提示された任務の内容を疑った。犯罪が任務というのは、納得がいかなかったのである。

「ええ、そうです。そこにいる、ノーザン・ジャッジ准尉とあたってもらいます」

「えっ？」

軍王から見て、二人の右奥に彼の視線がいったところで、シルラは間抜けな声を出してしまった。振り返ると、それまで気づかなかった、がたいのいい男が壁に体重を預けて立っていた。言われるまで、まったく気づかなかった。

「彼はあなた方の噂にある、裏の部隊の者ですが、今回の任務を共に行ってもらうことになります。ただ、メインはあなた方にお任せするので、そのつもりで。まあ、仲良くするといいでしょ」

ミッドハイムが説明する間に、ノーザンは二人の方へと近づいてきた。ゆっくりと重々しく口を開く。

「ノーザン＝ジャッジ准尉です。よろしくお願いします」

気味悪い微笑と共に、ノーザンは自己紹介してきた。どうにも、仲良くはできそうになかった。

「ああ、よろしく」

それでも、あいさつはなんてことのないように返した。隣のガヌは、

「んー、そこまで仲良くはしたくねーな」

と、正直な感想を口にしたが。

「どうやら、彼に対してお二人共あまり友好的ではないようですね。まあ、仕事はしっかりこなしてください」

やりとりを黙って見ていたミッドハイムが口を出し、会話をまとめた。これはまだ、観察だけで分かる範囲ではあるが、シルラは内心を見透かされているような気がしていた。頭に浮かんだのは、ミッドハイムに関する噂。

「ミッドハイム総督。なんか、俺らの考えてること、見透かしてません？ なんでも噂じゃ、人の考えてることが読み取れるとか聞きますが、それが本当だったりするんじゃないですか」

それをガヌは、ためらうことなく真正面からぶつけた。ミッドハイム軍王は人の心を読む、という話がかかり前から存在していたのである。

「ええ、本当のことですよ。私は、他人の心を読むことができます。心理学などの類いではなく、もつと直接的に」

問われた彼は、隠す様子もなくあっさり認めた。あまりに軽すぎて、シルラは信じられなかった。ガヌも同じ考えだったようで、「にわかには信じがたいですね。手品の範疇とかなんじゃないんですか」

訝しげな表情を、軍王へ向けた。

「そう簡単に信じなくとも、別にかまいませんよ。そこは大事じゃありませんから。とにかくにも、あなた方はこれから話す任務をこなしてくださいね、それで充分ですからね」

彼は回答をばぐらかし、任務についての話を始めた。誘拐の対象が、特別な力を持った少女だと聞かされたところで、シルラは問いを挟んだ。

「その子を攫うことに、どんな意味があるのですか」

「我が軍のため、とだけ言っておきましょう。彼女の力が、我々の利益になるのです」

「力？」

「ええ。私の力と通じるものですが、彼女は自分の意思を、言葉を使うことなく直接我々の心へ伝えることができます。俗に言う、テレパシーのようなものです。かつての記録で、我々の持つ力へつけられた名前は、“オモイノチカラ”。彼女はそれを有しているのですよ」

これもまた、到底信じられない話だった。テレパシーのようなものと言われても、それはあくまで虚構の世界にあるものなのだ。例にされたところで、納得がいくはずもなかった。

「疑うのも無理はありませんが、とにかくこれは命令です。どれだけの疑問を抱こうとも、従ってもらいますよ」

口調は柔らかなままだったが、有無を言わせぬ威圧感が入り混じっていた。雰囲気は吞まれ、シルラは何も言えなくなった。

「……それくらい分かっていますよ。ただ、やり方はこっちに任せてもらっていいですかね」

代わりに、ガナが不機嫌な声色でしゃべる。彼も、疑問を持っているようだった。

「ええ、かまいません。サリア・ミュルフを私の前に連れてきてくれさえすれば、あとは何をしようと自由です。私へ反抗することも止めません。その結果どうなるかは、何も約束できませんがね」

ミッドハイムの返答は、脅しだった。シルラにはガナが何を思っている、やり方は自分たちの好きにさせるよう求めたのか分からなかったが、滅多にシリアスさを出さない彼が、引きつった表情を見せた。「とにかく、しっかりと任務をこなしてください。これは、最重要の任務と言っても過言ではありませんので。詳細はまた後日としますから、今日のところはもう退室していただいて結構ですよ」

部下の反応には気づいているに違いなかったが、触れることなく、

ミッドハイムは退室を命じた。

「……失礼します」

子供のように、ガ又は露骨に機嫌を損ねていた。足早に扉へ向かっていった。

「私も失礼します」

シルラも頭を下げて、逃げるように彼へ続いた。こうして、ガ又は執務室を後にしたわけである。ノーザンは、一緒ではなかった。

しばらく、無言で廊下を進んでいたのだが、途中でガ又が口を開いた。

「シルラ」

「なんだ」

「お前、あの任務をどう思う」

訊いてきたのは、簡単なことだった。キツと、睨みつけるような目線を送った。

「あの内容で、私が楽しみにしていると思うなら、お前はたいした目利きだ。眼科に行った方がいい」

強い口調で答えた。得体のしれない恐怖から解放され、いつもの調子を取り戻していたのである。

「お前なら、きっとそうだと思うたよ。なら、協力してくれないか、シルラ」

「協力？」

「ああ。任務は成功させる。ただ、“完璧”にはこなさない。とっかかりを作る」

「とっかかりって、どんなだ」

突拍子のない発案だったが、否定はせずに話を聞いた。ガ又の目が、いつになく据わっていたというのもあった。

「それはまだ分からないが、裏部隊の奴らだけじゃなく、俺たちをこの任務に当てた理由が必ずある。ということは、対象であるサリアって子のことを調べたら、何かが見つかるともかもしれない。そこが、とっかかりになるはずだ」

彼の言葉は、力がこもっていた。確かな可能性はなかったが、シルラは迷わなかった。

「なるほどな。実にお前らしい、不安な作戦だ」

まず皮肉を放ってから、

「だが、そこでためらわないお前を評価して、協力してやろう。会ったこともない少女だが、理不尽に巻き込まれるという時点で、助けることに疑問はいるまい」

彼への全面的な賛成を表明した。目を合わせてうなずく。

「だが、軍王はどうする。もしも、奴の話が本当であるならば、次に会ったときにバレてしまうぞ」

「問題ないさ。こつちが目的を達成できるんざ、奴は思っていない。何を考えてるのがバレても、釘を刺されるくらいで、本気で止めにはかからないだろう。さつきも言ったが、わざわざ俺たちを選んだ理由があるんだからな」

シルラの持ち上げた問題点へ、彼は間髪入れずに解答を示した。

「ずいぶんと自信満々だが、何か確証があるのか」

ただ、どう考慮しても不十分であった。予測はついていたが、一応尋ねてみた。

「ない！ 全部推測だ」

案の定、はつきりと証拠はないと返され、思わず笑ってしまった。

「ははは！ さすがだな。やはり、貴様は理解できん」

「んあ？ なんだよ、仕方ないだろ。分からないものは分からないんだ。でも、だからって全部を受け入れるわけにもいかねえ。可能性があるなら、そこに賭けるぜ、俺は」

笑われたことに対し、彼は口を尖らせた。なんとか笑いを抑えて、言葉を足す。

「すまん、すまん。別に、貴様を馬鹿にしているわけではないのだ。私だって何も妙案は思いついていないしな。ただ、あまりに貴様がいつもどおりに根拠のない自信を持っているものだから、おかしくてたまらんだ。ふふ、あははははは！」

そのうちに、シルラは我慢できずにもう一度笑い出した。廊下を歩いている他の人間たちが目を向けてきていたが、まったく気にならなかった。

「なーにが、そんなにツボに入ったのかねえ」

ガヌは呆れたような声を出したが、彼も口元が弛んでいた。

「私も分かん。とにかく、おかしいのだ。なににせよ、私たちでなんとかするぞ、ガヌ」

「笑いながら言うかー、そういうこと？ まあ、同意するけどな」
こうして、二人は攫う対象たる少女を救うために、動き出したのであった。見通しは暗かったが、ガヌがいるなら、シルラには希望が途絶えることはないように思えた。

事実、彼らの行為は無駄にならなかった。少女のすぐ近くに、軍の語り草となっているトルマシエードと、その息子でありエリート街道を歩む実力者のニックシエードの姿があることが分かった。ガヌの見立てだと、ミッドハイムは裏部隊の人間を派遣した場合に捕らえられたときの情報流失を恐れているのではないかということだった。

そこで二人は、ニックシエードとの連携を考え出した。しかし、その矢先に彼は首都から弾き出されてしまった。軍王から二人への牽制なのか、それとも元々遠ざける予定だったのか定かではなかったが、助力者になりうる人間が、首都から一人いなくなってしまうたのである。

だが、二人はあきらめなかった。まだトルマシエードの存在があったし、首都から離されたことで、シエード親子が陰謀に気づく可能性は、十分にあったからである。ただ、トルマが表に出てきたとしても、二人には、任務をしくじるわけにはいかないという共通認識があった。任務に失敗して、自分たちが処分されるのは、避けなかったのである。死んでは元も子もない。

なので、任務には支障をきたさない程度に、あらゆる部分で“きっかけ”を作るようにした。同僚たちに任務内容をぼかして伝えて

みたり、サリアの誘拐を昼間に決行したり、行き帰りはわざと人目につく場所を通ったりと、誰かが自分たちの行為に気づき、アクシヨンが起こることを期待したのだ。

（そう、“何か”を待っている。ニックシールドでも、トルマシールドでもいい。何か、動きが起きればと）

二人自身は、期待している外部からの“何か”が起きるまでは、動かないと決めていた。先んじて動き、軍王に見咎められてしまうと、いざというときに動けないためである。

しかし、サリアのつぶやいた言葉に、シルラは揺れている。本当に、あるかどうかも確かではないきっかけを待つしかないのか、と眠り続ける少女を見下ろす。答えは、もう心にあった。

「ふん。どうせ、階級に興味はないしな。私が軍人になった理由を、まっとうしないのでは、ここにいない意味がないだろう」

初志を思い起こし、決意を固めていく。

「“護りたいものを護る”。それだけのことだ」

待つだけをやめる。組織に属する身であるシルラにとって、危険きわまりない行為だった。それでも、譲れないものがある。

「貴女に、悲劇は似合わないしな。好きな人間のそばで笑えるように、精一杯努力しよう」

少女の髪を、優しく撫でた。まだ幼いとはいえ、彼女にはもう大切な存在がいる。シルラは、少女をそのそばへ返してあげたかった。（ガヌには、伝えんといかな。引き止められるかもしれんが、ここは譲れん）

決心したところで、一緒に少女のことを考えてきた同輩のことがよぎる。心配してくるに違いないとは思ったが、彼が相手でも今の気持ちは曲げるわけにはいかなかった。

シルラが少女のために動くことを決めた頃、ノーザン・ジャッジは、軍王の座する執務室にやってきていた。

「それで、資料はまだ残っていましたが？ シャズの町にあった施設は、規模こそ小さかったですが、優秀な検体がいましたから、なかなか興味深いものも多く残っていたかと思いますが」

口火を切ったのは、ミッドハイムである。例によって、顔には微笑を浮かべていた。

「優秀な検体ですか。はは。まあ、確かに“力”をすでに持っていましたからね。研究者たちも、かなり盛り上がっていたようです」

ノーザンが声を上げて笑い、持ち帰った資料をぞんざいにミッドハイムの机へ投げ置いた。かなり傷んでいたが、軍王は口角をさらに上げる。

「素晴らしいですね。まだ、こんなにあったとは」

上機嫌に、紙やファイルをいじり出した。動作自体は子供のようなのだが、可愛らしさはない。見た目などの問題ではなく、何かしらの恐ろしさがあった。

「しかし、どうして今更、あそこの資料を？ 主要なものは首都に移したのでしょうか」

それを肌で感じつつも、ためらうことなく、質問する。資料から目を離さずに、ミッドハイムは言葉を返してきた。

「ええ。私の求めていた“力”とは、また別物でしたから。ただ、サリア・ミュルフを手中にした今、あらゆる面からの調べ直しが必要になるのですよ」

彼の求めている“力”については、ノーザンも詳しく知らなかった。なので、最終的にどうしたいのかも分からない。

「へえ……。しかし、遠くからしか見ていませんが、あの少女がそんなに大事な存在だとは、信じられないですけどね」

軍王が出した少女の名前に反応し、率直な感想を漏らす。

「否定はしません。彼女の価値が分からなければ、そう見えるでしょう。情報を持つていなければ、ダイヤも石ころと同じです。ただ、ダイヤに値するための力を、彼女が既に発現しているかどうかは、定かではありませんが」

それに対する相手の返しに、ノーザンは首を横に傾けた。

「発現？ ジーニアスの研究では、“オモイノチカラ”は先天的なもので、生まれた時点で、もう発現はしているとかいう話ではありませんでしたか」

「普通ならその通りです。ですが、ただでさえ稀有である“オモイノチカラ”の力の持ち主の中でも、彼女はさらに特別な存在なのですよ。世界を変えられるかもしれないほどに」

答えながら、軍王は自分のイスの背もたれへと体重をかけた。静かに目を閉じる。

「私は長い間、それを追い求めてきたのです」

「貴方にそこまで言わせるとは、いったいどんな力なのか余計に気になりますね。そろそろ聞かせていただけませんか」

国の頂点に立った男が、長きに渡って求めてきたものに興味があった。

「まだ、詳細を話す気にはなりませんね。時が来れば、おのずと分かるでしょう。貴方が察するか、私の口から明らかにされるかは、断定できませんが」

しかし、ミッドハイムは答えなかった。どこに視線を合わせるでもないが、わずかにまぶたを持ち上げる。

「今日は、もう結構ですよ、ノーザン准尉。まだ懸案事項がいくつもありますから、明日からはそちらを任せることになるでしょう。レインが現れたというのを、私に報告してこなかったのは、見逃してあげますので」

「……それは、どうも」

（本当に、かなわない人だ）

たぶん、これも読まれているだろうと思いつながら、内心で冷や汗

をかいた。

「あー、まあ、今日はこんなとこでいいや」

報告書類の山を、全体の四分の一程度片付けたところで、ガ又はペンを置いて背伸びをした。周囲のデスクには、既に誰もいない。

「さつとと、あいつはまだサリアちゃんの監視か。ご苦労なことって頭に、自分も行ってみようかという選択肢が浮かんだが、首を振って打ち消す。

「ダメだ。俺は、ダメなんだ」

自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「貴方の人生ならば、貴方の好きに生きればよいのではないですか」そこに、柔らかな声が飛び込む。ガ又が扉の方へ顔を向けると、ミッドハイムが立っていた。

「……それは、何に対してですかね」

「好きに解釈なさって結構です。シルラ中尉のことでも、レインのことでも、その他のことでも」

「さいですか」

心が読めるのなら、言葉による駆け引きは意味をなさない。自然と手が汗ばむ。

「そんなに身構えなくても大丈夫ですよ。私は、貴方に新しい任務を命じに来ただけですから」

そんな心内すら見透かし、ミッドハイムは穏やかに微笑む。

「新しい任務？」

「ええ。明日の朝一番に、ニケアのニック少将のところへ行ってください」

「ニケアへ？」

「はい。彼を、暗殺していただきたいのです」

「……なんですって？」

「ニック少将の暗殺です。嫌とは言わせませんよ。断れば、女性が一人亡くなることになりますから」

思い当たる人物は、たった一人だった。

「シルラが人質、ですか」

「さあ、どうでしょうね」

ミッドハイムはうそぶくだけだった。

「とにかく、任務を達成してください。大切な人を失いたくなければ」

勅命書をガヌのデスクに置き、彼はその場から去っていった。

「……困ったね、こりゃ」

ガヌは、一人勅命書を指で弾いた。

八章 『首都セルゲンティス』

「はつきり見えてきたな」

「ああ。あれが、首都セルゲンティスさ。見え始めてから、ずいぶんかかったけど」

シャツを出て二日、朝方に、カリクとレインはようやく首都へたどり着いた。無機質な灰色の外壁に囲まれ、建物を目視できない街がフロントガラス越しに見える。

（あそこに、サリアがいる……）

自然と、心がざわついた。ここまでの道中でも色々あったが、あくまで本番はこれからなのだ。

トンと、肩を叩かれた。身体が揺れる。もちろん、レインである。

「なんだ、レイン」

「いや、力んでるから、リラックスさせようかと」

「余計なお世話だ」

「そりゃ、悪かったねー」

悪びれる様子は皆無だった。カリクは、肩をすくめる。事実、余計な力は抜けたのだが、礼をいう気にはならなかった。

「んあっ？」

「今度はなんだ」

「いや、向こうから車が来てるんだ」

レインが、顎で前を示す。確かに、一台の車の姿があった。

「首都近くなんだ。車くらい、普通だろ」

「まあ、そうだけどさ」

反対側からの車と距離が詰まる。すれ違う刹那、カリクははつきりと運転席にいる男の顔を目にした。

「あいつは……」

忘れようにも、忘れられるわけのない人間だった。サリアを誘拐したうちの、一人だったのである。一瞬のことだったが、間違いな

かった。落ち着いたはずの感情が、怒りで一気に高ぶる。

「どうしたよ、カリク君。急にそんな怖い顔して」

「別に、なんでもない」

「鼻息荒く答えられても、信憑性に欠けるぜ」

「とにかく、なんでもない。そういうことにしておけ」

しかし、頭は冷静で、今はあの男のことに気を取られずに、首都に捕らわれているであろうサリアの身を優先すべきと意見していたので、カリクは心を抑えた。目的地は、すぐそこにあるのだ。すべきことは、男を倒すことではない。

（それにしても、ずいぶんと思ひ詰めた表情だったな、あの男）

ただ、そんなことが少し引つかかった。

「釈然としないけど、カリク君は怒ると怖いからな。そういうことにしとくぜ」

レインは横目でカリクを見ながら、苦笑していた。別の話題に移る。

「そういえば、首都じゃ入るときに兵士の許可をもらわないといけないんだよな。このまま車で入るわけにはいかないじゃん。こいつはどうするんだ？」

自分の座るイスを片手で、二度叩いた。既にそのことについて考えていたカリクが、返答する。

「近くで降りていけばいい。徒歩なのを怪しまれるかもしれないが、知り合いに送ってもらったことにすれば、問題ないだろう」

「なるほどねー」

「それよりも、どうやって入り口の審査を通り抜けるんだ。軍の方針で、確か身分確認をしてるんだろ。俺はともかく、お前は どうするんだ」

車をどうするかより、門前での軍による身分確認をどうするかの方が重大な問題だった。へたをすれば、レインはこの国に存在すらしていないことになっているかもしれないのだ

しかし、心配するカリクをよそに、

「大丈夫大丈夫。手はあるから、カリク君は気にしなくていいよ。軽い調子でレインは片手をひらひらとさせた。

「本当だな？」

「本当だよ。俺っちは、嘘ついたことないぜ」

自信満々に、胸を張る。どうやら、偽りではないようだった。

「ならいい。近くで車を降りよう」

「了解だぜ、カリク君」

（待ってる、サリア）

幼なじみと違い、誰かの心に響くことはないが、強い思いであった。

「はい、止まってくださいーい。首都観光に来た方ですか？」

「はい。夏休みなんで」

入都管理局の人間に門前で止められ、レインがにこやかに答えた。二人は、少し離れた位置で車を降り、首都への門へとやって来た。近くで見ると、外壁の高さがよく分かる。圧巻だった。

「ああ、なるほど。もうそんな季節なんですねー」

管理局の男は、カリクたちがまだ子供であるというのもあってか、態度が柔らかかった。

「でも、徒歩で来るっていうのは、不思議ですねー」

ただ、さすがに首都の門を預かっているだけあり、仕事は手を抜いてくれそうになかった。

「友達のお父さん車で、近くまで送ってもらったんです」

レインが、用意していた嘘を口にする。

「ふーん。なるほど。でも、それならどうして門の前まで送ってくれなかったんですか？ そうすれば、あなた方は歩かずに済んだと思いますか？」

「んー、怪しがられるかもしれないですけど、僕が少し歩きたいっ

て言ったんです。外からの首都も、ゆつくり見たかったですし」

「ほうほう。まあ、外から見たら、それはそれですごいですからね、ここの外壁は。たまにいますよ。この正門を後回しに、外壁ばかり見てる人」

他にも、同じような人間が今までにいたのか、疑っていた態度が軟化する。

「おっと。中へ入りたかったんですよね。入都の手続きをするので、ついてきてください」

「はいはい」

レインが元気に返事をし、後ろにカリクは続いた。入都管理局の男が駐在している、門脇にある小屋のようなところへ案内された。

「住んでいる町と、名前を言ってください」

位置的に、まず前にいるレインが答えるのが自然だった。まだ、彼がこの質問にどう答えるのか知らないカリクは、思わず唾を飲み込んだ。

「オールンの、ブックル＝エンハンスです」

すると、レインはまったくのデタラメと思われる情報を、迷いなく口にした。カリクは声を上げそうになったが、なんとか耐え切る。

「オールンのブックル＝エンハンスですね。そっちの君は？」

動揺するカリクへ、入都管理局の男は続けて尋ねてきた。平静を装って、名前を明かす。

「キュールの、カリク＝シェードです」

「シェード？ もしかして、ニック大佐の……、ああ、この前少将になりましたっけ。ニック少将の身内の方ですか？」

「ええ、まあ」

向こう側の持っている情報で、すぐに分かっってしまうだろうという判断から、隠さずに認めた。

「本当ですか！ いやー、ニック少将には以前仕事で助けて頂いたことがありますね。感謝しているんですよ」

「はあ……」

あくまで父の話なので、カリクは曖昧な返事をするしかなかった。その間に、男は手元で何かをあれこれと操作しているようだった。小屋内の奥の方で、何かがはずれたような音がした。

「お二人の情報をお持ちしますので、ちょっと待っててくださいねー」

男は、にこやかに言ってから、奥へと姿を消した。

彼が言っていた“情報”とは、個人情報のことである。出生届と一緒に提出になり、以降は変更がなければ五年に一度確認をさせられるものだった。男が、それらしき紙を持って、戻ってくる。

「お待たせしました。身分証明の類は持ってますか？」

「持ってますぜ」

「はい」

レインとカリクが、それぞれ一枚の紙をカバンから出して、男へ渡す。国側から配布されている、公的な身分証明書だった。

「ちよつと拝借。……うん。二人共、オッケーですね」

用意してきた紙と照らし合わせ、男は身分証明書をカリクたちに返してきた。受け取り、カバンへしまい直す。

「じゃあ、荷物検査するんで、カバンをもらえますか」

「はいはい」

レインが、素直にリュックを差し出す。

「あー、そうだ。来る途中で、キャンプもしたんでナイフが中に入ってるんですねー。やつぱり、持ち込むのはまずいですか？」

「んー、サイズによりますかね。そりゃ、事件を起こす気だっていふなら、没収しますが、そんな気はないですね」

「もちろんですよー。当たり前じゃないですか」

いけしゃあしゃあと言い切る。大物だなと、カリクは密かに思った。

「そうですよねー。それでは、失敬しますよ」

男は、容赦なくカバンを開いた。中を手でまさぐり、さらには覗き込む。だが、

「んー、確かにナイフですね。でもまあ、大丈夫でしょう。違法ではありませんし」

ナイフだらけのはずであるのに、彼は厳しいことを言わなかった。普通にカバンを閉じ、レインへ返す。

「じゃあ、次は君ですね」

「はい」

カリクも、ためらいなくカバンを渡した。レインと違い、元は危険なものなど入れていないからである。

「おや、君もナイフを持つてるんですね。特に問題はないですけど」
ただし、今は数本のナイフを入れていた。レインのカバンの中身が見咎められなかったのは、身体への仕込みナイフを目一杯増やし、カリクも隠し持って、残りの数本だけを荷物にしていたからである。
「うん。大丈夫ですね。お待たせしました。今から門を開けます。
首都セルゲンティスを、ゆっくり見ていってくださいね」

男は、にこやかに大きな二枚扉を手で示した。ゆっくりと、門が内側へと開いていく。

「ういっす。じゃ、行こうぜ、カリク君」

「……ああ」

とうとう、敵地へと足を踏み入れることになった。覚悟も新たに、カリクは門を通った。中に入ったところで、後ろの扉が閉じていく。

「入ったが最後。簡単には、逃げられないってどこか」

「んー、あの門だけ見ると、そんな感じするけど、出るのはそんなに難しくないぜ。実際、俺っちは出れたし」

カリクのつぶやきに、レインが反応を示す。実験では反論の余地がないので、カリクは「そうかよ」と、肩をすくめた。続けて、先ほどの入都手続きのことに話を移す。

「それより、いったいどうなってるんだ。オールンのプックル＝エンハンスって、誰だよ」

「ああ、あれか。あれは、ジーニアスの実験体にされてる人間へ与えられる、仮の名前さ。時折実験のために実験対象を町の外に連れ

出すことがあるんだけど、ジーニアスでの人体実験は下っぱとかには隠されてるから、入都のときに個人情報が必要なんだ」

「仮の名前、か。まあ、軍王主導なら、情報のでっち上げも簡単だろうな」

ミッドハイムは、いったいどれほど権力を自身のために活用しているのか、想像が及ばない。

「ま、とにかく」

先を歩いていたレインが、立ち止まって振り返ってきた。顔には微笑を浮かべる。

「首都へようこそ、カリク君」

黒く巨大な中央基地と、高く高くそり立つ外壁を背景に、賑わいと無機質が入り混じる首都の光景が、カリクの目に映った。

「さて、どこから攻めるかね？」

街並みを見るカリクへ、レインが問う。どこか楽しげだった。

「まずは、町を普通に見て回る。ある程度、地理は把握しておいた方がいいだろうしな。まあ、本部基地はあれ以外あり得ないだろうが」

カリクは、眼前にそびえる巨大な黒の建物を睨んだ。レインも、同じものへ目をやる。

「ご明察。あれが本部基地だ。やたらでかいから、実際はここからけっこう歩かないといけないけど」

「あれが、ミッドハイムの城か」

言葉に、隠しきれない敵意が乗る。すると、レインが顔を近づけてきて、

「おっと、その敵意は抑えた方がいいぜ、カリク君。ここは、軍王のお膝元だ。敵視している奴は、当然目をつけられる」

低い声で警句を告げた。軍王の支配下の町だからこそその注意である。

「なるほどな。肝に銘じておく」

カリクも、低い声で答えた。目的達成のために、危険を自ら冒す

つもりはない。

「じゃあ、案内は頼むぞ、レイン」

「ういつす！」

レインは弾んだ声で答えた。

昼食を挟み、昼下がりになってようやく簡単に首都を回り終えた。
「ふう。想像以上に、でかいな」

「まーなー。軍事国の首都で、演習場が多いのに、観光にも一定の力を入れてるから必然的に大きくならざるを得なかったんだろーさ」
頭の後ろで手を組み、軽い調子でレインが言葉を返す。確かに、演習場はあちこちに点在していた。

「さて、じゃあ次はあつこに行くかい？」

中心にある基地へと、彼は目をやる。敵の本陣や重要な拠点は後回しにしていた。

「……いや、本部基地が一番最後でいい。先に、ジーニアスのある場所を教えろ」

「了解了解」

しかし、カリクは先にジーニアスを見に行くことを選択した。すでに軍には、レインのことが知られているはずなので、本部基地はリスキーだった。視察の段階で騒動を起こしたくなかったので、場所が明確な基地は後回しでもいいという判断だった。

「じゃあ、行きますか。こつちだ、カリク」

レインが歩き出す。基地への方向だった。重要施設なので、あまり離れた場所ではないのだろうと予測する。

「ちなみにジーニアスは、本部基地近くの、普通の研究所の地下にある。普通じゃ入れないし、入り口すら分からないと思うから、怪しい箇所がなくても、俺っちを疑わないでくれよ」

「分かった。一度見て、建物から離れたら出入り口を教えてください」

「おいよー。任せとけ」
そうして二人は、研究所へと向かった。

研究所は、本部基地から五分ほど歩いた場所にあった。真つ黒な基地とは逆に、外装は白一色に塗られている。二階建てで、敷地が広い。代わりに民家を入れるなら、三十戸は置けそうだった。

「ここが、研究所。セルゲンティスの中には他にもあるけど、ここが一番大きいし、メインだな」

入り口が見えてきたところで、レインが解説を入れた。主要な研究は、ここで受け持っているのだろう。

「中には入れるのか？」

「一般公開してる部分なら、見学料を出せば入れるぜ。どれ、中を見ているかね」

「お前、入って平気なのか。顔を知ってる奴がいるだろ」

一人で入って、一通りを確認するつもりだったカリクは、レインへ顔を向け、そう尋ねた。

「あー、平気平気。警備してるような軍人は、まずジーニアスなんて知らないから、俺っちの顔なんて分からないよ。それに、立ち入れるのは、“表”だけだしさ。俺っちのことが分かる人間とは会わないと思うぜ」

当の本人は、まったく心配していないようだった。「んーっ」と、腕を上げて、伸びをしている始末である。

「なら別にいいが、何かあったら、切り捨てるからな」

「えー、助けてくれよ、カリク君」

レインが大きさに声を上げる。少しかんに障ったので、

「……お前を囿にして、注意がお前へ向いている間に、行動起こすなんて手もあるな。当然、お前がどうなるかと責任は持たないが」
冷たく言い放った。

「……怖いねー、カリク君」

レインは、なんでもないうような感じで返したが、頬が引きつっていた。

「とにかく、平気なら別にいい。さっさと行くぞ」

「おう」

ようやく、研究所の入り口に立つ。門番のように佇んでいる軍人二人が、ほんの少し視線を向けてきたが、すぐにはずされた。怪しい動きをすれば、即座に武器を突きつけられるだろうが。

騒ぎを起こす気はさらさらないので、カリクとレインはそのまま中へと入っていった。受付らしき場所にいる人間に、声をかけられる。

「あら、見学？」

「ええ、まあ。宿題の参考にしようと思ひまして」

レインが、果てしなくいい加減なことを口にする。だが、受付の中年女性は特に疑う様子もなく、

「あー、なるほどね。じゃあ、お金がかっちゃうけど、色々見ていくといいわ」

やる気なく、料金表と順路を指差した。

「うーっす。ほら、カリク君。お金お金」

軽い返事をしてから、カリクに見学料を払うようせかした。

「分かってるから、静かにしろ」

レインをたしなめ、金を雑に出した。受付女性が、それを受け取る。

「はい、確かに受け取りましたよ、と。案内の人はつける？」

「別にいいです。自分たちのペースで回りたいので」

「はいはい。じゃあ、そっちからだから、ゆっくり見て行ってねー」

気だるそうに手を振る女性へ、軽く頭を下げ、カリクは既に進み始めているレインを追った。

中は研究所というよりも、科学館のような感じだった。今までの発明に関する解説と、簡単な体験スペースが点在しており、気軽に

科学に触れられるような仕様になっている。夏休みに入っているためか、客はそこそこ入っていた。見たかぎり、親子連れの割合が多い。

「……研究所そのものは、あまり見れないんだな」

カリクがぼやく。研究所を見学とはいうものの、科学者たちの姿はほとんど見る事ができない。ところどころに、ガラス越しに実験中のところを見る事ができる場所があったが、それほど今の二人にとって有益なものではなかった。

「まーなー。仕事の邪魔は、されたくないんだろっさ。それに、本当に大事な部分は、見せたくないだろっし」

「そっだろっな。けど、お前は見学を勧めてきた。出てから、ゆっくり話は聞かせてもらっぞ」

解説を入れてきたレインに言葉を返し、先へ歩き出す。もう少しで、見学ルートは終わりだった。元の受付の場所ではない。どうやら、出口は建物正面とは別にあるらしかった。立ち入り禁止の扉が左右に見える、カーブした廊下の先に、外の光が見える。

その出口の直前の壁に、カリクは違和感を覚えた。まじまじと見ていると怪しまれてしまうので、長く見たりはせずに、光景を頭に刻む前へ向き直って、外へ出た。

「ここで見学は終わり。どうだったかな、カリク君？」

傍らのレインから、冗談混じりの問いが飛んできた。暗に、ジーニアスへの入り口が分かったかどうかも訊いてきているのを、カリクは嗅ぎ取った。

「それなりに面白かったな。いい感じに、宿題がこなせそうだ」

なので、こちらも遠回しな表現で、入り口と思しき箇所を見たことを伝えた。レインは一瞬眉をわずかに動かしたが、

「なら、よかつたぜ。俺っちが案内したかいがあつたつてもんさ」

大きな動揺は見せなかった。それどころか、胸を張ってみせる余裕すら見せる。出口にも警備兵がいたのだが、怪しまれることなく通り過ぎた。三分ほど歩いてから、人のまばらな裏通りへ、身を隠

すように入る。

「本当に分かったのかい、カリク君？」

「場所だけはな。合ってるかどうかは分からないし、どうやって中へ入るのかもさっぱりだが、出口付近の壁の足元部分が、周囲と無理に色を合わせたようになっていた。あれは、あの壁が見せかけで後ろに隠されたものがあるからだ」

自分の考えが合っているかどうかを、目で尋ねる。レインは口笛を吹いた。

「ご明察！ さすがだねえ、カリク君」

「ってことは、やっぱりあの壁の後ろにジーニアスへの入り口があるってことか」

「そういうことだ。あそことはまた別の場所に、あの壁を動かす仕掛けがあつて、それを操作すると、ジーニアスに入れるってわけ」

レインが調子よく解説を入れる。どうやら、壁を開くのは呪文ではなく、人工的な仕掛けらしい。

「なるほどな。入るための仕掛けが別の場所にあるとなると、潜入のリスクは余計に上がりそうだ」

ある程度の危険は承知の上でも、サリアのことを考えると忍び込むことは避けられない。なのに、地下施設へ行くのに一手間かかるとなると、さらに厳しくなる。

「だな。でもまあ、そこは俺たちもいることだし、追々考えることにしようぜ。それよりも、次は本丸、行くだろ？」

「……ああ、行くさ。正直、ジーニアスより怪しいからな」

レインが、とある建物へ顔を向けたので、カリクも同じものを見る。黒一色に塗りつぶされた敵の本拠地は、カリクたちを見下ろしていた。

首都セルゲンティスの中心に位置する、この国の心臓たる本部基地である。最後に、ここが残っていた。

「あそこも、中に入れるのか？」

「入れて、事務の受付部分だな。それ以外は一切入れないはずだっ

たと思うぜ。なんせ、機密の塊みたいなところだからな」

「ふん。サリアも、その中の一つってわけか」

「まー、そうだろうな。機密のレベルが、他とは段違いだろうが」
腕を組んで基地を睨みつけるカリクに対し、レインは微笑を浮かべる。

「じゃあ、行ってみましようや。この軍事国の支えたる、本部基地に」

「ああ」

カリクは、低い声で短くうなずいた。

本部基地の外観は、とにかく黒だらけだった。右を見ても、左を見ても、窓と黒しかない。おまけに、建物の端っこまでが、かなり遠かった。

「馬鹿でっかいねー」

「お前の声も、考えものなくらいにでかいと思うぞ」

皮肉を挟み、全体を見渡す。すべてを視界に入れきるのは、まず不可能そうだった。

「少し、中に入ってみるか」

「あいよー」

上へ曲げていた首を元に戻し、中へ行く。見た感じ、ニケアの役所と同じような印象だった。人の数はそれなりといったところで、あちらこちらで事務手続きを行っている。

「まんま役所だな」

「そりゃまあ、基地以外にも、こういう生活関係の施設としての機能もあるからな。他にも、裁判所とか、政治関係の設備もあるし」

本部基地は、軍事施設としての機能だけではなく、首都の主要機関を内包している。最高裁判所、国会堂なども、基地内に存在していた。それも含めて、本部基地はまさにラスタージ共和国の心臓な

のである。

「でも、そういう場所を含めて全部立ち入り禁止だろ。ずいぶんと露骨な機密主義だな」

声を落として、批判を口にする。国がどのような会議をしているのか分からないというのは、カリク個人の考えでは不安を煽る要素でしかなかった。

「でも、それを誰も疑問に思わないのさ。ミッドハイムは、国を見捨ててはいないからな。しっかりと統治をしたうえで、陰謀を進めてる。多少の不満はあっても、明らかな悪政じゃないなら、会議内容が分からなくてもたいした問題じゃないんだよ」

耳元で、レインがささやくようにしゃべる。確かに、ミッドハイムの政治は悪政とは言い難かった。カリクの記憶では、民衆の声も拾っているし、露骨におかしい政策も行っていない。軍事に傾いているのはもつと昔からのことであり、大規模な戦争がここ最近ないため、特にその部分への批判も大きくは上がっていないかった。

「結果しか見えてこない状態ながらも、誰も過程を気にしていないってわけか。それに気づいたら、ゾツとしかしないな」

つまりはそういうことだった。役所部分を見渡しながら、カリクは腰に手を当て息を吐いた。

「まあその分、裏で色々してるけどな。ジーニアス然り、カリク君の彼女のこと然り」

「そうだな」

サリアのことを話題に出され、心がざわつく。この街のどこかに、幼なじみの優しい少女はいるはずなのだ。

「絶対に、助け出す」

言葉に出して、もう何度目かの決意の固め直しをする。敵の巨大さを理解していても、サリアの居場所を探すことすら困難だと分かっている、弱気になどならなかった。どうあっても助け出す。その感情しかなかった。

「うっはー。カッコいいねー、カリク君。こんないい男に助けても

らえるサリアちゃんて子は、幸せだねー」

静かに、レインが騒ぎ立てる。音量はないが、耳障りには変わらない。

「うるさい。もう行くぞ」

「んあつ？ もう行くのか」

「見れるものが少ないからな。もう引き上げ時だろ。こっからは、足じゃなくて頭を動かす」

「頭を？」

「そうだ」

首をひねるレインに背を向け、出口へと歩き出す。

「まずは、どうにかしてジーニアスに潜り込む。そのための方法を考える」

「なるほどねー。じゃあ、とりあえず今日の寢床でも探すか？」

「そうだな。まずはそうするか。拠点も必要だし、何より作戦をゆつくり考えられる場所がほしい」

レインの提案に、カリクは乗った。腰を落ち着ける場所が必要だと考えたのである。

「どこか、いい場所はあるか？ 宿でなくても、身体を休ませられる場所なら問題ないんだが」

建物の外に出て、当てもなく歩き出す。この街に関して、カリクより何倍も詳しいであろうレインに尋ねた。

「うーん。野宿は、軍の見回りに咎められるんだよな。下手したら補導されて、最悪数日間拘留だし。宿の方が無難だと思うぜ」

「見回りか。どのくらいの人数で巡回してるんだ？ 潜入は夜にするつもりだから、そっちでも、見回りに捕まると面倒だ」

野宿のリスクだけでなく、まず夜に外をでること事態が厳しくなる可能性があるので、見回りの厳しさは重要な要素だった。

「人数はそこまででもなかったと思うぜ。なんせ、この街の規模だ。全体の人数は多くても、一人一人の担当エリアが広がるから、気をつければ見つからない」

説明を受けて、それなら野宿でもと、カリクは考えたが、

「おつと。でも、俺たちは野宿は勧めないぜ。宿に泊まっていれば、見つかっても宿の部屋まで付き添われるだけで済む。リスクが段違いだ。あつ、もちろん適当な宿の名前を言うだけじゃ駄目だぜ。宿帳も確認されるからな」

先んじてレインに待ったをかけられた。不要なリスクは削りたいので、野宿は選択肢からはずさざるをえなそうだった。

「……なら、仕方ないな。宿だ。一番安いのはどこだ？」

「さあ。さすがに、俺たちもそこまでは分からないだよな。でも、安そうな辺りなら分かるぜ。とりあえず、そこから探すって感じでもいいか」

「ああ、構わない。案内しろ」

「あいよー」

レインがカリクより前に出て、道案内を始めた。軽い足取りで進んでいく。カリクは、一度後ろを振り返った。黒くそびえる建物を睨む。

「カリク？　どうかしたか」

「ああ、悪い。ちょっとな……」

「ふーん」

レインに呼びかけられ、目線建物からはずした。再び歩き出す。珍しく、彼はつついてこなかった。

結局、カリクとレインは基地から少し離れた、宿泊代の安価な宿にチェックインした。値段に見合い、埃なども目立つような、お世辞にも環境のいい宿ではなかったが、ベッドがあるだけでも充分事足りた。あてがわれた部屋で、二人は話し合いをして、深夜にまずジーニアスへ潜入することに決めた。

ちっばけな少年たちによる、強大な国軍への抵抗が始まるうとし

ていた。

九章 『潜入の夜』

夜遅く、次の日が非番なのか、酔っ払いながら通りを歩く軍人たちが見られるような時間帯だった。わずかなガス灯の光が点在する中で、二つの影が動いている。カリクとレインだった。

「いるか？」

「いや、平気だ。行くぜ」

視力がよく、闇の中でも目が利くレインに前を進ませ、カリクは“ジーニアス”の隠されている、研究所を目指していた。通行人であつても、軍人は警戒しながら進んでいく。

「いやー、こんなにドキドキするとは思わなかったね。シャツのときより、やばいかも」

「これくらいで、そんなに緊張してどうする。この後、もっと危ない橋がいくらでもあるっていうのに」

「まあまあ、いいじゃないの、カリク君。俺たちだってそれくらいは分かっているけど、それでもドキドキするもんはドキドキするのさ。なにしろ、見られちゃいけないってんだからな」

レインはどこか楽しげだった。小走りで、先行する。

「そうかよ。まあ、しっかり働いてくれれば、文句はないさ」

「どこの悪役のセリフだい、カリク君」

軽口をたたき合っているうちに、幸運にも誰にも見つかることなく研究所の入り口へたどり着いた。見学ルートだと、出口にあたる部分である。門番として、昼間と変わらず見張りの軍人が二人立っていた。入り口正面からはやはずれた、研究所の向かい側にある曲がり角に、カリクたちは身を潜めた。

「さてと。じゃあ、手筈どおりに頼む」

「あいよ。でも、本当に大丈夫か、カリク。相手はプロの軍人だぜ」

「そうだな。だから、策を練ったんだよ。まともにやり合ったら、命がいくつあつても足りないからな。だから、俺のことは気にしな

くていい。サリアを助けるまで、捕まる気も死ぬ気もない」

驕っているわけでも、強がっているわけでもない。カリクは、冷静だった。そのうえで、ある作戦を立てていた。

「それより、お前もドジを踏むなよ」

「心配ご無用！ 伊達に裏の世界を生きてきてないんでね」

「ああ、そうかい。期待してやるよ」

投げやりにそう言うと、

「じゃあ、行くぞ」

「おう」

獲物を手にとった。レインも、ナイフを手元で遊ばせる。

「カリク」

「なんだ」

「幸運を祈る」

「ああ、お前も死ぬなよ」

「了解っ！」

作戦開始前最後の会話を交わし、二人は別れた。

一、二分経ったところで、カリクは銃を持った右手を、夜空に向けて伸ばした。左手は、指を耳に突っ込む。そして、

「うまくいってくれよ」

引き金を引いた。乾いた音が、周囲に響く。立て続けに、もう一発。少し顔を出して、門番たちの様子をうかがうと、明らかに浮き足立っていた。

（さあ、来い）

腕を下ろし、腰の部分で銃を構える。意図したとおり、門番のうち一人が、カリクの方に歩いてきた。恐る恐る、警戒しながら近づいてくる。向こうも、銃を手にしていた。カリクは息を潜め、ギリギリまで相手を引き寄せる。

着実に、距離が詰まっていく。心音が、相手に聞こえてしまうのではと思えるほどに、うるさかった。

（いっても、実戦は諸々を数えても四回目だからな。そうそう、落

ち着いて臨めるもんでもないだろ)

自分が緊張しているのを認めたくえで、冷静さを欠かないように、肩の力を意識的に抜く。

そして、相手がカリクのいる路地に入った瞬間、

「退屈な警備、ご苦労様だな」

言葉と共に、敵の銃を撃ち飛ばした。後方へ、転がっていく。

「なっ……」

実戦不足なのか、相手の軍人はいきなりのことに対応できていなかった。すかさず距離を詰め、銃をつきつける。相手は、苦々しい顔で両手を上げた。

「後ろを向け。声を上げれば撃つ」

「貴様、何が目的だ」

「……自分の欲を満たしに来ただけだ。さっさと後ろを向け。もう一度しゃべれば、頭を撃ち抜く」

カリクの声は冷たかった。銃を突きつけられている軍人は、少し迷ってから舌打ちをして背を向けた。

「よし」

それを見たカリクは、少し相手に近寄り、

「想定どおりで助かる」

迷いなく、右肩へ鉛玉をぶち込んだ。

「んなっ……？」

自分の身体に空いた穴に驚き、続けて吹き出した赤色の液体を見てから、門番をしていた軍人は、

「ぐああああ！」

痛みから叫びだした。その最中、

「眠ってる。そのくらいの傷なら、生き残れる公算も高い。死んでも、責任はとらねえが」

カリクは後頭部を殴りつけた。叫び声が急に途絶える。軍人は、意識を失って地面に倒れた。

(まず一人)

一つ段階を終えたのもつかの間、次の手順がすぐにきた。

「おい、どうした!」

もう一人の門番である。銃声に叫び声とくれば、さすがに持ち場を離れずにいられたと見える。手には、二丁の銃を持っていた。一人目の手から飛ばしたものを拾ったらしい。しかし、カリクは慌てずに、一つずつ拳銃を撃ち落とした。

「何っ!？」

正確に武器を飛ばされて、二人目の門番は、目を見開いた。その際に、またもカリクは相手の肩を撃ち抜く。今度は、両方とも。

「ぐがあああああ!？」

尋常ではない悲鳴が上がる。両肩をやられているせいで、傷口を押さえることもできず、すでに気を失っている仲間の横に膝を落とした。

「ゆっくり寝てる。その間は痛みもない」

こちらにも頭へ衝撃を与え、気絶させた。静寂が訪れる。闇の中にはカリクだけが立っていた。

「意外に早く終わったな。レインの方も、うまくいけばいいが」

一度、研究所を見つめてから、足元に転がる軍人たちのうちの片方の両足首を掴み引きずり始めた。研究所の敷地内へと向かう。まだ踏み込むわけにはいかなかった。

「さあて、中の警備はどうなってるかね」

一方のレインは、“すでに”研究所の内部に侵入していた。門番たちが、カリクに気を取られている間に、忍び込んだのである。あの事情で、カリクはまだ入ってこない。

レインの目的は、ジーニアスへつながる隠し扉を開くことだった。場所は知っているのだが、たどり着けるかは定かでない。警備が厳しいのだ。とはいえ、巡回のパターンを覚えていた。施設にいたと

き、逃げるチャンスはずっとうかがっていたので、あらゆる情報を仕入れていたのだ。

（んーと、通路よりは重要なところの監視を固めてるんだよな。確か、ジーニアスへの入り口を開くスイッチの辺りも、厳しかったか）
手元でナイフを遊ばせながら、攻略手順を考える。あまり時間をかけられない“事情”もあつたので、多少のリスクには目をつむることにした。

「まー、失敗したら、ごめんなさいだ、カリク君」

この場にはいない人間へ、届くことのない謝罪をしてから、

「さ、行くぜ。軍人さんたち」

行動を開始した。

レインのいる位置は、見学ルートのゴール地点から、少し奥まったところである。研究所はだいたい三ブロックから成り立っており、レインのいる出口と倉庫などが集まった部分、入り口側の職員の手詰り所とデスクの部分、そして実験室と建物自体の稼働に関わるメイン機器が集められている中央部分があつた。目指すは、この中央部分である。

門番がいたために、ジーニアスへの扉前の守備は甘かつたので戦闘になることにはならなかったが、この先はすべて避けられそうになかつた。中央部分に近づけば近づくほどに、警戒は厳しくなるからである。

「まあ、なんとかなるだろ」

それでもレインは、気軽な言葉と共に進んでいく。

「えーと、あと少しだな、たぶん」

角を曲がったところで出くわしてしまった軍人をのしたところで、レインは一息ついた。目指す場所は、あと少しだった。

ここまでのところ、警備の厳しさをもっていない。パター

ンを覚えているがゆえに奇襲ばかりしたというのもあるが、単純にレインが場慣れしていることもあった。

角から、曲がる先の直線の様子を覗き見る。真っ直ぐ伸びる廊下の中ほどに十字路があり、その周囲を三人の軍人が巡回していた。退屈なのか、一人はあくびをかみ殺している。レインは、十字路を左にいきたかった。

(んー、避けるのは無理か)

手早く判断し、十字路に軍人が一人だけになったところで、駆け出した。

「なっ!?!」

唐突な侵入者の出現に、若い男の軍人は面食らったようで、なんの抵抗も見せなかった。簡単に間合いに入り、みぞおちに一撃を入れる。体勢を崩したところで、続けざまに脳天へもう一発加えた。

「がはっ!?!」

苦しげな声を吐き出し、男は崩れた。騒ぎを聞きつけ、他の巡回兵が走ってくる。

「何事だ!」

「なっ、貴様、侵入者か」

「うーん、世間一般ではそういう表現される状態かな」

ランタンを向けられたレインは不敵に微笑んだ。同時に、ナイフを飛ばす。

「うおっ!?!」

刃先がランタンを囲うガラスを貫通し、光源を奪い去った。辺りが暗闇に包まれる。しかし、闇を歩いてきたレインにはなんの障害にもならない。

(二人目!)

片方の見回りに足払いを見舞う。「うおっ!?!」とまぬけな声を出して、彼は背中から床に落ちた。鈍い音が響く。それから、少し首を締めて意識を奪った。

(最後!)

首が横に倒れたところで、すぐに次の敵へ視線を移す。明かりを失った中年くらいの男は、首をせわしなく回していたが、まったくレインを捉えられていない。

（楽勝！）

音を立てないように、レインは中年男の背後に回る。そうして腕を上げると、渾身の力を込めて相手の後頭部を殴った。「がっ！」と、息を漏らすような形で声を上げ、男は倒れた。

「はあー。軍人が聞いて呆れるねえ。殺しにいったら、簡単に死んでたつていうのに」

聞き手がいないにも関わらず、冗談めかした言葉を口にした。倒れている軍人たちから目を離し、十字路を左へ折れる。目的地は間近だった。

「むっ。貴様、一人か。もう一人はどこに行った」

「お手洗いです。じきにお戻りになるかと」

その頃、裏口では街を警備している兵たちと“門番”とが顔を合わせていた。ただ、門番は一人で、どうにも軍人としては小柄に見える。腕を見たかぎり、引き締まった筋肉を持っているので、一概に軍人らしくないというわけでもないのだが。

「……ずいぶんと若く見えるな、貴様」

「そうでしょうか。確かに、年相応に見られることが少ないので、不満に思うことがしばしばありますが」

警備兵の言葉に、門番は肩をすくめてみせる。

「ふん。まあ、いい。よく考えれば、本当にただの子供なら、門番に成り代わられるわけがないからな。……しっかりやれよ」

「はい」

最後にほんの少しだけ態度を軟化させて、見回りの軍人は仕事へ戻っていった。背中が闇に消えていくのを見守ったところで、

「……ふう」

門番の服を剥ぎ取って着用していたカリクは、息を吐いた。門番がいなくなっているのは見回りが不審がると思っただため、リスクを承知で成りすましていたのである。さすがに、ジーニアスへ乗り込むまでは、異変に気づかれなくなかった。

「まだか、レイン」

一人つぶやく。もう一度、巡回が来るときまでに扉が開かなければ、レインは失敗したと判断して、一旦退却するつもりだった。

タイムリミットが、刻一刻と近づいていく。だが、カリクにできることは待つことだけだった。深呼吸を一度挟み、前を向く。

と、背後から不自然な音が聞こえた。何か重いものを引きずっているような、そんな音。何秒間か聞こえ続け、やがて沈んだ。

「まあ、合格点だな」

カリクは、口元に微笑を浮かべた。門番の服装を脱ぎ捨てて、音の正体を確かめにいく。予測は、裏切られなかった。

「ふん。ずいぶん深いな。首都の研究者どもは、地下がお気に入るか」

床とわずかに色合いのずれた不自然な壁がなくなっていて、下り階段が姿を現していたのだ。

「戻るか。カリク君だけじゃ、心配だし」

レインは、中枢部からややはずれた位置に隠されている、ジーニアスへの扉を開くスイッチにたどり着いていた。十本ほどナイフを手早く回収し、早足で裏口へと向かう。

スイッチの近くには、意識のない軍人たちの身体が五人分、並んで倒れていた。

「待つてるよ」

幼なじみの少女を想って、カリクがつぶやく。眼前は月明かりもない暗闇だったが、ためらうことなく足を踏み出す。足音が鈍く響いた。トラップに警戒しつつ、しかし足早に下っていく。

そのうちに、底についた。前には、もう一枚扉があった。隙間から、わずかに光が漏れている。

（誰も向こう側にいなければいいんだが）

頭でそう希望しつつ、いつでも銃を打ち込めるように、胸の高さで構えてから、ノブ式の扉に手をかけた。息を整える。

（よしっ）

自身へのかけ声と共に、扉を一気に開け放った。身体は中へ入れず、銃口を前へ向ける。だが、そこには人工的な光のついた無人の部屋があるばかりだった。

「ここも、電気って奴か。変な明かりだな」

数秒、五感をフルに使って、敵の気配を探りにかかったが、どうやら本当に誰もいないようだった。肩の力を抜き、天井を見上げる。内開きのため、扉の影に誰か隠れていないかを目視してから、カリクは室内に入った。後ろ手で扉を閉める。部屋の左右には、資料とおぼしきファイルや本が並べられた棚があった。隅には、ダンボールが積まれている。どうやら資料室のような場所らしい。どこに出るのか分からないが、奥にはもう一枚扉があった。

今の目的はサリアを探すことなため、資料へは目もくれず、カリクは奥の扉へ近づいていく。耳を当て、外の音をうかがった。聞こえてくるものはない。ゆっくりと、扉を押す。隙間から、今度は目で何かないか確認した。カリクのいる部屋と同じような明かりで満たされた曲線の廊下が、ただ伸びているばかりだった。

（人が、少なすぎやしないか……？）

機密施設とはいえ、重要機関であることには変わりない。なのに、あまりに閑散としていた。警備兵すら、今のところ姿を見ていない。

頭によぎるのは、既にレインの存在が知られており、自分たちが畏
にかけられている可能性だった。

疑惑を持ったところで、後方から足音が聞こえた。ほぼ間違いな
くレインだろうとは思いつつも、部屋の出入り口の死角に入り、息
を殺す。足音は着実に階段を降りてきていて、接近していた。

やがて、扉が勢いよく開けられた。誰かが飛び込んできたのを脳
が認識するが早いか、ナイフがカリクへと放たれた。わざわざ撃ち
落とさずに、左へ避ける。

「やっぱりお前か。なかなか早くて、助かった」

銃を下ろし敵意がないことを示してから、やってきた人物に声を
かける。向こうも敵意を消して、微笑した。

「おう。なかなかすごいだろ、俺っち」

予想に反さず、レインだった。ナイフが放たれたのは警戒のため
だと理解しているため、カリクはわざわざ責めたりはしなかった。

「そうだな。じゃあ、さっそく次の仕事だ。道案内だから、たいし
て難しくないだろ」

「……人使いがなかなか荒いねー。確かにさつきほどの危険性はな
いかもれないけどさ。時給いくら？」

「一日三食だ。さつさと行くぞ。裏口にまた見回りが来たら、逃げ
づらくなる。それに、お前も暴れたんじゃないか？」

レインの軽口をあしらいつつ、カリクは廊下へつながる扉の方へ歩い
ていった。

「まあねえ。ていうか、三食プラスデザートつけてくれない？」

レインが後から続く。

探索は、ここからが本番だった。

「とりあえず、サリアのいそうな場所を教えてください。時間がないか
ら、さつさと回らないと」

「んー、それならいい手があるぜ」

廊下に出たところで、レインが人差し指を立てた。

「いい手？」

「うん。時間がかからなくて、かつ簡単な手段だ」

「聞くだけ聞いてやる。話せ」

上から目線の発言だが、レインは気にせず自分の案を説明する。「研究員かジーニアスでモルモットにされてる奴を、一人捕まえればいい。どいつもこいつもあちこちに目を光らせてるからな。サリアちゃんほどの大ニュースなら間違いなく、何か知ってるはずだ」

「捕まえれば、か。簡単そうに言うが、そんなうまくいくのか」

あまり現実的には思えなかった。今は警備の姿が見えないが、さすがに研究員たちは守られているはずである。となると、騒ぎになるリスクを含め、得策とは思えなかった。

「大丈夫、大丈夫。今の時間なら、だいたい単独行動してるはずだし、研究員共の要望で、警備兵も最小限の人数しかいないんだ。だから、誰か一人くらい捕まえられるさ」

カリクの心配をよそに、レインは楽観的な意見を口にする。納得しきれないものの、時間が惜しい現状では、ジーニアス内部に詳しい彼の意見に乗らざるを得なそうだった。

「仕方がない。その方法で行く。この時間に、関係者がいるとしたらどこだ」

「そうこなくつちな。今から案内する。ついてきてくれ」

自分の意見が聞き入れられたためか、機嫌よくレインは歩み出した。向かうのは最初の部屋から出て、左の方向だった。右に折れていく曲がり廊下を進んでいく。見張りとは、まったく遭遇しなかった。

「っと。ちよつとストップ、カリク君」

しばらくいったところで、レインが足を止めた。小声での指示に従い、カリクも止まる。

「どつした」

「獲物を見つけたのさ。今、警備の奴となんか話してるから、ちよつと待って」

どうやら、進行方向に狙い目の人間がいたらしい。レインよりは

前に出ないようにしつつ、聞き耳を立てる。二人の男性のものと思われる会話が届いてきた。

「妙に突っかかるね。君は、僕にそんな態度をしていい立場だったかな？」

「はっ。相変わらずの傲慢さですね、あんたらは。もういいですよ。教えてくれるかもと思った俺が馬鹿だった」

「おやおや、ずいぶん言いようだ。君が軍人という職につけた理由をよく考えてごらん。我々のおかげじゃないか」

「言ってる。ジーニアス出身の奴らのほとんどは、憎みこそしても、感謝なんてしちゃいねえ」

直後、一人分の足音がして、どんどん遠くなっていった。片方が捨てぜりふを吐いて、その場から離れたらしい。

「あー、面倒な奴だけど、折れやすそうでもあるか。行け、カリク君」

「あっ、おい」

飛び出したレインに、カリクは慌てて続く。廊下の先には、白衣を着た初老の男がいた。

「な、お前は」

「久しぶりだな、研究員A」

驚きで固まっている男へ、レインは容赦なく拳を叩き込んだ。「がはっ！」という声とともに、男の身体が宙を舞い、床へと落ちる。呻く彼の首もとへ、レインはナイフを突きつけた。

「騒ぐなよ、おっさん。二度と騒げなくなるぜ」

「レ、レイン。逃げ出したはずの貴様が、なぜここに」

「ちよいと人助けさ。訊きたいことがあるんで、ついてきてもらおうぞ」

「貴様に話すことなど、何も無いわ」

口答えした男の首に、レインは刃を軽く立てた。赤く薄い筋ができる。

「あんたに選択権はない。いいから従っておけよ」

彼にしては、冷たい声だった。気圧されたのか、男が黙り込む。その反応を見てから、レインはカリクへ目を向けた。

「カリク、移動するから手伝ってくれ。人がいない部屋を探す」

「ああ」

カリクは軽く請け合い、

「まあ、そういうわけだ。ちょっと付き合え、おっさん」

やや距離をとって、銃口を男に向けた。

「け、拳銃……。貴様は、いったいなんだ」

「答える義理はない。さっさと立て」

問いを弾き、命令する。男は不本意そうではあったが、レインに小突かれて立ち上がった。

「こっからなら、たぶん第二保管庫が近いな。俺っちについてきてくれ」

彼の案内で、カリクと白衣の男は、扉の横上に『第二保管庫』という表記のある部屋の前へきた。

「ちょっと待っていてくれよ」

レインが懐から針金を出し、鍵穴をいじり始める。二分とかからずに、鍵が開いた。中へ入る。彼が入り口横の壁にあるスイッチを押すと、電気がついた。捕らえた男を、部屋の一番奥の壁に押しつける。

「さあてと。あんた確か、わりと上層部の事情にも詳しい奴だったよな。色々と聞かせてもらうぜ」

先ほどと同じように、レインは男の首筋にナイフを近づける。

「貴様らに話すことはない」

しかし、相手はまだ折れない。なのでレインは、

「んー、あんまりプライド守ろうとすると、命が守れないぜ」

そう言ってから、男の右の手のひらに、ナイフを刺した。刃は手のひらを貫通し、壁に届く。

「あがアアアア!?!」

男が悲鳴を上げた。その音量に、カリクは顔をしかめる。

「これ、拷問だから。あんたの振りかざしてきた地位とか、なんの意味もないわけさ。まだ答えないなら、左手もいつておくか。バランスいいし」

「や、やめる。分かった。話す。話してやるから」
血相を変え、男は簡単に意見をひっくり返した。レインが何度かうなずく。

「うんうん。いい心がけだと思っぜ。上からなのが気に入らないけど、そこはまあ目を瞑ってやるよ」

男の肩を叩き、微笑した。続けて本題に入る。

「じゃあとりあえず、一番に知りたいことから訊くぜ。最近、軍王君念願の“オモイノチカラ”を持った女の子が連れてこられたはずだ。その子は、今どこにいる」

「なぜ、貴様がそんなことを知りたがる？」

右手から鮮血を流しながらも、男が問い返してきた。レインがまた脅しをかけようと口を開いたが、言葉を発する前に男の顔の横に、銃弾が飛んだ。

「いいから、訊かれたことだけ答える。何度も余計なことを言わせるな」

カリクである。かすかに煙を上げる銃を手にし、男を睨んだ。

「わ、分かった分かった。キールからきたという、サリア「ミユル」のことだろ。話すから、もうこれ以上のことはしないでくれ」

男もかなりの恐怖を抱いたようで、情けない声を出した。慌てて本題に入る。

「サリア「ミユル」なら、本部基地の地下にいる。本来なら、要人を匿うための部屋に閉じ込められているはずだ。軍王様は、手元に置いておきたいらしい」

「本当だろうな」

「ほ、本当だ。間違いない。上層部の会議結果がこちらにも回ってきたのだ。疑う余地はない」

カリクの追及に対し、男は必死に訴えた。どうやら、嘘ではなさ

そうだった。サリアはジーニアスではなく、本部基地に捕らえられているのだ。

（ちっ。手元に置いておきたいか。とんだ変態野郎だな。サリアに何かしてたら、殺すだけじゃ済ませねえ）

「はずしたか。となると、一回退かないとならないな」

内心での悪態とは裏腹に、カリクは冷静な判断を下す。ジーニアスにサリアがいないのならば、長居は無用だった。

「そうさな。でもその前に、せつかくこいつを捕まえたんだから、他のことも訊いておこうぜ」

「……聞いて損はないか。手短に済ませるぞ」

「了解っ」

しかし、レインの提案により、もう少し留まることにした。目の前にある情報源を活用するためである。

「さて、カリク君。何が聞きたい？」

問われたカリクは、少し考えてから、

「軍王の目的だな。漏らしていない可能性もあるが、そいつの予測でもいいから聞いておきたい」

顎で研究員を指した。サリアが誘拐されたときから、ずっと疑問だったことである。

「だってさ。どうなの、研究員A。軍王の目的について、なんか心当たりある？」

カリクの言葉を受け、レインは捕らえた男へ顔を向ける。

「軍王様の目的？」

「そう。奴の目的。あんたの予測でもいいみたいだぜ」

「うっむ……」

もう反抗してきたりはせず、男は素直に考え始めた。うなり声を上げる。しばらくしてから、静かに語り出した。

「詳しくは分からないが、端々の行動と発言から察するに、おそらく軍王様は世界を欲している」

「世界だあ？」

レインが素つ頓狂な声を上げる。カリクも、口を半開きにして固まった。

「ああ。軍事力の強化は前々から行っていたが、それもそもそもは他国へ勢力を伸ばすためだ。だが、今の軍王様の場合、勢力拡大という小さなことではなく、世界を手に入れようという考えをお持ちになられている」

呆気にとられる二人に構わず、男は続ける。

「軍王様は“オモイノチカラ”に、それだけのことができる“何か”があることをご存知なようだ。どのようなものは、我々も知らされていないが、あの御方が言うのだから、まず間違いなく何かがある」

「“何か”だってさ、カリク君。思い当たることある？」

「いいや。サリアの力は、世界を手に入れられるなんて妄想を抱かせるようなものじゃない。いったい軍王は何を知ってるんだ」

疑問の払拭につなげようと投げかけた質問であったのに、ますます謎が深まってしまった。

(それとも、サリアの“力”には、別の何かがあるのか?)

思い至った結論は、それだった。そうでなければ、サリアにこだわる理由がない。

「そうだ。貴様等が何をやる気なのか知らないが、軍王様は強大で偉大な御方だ。何をしようと、あの御方の敵であるかぎり、貴様等は何もできない！」

軍王の存在を思い出したからなのか、急に男は威勢を取り戻した。わめき始める。

「私にこんなことをしたのも、許されない。お前たちは、軍王様に楯突いたことで処刑されるのだ！」

「だってさー、カリク君。俺っち怖いぜ」

レインが茶化す。カリクは軽いため息をついた。

「アホか。それにお前は、殺しても死ななそうだ」

「……クールだねえ、カリク君」

簡潔な返しに、レインは苦笑した。続けて、別のことを問いかけてくる。

「で、まだ訊きたいことはあるかい、カリク君」

「いや、いい。潮時だ。性急に退くぞ」

「あいよ」

カリクの選択は退却だった。本来はサリアがいるかどうかさえ分かればよかったところを、軍王の目的についても微かな情報を手にしたのだ。充分だった。

「こいつはどうする？」

レインが男を指差す。カリクは間を空けずに答えた。

「他と同じように、気絶させてそこらへんに転がしとけ。こいつ一人始末したところで、俺たちの顔は割れるだろうしな」

「んー、了解。いい時間だし、おねんねしときなー」

「な、何を」

男が自分へ伸びてくるレインの腕を見て、うろたえる。一方のレインは、明るい口調で伝えた。

「首絞めて、気絶してもらうだけ。殺すわけじゃないから、安心しな」

「バ、バカな真似はやめろ！」

彼の言葉を聞き、男はじたばたしたが、

「死にたくないなら動くな」

カリクに銃を向けられたため、おとなしくなった。

「そーそー。懸命な判断だな」

「うぐ。うづうづ……」

そして、レインが男の首を掴み、ゆっくりと力を加えていった。しばらく唸り声が上がっていたが、やがて静かになった。手を離すと、男の身体はガクリとうなだれ、彼の右手を壁へつなぎ止めているナイフを回収すると、今度は床へ落ちた。

「さて、行きますか、カリク君」

「…… 本当に殺してはいないんだな」

立ち去ることを促してきたレインへ、カリクは一応確認する。ナイフを手元で遊ばせている少年は、気楽そうに笑って答えた。

「殺してない殺してない。必要がないし。カリク君、もしかして敵の命は取らないタイプ？」

「いや、そういうわけじゃない。ただ、無闇に命を取るのサリアも望んでないだろうから、気になっただけだ」

「ふーん。なるほどね。理解理解。俺っちもやたらに殺人はしたくないし。ただな、カリク君……」

そこでレインは言葉を切り、カリクの方へ笑みを向けた。ただ、目はまったく笑っていない。むしろ、つり上がっていた。

「殺さないといけないって判断したとき、迷うなよ。迷ったら、死ぬのはお前だ」

「……肝に銘じておく」

いつになく真剣なレインの忠告を、素直に聞き入れた。目の前に立つレインが、満足そうにうなづく。

「よろしい。じゃあ、さっさとずらかるか。長居しても、いいことなさそうだし」

「ああ」

一人の白衣姿の男が倒れている部屋から、カリクとレインは出て行く。後は、退却するだけだった。

施設から逃げるのには、苦労しなかった。二人はきた道を戻り、裏口から出ていった。襲撃された情報が、他の見回りにまだ伝わってないらしい。

「いやー、運がよかったね、カリク君。何事もなく脱出てこれるとは」

「そうだな。けど、明日はこうはいかないだろう」

「明日？」

首をひねるレインへ、カリクは静かに告げる。
「明日、本部基地に乗り込む」

十章 『反旗の芽』

ガヌがニケアにたどり着いたのは、カリクたちがジーニアスに潜り込んだ頃から少ししたくらいで、もうすぐ夜明けという時分だった。本来であればもう少し時間がかかる距離だったのだが、シルラを人質とされたために、食事も睡眠もせず、ひたすらにアクセルを踏んできたのである。

（暗殺、か。馬鹿らしいな）

そう思いつつ、車を東部基地の入り口へと持つて行く。当然、門番をしていた兵士たちに止められたが、勅命書を見せると、夜明け前であることもひっくりくるめて、疑われることなく中へ通された。通常勤務時間外でも警備の固い本部基地と違い、東部基地は閑散としていた。見回りはいるが、さほど数はいない。

そのため、東部責任者であるニック＝シェードの執務室へたどり着くのも、容易だった。軍王の部屋へ入る前のシルラのように、深呼吸をしてから扉を拳で軽く叩いた。

「首都から参りました、ガヌ＝ロード中尉であります。東部基地責任者であるニック＝シェード少将に用があり、お訪ねさせていたできました」

中へ呼びかけると、

「どうぞー」

男性のものではあるもの、それにしてはやや高い声が返ってきた。

「失礼します」

扉を開くと、

「それで、どんな用だ？ 首都からの客人」

室内で待機していた十名ほどの軍人から、一斉に銃を向けられた。その包囲の奥に、ニック＝シェードの姿があった。短い金髪は無造作にあちこち跳ねている。肩幅がるものの、あまり背は大きくなさそうだった。眼鏡越しに見える目つきは鋭く、青い瞳はすべてを見

透かしているかのように思えた。

急に敵意を向けられ、ガ又は両手を上げたものの、気持ちではひるむことなく、問いに答える。

「俺の大事な人を護るために、貴方の力を貸してほしいんです。ニツク少将」

「んあ。どうやら、俺の予測とはズレがあるらしいな。正確な情報を得ていたわけではないが、お前は俺を殺しにきたんじゃないのか」堂々と目を見て言ったところ、ニツクは少し口元を緩めた。

「軍王からのお達しはそれです。ですが、俺にその意思はありません。身体検査してくださっても結構です」

さらにガ又は、迷いなく堂々と言葉を続ける。銃を構えているうちの一人が、ニツクの方へ振り向いた。彼は、意味深な笑みを浮かべてうなずく。

「言葉に甘えて、調べさせてもらおう。それにしても、勅命書ももらいながら、軍王の命に背くとは。何を意味するのは分かっているんだよね？」

「ええ、もちろん」

身体検査を受けつつ、ガ又は深くうなずいた。

「軍王は、俺の大事な人を人質にしたことで油断しているでしょうが、よくよく考えたら、その人質にされた奴は、ちょっとやそつとで死ぬようなたまじやないですよ。そこを、軍王は分かっている」

勝ち気でいながら、もろい部分も併せ持つ女性軍人のことが頭をよぎる。人質にされたときは焦ったが、冷静に考えると、彼女はそうやすやすと殺されるような人間ではなかった。

「だから、俺は軍王に反旗を翻す。年端もいかない女の子を誘拐させるっていうのも、納得いかなかったですしね。もう、奇跡を待つだけはやめたいんです。力を貸してください」

真つ直ぐにニツクを見つめる。ガ又は囲っているうちの一人が、声を上げる。

「少将、騙されなないてください！ これもきつと、こいつかミッド

ハイムの策のうちです!」

「ニツク少将!」

ガ又は余計な言葉はつけずに、ただ名前を呼んだ。すべての想いを込めて。

「……いいだろう。信じてやる。例え罠だとしても、簡単にやられる気はないからな」

ニツクはイスの背もたれに体重をかけた。完全にはないもの、一応は信じてもらえたようだった。

「少将、武器の類は弾の込められていない銃だけでした。他に、怪しいものは持っていないません」

身体検査を終えた兵士が、手の中にある銃の、空っぽな弾倉を見せながら報告する。

「銃だけ、か。弾はどうした?」

「貴方が俺を完全に信頼できると思えたら、渡してください。それまでには必要ありません」

ニツクの問いかけに対し、ガ又は堂々と答えた。奥のイスに座す少将が、笑い声を上げる。

「面白い奴だ! まず、お前の知っていることを全部話せ。そして、銃弾はこつちからくれてやる。もし、油断させて俺を撃つつもりなら、それを見抜けなかった俺が悪いだけだからな」

「少将!」

先ほどニツクへ苦言を呈した兵士が、再び上司を思いとどまらせようと呼びかける。しかし、ニツクは首を横に振った。

「お前の意見も一利あるが、俺の意見には影響しない。こいつは白だと、俺は判断する」

「ですが……」

「なら、お前が見張ればいい。俺を撃たせるなよ」

なお食い下がろうとする部下に、若き将校はそんな言葉をかけた。唇の片側だけを上げる。

「はっ、はい! 絶対に少将殿を撃たせたりはしません!」

「ああ。頼む」

気合いのある返答に、ニツクは満足げだった。

「そいつに向けた銃を離せ。大事な情報源だ」

続けて彼が指示を飛ばすと、ガ又を囲っていた拳銃の輪が解かれた。

「さあ、話せ。俺の子供に等しいあの子が、今どうなってるかも含めてな」

ニツクがイスに深く座り直し、そう命じた。ようやくまともに対面したガ又は、その威圧感に冷や汗を流す。

（これが、史上最年少の少将か）

柔らかさの中に狂気と力を包み隠している軍王とは違い、揺るがない意志による別の凄みがあった。彼の意志とシルラ、そして“とある少年”のため、ガ又はゆっくりと口を開く。

「ご希望通り、話させていただきます。この任務の始まりから、ここまでのことを。手短にですが」

「ああ、構わん」

ニツクの了承をもらい、ガ又はすべてを語り出した。

「現状はこんなところです」

「ふん。いい具合に、奴の舞台が整ってるわけか。気に入らないな」
ガ又が自身の知るかぎりのことを伝え、ニツクは顔の前で両手を絡ませ、忌々しそうにぼやいた。

「上層部は奴の手中で、俺みたいな自分に害な人間は中央から排す。おまけに軍事に力を傾けてはいても、安定した政治をしているから、ほとんど国民から反発は受けていない。何かの鍵になる、サリアも手に入れた。うまくいきすぎて、気味が悪いくらいだな」

今の軍王のことを一つ一つ確認していくと、見事な展開になっていた。彼の書き進めているであろうシナリオどおりになっている。

「だが、まだつけ込む余地はあるな」

「ええ。だからこそ、俺は貴方に協力を申し出たんです」

ニツクの言葉に、ガヌも同意を示す。部屋の端に退いた兵士の一人が、口を挟む。

「失礼ですが、つけ込む余地とはいったいどういうことでしょうか。今の話のかぎりでは、ミッドハイムの思い描くとおりとおりに進んできていて、隙はないように思えますが」

「いや、トントントン拍子で進んでるからこそ、不自然なんだよ。どんなもんかとはかく、奴の野望の鍵になるサリアを捕らえたのに、どうして奴は未だに何もしてもないと思う？」

「どうして何もしてないか、でありますか？」

ニツクから問いかけられ、兵士が考え込み、しばらくして、「あつ」と声を上げた。

「まだ、ミッドハイムに必要なものが足りていないのでは」

「半分正解だ。正確には、ものは足りてるが、状態がまだ万全じゃないってところだな。一つの予測を立てるなら、サリアの能力にはまだ秘密があつて、そいつが原因で、ミッドハイムはまだ動け出せないのかな」

部下の答えに、ニツクはそう付け足した。さらに続ける。

「サリアが誘拐されたって報告を耳にしてから、三日目経つ。なのに、首都で目立った動きはない。何かを待ってるかしら思えない」
言い終えると同時に、彼は机に手を置き立ち上がった。

「だが、時間に余裕があるとはかぎらない。その何かが揃ったときに軍王がどうするかも分からない。動くなら、今つてところだな」

「少将？」

部下の一人が、腰を上げたニツクへ声をかける。なぜ立ち上がったのかが分からなかったのである。

不思議そうな部下に加え、他の部下とガヌへ、ニツクは不敵な笑みを向けた。

「首都へ行く。そのこの奴の話が本当なら、首都にはレインともう一

人のガキが着いているはずだしな。ガキどもだけに、重荷を背負わせるわけにはいかない」

「……いいんですか。俺は協力は求めましたが、貴方ご自身に動いてほしいとは言っていませんよ」

ガヌが彼の意志を確認する。ニツクは表情を崩さずに答えた。

「そんなことは分かっている。でもな、自分の娘みたいな存在が捕まっただけというのに、他に任せておくのは嫌いなんだよ。自分で動かないと、落ち着かないのさ」

責任ある立場にいる人間からは、あまり聞かれない言葉だった。

しかし、ガヌの聞いてきた噂には違わない。

「貴方は、話に聞いてきたとおりの人ですね。軍人でありながら、自分の考えに忠実で、部下だけに危ない橋は渡らせない。よく、陰謀だらけの首都で、少将まで上れましたね」

「別に、上りたくて上ったわけじゃないけどな。サリアのことを考えると、情報が必要だったから、上の立場の方が都合がよかっただけだ。で、親父の知名度も利用してここまで来た。本当は、上に立つなんてのは苦手なんだよ」

「よく言いますよ。これだけ慕われているっていうのに」

ガヌは、この部屋の中にいる、ニツクの部下たちを見渡す。見たかぎりでは、全員が上司を信頼しているように思えた。なにしろ、未だガヌを警戒し、銃から手を離していないのである。

「よせよ。そういうことは、本人の目の前じゃ言わないもんだ」

微笑とともにニツクが答える。信頼されているという自覚はあるらしい。

「とにかくだ。うちの娘を助けに行くでしょう。お前ら、反軍王派全員に伝える。半分は留守番でこの基地を防衛、もう半分は首都に行くってな」

ニケアの地で、ついに若き将校が出陣を命じた瞬間だった。

場所は移り、首都セルゲンティス。朝日が既に高く昇っている時間だった。いつものとおりにシルラが本部基地へ出勤すると、何か騒がしかった。内容が分からないが、あちらこちらで噂話が飛び交い、一部の軍人は基地内を駆け回っていた。

「何かあったのですか」

先に来ていた上司を捕まえ、シルラは尋ねた。音量を抑えた声が返ってくる。

「にわかには信じられないんだが、なんでも中央研究所に、侵入者が出たらしい」

「侵入者、ですか」

「ああ。しかも、たぶんデマだとは思いますが、侵入者は二人で、なんでも高校生くらいの子供だったとか何とか」

「子供？」

首を軽くひねる。侵入者というだけでも信じられないのに、一層おかしな話だった。

「まあ、嘘だろうさ。軍人が警備に当たっていたはずだし、それを子供がどうにかこうにかできるはずがない」

上司は本気で捉えてはいないようだったが、サリアの脳裏には一人の少年のことが浮かんでいた。

（もしかして、カリクシードか？ しかし、そうだとすると早すぎる。もしかしたら、もう一人いたという奴が何かしらの手を使ったのかもしれないが）

昨日、ガヌが何かの任務で首都を離れたことを知ったシルラだが、好都合ととっていた。ガヌを説得する手間が省けるためである。

「なにせよ、警備はうちの班と関係ないからな。侵入者は然るべきところに任せて、俺たちは俺たちの仕事をするぞ。いいな、シルラ」

「ええ。もちろんです」

表面上では素直に応じたが、真面目と自負するシルラでも、今日

ばかりは心からの返事ではなかった。

(どうにかして、侵入者の情報を得たいところだな。もし本当に侵入者がカリクシードなら、接触しておきたい。万一、情報が得られなくても、サリアの“力”で声は届けられるかもしれないな。今日中に試してみるか)

仕事よりも、サリアのことに思考の重きは置かれていた。

しかし、想いとは裏腹に、襲撃者の情報はなかなか集まらなかった。研究所の警備をしていた軍人たちは、事情聴取やらなにやらで捕まらず、他に詳しいことを知っている人間がいなかったのである。(くっ。これでは、意味がないではないか。せつかく、ガ又を気にせず動けるといふのに)

シルラは、昼食のパンを食いちぎりながら、あれこれと考えていた。

「ご一緒してもいいですか？」

うつむき加減だったところに、低く野太い声が降ってきた。首を上にかすと、見たことのある、体躯のいい男がいた。

「貴様か。なんの用だ。任務でないかぎりは、貴様とはいたくないのだが」

「いや、これはお手厳しい。ガ又中尉でなく、僕ですみませんね」
ノーザン「ジャツジだった。笑顔なのだが、目が笑えていない。」

「戯れ言を聞く気はない。何もないなら、さっさと帰って愛想笑いの練習でもするのだな」

「これは失礼。貴女に、雑談は必要ないですか」

嫌み混じりに突っぱねると、ノーザンはまったく気持ちのこもっていない謝罪を口にした。だが、表情は変えない。

「では、貴女に必要そうな話をしましょうか。サリア「ミュルフのことです」

彼は、ハンバーグの定食をテーブルに置き、シルラの隣に腰かけてきた。シルラは不快感を覚えたものの、サリアの名前を出されたことの方が気になったので、文句は言わなかった。代わりに、「あの子がどうした。話によっては、ここでお前の頭を撃ち抜く」脅しに近い言葉を返した。

「心配には及びません。僕は別に、何をするわけでもないのですが、ノーザンはまったく堪えた様子を見せず、話を続ける。自然と、会話の音量が落ちていた。

「動くのは、軍王様ですよ。なんでも明日、第一議会所にあの子を連れて行って、“お披露目式”をするらしいですよ」

「“お披露目”？」

サリアの監視任務を請け負っているというのに、そんな情報を耳にしたのは初めてだった。ミッドハイムを、盲目的に崇拜している人間たちの集いかと予測する。

「ええ。出席するのは上層部の人間と、一部の部下たち、あとは研究者というところです。ですが、おそらく貴女一人混ざっても、招かれざる人間であるのは気づかれないと思います」

その予測は間違っていないかった。ただ、最後の部分に反応する。

「それは、私にもその“お披露目”とやらに出ると言うことか」

「いいえ、そういうわけでは。ただ、誰か一人くらい増えても分らないだろうというだけのことです」

ノーザンはそんな答えを寄越したが、素直に聞き入れられるはずがなかった。

「まあ、僕も呼ばれているんですが、貴女がいたとしても気づかないでしょうね」

真意は捉えられなかったが、彼がシルラへお披露目へ来いと言っているのは明らかだった。ほぼ確実に、親切心以外の理由で。

「貴様、いったい何を考えている」

無駄だとは思いつつも、尋ねる。隣に座る男は、

「面白いことが見ただけですよ、僕は」

と、今度は狂気を湛えた目をして、微笑んだ。
「ふん。まあいい。お前のことなど、理解したくもないからな」
手元にあつた牛乳を飲み干し、シルラは立ち上がった。ノーザンに背を向ける。去り際に、
「ただし、貴様が私の大事なものを傷つけるつもりなら、容赦なく銃を抜く。覚えておけ」
そんな宣言をした。

（明日か）

昼食の後、シルラはデスクに戻って仕事を再会したものの、身が入らなかつた。サリアの“お披露目”が、気になって仕方なかつたのである。

（まだ、なにも策は立てられていない。無策では、どうしようもないだろう）

とはいえ、まだサリアを助けるための具体的な算段はまったくできていない。不本意ではあつたが、今のところはノーザンの言葉に乗るしかなさそうだった。

（しかし、ノーザンは何を考えているのだ。あるいは、何も考えていないのかもしれないが、不気味なところだな）

そもそもシルラは、彼に対して大きな不信任を抱いていた。理屈ではなく、直感である。底の知れない悪意を、彼は有しているように思えた。

しかし、だからと言って、お披露目とやらに行かないという選択肢は選べなかつた。軍王がいつたい何をする気なのかも見逃せないのだ。

（明日は、相手の考えを知ることができるかもしれない。もしかしたら、サリアを別の場所へ連れて行かれてしまうかもしれないが、移されても首都の中だろう。多少のリスクを考慮しても、お披露目

は甘んじて受け入れるしかないか)

とりあえずは様子見に回ることにする。今日のうちに、いたいけな少女を解放することはできなさそうだった。

(とにかく、後でサリアに頼んでカリクⅡシエードに呼びかけてみるか。本当に来ているのなら、接触を図りたい。罫だと思われるかもしれないが)

カリクのことに考えが至ったところで、シルラはあることが考えついた。

「ニツクⅡシエードがいるではないか」

思わず、つぶやく。ある策が、頭に浮かんだのである。

(サリアを連れ出すこと自体は、軍王本人に会わないかぎり、任務の一環と偽れる。あとは、首都から逃げ出せばいい。それから、まずはニケアに行ってニツクⅡシエードと接触する。そのまま馬鹿正直にニケアに留まったり、キュールに行かなければ、サリアを逃がしきれるかもしれない)

これだと、シルラは直感する。カリクと接触できるか試してからにはなるが、案そのものに問題はなさそうだった。実行すれば、確実に軍には戻れなくなるが、問題ではない。

ただ、ある人物のことが心にかかった。

(せめて、ガヌには居てほしい)

軍には友人も多くいるが、サリアを助けるためにはやむを得ないかとも思えた。しかし、ガヌだけは切り捨てられそうになかった。

「ちつ。こんなところで、奴が障害になるとはな」

自身の内心を理解しつつも、悪態をつく。特別が、足枷だった。

(あいつは、私と来てくれるだろうか)

サリアのことから、ガヌのことへ気が移る。思い出すのは、わざと一線を越えさせない彼の態度。まるで、自身を戒めているかのような行動や言動が、多々あった。

(偉そうな決意をしておいて、私はあの子のために自分の願いすら犠牲にできないのか。滑稽なものだな)

自嘲の笑みを、ひそかに浮かべる。結局、自分が第一だった。

(あいつともう一度、会わなければ。そうでなければ、私はたぶん、ギリギリまでここから出られない)

「早く戻れ、ガヌ」

誰にも聞こえないよう、うつむきつつ、細心の注意を払ってつぶやく。声に出さずには、いらなかった。

「カリクが、この街に？」

「もしかしたら、着いているかもしれない。軍の施設に、昨日の晩侵入した者がいて、噂だと中高生くらいの子供だったらしいのだ。

ニック「シエード少将の息子、ひいてはトルマ「シエード殿の孫となれば、見張りが相手にならなかったのも、納得できる範囲だ」

終業時間よりも少し早い時刻にデスクを離れたシルラは、またサリアの元を訪れていた。他の人間は外に出しているため、部屋にいるのは二人だけだった。話題にしていたのは、カリクのことである。「だから、サリア。彼に呼びかけてみてくれないか。私は彼と接触を図りたい」

少女の目を見て、頼む。揺れる瞳には、戸惑いと疑いが入り混じっていた。それを見て、言葉を足す。

「もちろん、貴女が私を信用できないのなら、無理強いはしない。もしかしたら、本当に罠かもしれないのだから。だから、貴女次第だ。ただ、私からは信じてほしいとだけは伝えておく」

自分が、彼女を攫った張本人であることを踏まえての発言だった。今更になって助けたいなどと言うのが、とてもおこがましく、とても信じてもらえないものではないというのは承知している。しかし、気持ちは本物だった。ゆえに、想いが届かなければそれまでだという覚悟もあった。

「……正直」

黙り込んでいたサリアが、口を開く。監禁状態が続いているがためめの披露も、その声に垣間見える。だが、一言一言は、はっきりとしていた。

「軍人である貴女からそんな提案をされても、信じることはできません」

はつきりとした拒否。やはり駄目かと、シルラは潔くあきらめようと思ったが、サリアはそこでしゃべるのを止めなかった。

「でも、一人の人間としての貴女は、とつても信じたいです。たとえ、本当は罫だとしても、そうだとはつきりしないかぎり貴女を信じたい。貴女は、とても優しい人だと思うから」

彼女が、穏やかに目を細める。優しさに満ち溢れた表情だった。

「貴女の提案に乗ります。一人の人間である、シルラさんとして言ってくれるのなら」

何もかもを包んでしまいそうな笑みを浮かべたまま、そう言われたシルラは、深くうなずいた。元より、目の前にいる少女への提案は、軍人としてのものではないのだ。ためらう必要がなかった。

「……ああ、このことは、一個人として願います。カリク」シエードに、呼びかけてくれ」

「分かりました。協力します」

サリアは、すぐに聞き入れてくれた。同じように、うなずいてくる。

「でも、うまくいくかどうかは分かりませんよ。私の“声”が、どこまで届くのか試したこともないですし、伝わったかどうかも、相手が見えない状況だと、私は確かめられません。それでも、いいんですか」

「構わない。あくまで、手段の一つだ。もし伝わらなければ、それはそれで仕方がない」

すぐさま応えた。会えなければ、カリクのことは構想外にするだけだった。

「……そうですか。そしたら、カリクになんて伝えたらいいかを教

えてください。“力”に乗せて、発信してみます」

シルラの力強い口調に引つ張られてか、サリアの声にも力がこもっていた。

「すまないな。感謝する。本当なら、貴女の手は煩わせずに助け出せばよいのだが」

「気にしないでください。結局、私は私のためになることをするだけですから。それよりも……」

優しい表情が崩れ、眉が下がり、不安を帯びる。シルラは、何かと少女を見つめる。

「シルラさんは、大丈夫なんですか？」

「私……？」

予期せぬ言葉だった。

「軍人なのに、私を逃がそうとしたりして平気なんですか？」

「ああ、そういうことか」

疑念からではなく、純粹に心配してくれていると感じ、シルラはできるだけ気楽に答える。

「気にしないでいい。そろそろ転職しようと思っていたところなのでな」

「シルラさん……」

しかし、少女の顔色はよくなる。さらに、問いかけられる。

「ガ又さんのことも、いいんですか？」

心を抉られたような衝撃を覚えた。冷静さが一気に飛んでいきそうになる。必死に、つなぎ止めた。

「……いい。奴よりも、今は貴女だ」

「でも」

反論しようとするサリアを、右手の掌を出して制した。

「自分のことを考える。私のことは、二の次でいい。ガ又のこともな」

「シルラさん……」

「カリク＝シエードに、伝えてくれ。今日の深夜十二時、本部基地

入り口からしばらく直進した場所にある公園の入り口に居るように
と」

本音を言わずに、すべきことをする。いざという時ガヌとサリア
のどちらを取るか、シルラ自身もまだ分かってはいなかったが。

十一章『交差する意志』

首都にやって来てから二日目の夜。カリクは、深夜に決行する、本部基地への潜入に備え、レインと共に宿で休んでいた。レインはベッドに身体を預けていて、カリクは部屋の端にある机で銃の手入れをしていた。

“声”が飛び込んできたのは、そんなときだった。

『カリク。首都にいるなら、今から言うことを聞いてて』

「サリア？」

反応は早かった。幼なじみの声に、うつむけていた顔を上げる。

「……どうかしたの、カリク君。急に、サリアちゃんの名前なんて口に出して」

突然、声を発したので、レインが訝しげな表情を向けてきた。彼には、サリアの声が届いていないようだった。

「オモイノチカラ」だ。あいつの声が聞こえた」

「本当か？俺っちはなんにも聞こえないけど」

「お前には呼びかけてないからだろ」

首を横に傾げるレインへそれだけ返し、サリアの呼びかけに集中しようとする自分の内側に気を向ける。彼女の声が、心に響く。

『私を助けようとしてくれていている軍人さんがいるの。きつとカリクにも協力してくれると思う。だから、今日の深夜十二時に、本部基地の正面から真っ直ぐいった場所にある公園へ来て』

呼びかけの中身に、カリクは眉をひそめる。優しすぎるサリアの性格を考えると、疑いたくはないが、罠の可能性が頭に浮かんだ。

『でも、カリクが罠だと思うなら来なくてもいい。けど、私はその軍人さんを信じてるから、カリクにも信じてほしい』

しかし、続けてきた言葉で、決心をつけた。彼女がそこまで言うのなら、信じてみようと思ったのである。それに、もし本当に協力してくれるのならば、逃すのはもったいない。

『何回か、繰り返すね』

そう前置きがあり、同じ内容が数回繰り返された。少しでも、こちに届く可能性を増やしたいのだろうとカリクは踏んだ。

最後の繰り返しが終わると、“声”はそこで聞こえなくなった。待つてみて、もう何も響いてこない。カリクは、意識を自分の内面から外に戻す。

「行くところがあった。一旦、本部基地への乗り込みは見送る」
「はあ？」

唐突な計画変更、レインが素っ頓狂な声を上げた。

「サリアから、協力者の存在を知らされた。向こうがこつちと会いたがってるそうだ」

「協力者って、それ軍の奴だろ？ サリアちゃん、脅されて言わされたんじゃないか？」

「いや、脅迫はない。サリアの“力”の内容は、発信された相手にしか分からないから、サリアは伝えたと偽れる。畏なら、はつきりと俺に畏だつて言うだろう」

レインが抱いた疑惑を否定する。サリアの“力”なら、強要されたものとまったく違う言葉を発信することが可能だった。

「そうなのか。でも、それなら、サリアちゃんが騙されてるってことはあるんじゃないか？ サリアちゃんが気づいていないだけで」

「それは確かにありえる」
今度は、肯定せざるをえなかった。ただ、それだけでは口を閉じない。

「だがサリアは、はつきりとその協力者を信じると言った。俺は、あいつを信じたい。それに、たとえ畏だったとしても、なんとか乗り切つてやる。本当に協力者だったのに、会わなかったなんてことになる方がもつたないしな」

その口調は、強かった。協力者を信じたサリアを、信じたのである。

「そりゃそうだけど、ドジを踏んだらそこで終わっちゃうかもよ。」

罷だったら、研究所にいた奴らと違って、油断も驕りもないだろうし」

しかしレインは、いい顔をしない。内情に明るいがために、余計に不安があるようだった。

「そのときはそのときだ。嫌だったら、お前はこなくていい。協力も無理強いしない」

それでも、カリクの決心は揺るがなかった。レインが、あきらめからため息をつく。

「まったく、強情だね、カリク君は。乗った船を、途中で降りたりはしないっての。最後まで協力するよ。俺たちには、俺たちの目的もあるし」

目的については初耳だったが、カリクは深く問いただしたりはしなかった。代わりに、

「正直、助かる。悪いな、レイン」

お礼を口にした。レインが、目を丸くして固まる。

「なんだよ、その反応」

カリクが指摘すると、レインは頭をかきながら、答えた。

「いや、カリク君からこんな素直に感謝されるとは思ってたなかったから」

その言葉を聞き、カリクはしばらく記憶を探った。至った結論を口にする。

「確かに、まともに礼を言った覚えはないな。まあ、別に俺だって普通に感謝の言葉ぐらい言うさ」

レインは納得いかなさげに、眉を寄せていたが、無視する。

「とにかく、十二時に言われた場所に行くぞ。戦闘の準備も一応しておけ」

「あいよー」

レインが、返事とともに手元でナイフを一回転させる。カリクは軽くうなずき、自分の銃へ目を落とした。そういえばと、ふと思う。（人に対しては撃ったが、命を奪ったことはないな。この先、もし

かしたら……)

頭によぎる、『迷うなよ』というレインの言葉。人殺しにならないといけない瞬間が、訪れるかもしれない。そのとき、自分ならどうするか、確固たる意志で思う。

(サリアのためなら、迷わない。容赦なく、引き金を引く。たとえば、命を奪うことになっても)

少女のための、決心だった。

深夜十二時。昨晚と同じように、宿を抜け出したカリクとレインは、指定された公園へとやってきていた。

軍事都市とはいえ、公園は平凡なものだった。草木が外周を覆い、端にはブランコや砂場、中央にはすべり台がある。今は深夜のため、本来ここを使うべき子供の姿はない。

巡回している兵士に見つからないように、二人は木々の影に隠れていた。

「さて、来るかね？」

「向こうが本当に協力者ならな」

「……怖い言い方するね、カリク君」

内緒話の音量で言葉を交わしていると、公園の入り口に、人影が現れた。

「……あれか？」

「あれだろうな」

首を動かして周囲を見回している姿を見て、カリクは確信した。いつでも銃を抜けるように手を添えながら、その人影の後ろへと回り込む。レインには、前から行くように指示した。

「サリアの協力者か？」

二人で挟んだところで、声をかけた。人影は二人ともを見れるように、身体を横向きにした。カリクの目に、金髪のポニーテールが

映る。真一文字に結ばれた硬い表情に、見覚えがあった。

「な、お前は……」

サリアを攫った張本人の一人である、女軍人だった。カリクの姿を認めると、彼女は両手を上げた。

「カリク」シエード。言いたいことは山ほどあるだろうが、この場は怒りを抑えてくれ。時間がもつたいないのでな」

語り口は淡々としていた。生真面目な印象を受ける。

「……カリク君、知り合い？」

反対側にいるレインが口を挟んできた。

「ああ。こいつは、キョールでサリアを攫った二人組のうちの片方だ」

「ああ、なるほど」

カリクの返答に、一旦納得した様子を見せてから、

「えっ！？ そいつが、なんでサリアちゃんの協力者に!？」

そこに気づいて声を上げた。カリクと女軍人が揃って注意する。

「静かにしろ」

「あ、はい……」

レインは素直に謝った。

「……でも、お前の言うとおりだ。あんた、なんでサリアの逃亡に協力しようとしている？ 軍人なら、ミッドハイムのやることには絶対服従のはずだろ」

彼の意見に同意を示し、カリクが尋ねる。敵であり、そもそもサリアを首都へと連れてきた人間が協力者を名乗るといふのは、違和感を覚えざるを得ない。

その問いに、女軍人はやや間を空けてから答える。

「あの子を、サリアを助けたいと思ったからだ。それ以上でもそれ以下でもない。これだけで納得してくれとは言わないがな」

語調は強く、目つきは鋭い。冗談ではなさそうだった。

「ずいぶん、利己的な軍人なことだ。あんた、それでよく軍に居れたな」

畏ではないとほぼ確信しながらも、あえて嫌味を放る。

「ちよつ、カリク。あんまり刺激しない方がいいんじゃないか？」
女軍人よりも先に、レインが動揺を見せた。それに対し、当の本人は顔色一つ変えない。

「私が軍人になったのは、“護る”ためなのでな。けっして、女の子を攫うためではない。それだけのことだ」

ブレはなかった。彼女の信念において、軍人であることは、しいことをする方法の一つでしかないのだろう。

（真に仕えるは、自分ってわけか）

心が、共感する。カリクの考えそのものだった。

「なるほど。サリアが信じるわけだ。いや、サリアじゃなくても、信じるだろうな」

「それは、褒めているのか？」

「ああ。そう受け取ってもらっている」

女軍人の問いかけに、カリクは躊躇なくそう返した。すると、彼女は少し頬を緩めた。

「面白いな、君は。実に、はっきりしていて。私の知り合いにも、その誠実さを見習ってほしいものだ」

「いや、カリク君は誠実っていうより、馬鹿正直だと思っぜ」

軽口を叩いたレインに、カリクは同じような調子で反撃する。

「お前はただの馬鹿だけどな」

「……さすがに酷いぜ、カリク君」

元気が激減した声を聞くに、わりとショックを受けたらしかった。そちらは放っておいて、女軍人に向き直る。

「で、あんたはなんで俺たちと接触しようと思ったんだ」

さっそく本題へ触れる。何か、策があつてのことなのか、それとも別の意図があるのか。

「待て。その前に、確認しておきたいことがある」

しかし、彼女は回答の前に問いを寄越してきた。

「こっちの少年は、何者だ」

レインを指差す。彼女は、彼のことを知らなかった。

「俺っちは……」

「そいつは、レインだ。知らないかもしれないが、この国の秘密機関で人体実験と軍人教育をされていたそうだ」

話し出そうとしたところを遮り、カリクが情報を伝える。レインが眉を潜めたが、気に留めない。

「レイン……？」

女軍人が反応を示したのは、名前だった。

「一つ訊きたいんだが、ガヌ＝ロードという奴に心当たりはないか
カリクの聞いたことの名前だった。しかし、レインは違ったよ
うで、

「あいつのことを知ってるのか!？」

異常な食いつきを見せた。

「あ、ああ。一緒に任務に当たっていたからな」

反応の強さに、訊いた女軍人もやや引き気味になる。

「そいつ、今どこにいるんだ」

今までになく、レインは必死な様子だった。宿で言っていた、

“目的”という単語が頭をよぎる。

「ガヌなら、今は任務で首都から離れている。どこに行っているの
か、私は知らない」

「いないのか……。悪いね、ありがとさん」

戸惑いながらも、女軍人は情報を出した。それを耳にして、レインが落ち着きを取り戻す。

やり取りを見ていたカリクが、疑問をぶつけた。

「そのガヌとかいう奴とは、どういう仲なんだ？」

「……知り合いだよ。ちよっとした」

「とても、ちよっとしたって表現で足りるような感じには思えない
けどな」

「……それ以上は無粋だぜ、カリク君」

どうやら、話す気がないようだった。相手を女軍人に変え、別の

話題に切り替える。

「そういえば、あんたの名前をまだ聞いてなかったな。なんていうんだ？」

「そうだったな。私としたことが、失礼なことをした。私はシルラ
＝マルノルフ。軍での階級は中尉だ」

「シルラか。率直に訊こう。どうして、俺たちに接触してきた。何か、サリアを助ける策があつてのことか」

名前を聞くと、元の路線に戻った。カリクとしては、何よりも優先すべきはサリアだった。

「策があることにはある。ただ、私に拠るところの大きい作戦だ。一人でも実行はできるのだが、君らには先に会っておきたかった。

サリアを逃がせるのに、本部基地で騒ぎを起こされては面倒だからな」

続けてシルラは、自身の作戦を話し出した。掻い摘むと、任務と偽って、サリアを伴って首都から逃げるというものだった。

「なるほどな。確かに、一時的にはうまくいくかもしれない」
カリクが感想を口にする。わざわざ一時的にと加えたのは、意図があつた。

「だが、ミッドハイムはどんな手を使つてもサリアを取り戻そうとするだろうな。あいつや俺の家族や、周囲の人間を巻き込むくらいは、容易にやってのける」

シルラは否定してこなかった。彼女も、その考えを持っていたのだらう。

「……確かに、そのとおりだ。だが、まずは目下の危機を脱するべきだらう。対策を立てる時間は作れる」

付け足しを聞いても、カリクは納得できなかった。サリアは、自分のために他人が傷つくのを嫌がるだらう。カリクに対しても、助けてくれるという信頼と、傷ついてほしくないという感情がない交ぜになっているだらう。そうになると、他の人間を巻き込むわけはない。

「そうか。助けるだけじゃない。ここで、終わらせないといけないのか」

そこで、カリクは気づいた。本当の意味でサリアを助けるには、ただ基地から連れ帰るだけでは、不十分だと。

「あー……。だいたい想像つくけど、なに考えてるの、カリク君」
レインは頬をかいた。おそらく、彼の予測に反さないであろう回答を、カリクは伝える。

「分かってるんだろ？ ミッドハイムをなんとかしないかぎり、サリアは狙われ続ける。一旦首都から出たくらいじゃ、安息には程遠い。なら、ここで片を付けた方が効率的だ」

正論であり、結論であり、無謀であった。レインが、引きつった笑いを見せる。

「……やっぱり、カリク君はおっそろしいね。間違ったことは、言っちゃいけないけどさ」

「本気が、カリクシエード。たとえ、武術や銃撃に秀でた中将クラスが二人がかりで戦っても、勝ちを拾えないであろう相手だぞ。勇氣と蛮勇は違う。考え直した方がいい」

軍王の力を知るシルラがら、反論が飛んできた。声はやや音程の高い、驚きを含んだものになっている。その止め方は、必死だった。

「さつき、貴方は自分で言ったばかりだろう。サリアのためにも、貴方は死んではならない。たとえ結果として彼女を助け出せても、貴方が生きていなければ、彼女にとってはなんの意味もないのだぞ」
だが、カリクは折れない。

「誰が、死んでも助け出すなんて言った。言っていないだろ。軍王だろうがなんだろうが、サリアを残して俺が死ぬかよ」

自信を持って言い切る。まったく根拠はない。そこにあるのは、ただただ強い意志。敵の強大さも何も、関係はなかった。

すると、シルラが声を荒げた。

「……自惚れるなよ、カリクシエード！」

深夜であることを無視した音量だった。レインが思わず、彼女の

いる方向の耳を片手で塞いだ。

「思い出して見る。キクールで、貴様はサリアを護れなかったではないか！ そんな弱者が、軍王を相手にして死なずに帰るだと？ 寝言は寝て言え！ 貴様にまだそんな力はないだろうが！」

シルラの顔がカリクを威圧するかのようになり、近づいてきた。だが、カリクは引き下がることなく、目を真つ直ぐに見返す。

「ああ。確かに、俺に力はない。ミッドハイムの足下にも及ばないだろう。でもな、そこであきらめられないんだよ。俺は、あいつのために今まで何もしてやれなかった。しかも、俺の勝手な理由で。だから、できることは全部やらないといけないんだ、俺は」

その芯にあるのは、サリアだった。すべては、彼女のためなのである。

「お前の事情など知るか！」

しかし、カリクの想いが詰まった言葉を、シルラは一言で切り捨てた。

「根は確かにあの子のためだろうが、現実を見違えるな。貴様は、死なない意志も持っているだろうし、それは確かに力に成りうる。

だが、軍王はそれだけでなんとかなるほど甘い相手ではない」

威勢良く話していたカリクすら、雰囲気には圧されて口を噤むほどの剣幕だった。

「最上の結果を焦るな、カリク。シールド。ここから逃げても、サリアは追われる。自分を護る人間が傷つくことで、あの子は苦しむそれでも、今後、軍王をどうにかできれば幸せを運べるはずだ。だが、ここで貴様が感情だけで軍王に挑んで、死んだりしてみる。それだけで、あの子は間違いなく不幸になる。そうしないためにも、貴様はまだ冷静になれ」

さつきまで、負けん気から迫られてもひるんでいなかったカリクだが、今は腰が引けていた。目だけは逸らしていないが、気圧されているのは明らかだった。

さらに、レインからも諭される。

「そうだぜ、カリク君。軍王に挑むのは、さすがに無謀すぎるぜ。ジーニアスにいたときに聞いたんだが、けっこう軍王に不満を持っている奴は多いみたいだし、奴と戦うのは、戦力が整ってからもいいんじゃないか？」

「けど」

「けども、しかしもない。貴様はサリアを助けたい一心で思考が暴走している。頭を冷やすのだな」

カリクの反論は、シルラに遮られた。

「準備が整ったら、さっき話した計画を実行に移す。サリアを連れ出して車に乗せたら、あの子から貴様らに連絡させるから、勝手なマネはするな」

さらに、釘を刺される。カリクは顔を歪めた。

（一回、どこかに逃げおおせたところで、サリアに安全はこないじゃないか……）

目の前の女軍人の意見が真つ当なのは、重々承知していた。それでも、心が納得しないのだ。サリアをただ逃がすだけではなく、自分の身も、周りの人間のことも心配しなくていい、そんな日常に戻してやりたい。そのうえで、“力”のせいで孤独に近かった彼女を、今度は一人にしない。勝手な理由で、距離を置いてしまったが、今はその愚かさを知っている。

「まあ、カリク君は俺っちがなんとかするよ。サリアちゃんのこと、は、あんたに任せる」

釈然としない想いを抱えたカリクを置き去りに、レインがフォロ―を入れる。もう文句は言わない。言っても、無駄だろうから。

（何か、何か対抗策はないのか。強大な力を持つミッドハイムに、太刀打ちできる方法は）

答えに、至らない。そもそも、答えがあるのかどうかも怪しかった。

「ああ、頼む。私も最善を尽くそう」

悩む間にも、会話が進んでいく。反論の芽は見つけられない。

「では、私はこれで失礼する。一応、家の場所は伝えておこう。ただ、余程のことがないかぎりには訪ねてくるな。軍の宿舎なのでな」
シルラがカバンから手帳とペンを出し、メモを書くとそのページを破った。レインの手へ渡す。

「ほいほい。いただいでおくぜ」

彼は、軽い口調とともに受け取った。直後、

「そういえば、さっき話したガ又って奴も、ここに住んでるのか？」
声色をかなり低くして、尋ねた。今までになく、真剣な様子で。

「……いや。私のは女性用のところで、男は少し離れた別の宿舎で生活している。ガ又もそこだ。だが、さっきも言ったように、今は任務でいないぞ」

「いつ帰ってくる？」

さらに、レインは詰め寄った。シルラが、ややのけぞりながらも返答する。

「分からない。どこに行ったかをまず知らないのな。だが、一週間はおかからない内には戻ると思うぞ」

「一週間、か。分かった。あんがとさん」

前のめりをやめ、レインは礼を言った。シルラは訝しげな表情をしつつも、「どういたしまして」と受ける。

「とにかく、だ。一旦は私に任せる。必ず助け出す。今日のところはお別れだ」

最後にそう言い残すと、シルラは二人に背を向けて公園の出口へと歩き出した。振り返ってきたりすることはなく、そのまま暗闇へと消えていった。

「じゃあ、俺たちたちも宿に戻ろうぜ。今の感じじゃあ、あの人に任せるしかなさそうだ」

「……そうだな。納得いかないが」

結局、最後までカリクは筋の通った反論も妙案も出すことができず、シルラの計画に乗っかるしかなかった。

だが、カリクたちはまだ知らない。強力な助っ人たちが近づいて
いることを。

きっかけはガヌ＝ロード、率いるはニツク＝シエード。東部軍の
一部が、首都に向かって最速で進軍してきていたのである。明日の
夜前には、首都に到着できそうなほどだった。

着々と、舞台は整いつつあった。

十二章『頂点に立ちし者の野望』

今は、何日の何時なのだろう。サリア「ミュルフは、起きたての頭でそんなことを考えた。実際問題、地下では時間の流れがまったく分からないのである。唯一の指針として食事の時間があるが、それすらも朝食、昼食、夕食が曖昧になってしまっていた。

（昨日、だよな。カリクへの呼びかけ、届いたかな）

身体を起こし、ベッドの縁に腰かける。幼なじみの少年に想いを馳せた。何度想ったか、もう分からないくらいだった。

「おはよう。朝ご飯食べる？」

見張りである女性が、声をかけてきた。「はい、いただきます」と、うなずく。出された食事は、トーストとスクランブルエッグというシンプルなものだった。

食事をしながら、サリアは考えを巡らせる。言い知れない不安が頭をもたげた。軍王は、最初に顔を会わせて以来、何もしてきていない。何かされるのはもちろん嫌なのだが、何も無いのも不安を煽るばかりだった。

（このままずっと、こんな環境に居させられるのかな）

考えだけでも、あまりに退屈で苦痛だった。一番辛いのは、カリクがいないことだった。

（信じてるよ、カリク）

彼がきつと助けにくるといふ希望を大きな支えに、サリアは首都に来て五日目を迎える。

そして今日は、これまでと違うことがサリアの身に起きた。

「サリア「ミュルフ。軍王様がお呼びだ」

昼食後しばらくして、いかにも偉そうな軍服姿の男が、地下室へ

とやってきたのである。

「また目隠しをさせてもらうつことになる。いいな」

こちらの了解を取ることなく、勝手に話を進めていく。

「……従いますが、どんな用件なんですか？」

反抗は無意味なので、目的を尋ねた。

「じきに分かる。お前は、ただこちらの指示通りにすればいい」

しかし、はぐらかされてしまう。話す気がないのか、そもそも知らないのかは、判断がつかない。

「時間がない。さっさと行くぞ」

そして、目隠しをされたサリアは、地下室から連れ出された。腕を引かれる。

廊下や階段をいくつか通り過ぎ、扉を開く音がした後、喧騒らしきものが耳に届いた。同時に、風が頬をなでた。

（外、なのかな。基地以外の場所に向かっているの？）

さらにしばらく直進すると、また扉を開く音がした。重たそうだった。

「ミッドハイム総督！ サリア・ミュルフをお連れしました！」

手を引いていた男が、大声を出す。反響の具合から察するに、かなり広い建物の中にいるようだった。

「ご苦労様です、大佐。中央まで来てください」

「はっ！」

聞き覚えのある男性の声に、傍らの男が従う。前に進み、段差を上らされた。

「目隠しを取ってください。そうしたら、あなたも席について結構です」

「はっ！」

ようやく、サリアの目隠しがはずされた。光の眩しさに目を細め、ゆっくりと慣らしていく。手を引いてきた男は、すでに隣からいなくなっていた。

いたのは、やはり建物の中だった。円状で、かなり広い。中心を

ぐるつと囲うようにして、五列ほどの席が規則的に並んでいる。床からはいくらか高い位置にあった。今は、半分程度が、軍人で埋まっている。奥の方に、堅い表情のシルラの姿もあった。ドーム状の天井は遙か頭上で、壁までは平均的な大きさの家屋を三つは入れられそうなくらいの距離がある。

中央には、サリアの立つ、床より一段高い裁判所の被告席のような柵のついたものと、それを見下ろすかのようにそびえる席があった。そこには、

「こんにちは、サリア＝ミュルフ。元気でしたか？」

この国の頂点たる、クラカル＝エル＝ミッドハイムの姿があった。声量は大きくないのだが、この空間自体が静まり返っているため、よく通った。最初に対面したときののように、怪しく微笑んでいる。

「いいえ。監禁状態で、元気になるわけがありません」

彼の問いに、首を横に振る。素直な意見だった。

「おや、これは申し訳ありませんね。まだ、しばらくは今の状態が続くでしょうから、我慢していただくほかないのですが」

しかし、向こうは謝罪の言葉こそ口にしたものの、悪びれる様子はなかった。

「さて、サリア＝ミュルフ。今、我々は非常に厄介な状況に立たされています。今朝に入った情報だと東部軍の兵が、首都へと進軍してきているそうです」

「東部軍が？」

サリアは顔をしかめた。どうして、東部軍が進軍しているのか。建物内全体も、ざわついている。彼らも初めて聞いた話のようだった。

「その反応では、ご存知ないようですね。今、東部軍のトップはニツク＝シエード少将、貴方のご友人のお父様なんですよ」

「ニツクさんが？」

義父よりも、よっぽど父親らしかった人物の名前だった。

「首都から離せば、付き従っている派閥からも隔離できるかと思

ましたが、甘く見過ぎましたね。各方面に、根が回っているとは思いませんでした」

微笑みは崩れていないが、言葉の節々に苛立ちが覗く。彼の想定していなかった事態なのだろう。

「だから私は、この会合を開かざるをえなくなりました。目的をはつきりさせなければ、貴女を死守する戦いに納得してもらえませんがね。本当は、貴女の力が開花してからにしたかったですね」
続けての彼の発言に、サリアは眉をひそめた。

(開花……?)

“オモイノチカラ”は、生まれたときから持っていた力である。開花も何もなかった。

「これもご存知ないようですね。ということは、やはり貴女は、まだ本来の力を発揮できていない状態のようだ」

「どういことですか。私の“力”は、他の人の心に、直接語りかけられるくらいのものですよ」

「その能力こそ、他とは一線を画しているものである指針になるのですが、力の持ち主たる貴女が存じないのなら、これは私しか、今は知らないでしょう」

ミッドハイムの言っている意味が、まったく掴めなかった。何を言いたいのだろうか。

「貴女の力は、“オモイノチカラ”の中でもさらに特別なのです。

貴女自身はまだ気づいていない、世界をも手に入れられるであろう力なのですよ」

「だから、私の力はそんな大それたことができるようなものじゃ……」

「それとは、また別の力です」

先ほどと同じ反論をしようとしたところで、ミッドハイムが発言をかぶせて、サリアを黙らせる。

「そう、別の力なのですよ。“オモイノチカラ”を研究していた人物が見つけた、神に等しい力。貴女はそれが発現する要素を持って

いる。すなわち、“相手の心に干渉する力”！」

ミッドハイムの顔から、内面を包み隠すような、怪しい微笑が消え去り、代わりに、瞳孔を開いた状態の、狂気じみた笑みが広がっていく。サリアは、自分の背筋が冷えるのを感じた。

「私が若いときに見つけた、ある文献にその力は記されていました。著者は幾人かの“オモイノチカラ”の持ち主を対象に研究をしていたのですが、たった一つだけまったくの例外を持った力があつたそうです」

口調には、熱がこもっていた。ミッドハイムの部下たちも、聴き入っている。彼は、この空間を支配していた。

「他の“オモイノチカラ”は、それ自体が特殊であるものの、あくまで行使できる力は一つでした。私ならば、他人の心を読めるとかですね。しかし、かつて貴女の力を持っていた人間は、当てはまらなかった。もう一つ、別の力を使うことができたのですよ！」

身体を乗り出し、興奮気味に語る。穏やかな雰囲気は、欠片もない。

「……それが、正しいという証拠はあるんですか」

ミッドハイムが燃えれば燃えるほど、サリアは冷めていった。夢物語のようにしか聞こえないのだ。

「ええ、もちろん！ 言ったでしょう。“オモイノチカラ”を研究していた人間がいると。その人物が残した書物が確かに残っているのですよ。しかも、私の知っている力について正しい表記がなされていて、かつ考察もなされている。疑いようがありませんよ」

しかし、どうやらただの妄想ではないようだった。いったい、研究者は何者だったのだろうか。

「ああ、研究者について気になりますか。そういえば、まだはつきりと伝えていませんでしたね」

サリアの心を読んだのだろう。ミッドハイムが話題を本筋から一旦はずす。

「研究者の名前は、クロイツ＝ハイペリオン。貴女が生まれるずい

ぶん前に、亡くなった方です。あまり多くの研究資料は残っていませんでしたが、それでも、“オモイノチカラ”の持つ力を知るには充分でしたよ」

「クロイツ＝ヘイペリオン……」

どこか、引つかかる名前だった。記憶にはないはずなのに、心がざわつく。

「おや、聞き覚えがありませんかね。まあ、なくても本当のお父様から聞いたことがあるか、でなければ、おそらく貴女の魂が覚えているでしょう。なにしろ、貴女の先祖ですから」

サリアは目を見開いた。自身の先祖が自分の持つ能力の研究者とというのは、予想外だったのである。

「貴女の曾お爺様に当たるお方ですね。その時に貴女の力を持っていたのは、彼の妻であった、シャルリーナ＝ヘイペリオンです。そして、彼女こそが“オモイノチカラ”の中でも、さらに特別な力を持っていた」

冷静さを取り戻しかけていた口調が、再びおかしくなり始める。力の正体が、とうとう伝えられた。

「すなわち、“人を操る力”！ 他人の心干渉し、自分の意のままに、動かすことができる！ それも、同時に何人でも！ まさに、夢の力でしょう！ これを軍事活用できれば、戦わずにして勝てるに等しい！」

ミッドハイムの声だけが、建物内に響いていた。他には、何一つ聞こえない。演説のようだった。

だが、サリアは空気に吞まれずに、場を切り裂くかのごとく、言葉を放つ。

「そんなの、ただの妄想にすぎません！ 私には、そんな力はないです！」

事実だった。自分の先祖が研究者であろうが、人を操る力を持つていようが、今ここに立つサリアには、彼の求めている力はなかった。

「いいえ、ないわけではありません。貴女の力は、まだ目覚めていないだけです。シャルリーナも、声を直接心に響かせる能力は先天的に持っていましたが、操る力は後天的でした。つまり、いずれ貴女にも宿る力なのですよ！」

「後天的に……？」

「これもまた、耳を疑う話だった。どうして、サリアだけが、二つ目の能力を持つというのか。」

「そうです。貴女が元から持っている力は、あくまで下地にすぎない。本来の力は、そこから派生するのです」

「どうして、私の力だけなんですか。他人の心に干渉できるのは、貴方も同じはずです」

サリアの反論に、

「いいえ、まったく違います」

と、ミッドハイムは首を横に振った。

「私の力の場合、相手の心を読み取れるだけです。何か影響を及ぼせるわけではありません。言うなれば、閉じた箱の中を、外から見るだけできるだけです。しかし、貴女の場合は箱のフタを開けて中に別のものを入れることができます。これが、私と貴女の違いです。だからこそ、心を操る能力は貴女にしか芽生えない。箱の中身を、そっくりそのまま自分の用意したものと入れ替えられるわけです」

駆け足で、一気に言い切る。サリアには、いまいちピンとこなかつたが、決定的な違いらしい。

「貴女のお父さんも、研究を引き継いでいました。そして、特別な力を持つ貴女という娘をもうけた。当時から、軍事転用を考えていた私は、少将という立場を利用して貴女を手元に置こうとしたのですが、貴女のお父様は強情でした。どうしてもこちらに引き渡さうとしなかった。ですから、強攻策に出たのですが、母親と逃げられ、貴女は捕らえられなかった」

続いて彼が口にした昔話りに、サリアは強い反応を示す。今まで知ることなかった、自分の本当の家族のことであつたから。

「ご家族のことも、何も分かっていないのですか。可哀相な方だ」
ミッドハイムの口調は、気のないものだった。とても可哀相と思
っているようには感じられない。

「そうなるよ、母親も死んでいるようですね」

「母親、“も”……？」

サリアの頭に、その助詞が引つかかる。認めたくない推測が、あ
つという間に広がっていった。

「ええ。貴女のお父様の死体は、しっかり回収していますから。母
親は生きているかとも思っていたのですが、亡くなっているよう
ですね」

推測は、無情にも真実だった。かすかに抱いていた、本当の親と
会うという夢は、幻となる。

「貴方が、殺したんですか……？」

恐る恐る尋ねる。答えはおそらく決まっているのに、訊かずには、
いられなかった。

「とんでもない！ 私は殺すつもりはありませんでしたよ。ただ、
あまりに抵抗するならば、殺害もやむを得ないとは指示していま
したがね」

ミッドハイムが、意地の悪い笑みを浮かべる。悪意しか、感じら
れなかった。

「貴方は……！」

サリアは、前方の柵を両手で握りしめた。強く、強く。自分の本
当の両親を奪ったのは、この男なのだ。しかも、私利私欲のために。
「これはずいぶんとお怒りのようですね。しかし、貴女には何もで
きはしないでしよう。戦う力は、持っていないのですから」

睨みつけた相手は、せせら笑った。灯った怒りが、さらに燃え上
がり、大きくなる。海のごとく広い心を持つサリアですら、許すこ
とができなかった。

「でも、抗うことはできる！ もし私が本当に他人を操る力を手に
入れたとしても、貴方のためになんて使わない！ 貴方や、貴方の

配下を操って、逃げ出してみせる！」

「ほほう、いい考えだ。しかし、そう話はうまく行きません。他の“オモイノチカラ”と違って、操る力は、別の“オモイノチカラ”を持っている人間には効かないのですよ！ 貴女に抵抗の余地はないっ！！」

「なら、使わない！ そんな力は絶対に！ どれだけ脅されたとしても、貴方なんかには利用されてたまるもんか！」

「言ってくれますね、サリア＝ミユルフ！ ですが、貴女の力はどうあっても利用させてもらう！ 力づくでも！」

叫びの応酬になる。感情に任せ、互いにらしくない言い合いだった。

「どんなになっても、協力はしない！ それに、私は信じてる！ きつと、カリクが助けに来る！ 貴方から、私を解放するためにつ！！」

カリクへの絶対の信頼を、力強く口にしてみせた。ミッドハイムが、高らかに笑い声を上げる。

「ふっ、はは、あはははははははは！！ それはまた、どこのおとぎ話の主人公ですか！ カリク＝シールドというのは、ニック少将の息子さんでしょうに。この本部基地の戦力を知らないわけもない。助けになどきませんよ！ 仮にきたとしても、無駄死にするのが見えています！ 夢を見ているのは、私ではなく、貴女なのではないですかね」

「貴方は、なにも知らない！ カリクという人間を。カリクは、私を必ず助けに来る！ そう、約束したから……！！」

嘲笑われても、サリアの想いは揺るがない。幼い頃の、他愛ない子供っぽい約束。それでも、大切な約束だった。両手を絡ませ、祈るように想いのこもった言葉を心の中で爆発させる。

（カリク！）

瞬間、会場がざわついた。構わず、続ける。

（私はここだよ。ここにいますよ。助けに来て。約束したよね）

想いが、響く。強烈に、美しく。建物内全域に、そして、外にすら響き渡っていくようだった。

（『私が一人でいたら、助けに来る』って。カリク、私は信じてるから）

胸にある、大切な約束。力に乗せて、彼へと飛ばす。どこまでも響けばいい。彼以外の何人に聞かれようとも構わない。ただ、彼には絶対に届いて欲しかった。だから、心で叫ぶ。

（私を助けて、カリク。どれだ時間がかかってもいいから。私は耐えるから。いつまでも、待ち続けるから）

力の範囲は調節しない。いや、あまりにも想いが強烈なために、抑えることはできなかった。

（カリク……）

周りの音はもう、耳に入らなかった。

同じ空間に潜り込んでいたシルラは、壇上に立つ少女の力に、愕然とした。心に届いたどころか、もはや建物内、さらには壁や天井すら突き破ってしまったのではないかと思えるほど、彼女の心の声が響き渡ったためである。

「こんなことが……」

一度体験していて、かつ正体も分かっているのに、自分に起きている現象が信じられなかった。周囲の将校たちも、動揺を隠せていなかった。

ただ、サリアともう一人だけは、違った。

「はは、はははははははははは！ 素晴らしい！ なんと素晴らしい！」

ミッドハイムである。壊れたように笑い、天へ両手を開いた。高笑いを続けた後、手をおろして、サリアへ目を戻した。

「これだけの力！ やはり、貴女は、貴女の力は特別だ！ 驚嘆せざるをえない！」

当の少女は、両手を絡ませ、目を閉じ、想いを発し続けていた。

集中していて、ミッドハイムの声は届いていない。証拠に、シルラ

の心には、次から次へとサリアの感情が伝わってきていた。

「ガヌ中尉の任務失敗はともかく、ニック少将の動向は予想外でしたからね。だが、彼と今ぶつかることすらためらわせないほどの価値がある！」

一人で、盛り上がっていた。ある部分に、シルラは強い反応を示す。

「ガヌだと……」

どんな任務についていたかは知らないが、失敗したという話に、心がざわついた。あわよくば、少女を首都から逃がすときに、一緒に来てほしかったのに。生きているのかどうかすら分からない。

しかし、彼の安否確認に時間は避けない状況下になっていた。東部軍と戦うのなら、原因であるサリアの警備は厳重になるだろう。そうになると、首都から逃がすのは困難である。東部軍が来る前に、彼女を逃がすしかない。

「あの馬鹿が……」

ここにいない、同僚以上の存在である男に対しばやく、決断するしかなかった。

ガヌを待たずに、行動へ移ることを。

十三章 『死を冒流する者』

宿の一室にいたカリクとレインの“心”に、それが飛び込んできたのは、昼と夕方の間のことだった。

『カリク!』

「ん?」

仰向けになつて、ベッドに倒れ込んでいたレインが、顔を上げる。隣のベッドに腰かけうつむいていたカリクも、同じだった。

『私はここだよ。ここにいますよ。助けに来て。約束したよね。私が一人でいたら、助けに来るって。カリク、私は信じてるから』

「どうなってるんだ? 自分の内側から女の子の音がするぞ。もしかして、俺っちの女性的部分が覚醒して……」

「違う。ちよつと黙ってる」

見当違いも甚だしいレインを遮り、自分の中から聞こえる声に神経を集中する。

『私を助けて、カリク。どれだ時間がかかってもいいから。私は耐えるから。いつまでも、待ち続けるから』

間違はなく、サリアだった。今までに覚えがないほど、力強い想いに溢れている。レインも聞こえているあたり、おそらく最大限に力を解放しているのだろう。

『カリク……』

「呼んでる。俺のことを、呼んでる」

つぶやきながら、腰を上げる。大切な女の子に、これだけ請われて、動かないはずがなかった。

「あつ、おい、カリク! どこ行く気だ」

「決まってる。サリアのところだ」

「駄目だつて。今、飛び込んだつて、返り討ちにあつのが関の山だろ。シルラさんを信じろよ」

「あの人が信じられないわけじゃない。でも、サリアが俺に助けを

求めてる。これ以上、ここで待つ必要性はない。あいつの想いが、すべてだ」

必死に制止するレインの言葉を弾く。すると彼は、腕を掴んできた。さらに、逆の手にナイフを持つ。

「カリク君の気持ちも分かるけど、冷静さが足りない。意地でも行くって言うなら、こつちも本気で止めるぜ」

「……そりゃ、残念だ」

レインの腕を振りほどき、カリクは服の内側にあるホルスターから、銃を引き抜いた。距離を置いて、照準をレインに合わせる。

「……強情だねえ、本当に」

レインは、ほどこれた手にもナイフを持った。変わらない口調と対照的に、醸し出す雰囲気は、鋭くなる。

「一応、先に言っとく。今まで協力ありがとよ、レイン」

「いやいや、これからもよろしくってことで、感謝にはまだ早いぜ」互いに、タイミングを図る。気が抜けない状態だった。

ある気配を感じ取るまでは。

「……レイン、一旦、休戦でいいか」

「依存ないぜ、カリク君」

共に武器は下ろさずに、注目を部屋の入り口に移した。扉側に立つカリクが、入り口からは死角になる場所に移動して、呼びかける。

「鍵なら開いてるぞ。そんなに張り詰めた殺気出してないで、姿を見せたらどうだ」

すると、扉が勢いよく乱暴に開かれた。カリクは顔と左手をわずかに壁から出し、発砲する。

「問答無用だなあ、カリク君」

カリクより奥側で状況をうかがっているレインのつぶやきが聞こえたものの、気にせず、もう二発撃ち込む。

それから、ようやく相手をしっかりと見た。開放された入り口部分にいたのは、うなだれて顔の見えない人間だった。体格からすると、おそらく男。ただ、色々とおかしい。武器は持っていないし、

服装もポロシャツに短パンで、とても今、肌を感じている殺気とは結びつかない外見だった。さらに、銃弾が腹や腕に命中しているのにも関わらず、あまりに反応に乏しいのである。

「容赦ないな。シャツでもそうだったが、引き金を引くことに迷いが無い。たいしたもんだ」

と、低く重い声がした。しかも、聞き覚えのあるものだった。レインが、わざとらしく驚く。

「おおう、しゃべった」

「今、見えてる奴じゃないだろ。後ろに、他の奴がいる」

カリクが冷静に返す。シャツという単語で、すぐにある一人の男軍人が思い出された。

「あのときの奴か」

もう放棄されていたジーニアスの関連施設に潜り込んだ際に、出くわした人物だった。姿は見えないので、確信はできないのだが。

「あのときってことは、覚えていてくれたみたいだな。嬉しいかぎりだ。シャツでは、しっかり手合わせできなかったからな。今度は、全力でやらせてもらう」

言葉が途切れると同時に、うなだれていた男が顔を上げた。瞬間、
「なっ……！？」

信じられない光景が飛び込んできた。思わず、声を発する。レインの方からも、息を呑んだような音がした。

男の額に、弾痕があったのだ。いや、痕どころか、完全に穴が空いていた。肉や脳みそらしきものすら覗いている。だが、それは二の次の驚愕でしかない。一番ありえないのは、

「なんで、生きているんだ……？」

目の前で、その人間が動いていることだった。脳にまで弾が達しているなら、普通、即死は免れない。

「こ、これはまさか、リアルゾンビ!？」

「言ってる場合か！ 来るぞ！」

冗談なのか本気なのか分からないレインに言葉を返しながら、構

える。敵の目に生氣はない。本当に、ゾンビのようだった。

まず、レインがナイフを何個も投げつける。顔から下腹部にかけ、縦一列に刺さり赤い液体が零れるが、衝撃に少し動きを止めただけで、まったく苦しんでいない。すぐにまた、カリクたちの方へ近づき出す。

「はは。無駄だ。そいつは、どれだけ痛めつけても、壊れない。なんせ、もう壊れてるからな」

ゾンビ男の後ろから、笑い声上がる。

「あと、付け加えておくと、背中にも気をつけた方がいいぞ」
「何？」

男の忠告に、背筋が寒くなる。二人のいる部屋は、一階。つまり、
「レイン、後ろだ！」

敵は、後ろからも来る。自身は前方のゾンビ男から目を離さずに、
レインに指示を飛ばす。

「分かって、る……」
「どうした？」

知り切れになった返事に不安を覚え、カリクは横目で後ろを見た。
無意識に、息をのむ。

瞳の色を失った二人目のゾンビ男が、窓にへばりついていたので、正面から見て顔の右上部分、全体の四分の一ほどが、なかった。完全に、骨が見えていた。脳と、肉の断面も。

「ちよっ、ヤバイヤバイヤバイ。あれはヤバいつて！ さすがの俺
つちでも、見るに耐えなくて、泣きそうだよ！」

「気が合うな。俺もだ」

まだなんとか余裕を保ったが、相当にキツイ光景だった。顔の一部を失ったゾンビが、窓を砕き、中に入ってくる。

「ていうか、こいつらいつたいなんなんだ？ 武器は持ってないけど、まず間違いなく死人が動いてるぜ。それに、痛みとかは感じてないみたいだし」

「決まってる。あの軍人が、こういう能力なんだよ」

会話をしながら、お互い眼前のゾンビに攻撃を加える。しかし、効果は薄そうだった。カリクが舌打ちする。

「ご明察だ。この死体たちは、俺が操ってる。どっちも、さっき俺が殺したばかりの、この宿の従業員だ」

未だに部屋の外にいたのであるう、男の声がした。カリクの予測は当たっていたらしい。

「けっ。趣味の悪いこった。これも、“オモイノチカラ”の一種か」
「ええ、これも!？」

男よりも先に、レインが驚きの声を上げる。

「ほお。ジーニアスに潜り込んだだけあって、“力”の存在を知っているか。ますます、消さなければいけない理由が増えたな」

続けて、男の声が飛び込む。とても楽しそうだった。

「その通り。これも、“オモイノチカラ”の一種だ」

「へえー、で済まないぜ。ゾンビ製造に“オモイノチカラ”が使われるなんて、聞いたことないぞ」

ゾンビにナイフを放ちながら、レインが疑問を呈する。彼の知るサリアや軍王の“力”とは、かなり差があるため、無理もなかった。

「確かに、お前が知っているであろう軍王様の能力や、さっきの声なんかとは、一線を画したものだからな」

気づくと、カリクはかなりレインとの距離が縮まっていた。背中がぶつかるのも、時間の問題だった。

「そいつらは、死んで空っぽになった心の部分に、俺の心を侵入させることで、一時的に俺の身体の一部になるのさ。だから、死んでいても動ける。こっちからしたら、死んでるからこそ動かせるんだがな」

「うはー。そんなのありかよ。既に死んでるから、殺しても無駄とか、無敵じゃんか」

レインの嘆きが、もうすぐ近くから聞こえてきた。部屋の真ん中に、追い詰められつつある。

「そうだな、無敵だ。だから、お前らはもうあきらめろ。身体はリ

サイクルしてやる」

男の声は弾んでいた。ゾンビに任せて、自分は出てこないつもりらしい。

「仕方ないな」

カリクは、ため息を吐き、つぶやいた。レインと背中合わせになる。ゾンビから具体的な攻撃はまだ受けていなかったが、親切なものがくるとは、到底思えなかった。

「おいおい、どうするんだ、カリク君。背中がくっついちゃったぜ」「そんなもの、決まってる」

相棒から尋ねられたカリクは、迷わず答える。

「一旦、この部屋を出るぞ」

「まあ、そうなるか。了解だぜ」

二人はすぐさま行動に移る。まずカリクが、前方の敵から目を離し、後ろを向いた。レインが、微笑を浮かべる。

「ちよつと痛いことさせてもらうぜ、ゾンビ君」

その言葉を合図に、二人が同時に攻撃をしかけた。ナイフと銃弾が次々放たれ、敵をひるませる。相手が体勢を立て直す前に、カリクは懐へ踏み込み、

「死人をさらに痛みつける趣味はないが、どいてくれ」

銃を持った右手で、左頬を思いつき殴った。鈍い音が部屋にこだまし、無言のままゾンビが吹っ飛ぶ。割られた状態である窓への道が開けた。

「走れ！」

「あいあいさー」

叫びに応じたレインも、後ろに続く。窓枠を飛び越え、外に出た。眼前には扉があり、越えようとするれば、その間に背中を撃たれるのが濃厚だった。

「一度、別れるぞ」

「了解。で、どこで合流するんだ」

「明確には決めない。ここで、奴を潰すからな」

「……えっ？」

レインが、呆気にとられた顔をした。

「に、逃げるんじゃないの？」

「逃げてどうする。前のときと違って、今の奴は俺たちを殺すことを目的にしている。それに、俺は首都から離れる気はない。となれば、奴はここで片付けるしかないだろ。逃げて、追われるだけだからな」

「そりゃ、確かにそうだが……。勝機はあるのか。向こうは、ただでさえジーニアスで特殊訓練を受けてるのに、厄介な力まで持つてるんだぞ」

納得を示しつつも、レインは問題を口にした。確かに、彼の言うとおりだった。だが、引く気はない。

「勝機は、正直に言っ、はつきりとはない。見込みはあるってくらいだ。けど、ここで逃げてもいたちごっこになるだけだ。なんとかして、倒してしまった方が懸命だろ。つけ込む隙はある」

カリクが、自身の主張をしたところで、

「勝機なんてないと思うぞ、ガキども」

窓の内側から、男の声が聞こえた。二人とも後ろは振り向かず、「散るぞ！」

「あー、もう、仕方ねえ！ 腹くくってやる！ 俺が死んだら、首くくれよカリク君！」

カリクは右に、レインは左に、それぞれ逃れた。

獲物がいなくなった部屋で、ノーザンⅡジャッジは一人つぶやく。「ああ、面白くなってきたよ、父さん。ゆっくりゆっくり、追い詰めてあげようね」

部屋の外で、何かが蠢いた。

カリクは、裏口にたどり着いていた。ただし、そこから逃げていく気はない。勝手口のそばに腰を屈めて、銃を膝あたりで構える。耳を扉に当て、中の様子をうかがった。音がかすかにするが、遠い。少し開けて、今度は目で確認する。どうやら、倉庫のようだった。備品の入っているであろうダンボールや、火の燃料などが保管されている。息を殺しながら、内側へ滑り込んだ。さらに内部へと続く扉は一つしかない。構造上、おそらく廊下に通じていると、カリクは読んだ。

入ってきたのとは、反対側の扉に接近し、さっきと同じように、扉の向こう側の様子をうかがう。音が近くなってきた。鼓動は否が応でも激しくなるが、頭は冷静さを保つ。

（俺の逃げ出した方向からして、この辺りが無警戒ってことはないな。この扉の向こうに、何かしらはいるはずだ）

考察を終え、ノブに左手をかける。一度、息を吐き、一気に扉を押しした。

そこには、

「ふん。やっぱりか」

目の光を失い、人の形を成しただけの屍人形が待ちかまえていた。先ほどの頭が欠けていたものと違い、そこまで強烈な印象を与えてくる死体ではない。

ただ、腹部には致命傷になったのであろう痕を隠すようにして、ガーゼが貼られていた。

（わざわざ傷痕を隠して、どういっつもりだ）

疑問符が浮かんだのもつかの間、信じられないものが目に映った。鈍く光る、黒いそれは、間違いなく、拳銃だった。右手が持ち上がり、

「何っ!？」

カリクの額へ、照準を合わせてきた。咄嗟に、右へ逃れる。一瞬遅れて、銃声が轟いた。

（どうなってるんだ。なんで、武器を持っている?）

回避には成功したものの、いつも冷静なはずのカリクすら、動転していた。部屋を襲撃した二体は、素手だった。しかし、壁と扉を挟んだ反対側には、銃を持った個体がいる。

(元々、武器が使えるなら、どうしてさっきの奴らには持たせていなかったのが、分らない。ちっ。さっぱりだな)

頭の中で悪態をつき、理論よりも、遭遇した事象をどう乗り切るかに頭を切り替える。これを越さなければ、あの男軍人と戦うことすら叶わない。

(相手は、死ぬことのない存在だ。どう戦ったものかな)
壁に背を当て、考えを巡らせる。

「こりゃなんていうか、ついてないね」

カリクと別れ、正面玄関の方へと逃れてきたレインは、
「よう。すぐ会ったな」

一体のゾンビを連れた、男軍人本人と再び遭遇していた。ただし、今度は顔が見えている状態で。問答無用で、銃口を向けられる。まだ、玄関の扉の外にいたレインは、牽制で一本ナイフを放つと、敵の死角に逃げた。

「おいおい。そんなに必死こいて逃げられると、追うのが楽しくな
ってきまうぞ」

壁の向こうから、弾んだ声が聞こえてくる。冷や汗が出た。

(あの軍人に、ゾンビが一体か。カリク君、俺っちには、荷が重い
ぜ)

唇を舐め、唾を飲み込む。荷が重くても、やるしかなかった。

壁に背を当てていたカリクは、敵が扉をくぐって倉庫側にきたと

ところで、銃を持っている手を狙って発砲した。だが、寸前でずらされた。逆に、撃たれる。

「ふん、優秀な人形なことだ」

相手が引き金を引く前に回避を始めていたカリクは、余裕を持って避ける。

（しかし、随分と正確に動くもんだな。あそこまで綿密に操れるものなのか？ さっきの奴らは、そこまで細かい動きはできそうになかったが）

戦いながらも、思考は止めない。倉庫という地理を生かし、身を隠しながら攻撃のチャンスをうかがう。

（やっぱり、こいつは何か特別なんだろうな。逆に言えば、その特別な奴を倒せれば、絶対的な有利に立てるかもしれない）

その特別なゾンビは、キョロキョロと辺りを見回している。

（視力なんてあるのか？）

物陰からの光景に、単純な疑問を抱く。視力もないであろう死者が、見回す必要はあるのか。

と、ゾンビがこちらに気づき、銃を撃ち込みながら突進してきた。身を隠し、カリクも銃だけを陰から出し、狙いはつけずに何発か放って応戦する。何度も銃声がこだました。

（ジリ賃だな。打開策を立てないと）

相手は、死者である。殺すのは不可能だった。

（どうすればいい……）

拳銃での応戦の中、悩む。そこかしらに穴が空いて、備品も灯りの燃料も、零れ放題だった。

（どうすれば……）

玄関では、レインと男軍人が交戦していた。しかもゾンビがいるため、一対一ではなく、一対二である。

「おらおら。頑張らないと、三人目が来るぞ」

しかも、敵の軍人の言葉からすると、まだゾンビがいるようだった。

「いやいや、さすがにそれはきつついなあ。今の二対二で許してくれよ」

「俺が、それを聞き入れるような善人だと思っつか」

「聞き入れてくれたら、ギャップで惚れるかも」

「なら、余計に受け入れられないな」

「実に、正常な判断なことって」

軽口を叩き合っているが、この間、互いに銃弾とナイフをどれだけ放ちあったか分からない。どちらも、余裕があるように振る舞っていた。

「それより、そろそろ本気できたらどうだ。気づいているだろう。自分が壁際に追い込まれてることに」

だが、実際のところレインは不利に立たされていた。ゾンビは直接的な攻撃しかしてこないものの、男の銃撃と合わせると、厄介だった。そのせいで、背中が壁にかなり近くなっている。

「ああ、俺っち、壁際好きだからな。落ち着くんだ」

「強がり。ジーニアスの出身で、軟禁生活の経験があるなら、狭い場所は嫌いだらう」

レインの言葉を一笑に伏し、男は続ける。

「死にゆくお前に、遺言のチャンスをやろう。何か言いたいことはあるか」

「んー？ 別にないぜ。まだまだ、これからがあるからな」

「……まだ現状が理解できていないか。いいだらう。遺言は、なしだ」

銃口がレインを捉えてきた。瞬時にナイフを放る。

横一列に。

「面倒なことを……」

敵がつぶやきながら、自分に向かってくるナイフを撃ち落とす。

その隙に、

「くつらえー!!」

レインは両手にナイフを構え、飛びかかった。男にではなく、ゾンビの方へ。カ一杯、両肩へ一本ずつ刺した。ドロリとした赤い液体が、溢れ出す。

「へえ。そつちを狙うか。何体いるかも分からないのに」

男からの嘲笑が聞こえたが、今はゾンビの方に気の重きを置く。表情に変化がないので、効いているのかどうか分からなかった。

「コツコツやっていけば、成果は出るさ。学校で教わらなかったか」
ナイフを引き抜き、距離をとる。赤い飛沫が、壁と床、それからレインの身体にかかった。

「いいや。生憎、普通の学校には通ったことがなくてな」

「ああ、そうだったな。失礼したぜ」

ゾンビの男の腕はダラリと下げられたまま、動かない。だが、レインに襲いかかってくることは変わらない。駆け寄ってきた。ナイフを投げつつ、男からの銃撃を警戒し、位置をずらそうと、後ろへ飛び退こうとしたが、

「あだっ」

背中が壁に当たった。瞬間、全身の血が冷える。

「やば」

「ああ、そうだ。人を殺す方法なら、教わったな」

銃声がこだました。

一方カリクは、生きていないという特殊な敵を前に、突破口を見いだせずにいた。首を飛ばしても、止まるかどうか疑わしい。向こうの動きの遅さを利用し、出し抜いて操り主の男を先に倒そうかとも考えたが、その前にこのゾンビに追いつかれるのが確実のため、廃案にした。

ゆえに、今の戦況は膠着している。決定打は出ず、ただカリクの持ち弾が減るばかりだった。

漏れ出た燃料に足が入り、パシヤリという音がたつ。物陰に隠れているカリクは、まだいい案を出せずにいた。

（さつき銃声がしたことから鑑みるに、たぶんレインがあの男と交戦してるんだろう。そう簡単にはくたばらないだろうが、早めに加勢に行かないと、地力の差が出て負けちまう。ちっ、こいつさえ、なんとかできれば……）

息を殺しながら、辺りを見回す。足下には、流れ出ている油、眼前にはカリクの入ってきた勝手口があった。

（油、勝手口……。油？）

動く死体を止める方法が、カリクの頭の中に急速に組み上がっていく。

（これなら、死体を“殺せる”！）

すぐさま行動に移った。まず、勝手口の鍵をかけ、ドアノブだけを撃って吹き飛ばす。音に反応したのか、カリクの右の方から走ってくる足音がした。

（ここで、なんととしても銃を落とさせないと）

今度は逃げ出さずに待ち受ける。目的は一つ。相手の銃を奪うか破壊するかだった。

食料の積んである陰から、人の形をしたものが覗く。身体の前に構えられている銃も共に。

「あんまり時間はかけないぞ」

返答は、なかった。

（先手必勝！）

相手がカリクに照準を合わせる前に、攻撃をしかける。放たれた弾丸は、確実に敵の銃を捉えていたが、またもほんの少しずらされた。狙っていた場所ではなく、手首にめり込んでいく。

「肉を切らせて骨を断つ……じゃないな。なんて言えばいいんだ？ 肉を切らせて、骨は切らせないみたいないな感じか」

一人でつぶやき、敵の反撃を受けつけずにさらに攻める。だが、ことごとく狙いははずれた。自然に舌打ちが出る。

「やっぱり、動きが他と違うな」

そのうちに弾がきれ、空薬莖をすべて下に捨てた。新しい弾を込めたいところだが、敵が反攻に移ってくる。さっきのカリクの攻撃をそのまま真似したかのような、連射が襲いかかってきた。

「おっと」

身を翻し、物陰に入る。向こうと違い、こちらは弾が一発でも当たれば、致命傷になりかねない。その部分の差は、大きかった。

だがらといって、あきらめるつもりはなかった。手段はすでにあるのだ。

あとは、銃を飛ばすだけ。その一手が、遠い。

向こうは、カリクの姿がなければ弾も替えることができるのか、明らかに銃の最大弾数を越えていた。

（弾切れは狙えないか。どれくらい持っているか分からないから、時間がかかる。やっぱり、手から落とさせるしかないな）

壁を背に、銃撃をやり過ぎす。どうにか、武器を奪いたかった。

「策を実行するために、別の作戦が必要になるなんてな。皮肉な話だ」

一人、愚痴る。手元の銃を見つめ、息を吐いた。

「二発で決められるといいんだがな」

攻撃が止み、静寂が場を包む。だが、耳を澄ませると、かすかに弾を入れているらしき音が聞こえてきた。しばらくして、弾倉を戻した音が響く。と同時に、カリクは飛び出した。無表情な人形が、驚くことなく、素早く銃口を向けてくる。引き金に、指がかかった。勝負所は、まさに今。敵が発砲しようとしているこの瞬間が、狙いだった。

カリクは、相手の発砲にタイミングと軌道を合わせた。ほぼ同時に出た二つの弾丸は、旋回しながら互いにぶつかった。カリクが、「狙ってぶつからせた」のだ。空中で衝突し、パァンと、爆発音が

響く。これは、布石だった。

(チエック！)

頭の中にチエス用語が浮かんだときには、もう二発目を撃っていた。敵の銃撃による反動、自分の方の反動、角度、速度、すべてを読み切つて放たれた弾は、正確に、相手の持つていた銃に当たり、吹き飛ばした。床に、黒い凶器が転がる。

続けてのカリクの動きは、早かった。すぐさま接近し、ゾンビの顔を思いっきり殴つて、左にどけた。床に転がる銃を回収すると、そのまま、宿の廊下へと出る扉まで走つた。半開きにしてから、倉庫側のドアノブを吹き飛ばす。準備は、これですべてだった。

近くの照明を強引にはずし、中で燃える火を、油の広がる倉庫の床へと落とした。

「チエックメイトだ」

伝わりはしないだろうと思いつつ、冷徹に告げる。扉を閉め、廊下へと去つた。

取り残されたゾンビは、燃え盛る炎の中、走り回つて出口を探した。まず、カリクの出でいった廊下への扉。鍵がかかっているばかりか、こちら側のドアノブが吹き飛ばされている。さらには、銃も奪われたため、こじ開けることもできない。

次に、勝手口に戻る。こちらも扉は同じようになっていた。結論として、一人でこの場から脱出する方法はなかった。

炎がどんどん広がり、辺りを包んでいく。色のない目が、周囲を見回す。そこにあるのは、絶望なのか、それとも何も無いのか。

ゆっくりと、廊下へつながらる扉へと歩いていった。

少し、時間は戻る。カリクの耳に入った銃声は、男からレインに撃たれたものだった。

「あつぶねー」

ただ、その弾は身体には届かず、顔の前に出されたナイフによって、軌道を変えられていた。髪と頭皮をかすったようで、かすかに血が見えた。

「ずいぶん、反応がいいな。ジーニアス出身は厄介なもんだ」

「へっ。あんたも一緒だけどな」

「違ういな」

決定的な場面を一度逃しても、男の余裕は崩れなかった。

と、男が眉をひそめた。ゾンビも、動きを止める。

「どうしたよ、浮かない顔して。家の鍵閉めたか、心配になったか」

「まあ、そんなところだ」

はぐらかしてきたが、明らかに様子がおかしかった。

(ひよっとしなくても、チャンスだな)

「なににせよ、こっちに集中しないと、危ないぜ」

「言ってくれるもんだ。そもそも、こっちに集中しきっていない」

ナイフを両手に二本ずつ構えたレインへ、男は微笑を消して応える。

「早めに片づけさせてもらおう」

「急ぐなら協力するぜ。俺っちの勝ちにしてくれるなら」

「ぬかせ」

再び、刃物と銃器の応酬が始まる。ゾンビも、また動き出した。

「ああ、面倒なこった。やっぱり、せめてこいつは止めてくれよ」

ゾンビの額にナイフを放つも、無意味に終わりばやく。

「嫌なら、自分でなんとかするんだな。生憎、俺はそんなに優しくない」

「そんなんじゃ、周りに嫌われちまうぜ」

「問題ない」

言葉の応酬も再開されるが、男の歯切れがどうにも悪い。銃撃も、精度が落ちていた。

そんな最中、急に男が声を上げた。

「なんだと!?!」

「えっ、何が?」

突然の言葉に、レインはゾンビを蹴り飛ばしながら反応した。しかし、向こうは聞いていない。

「くそっ。こそこそ動いていると思えば、そういうことか。あのガキ…………!」

男が、歯ぎしりする。攻撃の手が止まるほどの何かが起きているようだった。

「くそっ!」

呆気にとられていると、急に彼はレインを無視して、走り出した。「あっ、おい」

レインも後を追おうとしたが、ゾンビがその前に立ちふさがった。それも、先ほどまで戦っていたのとは、別の個体。後ろには、頭にナイフが刺さったままのゾンビも健在している。

「おいおい。チャンスなのに、素直に攻めさせてくれないのかよ。嫌だねえ」

ナイフを構え直し、目を据わらせた。

「お前らじゃ、力不足だ。速攻でやるぜ」

軽い口調で宣言すると、唇を舌で舐めた。獲物を前にした、獣のよう。

ノーザン＝ジャッジは、走っていた。ただ、一途に。小規模な宿の中なので、なんてことのない距離のはずなのに、目指す場所は異様に遠く感じた。

(ちくしょう。もう少し、早く気づいていれば…………!)

後悔は、なんの役にも立たない。分かっているが、浮かんでくる言葉を抑えることはできなかった。

(まだ間に合う。間に合うんだ)

自分に言い聞かせるが、その希望を砕くかのごとく、二丁の銃を持った一人の少年が立ちふさがる。

「そんなに急いでどうかしたか。人形遊びは、そろそろ卒業した方がいいと思うが」

名前もまだ分かっていない、目つき鋭い少年。まだ、“殺し”を知らない目をした少年。そんな、甘い人間が、今、自分を焦らせている。

「舐めるなよ、人を殺したこともないガキがあー!!」

「悪かったな。でも安心しろ。ここで、お前は殺してやる」

軍人であり、ジーニアスで特殊訓練を受け、さらには普通の人間が持たない能力を有したノーザンを前にしても、まったく揺らぐことなく、二本の足でどっしと構えている。とても、普通の子供とは思えなかった。

「お前、いったい何者だ」

「人に名前を尋ねるときは、自分から名乗るんだな。まあ、名乗られても、こっちは教える気なんてないが」

煙に巻くような返しだった。本当に、何者か見当がつかない。右手の銃を、指でくるくると回した。

「言葉は充分だろ。俺は、レインほど多弁じゃないんだ」

しっかりと掴み、こちらへと向け直す。

「おもちゃ遊びをしたいなら、片付けることを片付けてからにするんだな」

「そうさせてもらう。後悔するなよ、ガキ!」

ノーザンも、銃を構える。

(父さんは、助ける!)

歪んだ想いを、軸にして。

一対一で、男と対するのは、カリクは初めてだった。表には出さないが、胸がざわついている。

二人がいるのは、廊下である。銃撃を妨げるような障害物は見当

たらない。身を隠すなら、近くの部屋に飛び込む他なかった。ただ、目の前の軍人がそれを許すかどうかは、定かでないが。

距離は、二歩踏み込んで拳が届くくらいだった。

無言が続く。出方をお互いに図っていた。

先に動いたのは、男の方だった。膠着を破る銃声が響いた。

睨み合いの構図は変わらない。ただ、二人の間の床に、二つの銃弾が落ちていた。男が引き金を引くのとほぼ同時に、カリクも同じ動作をしていたのだ。

両方、言葉は発さずに、次の動きへ移る。カリクはは駆け出し、距離を詰めようとした。だが、男は手近な部屋に入り、接近を拒む。逃すまいと、後を追ったが、部屋の前でカリクは急ブレーキをかけた。目の前を、銃弾が飛んだ。すかさず、腕だけを伸ばし、部屋の内側へと発砲する。すぐに戻した。直後にまた攻撃がきたため、命中しなかったらしい。

（決め手に欠けるな）

相手に焦りがあるにも関わらず、攻めきることができない。地力差が効いていた。

（もう一つ、要素がいる。もう一つだけ）

壁際で息を潜めていると、急に黒の物体が眼前に現れた。

「っ！？」

声にならない声と共に、反射的にひざを折る。すぐ後に、後方で着弾音が聞こえた。

カウンターを狙い、はみ出ている黒い銃へ攻撃を仕掛ける。しかし、よけられた。

（印象と違って、ちまちま攻撃してきやがるな。面倒臭い）

乾いた唇を舐め、警戒を続ける。ふと、廊下の奥を見ると、灰色の煙が漏れていた。

「まずいな。ここも、そのうち燃えるか」

火元は間違いなく、カリクの発火した倉庫だった。だんだんと燃え広がっているらしい。

死体でも、焼いて骨にしてしまえば、操ることは不可能と読んだ結果だった。戦っている相手の様子からして、正しい判断なのは、明らかである。

問題は、戦闘が長引くところも火の手に包まれてしまうことだった。

「おい、お前。焼死と銃で殺されるのと、どっちがいい？」

カリクは、その声をかけると、立ち上がり、二丁の銃を構え直した。時間をかけるのは、無理そうだった。

「必要ない選択だな。お前が死ぬの一択だ、ガキ」

余裕の感じられない、殺意に満ちた返答がきた。向こうは元々、時間をかける気はないはずであるため、短期決戦は確実だった。

「数十年先の話だな。まだ、そんな選択肢はない」

カリクは、相手の言葉を簡単にいなし、大きく息を吐く。心の準備も整った。

「あんまり時間はかけない。行くぞ」

「勘違いするな。攻めるのは、俺だ」

言葉と共に、男は部屋から身体を出し、カリクの眼前へと現れた。即座に、銃口が向いてくる。すぐに反応し、身体を軌道上からはずす。反撃の隙なく、続けざまに弾が放たれてきた。必死に右へ左へ避ける。

「この距離で、そんだけ避けれるなんてな。お前、人間か？」

男から話を振られたが、さすがに答える余裕がない。とにかく、動きを止めずにやり過ごす。

と、連発が止まった。

「ちっ。弾切れか」

男が悪態をつく。しかし、カリクは“騙されない”。

「そういう簡単にバレる嘘はやめとけ。後一発、残ってるだろ」

「銃そのものにも明るいか。厄介なもんだな」

男は忌々しそうに顔を歪め、最後の一発を放ってくる。それも、なんとか横っ飛びでかわした。

(普通に攻めても、意味がないな。どうするか)

自分の攻撃の機会が回ってきたものの、ただ普通に撃っても弾を無駄にするだけである。どう攻めるかが問題だった。

だが、考えるまでもなく、強力な攻め手が、左側にある開いた部屋への入り口から“見えた”。

(いけるな)

勝利への確信を持ったところで、二つの銃口を男に向けた。

「終わりだ」

一言だけ告げ、連射し出す。次から次へと、弾が飛ぶ。最初のうち、男は先ほどのカリクのように軽快に避けていたが、二丁は敵しかなかったらしく、

「ちっ」

舌打ちをして、先ほどのように部屋へ転がり込んだ。今度は躊躇なく、カリクも踏み込む。

男は部屋の奥の死角へ逃げた。カリクの視界から消える。さらに追い、角から出ると、急に目の前が白くなった。

「なっ」

男がシーツを投げたのだ。ひるんでいるところに、

「おら！」

蹴りが腹部へと飛んできた。壁に叩きつけられ、「かはっ」と息が漏れる。

「銃だけが、殺し合いじゃねーんだよ！」

追撃を察知し、カリクは入り口側へ転がった。さっきまでいたところに、また足が伸びていた。攻撃後の膠着を狙い、両手の銃から一発ずつ放つがかわされてしまう。

「後、一発つてところか。充填させないとして、肉弾戦になったら、お前は何分持つかな」

男が自身の優位を確信し、笑みを浮かべる。言葉に、余裕が戻っていた。

しかし、カリクはむしろ笑い返してみせた。

「何がおかしい」

「俺の弾数は確かに一発だ。でも、攻撃手段は一つだなんて言うてない」

「なんだと?」

男が顔をしかめた瞬間、ガラスの割れる音がし、続けてドスツという、鈍い音がした。聞こえたのは、彼の後方からである。

「がっ……?」

苦しげに息を漏らし、後ろを向く。彼の後頭部や背中など、複数の箇所にナイフが刺さっていた。黒の軍服がために、あまり目立っていないが、血が流れ出ている。

「なんだと……」

呻く。カリクからも、攻撃した人間が見えた。窓を叩き割って、室内に入ってきたのは、

「駄目だぜ、戦闘中に油断しちゃ。後ろから、刃物が飛んでくるかもしれないからな」

レインだった。廊下にいたとき、部屋の窓越しに彼をカリクは視認していたのである。

「レインだと……。馬鹿な、どうやって、あの二人分の死体をやり過ぎした?」

後頭部への一撃がキツいのか、男はゆっくりと壁にもたれた。徐々に身体が沈み出す。

「簡単さ。両手にナイフぶっ刺して、壁に磔にしてきたんだよ。ナイフを四本も使っちゃったけどな」

レインが部屋に入り、足元でガラスの破片を踏みながら、こちらに近づいてきた。

「なるほどな……。確かに、油断した」

男が、力なく笑う。少しずつ、床に赤い血が滴り出す。

「この状況で、二対一か。さすがに活路が見えない。父さんももう、半分以上焼けてしまっているみたいだしな」

「父さん?」

レインが首をかしげる。答えたのは、カリクだった。

「俺が戦ったゾンビのことだろう。他の奴とは、動きが全然違った。父親の死体だったのか」

「そういうことだ。ジーニアスの研究者だった父さんに殺されかけたことがあってな、返り討ちにした。ずっと父さんが嫌いだったが、自分で操れるようになって、やっと愛情を持てるようになったよ」

男は、息荒く語る。

「父さんだけは、精密に操ってたのに、まさか燃やされるとは思わなかった」

「そうかい」

カリクは興味なさげに流した。男との戦いは、もう終わっているのだ。サリアのところへ急ぎたかった。銃口を、男の額に向ける。

「最初の一人だ」

と、男が突然、そう口にした。意味が分からず、カリクは眉をひそめる。

「一人殺せば、その時点でお前はもう“こっち側”の人間だ。普通の奴とは、一線を画す」

警句だった。親切なのか、単なる気まぐれなのかは、判断がつかない。

「カリク君、早く！　なんか、煙ってる！」

レインが叫ぶ。部屋の外に、煙が見えていた。

「……俺は」

挑発的に微笑む男に、カリクは告げる。

「サリアを助けるためなら、どれだけ手を汚しても構わない」

決着の銃声が、轟いた。

十四章『誰もが誰かのために』

裁判所のような場所でのやりとりの後、サリアはまた地下に戻されていた。道中では例によって目隠しをされていたものの、耳から入る騒ぎから、東部軍が、カリクの父であるニツクを先頭にし、首都に攻めてくるというのは本当らしかった。

（私のため、なのかな）

ベッドの上で体育座りをしながら、考える。助かりたいとは思いますが、自分のために誰かが傷つくのはいい気分ではなかった。

（私は、何もできない）

カリクをただ待つだけの自分が、ひどく情けなく思えた。うずくまっていると、扉の外が騒がしくなった。

「で、ですが中尉。ここ以上に安全なところなど、今は首都にはありませんよ。ヘタに動くよりは、留まった方が……」

「私もそう申し上げた。だが、よほどあの子は重要らしい。どうしても、首都から一旦離せとのご命令だ」

「どちらも聞いたことのある声だった。一方は、外にいるのである。う見張りの男性軍人のもので、もう一方は、」

「とにかく、見張りはいい。戦闘準備をしておけ」

「十中八九、シルラ・マルノルフのもだった、はっ」

一人分の走り去る音がした後、扉が開かれた。内側にいた女性軍人が立ち上がり、入ってきた金髪の女性に敬礼する。やはり、シルラだった。

「話は、聞こえていたか」

「ところどころですが、大部分は。彼女をここから逃がすというのは、本当なのですか」

「ああ。軍王様直々の命令だ。貴女も、ここを離れて、支度をしてきなさい。そのうちに、戦いになる」

「はつ。それでは、この子のことは、よろしくお願いします」

「ああ」

女性軍人は頭を下げると、部屋を後にした。残ったのは、サリアとシルラである。

「さて、行くぞ。サリア」

「行くつて、どこにですか」

尋ねると、シルラは顔を近づけ、耳元で囁いた。

「他の街に貴女を逃げす。貴女の幼なじみにも伝えてくれ。軍本部裏口で待つと」

「逃がすつて、そんなこと……」

「声大きい。外にいる人間に知られると面倒だ」

驚きから思わず声を上げると、口を手で塞がれた。目を見てきた彼女に、サリアはうなずいてみせる。解放されたところで、今度は静かに言い直した。

「シルラさんは、それでいいんですか」

「構わない。前にも言っただろう。軍を離れることには、抵抗はない」

「そうじゃありません」

サリアが気にかけているのは、そこではなかった。

「ガヌさんは……！」

明らかに、シルラの顔色が変わった。

「ガヌさんのことはいいんですか。まだ、伝えてないんですよね。待たなくて、いいんですか」

言葉を、絞り出す。シルラにとって大切な人物のことだった。

「ここから離れてしまっていていいんですか。安否も分からないですけど、首都に残れば、何か掴めるかもしれないのに」

必死に訴えると、シルラが頭に手を乗せてきた。

「気にかからないと言えば嘘になるが、今は貴女を逃がす方が優先だ。奴を探すのは、逃げてからでもできる。だが、貴女を逃がすには今しかない」

彼女は、気丈にも笑っていた。ただし、とても寂しげに。

「シルラさん……」

痛ましさを感じ、目の前の女性の名前を呼ぶ。

「そんな顔をするな。私は自分のやりたいようにしているだけだ。貴女が気に病む必要はない」

つらい心境であるはずの彼女から、励まされてしまう。サリアは、唇を嚙んだ。

「とにかく、今は貴女を逃がすことを優先する。行くぞ、サリア」

自分の手を握った女性に、逆らえそうになかった。だから、ただ一言伝える。

「ありがとうございます」

「……ああ」

か細い声だったが、彼女の耳には届いた。手を引かれ、地下室を出る。目隠しは、しなかった。

「攻めるなら、一極集中した方がいいと思います。首都は、全面が壁に覆われている分、横や後ろからの攻撃は仕掛けてきづらいたはずですから。ただ、中に踏み込む時機を誤ると、あつという間に囲まれます」

「ふん。まあ、そんなとこだらうな。だいたい俺の見解と一緒だ。

ありがとうございます、ガ又中尉」

「いえ、お役に立てず、すみません」

ニツクの言葉に、ガ又は頭を軽く下げた。

ニツク率いる東部軍は、首都まで残りわずかの距離まできていた。道中の街で味方を増やし、さらに行軍の列は長くなっている。

ガ又は一応のところ、警戒されているため見張りをつけられているが、ニツクと同じ軍用車に乗っていた。ニツクは助手席で、ガ又は後部座席である。

「気にするな。元々、期待していない」

「……手厳しいですね」

遠慮も容赦もない言葉に、硬い表情で応える。息子以上に強烈だった。

「それにしても、さつきから、落ち着かないな。何か、気にかかることでもあるのか」

続けて、そう問われた。

「……そんなに落ち着いてないですかね」

「ああ。視線はあちこちに飛んでるし、たびたび貧乏揺すりしてる。それで落ち着いているんなら、辞書の内容を変えないといけねえよ」

無意識に、不安と焦りが外に出ていたらしい。

「“奴”のことが、心配か」

「半分は、それです。でも、もう半分は別の奴です」

一人の少年と、一人の同僚を思い浮かべる。

「人質扱いだっていう、同期か。まあ、お前にはそれ以上の存在なんだろうが」

ニツクがいたずらっぽく微笑む。だが、ガ又は口元を緩めることができない。

「重傷だな、これは。余裕を持ってなんて言わないが、周りが見えなくなるよ、死ぬぞ」

若くしてどれだけの修羅場をくぐってきたのかしれない男の言葉は、重く響いた。

「……分かってますよ」

うつむき加減で返す。

(助ける。助けてみせる)

とある二人のために、ガ又は心の準備をしていた。

煙の立ち込める拳銃を下ろし、息のない、自身が初めて殺した男

を、カリクは見下ろした。額に、黒い穴が見える。おそらく、即死だろう。

立ちすくむカリクを現実に取り戻したのは、

「大丈夫か、カリク君」

右肩に置かれたレインの右手だった。目を閉じ、肩の力を抜く。

「ああ、大丈夫だ。急いで出よう。丸焼きになっちまう」

「同意だな。じゃあ、行こうぜカリク君」

レインが肩から手を離し、窓から外へ出た。カリクも続く。宿の正面口の方へ向かった。

外の通りに出ると、異様に静かだった。まず、人の姿がない。消防隊が駆けつけてくる気配もなかった。二人の後ろの建物は、もくと煙を吐いているのだが。

「なんだこりゃ。集団引きこもりか」

レインが軽口を叩いた。静寂に言葉が飲み込まれていく。

「ある種、合ってるんじゃないか？ たぶん、避難指示なんかで、どっか一カ所に集められたんだろ」

「おっ、首都暮らしてもないのに、詳しいね、カリク君。たぶん、それで正解だ」

「……軍人の息子だからな。知識はある程度持つてる」

「なるほど。じゃあ、もちろん、どんなときに一切に避難するかも分かるわけか」

「ああ。大きな災害か、そうでなければ……」

一度、言葉を切って、首都の外壁を見やる。

「戦いだ」

冷静に、口にした。

「ご名答。まあ、何と戦うのかは、よく分からないけど」

「いや、ある程度の想像はつく」

両手を天秤のように上げるレインに、カリクは首を横に振った。

「首都まで、他国がなんの前触れなしに攻め込むことはまずないとすると、国内の何かが攻めてくることになる」

「国内の何か？」

レインが手を下げ、カリクを見る。うなずいてみせた。

「クーデターってやつさ。憶測にすぎないが、一番現実的だろう」

「誰がやるんだ、そんなこと？ 相手はあの軍王だぞ。無謀じゃないか？」

「やりそうな奴を、一人だけ知ってる」

「誰だ？」

問われ、頭の中に浮かんだ人間を答える。

「俺の父親の、ニツク＝シエードだ」

カリクの出した名前を聞いて、レインは「ひゅー」と口笛を吹いた。

「ニツクかあ。カリク君の親父さんだったか。そういえば、あっちもシエードだったな。ぶつとんだことするね」

「確証はないけどな」

ただ、その可能性は高いと踏んでいた。他に、首都に攻めそうな人間がいなかったのである。

「とにかく、俺たちも移動しないと。この場に残っても、どうしようもない」

「けど、どこ行くんだ。行くあてがないぞ」

レインの問いかけへの答えは、タイミングよくカリクの心へと降り注いだ。

『カリク！ 本部基地の裏口に来て！ シルラさんが車を出してくれるらしいの。急いで！』

大切な幼なじみの少女からの呼びかけだった。

「本部基地の裏口……」

「ああ？」

「今、サリアからの声が聞こえた。本部基地の裏口だ。そこに、昨日の女軍人が、車を回してくるらしい」

「昨日の今日で？ 展開が急すぎないか」

「それだけ、状況が変わったってことだ。考えるよりも、動くぞ」

レインの疑問を流し、カリクは駆け出した。

「あつ、おい、カリク君！」

止める声に耳を貸さず、ただサリアの元を目指す。
日がだんだん傾きだしていた。

サリアはシルラに手を引かれ、早歩きで基地内を通り過ぎていく。どこもかしこも、ただならぬ雰囲気だった。銃を手入れしていたり、首都の地図を広げてにらめっこしたりしている。

「なんか、怖いです」

「戦いだからな。しかも身内とだ。否が応でも、重々しい空気になるものだ」

足を止めることなく、応える。戦いの準備をしているのは、好都合だった。二人に関心を向ける人間が、いなかったのである。

「車までは、まだ距離がある。気を抜くなよ」

そういう彼女の手は、汗ばんでいた。

外観を見ていなかったとはいえ、基地内はサリアの想像以上に広く、なかなか駐車場にはたどり着かなかった。

「あと少しだ」

と、シルラが告げた。前を見ると、外の光と、駐車場の地面が見えた。そのまま、外に飛び出す。一台の車を指差した。

「あれに乗るぞ」

黒の軍用車だった。シルラは迷いなく、走って近寄り、扉に手をかける。

そのとき、サリアは悪寒を覚えた。咄嗟に叫ぶ。

「ダメ！」

シルラの身体を強引に引っ張った。同時に、扉の隙間から剣が飛び出てきた。

「なっ……」

体勢を直したシルラが息を呑む。

「おや、鋭いですね。シルラ中尉にも分からないくらい、気配は消していたのですが」

扉が開き、穏やかな声が聞こえてきた。二人ともが知る、一番聞きたくないかつたものである。

「とはいえ、さして運命が変わるわけでもない。多少、思い出に浸る余裕はできますが」

“軍王”クラカルⅡエルⅡミッドハイムであった。両手に細身の長剣を握っている。

「なぜ、軍王様がこちらに」

右手で銃をホルスターから抜きながら、シルラが尋ねた。必死に動揺を抑えているように見えた。

「私以外に対しても警戒をするべきだったのですよ、シルラ中尉。

この本部基地に、私の味方がどれだけいると思っっているのですか」

「なるほど……。先に、私の動向を探る指示を出していたわけですか」

シルラの口調は、苦々しげだった。サリアも、思い当たる節がある。

（あの見張りの人たちかな。シルラさんが地下に来るたび、部屋から離れるように指示していたけど、扉のすぐそばに張り付いてたとか）

シルラも同じ考えだったようで、

「私の指示には、従った振りをしていただけか。強い権力が存在すると、部下すら下手に信用できんな。嘆かわしいかぎりだ」

自嘲気味に笑った。軍王と向き合い、サリアを庇うような形で立つ。

「だが、私が私を裏切ることはない。私の信を、通させてもらおう」
声を張り、堂々と宣言する。先ほどまでの弱気は、なりを潜めていた。

「そうですか。なら、貴女の信は、貴女の思う以上にあっさりと折

れることになると思いますよ」

「言ってくれるものだ。せめて、相手が貴方でなければ、まだ笑えたものを」

銃を構え、対峙する。カミの見えるシルラに対し、ミッドハイムはかなり余裕があった。剣を二本とも、地面に向けたままなのである。

「これは申し訳ない。他の者に任せるのは、嫌だったもので。貴女を始末するだけなら、ジーニアス上がりの人間でも可能ですが、サリア＝ミュルフに怪我を負わせずになると、勝手が違いますからね。それに……」

ただ立っているだけなのに、すべてを飲み込んでいく。風も空気も、命も、何もかも。空間を、存在するだけで支配していた。

「そろそろ身体を動かしておいた方がいいですからね。ニック＝シエードとの戦いもありますし」

右手側の剣を、軽く払う。それだけで、二人を圧倒した。

「窮鼠は猫を噛みますが、獅子は噛めない。貴女たちに、勝機はありません」

柔和に告げる。しかし、口調とは裏腹に、醸し出す殺意は、鋭かった。

「準備運動くらいには協力しなさい、シルラ中尉」

獰猛たる頂点が、二人に牙を向く。

太陽が真っ赤に燃えだしてきた頃、ニックたちはついに首都の門前の状況を、はっきりと視界に捉えた。

「へえ。門は閉めて、軍勢を外に出すか」

ニックの言ったとおり、門は堅く閉ざされ、そこを護るように、兵たちが横に長く待ち構えていた。

「あれは捨て駒みたいなものだな。こっちが中に入る前に、少いで

も戦力を削るうって腹積もりだ。さすが、兵を人間と思っていない軍王なことだな。合理性に特化してる」

ただでさえ、戦力はニツクたちの方が少ない。にもかかわらず、街の中へ入る前に戦力を削られるのは痛手だった。

「マルク、剣借りるぞ。あと、ちよつと速度抑える。それから、車の真ん中辺りに、身体出すなよ」

ニツクは、席の脇に置かれていた運転している部下の剣を手に取り、車の扉を開けた。

「なつ、ちよつと、ニツク少将!？」

ガ又を含めた車内の人間が呆気にとられるのを横目に、車外に出る。ボンネットの上へと乗った。しゃがんだ体制から、剣を刺し、支えにして立ち上がる。後続の兵士たちがざわついた。

「全軍聞けー!！」

だが、ニツクの一声で静まった。すべての視線が集まる。

「これから、俺たちはこの国のトップに戦いを仕掛けることになる! しかも多勢に無勢だ! 勝ち目があるかも分からない! 多くの仲間の犠牲も生むだろう! それを悲しむ暇すら、おそらく許されない!」

声を張り、語りかける。動く車の上でも、揺らぐず全軍を見渡す。「だが、俺は勝つ気でいる! 自身の野望のために、子供を使って人体実験をしたり、関係のない子供を誘拐するような奴を、俺は許せん!！」

力強く叫んだ。目を据える。心には、目を疑うようなジーニアスの実験資料と、誘拐された娘に等しい少女の存在があった。

「俺の個人的な感情ではあるが、ミッドハイムのやり方には納得がいかない! これは、あくまで俺個人の思想に基づいている! だから、もし同意できなければ、無理に戦う必要はない! それでもお前等は、俺についてきてくれるか!！」

問いかけると、雄叫びが返ってきた。思わず、頬が緩む。

「いい返事だ! 戦いはもうすぐに始まる! 無理なこととは言わな

い！ただ、できるかぎり死ぬな！お前等の未来を護れ！！」
「「おおー！！」」

先ほどのを超える、空気すら揺るがすほどの声が響き渡った。頼もしさを感じながら、剣を抜いて、車内へ戻る。運転手の部下に話しかけられた。

「いきなり何かと思ったら、演説でしたか。相変わらず、力強いですね」

「言いたいことを言っただけだ。同意してくれるお前等がすごいのだ」

部下の褒め言葉を簡単に流し、逆に賞賛を送る。

「わざとですか、少将？どちらにせよ、我々は貴方のそういう部分が好きなのですがね」

部下は微笑を浮かべ、落としていた速度を戻した。

「ふん。物好きな奴らだよ、お前らは」

まんざらでもなさそうに、ニックはシートに体重をかける。すると、後部座席のガヌが前屈みになり、話しかけてきた。

「少将、類は友を呼ぶって、知ってますか」

「馬鹿にするなよ、ガヌ中尉。とっくの昔に、その単語は思いついた」

「そうですね。なら、別にいいです」

彼は苦笑しながら、姿勢を直した。ニックも、ガラス越しに見える戦場へと視線を戻す。

「マルク」

「今更、止めやしませんよ。『先陣は俺がきる』でしょう？まったく、いの一に斬り込む將軍なんて、ニック少将くらいだと思いますよ」

「分かってるなら、それでいい」

「ただし、一つだけ守ってください」

「なんだ」

「貴方も、死なないでください」

「愚問だな」

銃を取り出し、弾を込めていく。戦場が、どんどん近づいていた。「死ぬなど言った俺が、死ぬわけないだろ」

自信満々に、言い切った。

カリクとレインは、急いで本部基地の裏口を目指していた。ただ、軍人には会わないように注意を払っている。住民が避難しているのに、子供が二人、外を出歩いているのは不自然なためである。

「にしても、本部の周りが少し手薄すぎないか？ こっちが警戒しているとはいえ、見かけるあまりにも兵の数が少ないと思うんだが」建物の影を利用しながら進む中、カリクが疑問を口にした。レインが、こともなげに答える。

「まあ、まずは門を落とされることが一番だからな。不利になれば退いてくるだろうけど、最初は向こうに人員を割いているんだと思うぜ」

「なるほどな」

納得を示し、前を行くレインに合わせ、曲がり角の部分で立ち止まる。レインが壁に背をつけ、先をうかがった。

「やっと裏口だぜ、カリク君。ただ、どうにもおかしいな」

「何がだ」

「他の兵がいる上に、それらしい車が見当たらない。どう見ても、砲台とかがついてるやつしか止まってないんだよ」

彼の言葉に耳を疑い、カリクは彼の後ろから、顔を出した。確かに、兵士たちが多く立っているばかりか、逃走に使いそうな車が見えなかった。

「どうなってるんだ？」

「さあてね。あんまり、いい回答は用意できないぜ、カリク君」

それは、カリクも同じだった。頭上がる考えは、畏であるとか、

逃走が何者かにバレたとかである。

「なににせよ、これじゃあどうしようもないな」

二人して身体を引っ込め、レインが手詰まりを口にする。そこで、カリクの心に“声”が届いた。

『助けて、カリク！』

サリアからの呼びかけだった。

「待った。サリアの“声”だ」

「おっ、本当か」

吉報とばかりに、レインが期待の目を向けてくる。しかし、カリクに届いた情報は、悪報だった。

『“軍王”に見つかったの！ このままじゃ、シルラさんが……、シルラさんが、死んじゃう！』

その言葉の意味に、背筋が凍りついた。

「カリク君、幼なじみちゃん、なんだって？」

あからさまな様子の変化に、レインも顔色を変える。不安げだった。

「サリアとあの女軍人が、軍王に見つかったらしい」

「お……、おいおい、まじかよ」

大声で言いそうになったのをぐっと堪え、音量を抑えて尋ねてきた。彼に対し、首を縦に下ろす。

「なんで、軍王自ら出てくるんだ？ 戦いの直前だぞ。指揮官が他所で身内と戦ってるなんて、信じられないぜ」

レインが口にした問いに答えるのは、容易だった。

「サリアが、すべての鍵を握ってるからだろう。それこそ、トップとして戦いに備えるよりも優先順位が高くなるくらいに」

軍王にとっては、なによりもサリアなのだ。ゆえに、自ら確保に出てきたのである。

「場所はどこだ」

レインに訊かれたが、すぐには返せない。サリアから、情報がきていないのだ。

「カリク！」

「分かつてる！ でも、サリアから場所が伝えられてこないんだ！」
(サリア。場所だ。場所を言ってくれ)

求めていたピースは、やや遅れて、簡潔に響いた。まるで、カリクの問いが、聞こえたかのような返答だった。

『駐車場！』

サリアのいる、基地内の駐車場では、

「なかなかやりますね。私相手に、急所を避け続けられるとは」
「くっ……」

軍王を前に、シルラが圧倒的な劣勢に立たされていた。軍服のあちこちが斬られており、血がにじみ出ている。致命傷はかろうじて負っていないものの、長引けば血が足りなくなるのが予測できた。

サリアは、戦いに巻き込まれないようにと、シルラの後方で縮こまって戦いを見ていた。

(素人目でも分かるくらい、力量が違いすぎる……)

客観的には、勝ち目が見いだせない。軍王は、動きが早すぎた。

「私の能力はご存知ですよ、シルラ中尉。今のところ、貴女が助かっているのは、貴女の咄嗟の回避は、反射で行っているからです。もし、考えながらしていたら、既に斬られているでしょう」

その要因の一つが、軍王の“オモイノチカラ”だった。彼の場合、敵の動きを予測もなにもなく、考えを知ることができるため、確実に対峙した相手の動きに対応できてしまうのだ。

(カリク、早く来て……)

必死に力で声を送る。そうしている間にも、戦いは繰り広げられていた。

ミッドハイムの能力の特性上、シルラが先に仕掛けても簡単によけられてしまう。なので、彼女は最大限に回避に集中し、反射的な

カウンターを狙う戦法をとっていた。だが、今のところ、かすりすらしていない。逆に、回避へ神経を使っているにも関わらず、彼女の方は、傷が増えていた。

「まだまだ遅いですが、ついてこれているだけでも立派ですね。やはり貴女は優秀だ。ここで斬り捨てるのが、惜しくなってしまいます」

ミッドハイムが剣を振り、刀身についた血を軽く払う。シルラは、息を乱しながらも、

「なら、斬り捨てなければいいだろうに。まあ、慈悲をもらっても、貴殿の下にはもう戻らないだろうが」

強気に切り返した。サリアからは、表情が見えなかった。

「でしょうね。だから私は、ここで貴女を捨てる。思い通りにならない駒を、わざわざとっておく必要はないですからね」

「道理だな」

二人が、また構え直す。空気が、張り詰めた。

サリアが、ミッドハイムの踏み出しに気づいたときには、もう彼はシルラのすぐ前にいた。右手の剣を、左から右へと払う。シルラは、寸前でかわしたが、微量の血が飛んだところを見るに、やはり完全には回避できなかったようだった。

「この……」

続けて左手の剣を下から襲わせようとしていたミッドハイムに、シルラが銃弾を放つ。だが、楽々とかわされ、敵の顔の横を通り過ぎた。

「遅いですよ。反射的な発砲でも、銃の動きを見ていれば、心にはつきりと狙いが出なくとも、避けるのはたやすい」

「っ！」

剣が、下から迫った。

「危ない！」

サリアは、思わず叫んだ。軌道から察するに、銃を持っている右腕が狙われていた。

「正解ですが、遅い！」

シルラも同じ結論にたどり着いていたのか、ミッドハイムがその声を上げた。

しかし、一回の銃声を挟んだ後、彼女の腕はちゃんと身体と繋がっていた。代わりに、地面でゴロゴロと後ろに転がっている。銃の反動を利用して、強引に後ろへの力を作ったのである。

「いい反応ですね、本当に。ただ、戦いの判断としては間違いです。隙だらけですよ！」

体勢を立て直そうとするシルラに、刃が振り下ろされる。

「シルラさん！」

サリアが叫んだ、そのとき、一発の銃声が響き渡り、軍王が横に自ら飛ぶ。

「どなたか存じませんが、シルラ中尉ごと撃ち抜く勢いですね」

振り向き、後ろにいた人間へそう言った。

「背丈の高いあんたのいかれた脳味噌狙いなら、後ろの人間には当たりやしねえよ」

サリアにとって、最も聞き慣れた声だった。その名前を叫ぶ。

「カリク！」

待ちわび続けた、彼女だけのヒーローが、遂に来てくれたのである。

十五章 『開戦』

本部基地内の駐車場で、カリクはついにサリアと再会した。しかし、喜ぶ余裕はない。銃口が向く先に、すべての元凶たる実力者がいるためである。

「カリク……。なるほど、貴方がカリク」シールドですか。首都に
いることはサリアの心を読んで知っていましたが、よくまあ、こ
こまで来たものですね」

その軍王ミッドハイムは、カリクへ微笑を向けてきた。ただ、目
はまったく笑っておらず、纏う雰囲気も、柔和な口調とは相反して、
鋭く痛々しい。肌に刺さるようだった。

「誰かさんが、俺の大事なものを持っていたからな。取り返しにき
たんだよ」

しかし、カリクはひるむことなく強気な言葉を放つ。こちらはこ
ちらで、有り余る敵意を隠していないため、かなり刺々しい空気だ
った。

「それはなんとも申し訳ありませんね。事前に申し上げても、承諾
は取れそうになかったものですから」

「違うない。誰も許さなかっただろうさ」

言葉が交わされれば交わされるほどに、空気が張り詰める。カリ
クは、一瞬たりとも気を抜けなかった。

「しかし、どうやってここに。サリア」ミュルフの能力なら、場所
を伝えるくらいは造作ないにしても、基地への入り口には兵をあら
かじめ配置しておいたはずですが」

「ああ、いたな。気にしなくても、ちゃんと仕事はしてると思うぞ。
もう一人の方を相手にな」

相手の問いに、すらすらと答える。カリクが詳細を口にするより
も早く、

「ほお。もう一人とは、レインのことですか。ジーニアスに侵入し

たのは、彼と貴方というわけですね」

ミッドハイムは心を読んできたのか、事情を的確に言い当ててきた。初めてその能力を直に目の当たりにし、眉根を寄せる。

「それが、あんたの“オモイノチカラ”か」

「ええ、そうです。実物を見ても信じられない気持ちはお察ししますが」

「……なかなか、趣味の悪い能力だ」

心底、嫌そうな声を出す。だが、ミッドハイムの態度に変化はない。

「頂点には、汚さも必要ですからね。そのあたりは、貴方も合格点でしょう。いくつかの法を、踏み倒してきたのですか？」

「答える義理はない。わざわざ言うことでもない」

気味の悪い笑みとともに投げかけられた問いを、突っぱねる。まともに受け答える気はなかった。

「あんたは、ここで殺す」

幼なじみの前でも、カリクは宣言をためらわなかった。野望に生きる眼前の男を、生かしておくわけにはいかなかった。サリアに、平穏を取り戻すためにも。

空気が、張り詰める。心臓の音が強く聞こえ、呼吸すら楽にできなかった。

「かかってきたらどうです。カリク＝シールド」

対照的に、ミッドハイムには余裕すら感じられた。自分の実力への、おごりではない自信が見える。

「こないのならば、こちらから行きますよ」

トツと、軽い踏み出し音がカリクの耳に届いた頃には、既にミッドハイムは間合いに踏み込んできていた。

「早っ……!!」

横へ払われた剣を、どうにかバックステップで避ける。剣筋は、かるうじて捉えられる程度だった。続けて突きが腹部目掛けて飛んできたため、半身に身体をひねって回避した。そこで、ようやく一

発、胸部を狙って銃弾を放つ。だが、最初に払った剣がその軌道に合わされ、弾かれた。

（おいおい。心が読めるとはいえ、こつも正確に防御できるもんなのか）

「驚いていますが、私にとっては、軽いものです。この地位に登り詰められたのは、何も能力があつただけではないのですよ」

剣越しに、鋭い眼光が覗く。口元は微笑んでいるものの、その眼光はまったく笑っていない。多くの戦場を駆け抜けた経験は、伊達ではなさそうだった。

「そりゃ、ごもつともだな。だが、全盛期じゃないだろ。おまけに、二対一だ。そう簡単にはやられたりはしない」

だが、カリクにはためらいも恐怖もなかった。目の前の敵を倒さなければ、大切な人を連れて帰れない。ただ、それだけのことだった。

「確かに、貴方の言うとおりだ、カリク「シールド」

そして、カリクの二対一の発言に呼応し、シルラが武器を構え直す。

「なにより、勝たなければならぬからな」

わずかに口角を上げ、堂々と言い放った。ミッドハイムは、彼女の方を見ることなく、

「本人を目の前にして、ずいぶん自信満々に言ってくれるものですね」

やや首を上げ、目を閉じた。再び開いたとき、一気に空気の重さが増した。

「気が変わりました。確かに私は、全盛期ではありませんが、貴方たちごときに負けるほど、まだ衰えていません。本当は、ゆっくりと準備運動するつもりだったのですがね」

溢れる殺意が空気に乗り、それだけで傷を追ってしまいそうだった。敵の状態に滅多に影響されないカリクですら、背に寒気を感じたほどだった。

同時に、遠くから、街の中心に位置する中央基地にいるカリクたちにも届くほどの、大きな声の塊が上がった。その雄叫びが示すのは、すなわち開戦。

「向こうも始まったようですね。ニック「シールドも貴方も、ここです」と片づけますよ」

夕日によつて、剣がオレンジに煌めく。反射した光に、カリクは目を細めたが、標的から離すことはしない。

「二つ目の銃も出さない。私に、心的攻防は無意味です」
「せっかくなんでおいてやったのに、物好きなもんだ」

ミッドハイムに言われ、素直に宿の男から奪った銃を出す。使う弾が一緒だったので、持ち出してきていた。

「おや、その銃は……。それに、貴方の心での発言……。まさか、ノーザン准尉のものですか」

「ノーザンだと？」
彼の出した名前に、カリクではなく、シルラが反応する。

「誰だつていいだろ。もうあいつは倒した。今の戦いに関係がない」
「なるほど。死体を操る能力……。やはり、ノーザンは敗れたようですね」

流そうとしたカリクを無視し、ミッドハイムが確信する。カリクには確かめようがなかったが、宿で退けた男は、ノーザンというようだった。

「奴を、倒しただと」
驚愕を顔に出すシルラの後ろで、サリアは首をかしげていた。

「だからどうした。俺のやることに変わりはない」
「……でしょうね。ですが、私には弔い合戦の意味合いが生まれま

す」
「人は駒くらいにしか思つてないお前が、何言ってるんだ」

ミッドハイムの言葉を、カリクは真に受けない。この評は、父譲りだった。

「確かに、駒です。ですが、ノーザンは大事な“実験対象”でした。

他の駒とは、価値が違う。償ってもらいますよ、その命を持って」「言うが早いか、ミッドハイムが先に仕掛けてきた。右手の銃を発砲するが、ひらりとかわされる。

「読めてますよ、貴方たちの考えていることは」

それどころか、“シルラ”が同時に放っていた弾すら、背中に回した剣の腹で防いでいた。

「ちっ！」

「遅い！」

カリクは左手の拳銃の引き金に指をかけたが、そのときにはもう剣が振り下ろさていた。

「カリクーっ！！！」

サリアの叫び声を耳にしながら、カリクは大きく目を開けて、視界に飛び散る赤い液を見つめた。遅れて、右腕の肩口に熱を覚えた。

首都セルゲンティス、東大門。閉ざされているこの門の前が、今まさに戦場となっていた。怒号と、銃声と、金属音が、あちこちに響いている。

先陣を切ったのは、ニック・シェード。砲車や戦車に臆することなく、門の開閉システムのある詰め所に突っ込むという、おおよそ指揮官とは思えない、破天荒な幕開けをしたのだった。

続けて、東部軍が門前の兵たちが浮き足立っているところに突進し、形成は圧倒的に東部軍有利だった。

「ったく。いくら上官とはいえ、言わせてもらいますよ。あんた、馬鹿だろ、マジで！」

攻め来る兵士に鉛弾を撃ち込みながら、ガヌが声を上げた。場所は、車を突っ込ませた、門横の詰め所である。

「今更だな、ガヌ中尉。俺は元から馬鹿だ。それに、俺は提案しただけで、実行はしていない」

飄々と応えたのは、張本人であるニックだった。こちらも、迫り来る敵へ銃を撃ち込んでいた。

時間を少し、遡る。特攻をニックが判断したのは、もう敵兵が目前になったときだった。

「……マルク」

「なんででしょうか」

「このまま、向こうのデカブツを避けて、詰め所に突っ込めるか？
この彼の問いに、名前を呼ばれた部下よりも先に、後部座席のガ
又が反応した。

「何言ってるんですか！？ そんなこと、できるわけ……」

「ご命令とあらば」

「……えっ」

言葉を遮ってきた運転手の返答に、耳を疑った。

「じゃあ、頼む。先陣は、俺じゃなくて、お前だ」

「了解！」

二人の間で、やり取りが終了する。ガ又と、隣に座っていた別の
ニックの部下は、顔色を変えた。

「ちよつと、待つ……」

「しつかり、つかまっててくださいよ！」

運転席がギアを変え、一気にアクセルを踏み込む。目が据わって
いた。

一気にスピードを上げた車両は、飛んでくる銃弾がフロントガラ
スを割ってくるのにもひるまず、敵軍に突っ込んだ。敵兵の叫び声
が、ガラス越しにすら聞こえてくる。かなり、混乱していた。

さらに、ニックが助手席側の窓を開けて、拳銃を乱射しているの
も、混乱に拍車をかけていた。

頼んだ本人すら、驚嘆したのだが、

「うまいもんだな。これだけのスピードを出してるのに、こうもぶつからないもんか」

部下のハンドルさばきはそうとうのものだった。戦車や砲車の間を、うまいこと抜けていくのだ。

「どうも。それより、もう突っ込みますよ」

礼もそこそこに、その部下が告げた。正面には、すでに詰め所が見えていた。

「よし、行け」

「了解！」

「うわあああああ！！」

後部座席の二名の叫びと共に、車は詰め所の窓、壁へ大胆に突っ込んだのであった。

「あんなこと、普通は命令しないし、受けもしないですよ。普段、どんな指示出しててるんですか」

自分の乗っている車が壁に向かっていくという、恐ろしい光景の回想を終え、怒りの感情を込めた問いを投げた。だが、ニックは、「さあてな。そんなことはいちいち覚えてない」

真顔のまま、はぐらかした。

「……もういいです」

ガ又は、ため息をついた。

「少将！」

そこへ、突っ込んだ張本人である部下が駆け込んできた。

「装置を起動させました！ 門、開きます！」

「よし。いい調子だ。車に戻るぞ」

ニックは報告を受け、満足げにうなずいた。ガ又は対照的に、苦い表情を浮かべる。

「あの、ボロボロのに戻る気ですか？」

「他にどうするんだ」

返ってきた言葉に、

「……なんでもないです」

軽いため息を交えて、肩を落とした。先に向かうニツクの後を追い、車へ乗り込む。運転手ではない方の部下には、残留して本隊に戻るよう指示していた。それを受け、部下は混乱に陥った戦場を、縫うようにして戻っていく。

「それで、どこを目指すんですか？」

ガナが乗り込んだところで、車を後退させながら、運転手の部下がニツクへと尋ねた。問われた指揮官は、力を込めて、目的地を告げる。

「本部基地だ」

一瞬、沈黙が流れた。

「……本気ですか」

問いかけたのは、ガナである。主戦場はここにあるというのに、責任者が離れてしまっていないのか。

「本気だ。俺はついてきてくれた奴らの力量を信頼しているが、そもそも多勢に無勢だ。どれだけ楽観しても、勝ち目はほとんどないなら、頭を取る方が早いだろ」

「それは確かに、そうですね」

理解は示しつつも、難色を示す。現場の士気への不安があった。階級は中尉といえど、知識はある。

「問題ない。ここに来た連中なら、俺がいなくらいで、混乱したりはしねえよ。それに……」

既に車は、門の内側を目指して前進し始めている。窓はあちこち割れているが、走るぶんに支障はなさそうだった。

「俺の目的は、戦いに勝つことじゃない。サリアを助けて、軍王を倒すことだ。戦っている奴らには申し訳ないが、最悪、戦いには負けても、この二つが達成できればいい」

言っている間に、スピードを増していく。飛び交う銃弾にもひる

まず、真っ直ぐに本部基地へと向かっていた。

「……そうですか」

ガ又は、それっきり口を閉ざした。だが、ニツクは続しゃべるのをやめない。

「だが、勝ちもあきらめちゃいない。むしろ、絶対勝てると思ってる。不可能だと思つたら、そこで終わりだからな。できるかぎり、犠牲は少なくして、俺自身も死なない。それが、俺の理想だ。信念と言つてもいい」

上に立つ人間としては、青くさい言葉だった。しかし、彼には一片の迷いもない。

（まず、信じないと始まらないってところか。これが、この人の“強さ”……）

内心、ガ又は感嘆する。改めて、助手席の男は、普通ではないことを認識し直した。

「さあ、行くとしますか。」

その青くさい上官が、弾倉をすべて埋め、元に戻す。内側で待機していた部隊が、門が開いたことで、なだれ込んで来たが、

「止まるな、蹴散らせ！」

強引に、突っ込んだ。

「ほお、剣筋をギリギリ捉えましたか。トルマ殿の孫だけのことはある。斬り落とす気でいったのですが」

剣の血を軽く払い、口元をわずかに緩める。ただし、上辺だけのものだった。

「カリク！」

サリアが、再び名前を呼ぶ。カリクは、苦悶の表情を浮かべ、右肩を銃越しに押さえていた。

完全には斬り落とされていないものの、横幅の四分の一は斬られ

ていた。強く押さえたところで、真つ赤な血の勢いは変わらない。服と地面を、赤く染めていく。右手で銃を握っているのも厳しかった。

(この程度……！)

それでも、歯を食いしばって耐える。失いかける意識をつなぎ止め、軍王を睨みつける。

「あまり我慢はしない方がいいですよ。激痛で、立ってるのもやっ
とでしょう」

「いや、おかげでやっと思が覚めた。ただ、ちょっと目覚ましには
過激すぎるけどな」

ミッドハイムの言葉に、カリクは軽口を返す。強がり以外のなに
ものでもないが、踏ん張らなければならなかった。

(ここで倒れるとか、あり得ないだろ)

右肩から手を離し、二丁の銃を握りしめ、構え直す。

「昼寝は、終わりだ」

「なら、今度はもっとよく眠れるようにしてあげましょう。次はも
う、起きれないでしょうが」

相手も体勢を作り直し、腰を落とした。いつでも踏み出せるよう
に、体重をやや前にかけている。後ろにいるシルラへは、さほど注
意を払っていない。

(あの女軍人の攻撃は、簡単に避けれるっていうことか)

ミッドハイムの態度を、そう解釈し、カリクは身構える。

(傲りだ、ミッドハイム)

「傲りではありません。ただの、事実です」
「抜かせ」

相手の能力を気にせず、カリクは先手を取った。一発ずつ、左右
の武器で撃ち込む。

「当たりませんね」

ミッドハイムは正面からの弾を避け、さらにはシルラが放ってい
た弾も剣で防ぐ。だが、カリクは手を緩めない。シルラも続いた。

（踏み込ませなければ、射程でこっちが有利。なら、とにかく押してやる！）

連射に、さすがのミッドハイムも、反撃の隙を見いだせないようだった。防御と回避に徹している。ただ、有利ではない。間違いなく、弾切れを待っていた。

まもなく、ガチン、と音がした。カリクの右手の銃が、弾切れになったのである。シルラからの銃撃も、止まってしまった。残るは、カリクの左手にある一発だけだった。

「それも、さっさと撃ってしまえばどうですか。他の策がないことも、私にははつきり分かってしまいますし」

万事休すだった。普通に弾を込めていては、まず確実に斬られる。決断を、迫られていた。

「……貴方はもう少し、頭のいい人間かと思ったのですがね。見込み違いでしたか」

カリクの出した結論を読んだのだろう、ミッドハイムは呆れた口調とともに、肩をすくめた。

「好きに言ってる。俺にとっては、“これ”が今、最良の判断だ」
相手の反応を受けても、決心は変わらなかった。弾の切れた、片方の銃をしまい、代わりに、懐からナイフを取り出す。左手に持った。

「ナイフ……？」

シルラが顔をしかめた。

「おい、あんた。シルラさんだったか」

「そうだが……」

「あんた、弾倉代えるのに、何秒かかる？」

「十五秒はかかるな」

「十秒やる。それで、済ませてくれ」

当たり前のように言い放ったのだが、シルラはすんなりと応じなかった。

「何を言っている、貴様は。相手を考える。そんなナイフでは、十

秒も持たんぞ」

「持たせる。信じる」

カリクは応じなかった。有無を言わせず、構える。

「今から、十秒だ」

「ああ、もう、仕方ない。死ぬなよ！」

強引にスタートを宣言すると、シルラもあきらめ、装填を始めた。
「はっ！」

相手の能力を知りながらも、先にカリクは踏み込んだ。ナイフを刺しにいく形で、重心を前に置いた。右手にある銃は、常にミッドハイムに合わせる。

だが、向こうがわずかに下がったことで、攻撃は届かなかった。

「今度こそ、腕をもらいますよ」

伸びきった左手を狙われる。鈍い剣の光が見えた。

しかし、振り下ろされるよりも早く、カリクは最後の一発を撃ち込んだ。迷いはない。先んじて攻撃を読んでいたのである。ミッドハイムは、軽く身をかわした。そこで止まることなく、そのまま回転し、カリクへ突っ込む。

「終わりです！」

この国のトップからの死刑宣告は、回避のしようがなかった。本来ならば。

（耐える！）

左上から降ってきた剣を、ナイフで受け止める。ワテンポ遅らされて、横から飛んできた斬撃は、直前に“持ち替えていたナイフ”で、受け止めた。さらに、連撃がくる。上下から、左右から。突きもあった。わずか数秒の間である。完全には対応しきれず、生傷を多くもらったものの、致命傷には至らないものだけだった。しかし、そう長くは保ちそうになかった。

（装填、急げ……！）

心の中で、そう思ったのと同じだった。弾倉を銃に戻す、『カシヤン』という音がした。続けて、発砲音が響く。ミッドハイムには

命中しなかったが、重要なのは、そちらではない。

「よくもまあ、軍王を相手に、保ったものだ」

シルラが、間に合ったのである。

(よし。これで……)

「これで、また優位に立てるとでも？ 勘違いも甚だしい」

ところが、ミッドハイムは想定外の行動をしてきた。再び、連撃を仕掛けてきたのだ。それも、シルラの銃の軌道上に、自分とカリクが並ぶように。

シルラが、「なっ……」と、息を呑んだ。

(なるほどな。狙われている自分と俺を、同一の軌道上にすることで、銃弾を避けるだけで俺に弾が届くように位置取るつもりか)

先ほどまでは、シルラの位置からならば、カリクとミッドハイムは一直線上にいなかった。ゆえに、シルラは躊躇なく引き金を引けた。しかし、今は重なってしまっている。サリアを庇いながらなために、撃ち場所を変えにくいのも、不利に拍車をかけていた。

五秒でも厳しい剣撃が、容赦なく次々飛んでくる。致命傷を負うまでに、時間はかからなさそうだった。

「くそっ」

悪態をついた直後、下から振り上げられた剣によって、カリクは体勢を崩した。正面がから空きになる。

(しまっ……)

ミッドハイムの刃が迫る。

「カリクっ！」

そこに、今までなかった少年の声がした。直後、ミッドハイムの踏み込みを防ぐように、戦っている二人の間をナイフが飛んだ。カリクが両手に持っているものとは、別のものだった。狙いどおり、ミッドハイムは踏み込みを止める。

「なぜ、貴方までもがここに？ 門の兵士たちは、どうしたのですか」

シルラからの銃弾を軽く避けながら、ミッドハイムが姿を現した

少年に問う。声には、あからさまな不快感がこもっていた。

「ああ、気になるなら、確かめてくるといいぜ。あと、戦車を配備するなら、同じ場所に対重量装備もあった方がいい。戦車を敵にのっつけられたときに困るみたいだからな」

「これはこれは。貴重な意見をどうも。検討しておきましょう」

返答に、さらに眉間のシワを増やす。微笑を崩していない分、機嫌の悪さがさらに際立った。

この間に、カリクは軍王から距離をとり、弾の装填を済ませた。再び、両手に銃を持つ。

「そうした方がいいぜ。見返りに、金一封渡してくれてもいいところだ」

少年は、二本のナイフを右手の指に挟み、不敵に笑った。

「金一封は、都合上渡せませんね。その代わり、太刀を浴びせるくらいなら、いくらでもあげますよ」

ミッドハイムも、笑い返す。剣の切っ先で、軽く地面を傷つけた。「いやあ、それはあんまりにもサービスが過ぎて、傷み入るぜ。金一封が無理なら、あんたの命でもいいね」

「なるほど。ただ、釣り合うものがないと、差し出せませんね」

「へえ、例えば」

「世界、ですかね」

さらにと言いつつ。レインは、苦笑いを浮かべた。

「それはちよつと、用意できないな。死後の世界なら、いざなつてやれないこともないけど」

「そこには、まだ用がありませんね。遠慮願います」

軽いやりとりに反して、空気はどんどん重くなる。

「レイン」

カリクが、声をかけた。レインはミッドハイムから目を離さず、声だけを返す。

「なんだ、カリク君。生憎、右肩を治すのは無理だぜ」

「そんなことは頼まねえよ」

冗談に呆れつつ、確認したいことを口にする。

「今、門の方は敵がいなくて判断していいのか」

「たぶん。ただ、無線は途切れてるし、基地の中からも目視できるから、絶対ではないかなー」

「なるほどな」

左手で銃を遊ばせ、考えを巡らせる。軍王を討ち取ることを第一にするか、それとも。

「また、そんな考えを。貴方には、采配のセンスが欠落しているようですな」

間合いを計っているミッドハイムに嘲笑われたが、気に留めない。何を勝利とするかの違いだった。ゆえに、判断を下す。

「シルラ。あんた、サリアを連れてここから逃げろ」

「なっ、いきなり何を言っているのだ、貴方は」

突然の撤退を投げられ、シルラは目を見開いた。

「優先度の問題だ。最優先は、サリアの救出。あとは、二番目以降だ。となれば、首都から脱出しやすいあんたにサリアを連れ出してもらおうのが、一番理にかなってるだろ」

カリクの口調は淡々としていたが、同時に強い意志の強さもあつた。

「それはそうかもしれないが、せつかく、三対一の状況になのだぞ。なぜ、わざわざこちらからその戦況を崩すのだ」

だが、シルラは首を縦に振らない。二人を残していくことに、抵抗があるようだった。

「言ってるだろ、こいつを倒すことよりも、サリアを助ける方が優先だからだ。まあ、こいつを始末しないといけないことには変わらないけどな」

カリクも強情で、意見を曲げる気配はなかった。

「無茶だ。いくらあなた達が特別とはいえ、子供二人で勝てる相手ではない！ しかも、貴方は手負いではないか！」

シルラが声を荒げる。カリクの肩からは、まだ血が流れ落ちてい

た。何も言い返せず、傷口をそつと押さえる。

「駄目だよ……」

そこで、弱く辛そうな声がした。幼なじみのものだとすぐに察し、彼女のいる方へ目をやる。

「私が生き残ったとしても、カリクがいなきゃ駄目だよ！」

サリアは、泣いていた。頬を伝う水を拭いもせず、訴えてくる。

「サリア」

そんな彼女の名前を、カリクは優しく呼んだ。

「心配するな。約束はもう違えない。お前は俺が護る。もちろん、この先ずつとな」

ここでは死なないという、意思表示だった。レインが口笛を吹く。だが、雰囲気の水を差す声が、割って入った。

「これだから、子供は嫌いですね。現実も、しっかり見れないとはミッドハイムである。彼からすれば、むしろ戦いに水を差されていた。斬りつけるタイミングを先ほどからうかがっていたのだが、この言葉と共に、踏み込んできた。身構える。しかし、二つの刃はカリクに届く前に、小振りのナイフによって止められた。

「おいおい、人の恋路の邪魔をする奴はなんとやらって、知らないのか？」

レインが、二人の間に立っていた。

「嫌いな言葉の一つですね。恋路に断定せずに、邪魔者はすべてなんとやらだったら、共感できたのですが」

攻撃を止められたミッドハイムは、すぐに剣を離し、別角度から振り直す。下方からの斬撃にも、レインは反応してみせた。カリクは相棒が保っているうちに、サリアとシルラの説得にかかる。

「まず、サリアの無事が第一なんだよ。だからって、命を捨てる気はない。先に、行ってもらうだけのことだ」

「でも……」

「でもはなしだ、サリア」

反論しようとするサリアを遮った。その間に、ミッドハイムへー

発放つ。レインの頭のすぐ横を抜け、敵の額目掛けて飛ぶが、避けられた。

「これは、サリアのための戦いだ。勝敗は、そこで決まる。だから、今すぐ逃げる。生きて追ってやる」

「……絶対だよ」

つぶやくような声だったが、カリクの耳には届いた。ふっと、笑みを零す。

「ああ。信じる」

敵から目を離さずに、うなずいた。

目の前にある“殺し合い”を見ながら、サリアは考える。

（私は、何もできない。ここにいても、戦えない。おまけに、狙いは私……）

自分がここにいることと、ここからいなくなることを。どちらがカリクたちにとってプラスかは、はっきりしていた。

「……カリクに従いましょう。私は、彼のために逃げるべきみみたいですから」

「いいのか、サリア！ 死ぬ気だぞ、彼は！」

シルラに告げると、強い語調で苦言を呈された。首を横に振る。

「カリクは、死ぬ気なんてありませんよ。生きて、ずっとそばにいてくれないと、困りますから」

普通に捉えれば、命を捨ててもというように思えるだろう。しかし、サリアには分かる。カリクは強がりでも、口だけでもなく、本気でこの戦いを生きて越える気なのだ。

「もし、彼に死ぬ気がなくとも、気持ちだけでどうにかなる相手じゃない。貴女を逃がしはしたいが、戦力を一人減らすのは、危険なのだ」

しかし、シルラは是としない。“軍王”の称号の恐ろしさを、この場にいる他の人間より、肌で知っているからのようだった。

「それでも、私は逃げないといけないんです。最悪の事態……、全

滅してからじゃ、遅いから」

サリアも引かない。カリクは自分が生きる前提ではあったが、最悪も考えざるをえなかった。とすると、どうしても逃げなければならなかった。

かといって、後ろ向きな理由だけではない。

「それに、攻めてきているのが、ニックさんなら、合流して助けしてくれるかもしれません」

「それは、一理あるが……」

シルラも、そこは認めるしかなかった。ニックの協力を得られれば、軍王と戦う上で大きな助けになる。

「だが、向こうは今、おそらく門で戦っている。まだまだここまで攻めあがるには時間がかかるぞ。それに、まずここまで来られる保証もない」

もつともな意見だった。どちらが有利なのかさっぱり分からなかったし、攻めあがってこれるかも確かではない。

「行ってみないと、何も分からないですよ。まずは、動かないと。」

実際、今はナイフ使いの人がいるせいで、シルラさんは攻撃に参加できていないでしょ？」

「うっ」

痛い部分だったらしく、指摘されたシルラは、渋い表情を浮かべた。ナイフでミッドハイムと応戦している少年が、あまりに近いので、さつきから狙いはつけているのに、発砲できていなかったのだ。「カリクは、あの人と連携がとれてるみたいだし、今なら、ここを離れてもきつと大丈夫です」

自身も逃げる選択肢を嫌がったので、手のひらを返した説得である自覚はあったが、気に留めない。とにかく、早くこの場から離れることが重要だった。

傍らのシルラが、敵からは目を離さずに、黙り込む。唇を軽く噛んでいた。彼女の視線の先では、二人の少年が、必死に応戦している。軍人としての矜持に加え、大人としても、子供を置いていくの

をためらっているようだった。

「迷うな！」

その感情を見透かしたのか、ミッドハイムと交戦しているカリクが声を上げた。

「あんたが一番、サリアを連れて逃げるのに適任なんだ。軍人なら、自分の役目くらい察してみせろ！」

「私の、役目……」

彼の言葉を受け、シルラがつぶやく。きっと目を開いたかと思えば、次の瞬間にはサリアは手を捕まっていた。ぐいと、引っ張られる。

「逃げるぞ、サリア。ここまで言われて、動かないわけにはいかな
い」

「は、はい」

腰を上げ、うなずく、車へと走る。が、

「うぐっ！」

レインの呻きが聞こえたかと思うと、次の瞬間には、車を目指している二人の前に、ミッドハイムが立ち塞がった。

「逃がすと思いますか、この私が」

低く、重々しい声だった。シルラの手から、緊張が伝わってくる。彼女は、銃口を敵へ向けた。

「簡単には逃さない」、くらいではないのですか？ だから、逃がさせてもらいます」

自身の所属する組織の頂点に対し、見得を切る。

「自分の力を見誤ると、死に至りますよ、中尉」

冷たく言い放ち、ミッドハイムが斬りかかってきた。すかさず撃つが、片方の剣で弾かれた。

「シルラさん！」

戦えないサリアは、名前を呼ぶことしかできなかった。車の鍵を握らされ、手が、離される。

「走れ、サリア！ あなた達は、私を援護しろ！」

シルラが叫んだ。カリクとレインは、言われた通り、援護する。二人とも、一気にミッドハイムへ接近し、それぞれナイフと銃で攻撃した。サリアは、動くことができない。足が竦んだ。

「……面倒な」

ミッドハイムは、攻撃をかわしながらも、シルラへ剣を振る。左から右へ払われたそれを、彼女は身体を後ろに反らすことでギリギリ避けた。

「サリア、早く！」

再び、彼女は声を上げた。固まっていたサリアは我に返り、接近戦に持ち込んでいるレインの後ろを走り抜ける。彼は、強力な敵を相手にしながらも、常にサリアが背中側にいるよう器用に立ち位置をずらしていた。そのおかげで、ミッドハイムがサリアに近づけなくなっていた。

最初乗ろうとしていた車にたどり着く。助手席に乗り込んだが、運転手がいなかった。サリアでは、動かせない。まず、キーもなかった。

（シルラさん！）

窓から外を見る。彼女は、ミッドハイムによって、進路を阻まれていた。

（本気で、化け物だな、こいつは）

レインとシルラの位置を考慮しながら、カリクはミッドハイムに銃撃していた。だが、敵は三対一という圧倒的不利にもかかわらず、近接戦闘を挑んでいるレインを押ししていた。傷一つ、負っていない。（サリアは車にたどり着いたが、運転するはずのシルラがあっちにいけない。たぶん、行かせてもらえないだろう。なら……）

「レイン、シルラ！」

「なんだい、カリク君。今は取り込み中だから、用事は手短に頼むぜ」

「同意見だ」

それぞれから、返答がくる。どちらも、余裕はなさそうだった。「もうシルラじゃなくてもいい。車を動かせるあんたらのどっちかが、サリアのとこまで行ってくれ。俺が援護する」

下した判断は、これだった。連携面を考えると、レインをこの場に残しておきたいのだが、二人の実力自体はさほど差はないと思っただので、踏み切ったのである。

「了解！」

レインは即座に返事をしたが、もう一人からは反応が鈍かった。しばらくして、ポツリと問いを口にした。

「運転、できるのか？」

レインに向けてだった。攻撃の手は緩めていない。

「できる。ジーニアス出の奴は、みんなできるぜ」

「そうか……」

答えをもらったシルラは、意味深につぶやいた。

「どうあがこうと、無駄です。あなた達は、どちらも通しませんよ」ミッドハイムが割り込み、レインとの打ち合いをしながら二人を車と逆方向へと強引に動かす。カリクの目論見が空振りになりかけていた。

「させるかよ」

サリアを連れて行かれてはアウトなので、敵に背中を向けられる位置に立つカリクは、対面側にいる二人に遠慮することなく撃ち込む。心を読まれているため、ことごとく当たらない。舌打ちする。

「くうー。さすがに軍王様だぜ。三人がかりで、脇も抜けないなんて」

一度、レインが距離を取る。二人のどちらかが大きく回り込めば、簡単に車へたどり着けそうなのにも関わらず、ミッドハイムの反応速度と重圧が、それを許さない。

「発想の転換だ、レイン」

口を開いたのは、シルラだった。

「片方をたどり着かそうとするのではない。両方で車を目指す」

「なるほど。隙見つけたら、とにかくチャレンジみたいな感じか。いいぜ。やるう」

レインも乗り気で、ナイフを弄ばしながら同意する。二人で顔を見合わせ、うなずいた。

「なんとしても、通らさせてもらいますよ、軍王様」

「いつくぜー！」

二人が、サリアの待つ車を目指して猛進する。ミッドハイムは、剣を交差させ、待ち受けた。

まず、二人は左右に別れた。できるだけ広く。ミッドハイムがまず足止めにかかったのは、レインだった。縦に横に、次々繰り出す。応戦はしているものの、やや疲れが見えており、先ほどよりも反応が鈍かった。

「レイン！」

カリクが援護射撃をするも、ミッドハイムは身をかわした。そのままの勢いでレインを、カリクから見て左方向へ力で吹き飛ばす。シルラのいる方だった。

「馬鹿！ なぜこっちに来る！？」

「来たくて来たわけじゃないんだけど……」

飛ばされた勢いを利用し、レインは後転から体勢を持ち直す。ミッドハイムがすぐそこまで迫っていた。

「ちっ」

足を止めようとしたシルラに、カリクが叫ぶ。

「あんたは止まるな！ 走れ！」

だが、彼女は従わなかった。前に進むのをやめ、ミッドハイムの方へ身体を向ける。

「大人が子供を守らないわけにはいかないだろうー！」

大人としての責任感が、彼女を動かしていた。

「馬鹿野郎！」

ミッドハイムと対峙する彼女に、カリクは声を荒げた。レインは放っておいても、問題ないはずなのだ。助けるくらいなら、先に進

んでほしかった。

「愚かですね。目先の事象へのプライドのために、目的を逸するとは」

突進してきたミッドハイムは、前かがみに構えるレインを無視し、後ろにいるシルラへと斬りかかった。

「なっ……!？」

迫る刃に、目を見開く。狙いは、彼女の方だった。

ズバツという音と共に、赤い飛沫がまた地面に飛ぶ。右腕の肩と肘の間に、傷ができていた。パツクリと穴を開け、鮮血が溢れ出ている。反撃に一発撃つも、身をかわされた。

「手負いが三分の二。これでも、まだ勝てると思えますか」

構え直し、強気に問う。劣勢であるのは、疑いようがなかった。

「ああ、勝てる。少なくとも、勝負には勝った」

だが、カリクは堂々言い放った。両手には、再びナイフ。ミッドハイムの間合いに立っていた。

「いくらあなたでも、攻撃に集中していたら、周りの心は聞き取りきれないみたいだな」

「何っ？」

振り返ったミッドハイムは、カリクの後ろへ目をやっていた。

「レインは、通った。サリアは脱出させてもらう」

レインが、車にたどり着いているはずだった。彼は、シルラが攻撃を受ける間に、カリクと立ち位置を逆転させていた。

「くっ、しまっ……」

「悪いな、通行止めだから通せない」

走り出そうとした敵を、牽制する。

「だから言っただろう、傲るなっ」

車の扉が開かれて閉じられる音が聞こえ、続けてエンジンの唸りが響いた。横目をやると、車は裏門へと走り去っていった。

「……そうですね。気を引き締める必要があります」

前に視線を戻すと、ミッドハイムが大きく息を吐いた。

「あなた方は、ここで殺します。なんとしても」

「自ら出る理由を失った敵将が前線にいるようじゃ、器が知れるな」
互いに睨み合う。カリクは、敵の背後にいる女軍人に声をかけた。

「シルラ、まだ戦えるだろ」

「当たり前だ」

語調の強い返答がくる。彼女もまた、鋭く目を光らせていた。

護るべき対象が去った今、本気の殺し合いが始まると思っていた。

十六章 『邂逅』

車で待機していたサリアは、シルラが斬られたのを目にし、「シルラさん！」

と、思わず叫んだ。飛び出したい衝動に駆られたものの、自分が飛び出してもどうにもならないと、どうにか言い聞かせて耐えた。

さらに展開を見守っていると、レインがこちらへ走ってきた。どうしたのかと思っていると、彼はそのまま車に乗り込んできた。奥に身を引きながらも、まず問いを投げた。

「邪魔するぜ、サリアちゃん」

「な、どうして、貴方が乗ってくるんですか？」

「どうしてって……、ああ、外のやりとりが聞こえてなかったのな。納得納得」

「納得じゃなくて、私にも説明してください」

一人でうなづく彼に、そう求めた。

「ああ、カリク君がな、とにかくあなたの逃走を優先させて、運転手は俺たちでもいいって判断したのさ。俺たちも、運転できるし」

「じゃあ、貴方って十八歳より上なんですか？」

運転の心得があると言うので、サリアは年上かと思ったのだが、「いや、十六歳だけど。育った環境が特殊だったもんでね。免許はないけど、安全運転に心掛けるし、非常時だから見逃してくれ」

右手を振られて否定された。彼は車内をあちこち見回すと、サリアの方を向いてきた。

「あなた、鍵はもらってる？」

「えっ、あっ、はい。これです」

シルラが手を離す直前に握らせてきた鍵を差し出した。彼はお礼もそこそこに受け取ると、エンジンをかけてすぐに発進させた。

(カリク……、シルラさん……)

後ろを向き、身乗り出して窓からカリクたちを見る。ミッドハ

イムを挟む形で、固まっていた。どンドン離れていき、やがて車が左に曲がったことで完全に視界から消えた。

「はてさて、こっからが問題だな。裏口が全滅してるの、まだ誰も気づいてなければいいんだけど」

直線を走りながら、レインがつぶやく。前に視線を戻すと、その裏口らしき場所がかすかに見えた。戦車と砲車と思しきものがあったが、人間の姿は確認できない。

「んー、大丈夫か。用心はするけど」

彼も同じ状況を確認し、アクセルを踏み込んだ速度を上げ一気に距離を詰める。外が端に覗く位置まで来ると、ブレーキを踏みながら慎重に戦車の横に入った。何もなく、無事に通過する。

「どうやら、まだバレてなかったらしいな。ツイてるかも。さて、問題はこっからだな」

ハンドルを右に切りながら、レインがつぶやいた。サリアが、意味を尋ねる。

「問題って、何がですか？ ニックさんのところに向かうだけでしょっ？」

彼は、チツチツと指を左右に振った。

「シンプルにはそのとおりだけど、そのニックさんとやらに会うまでが大変なのさ。道中にも兵士がいるだろうし、門で混戦になっていたら、ニックの陣営側にたどり着くのも一苦労だ。あんたを逃がして終わりじゃない。あの二人も、死なせないんだろ？」

言い終わると、不敵に微笑んだ。一度ポカンとしてから、サリアは強くうなづく。

「はい。助けも呼ばないと」

「そういうこと。時間との勝負だ。飛ばすぜ、サリアちゃん」

ふと、アクセルを踏み込む彼の横顔に、既視感を覚えた。以前、どこかで見たような、そんな感覚だった。サリアが答えに至ることができないまま、車は西門へとひた走る。

街のあちらこちらにいる軍人たちの目を欺きながら、サリアたち

の車は門へ直線に伸びる通りにまで出てきた。後方には本部基地の正面出入り口が見えていたが、軍用車に乗っているからか、攻撃を受けたりはしなかった。多少、怪しいとは思っているのか、何かコソコソとやりとりしているようには見えるが。

前へ向き直ると、かすかにではあるが、人の塊が見えた。粉塵が上がっている。

「さて、あそこに向かわないとな」

運転手であるレインが、戦場を見据えて、言った。少しずつながら、近づいていく。

「なんだ、あの車」

すると、対向車線を走ってくる車が見えた。

「向こうから来るとなると、伝令とかでしょうか」

「そうかもしれないが……」

サリアの意見を否定こそしなかったものの、レインは首をひねった。距離が詰まり、対向車の中が見える。瞬間、二人ともが反応した。

「ニツクさん!？」

「あれは……!!」

急ブレーキをかけ、車を止める。サリアが前につんのめるが、レインは気にもかけなかった。そのまま、外に飛び出す。対向車もサリアに気づいたらしく、止まっていた。サリアも、車から降りる。走っていくレインが見えた。

(どうしたんだろ、レインさん。あんなに血相を変えて)

「サリアちゃん!」

対向車に近づいていくと、それから降りてきた人間に名前を呼ばれた。こちらからも呼び返す。

「ニツクさん!」

あちらが駆け寄ってきたので、サリアもそうした。親に等しい存在である彼に、抱きついた。助けを求める。

「カリクが、カリクが……! それに、シルラさんも……!」

いきなりの言葉に、ニツクは抱擁をやめ、こちらの肩を掴み、視線を合わせてきた。

「落ち着いて、サリアちゃん。いるんだな、カリクはこの街に」

「はい。私を逃がすために、今、軍王と戦ってます」

「どこだ。どこで戦ってる」

口調はゆつくりとさせているが、肩を掴む力が強くなったことから、余裕はそこまでないようだった。

「本部基地の駐車場です。そこで、カリクは軍王と戦ってます。シルラさんと一緒に」

「シルラ……。なるほど、あの男の考えていたとおりなわけか。彼女に、君は助けてもらったんだな」

大きくうなずく。ニツクの言葉が気になったものの、今は問いかける時間も惜しい。

「ニツクさん、早く二人を助けに行かないと。軍王は、強すぎます」「分かってる。急ごう」

サリアの訴えに、彼は同調し、後ろを振り返った。そこで、動きを止めた。不可解な光景があった。

二人の間が、対峙していた。奥側に立っているのは、ガ又だった。生きていたと、サリアが安堵したのもつかの間、手前にいるレインが、両手にナイフを構えていた。背中しか見えないのに、尋常ではない殺意を放っているのが分かる。ニツクが近づいていくのなら、事情が飲み込めないながらもついていく。

「ガ又＝ロード」

口を開いたのは、レインだった。表情が見える位置まできてみると、彼は先ほどまでとは打って変わって、ギラギラとした目をしてきた。対するガ又は、真っ直ぐにレインと向き合っているが、瞳にそこはかとない悲しみを湛えている。

「やっと会えたぜ。どうだったよ、弟を軍の研究材料にして得た軍人の身分は」

「弟……？」

サリアは、驚きからつぶやいた。

「あれが、レイン＝ロード、ガヌの弟か」

傍らのニックは知っていたらしく、重々しく言った。

「やっぱり、あいつについてきて正解だったぜ。俺っちが首都に戻ってきた本当の目的は、あんたに会うことだったからな」

レインがしゃべり終わると、沈黙が訪れた。ガヌが、何も返さないのだ。しびれを切らしたレインが、まくし立てる。

「なんとか言ったらどうなんだよ、兄貴。感動の再開だぜ。それとも、何年も前に関係を絶った奴には、何も言うことはないってか」

身を前に乗り出し、唾を飛ばす。そこで、ガヌがようやく重い口を開いた。

「それで、お前は俺をどうしたいんだ」

答えは、早かった。

「殺す。俺を売って、のうのうと暮らしたあんたを、俺っちは許さない」

ナイフを構え、臨戦態勢をとる。本気なのは、明らかだった。

「そうか」

ガヌの反応は、淡白だった。まるで、これが当然と言わんばかりに。

「ちょっと待ってください！」

待ったをかけたのは、サリアだった。

「詳しい事情は分からないですけど、今ここでお二人が争う理由はあるんですか。こうしている間にも、カリクとシルラさんは危険にさらされているんですよ」

声を荒げて、訴えかける。二人が対峙している意味が分からなかった。

「悪いな、サリアちゃん。確かに、あんたの言うとおりなんだが、俺っちはこの男を殺すために首都にきたんだ。カリク君の生死よりも重い」

レインの反応は冷めたものだった。期待を込めて、ガヌへ目を向

ける。

「そんな目で見ないでくれ。これは、俺の罪だ。こいつが俺のことを第一にしてるなら、応えなきゃならない」

しかし、こちらを受け入れてくれなかった。

「そんな……。誰かの命を助けるよりも、重要なことなんですか！？」

泣き叫ぶように、問いかけた。

「誰かを助ける力があるのに、自分のことに走るって言うんですか！？」

心の奥底からの主張だったが、二人には響かない。

「ああ。軽蔑してくれていいぜ。こいつを殺すことが、俺たちのすべでなんだ。他のことは二の次だよ」

「俺もそうだ。こいつに縛られているから、どうすることもできない。謝ってもどうにもならないが、すまない」

どちらも、応じる気は皆無である。サリアは、拳を握りしめた。キツと、二人を睨みつける。怒りが、こみ上げていた。同時に、得体の知れない何かが、内側から湧き上がるのを感じた。“力”とよく似ていたが、感覚が違った。

(カリクを助けてよ)

心が告げる。思いに任せて、感情に身をゆだねると、形のないものを捕らえた感触がした。レインが一瞬、目を見開いた。

そこで、

「やめとけ、サリアちゃん。時間の無駄だ」

ニツクに肩へ手を置かれ、サリアは我に返った。同時に、レインががっくりと肩を落とし、まばたきを繰り返した。向かい合っていたガ又は、怪訝な表情を浮かべたもののすぐ真顔に戻る。

「こっぴど奴らは、貸す耳を持っていない。説得の意味はない」

ニツクの口調は、平坦だった。部下に指示を出す。

「マルク、サリアちゃんを安全な場所に連れていけ。街の外に出られなさそうなら、無理に出るな。ほとぼりが冷めるのをまで」

「はっ。少将はどつなさるおつもりで？」

「訊くなよ。分かりきってるだろ」

上司の性格を把握している部下は、敬礼をした。親愛と、敬意を込めて。サリアも察する。彼は、間違いなくカリクを助けに行くつもりなのだ。

「この子を頼むぞ。あと、一つだけ言っておく。たとえ結果がどうなるうと、判断を迷うな。いいな」

「肝に銘じ直しておきます。ご武運を」

部下は改めて敬礼すると、サリアの方を向いた。

「行きましよう、サリアさん。必ず、お護りします」

「でも、ガ又さんたちが」

二人を残して去ることに抵抗を見せると、ニツクが耳元で囁いた。「サリアちゃん、二人は俺たちにはどうしようもない。だが、シルラとかいう奴なら、説得できるかもしれない。だから、今は逃げてくれ。後は大人に任せる」

シルラの名前は大きかった。ガ又を思いとどまらせられる、強力な人物である。彼女なら、あるいは止められるかもしれない。

それならばと、サリアは腹を決める。ニツクに対して、言い切った。

「いいえ、逃げません」

「なんだって？」

思いもよらぬ拒否に、彼は眉をひそめた。その反応を意に介さず、サリアは睨み合う兄弟の間に移動した。その場にいる全員が、呆気にとられる。

「おいおい、なんのつもりだよ、サリアちゃん。今の俺っち、冗談に付き合う余裕はないんだけど」

「すぐさま、レインが噛みついてきた。冷ややかに返す。」

「冗談のつもりはありません。本気で、今こうしているんです」

「どういう意味だ」

ガ又も、額にシワを寄せていた。

「貴方たちの邪魔をするってことです。どちらにも、死んでほしくないから」

二人の動揺をよそに、サリアは堂々言い切る。真剣な気持ちが、表情に出ていた。

ニツクが、頭を抱える。

「あー、そうなっちまうか。マリク、サリアを死なせるな。この状況が打破できるまで、あの二人から護れ」

「……話が読めないのですが」

「時間稼げることだ。頼むぞ。あの子は、ああなると意地でも曲がらないんだ。俺はミッドハイムのところに行く」

「……了解です」

部下の男は、まだ何か言いたげだったが、すべて飲み込み、短く応えた。

「サリアちゃん、無理はするなよ」

「分かってます」

最後にニツクは、その声をかけてくると、自分の乗ってきた車に乗り込み、勢いよく発進した。

四人が残る場に、沈黙が流れる。

「どく気はないんだな、サリアちゃん」

「はい。お二人が、カリクを助けに行くまでは。私に戦う力はないですが、意志はあります」

レインの問いかけに、サリアははっきりと言い放つ。瞬間、ナイフが飛んできた。目を閉じることなく、迎える。前方に人影が割り込んで、はじき落としたので、サリアには届かなかった。

「武器も持っていない人間に、攻撃しますか。子供とはいえ、マナーがなってなさすぎですね」

助けてくれたのは、ニツクの部下の男だった。剣を構え、レインと対峙する。

「そりゃ悪かったな。マナーなんかとは、無縁の生活を送ってきたから、知らなかったぜ」

レインの態度は、白々しかった。部下の男が、嫌悪感を声に込める。

「なら、学んでおいた方がいい。無抵抗の人間を手に掛けるのは、畜生にも劣る行為ですから」

「ふーん。じゃあ、私闘に水を差すのは、畜生にも劣る行為ではないわけだ」

「順序の問題ですよ。貴方がたがカリク君を先に救ってからやり合
うのなら、何も言わないのですがね」

お互い引かない。空気が張り詰める。

「あんたらに、用事はないんだけどな。邪魔するなら、巻き込まれ
ても責任はとらねえぜ」

レインが、笑顔なく告げた。殺気を背に乗せて、ナイフを構える。
「邪魔するなど言われましても、こちらも任務ですので、どうもで
きないですね。貴女も引く気はないのでしょうか、サリアさん」

「もちろんです」

男からの問いに、サリアは深くうなずいた。直後、舌打ちが耳に
届く。

「いいねえ、自分の身を護る盾があつて。それがなかったら、あ
んたは立ってないだろう?」

レインである。眉をひそめ、口を尖らせていた。その指摘に、首
を振る。

「いいえ。もし、私一人だったとしても、同じことをしました」

「言ってくれるね、サリアちゃん。まあ、実際に確かめてないこと
だから、いくらでも好きに言えるよな」

話し方は穏やかだったが、相反する感情が、貧乏揺すりのように
かかとを地面から上げたり戻したりを繰り返す、という行動に表れ
ていた。

「そうですね、確かにそうです。でも、今の私は助力がなくてもこ
うしていた自信があります。それで、十分です」

彼の言葉を一部肯定しつつも、強く言い切った。サリアが今、そ

う信じられるのなら、他の“もし”は考えるだけで無駄なのだ。さらに、付け足す。

「けど、訂正は必要ですね。ニックさんがいなかったら、こんなことをしようとは思いませんでしたから」

頭にあるのは、彼が呼びびにいった、一人の女性軍人のことである。ガ又にとつてのキーパーソンで、不毛な戦いを止められるかもしれない存在だった。その可能性に賭けるには、まず彼女の到着までガ又を攻撃させない必要があった。

ゆえに、サリアはどかない。

「貴方が矛を収めるまでは、邪魔します」

意志を示した。迷いは、ない。

「カリク君が惚れ込むだけあるぜ。ずいぶんとまあ、しっかりした考えをお持ちみたいだからな。でも、下手に他人のことに首を突っ込むと、痛い目見るぞ」

レインの額に寄るシワが、増えた。

ここまでのやりとりに、ガ又は反応を示さなかった。睨み合うレインと部下を横目に、サリアは彼に問う。

「貴方は、何も言わないんですか」

「ああ。俺は流れにすべてを任せるだけだ。レイン次第なんだよ。

君の介入は予想外だけど、君へ攻撃することは俺にはできない。かと言って、味方に回ることもできない。見守るしかないんだ」

「そうですか」

それ以上のことは、言わなかった。こちらはこちらで、説得は無理そうだった。

(でも、シルラさんなら……)

ゆえにサリアは、兄弟の間に立つ。細くか弱い希望を持って。

本部駐車場では、銃撃と剣、それから荒い息づかいで包まれている

た。

カリクは、自分の乱れた呼吸を耳に入れながら、銃を握っていた。敵を挟んだ向かい側には、肩で息をするシルラの姿がある。二人とも、生傷が多数あった。

「ここまで難易度が高いと、笑えてくるな。少しは思わせぶりなことをしてくれてもいいと思うんだが」

血を流しすぎたため、精神力で意識をつないでいるカリクが、そんなことを言う。強気な性格を持ってしても、口にせずにはいられなかった。

「敵に、そんな気遣いを見せるようでは、頂点など務まらないのですよ。自力でなんとかしなさい」

二人に挟まれているミッドハイムは、傷一つ負っていないかった。

両方の弾切れを警戒し、互いに弾倉補充の時間を作って攻撃し続けていたのにも関わらず、こちらの傷が増える一方だった。

「アドバイス、どうも。傷み入るな」

言葉ほど、カリクに余裕はない。糸口を掴めない戦いに、身体はもちろん、心も疲弊していた。シルラにも、言えることである。

ごり押しで勝てるわけではないとは思っていたのだが、傷一つつけられないのは予想外だった。剣さばきが早いせいで、空振りの後の隙もなく、どこをどのタイミングで狙えばいいか、取っ掛かりすら掴めない状態だった。

「今のうちに、せいぜい悩みなさい。もう、それすらもできなくなるのですから」

ミッドハイムが、右半身を引いた。左足を軸に、カリクとの距離を詰めてくる。

斬撃が、あらゆる方向から襲いかかる。カリクは、瞬時に右手の武器をナイフにスイッチし、片方の剣を受け止める。左手の銃で、至近距離から弾を撃ち込むが、防御された。舌打ちする。

ミッドハイムの側面からシルラも仕掛けるのだが、ことごとく彼の身体には届かない。もしくは当たらない。

もう一度、剣を受け止めたとき、カリクはわずかにフラついた。

シルラの援護で間を取るが、限界を意識せざるをえなかった。

「そろそろ、底が見えてきましたね。弾も、予備が尽きそうなようですし、早めにあきらめていいと思いますよ。二対一とはいえ、私相手にここまで善戦できれば、たいしたものです」

ミッドハイムもこちらの状態を見切っており、余裕が増していた。それでいて、油断がないのがカリクたちには不都合だった。

「貴方がたが、私に従順な部下であれば、よかったですね。殺すのが惜しいかぎりです」

「そう思うなら、俺たちは殺さずに、あんただけ死ねばいいと思っぜ。そうすれば、惜しまずに済むだろう」

カリクがそう言うと、ミッドハイムは声を上げて笑った。

「面白いことを言いますね。ありえませんが」

「そうだろうな」

本気ではなかったので、適当に流した。大きく息を吐き、前を見る。考えても、手が思いつかない。

「お困りみたいですね。潔く、あきらめてはいかがですか」

「馬鹿言え。俺はあきらめが悪いんだ。だいたい、勝つ奴があきらめるのは変な話だろ」

ミッドハイムの言葉に、そう返すと、彼は盛大に笑った。

「勝つことすら、まだあきらめていませんか。面白い人ですね。その顔を、絶望で塗りつぶしてあげますよ」

剣をこちらに向け、妖しく微笑む。

「さあ、貴方の人生の最終章です。醜い最期を迎えなさい」

言い終わると共に、また攻勢に移ってきた。一発一発が、どんどん重くなる。

(このままじゃ、まずい)

金属の打ち合う音と、銃声が乱れ飛ぶ。赤い液体が、地面に落ちる。息が、視界が、想いが、自覚できなくなっていく。

(サリア……)

想いが、一瞬で燃え上がった。消えゆく直前の、臃気な火なのかもしれないが、カリクは齒を食いしばった。

「まだまだだな。ああ、まだまだだ。俺は退かねえよ、ミッドハイム」

「サリアが支えというわけですか。私が、一番嫌いな活力ですね」
興が冷めたと言わんばかりに、ミッドハイムから表情が消えた。

「そうですか？ 俺は好きですがね、そういう幸せに溢れた活力」
そのとき、聞いたことのある声が、駐車場に響いた。滅多に顔は見れないものの、間違いなくカリクの知る中でもトップクラスの實力を持つている人間のものだった。車から降りた彼は、銃を持った右手とは逆の手で、降りた車のドアを閉める。

「……カリク」シールド。貴方は、かなりの幸運ですね」
「貴方は……」

シルラが、現れた人間を見て息を呑んだ。カリクは、笑みを浮かべる。

「戦場はいいのかよ。指揮官なのに」

「指揮官がいなくても、立派に動く部下たちだからな。心配することはないさ」

「そうかよ」

押され続けていたところにきた新しい風は、折れそうな心を持ち直させた。戦場に駆けつけた男が、名前を呼んでくる。

「久しぶりだな、カリク」

「ああ、久しぶりだな、親父」

カリクの父である、ニックシールドだった。間違いなく、カリクよりも腕の立つ戦力である。

「まさか、貴方本人が来るとは思いませんでした。ですが、残念ながらサリアはもうこの場から脱出していますよ」

佇むミッドハイムが、ニックの方へ顔を向けた。余裕ある態度は崩れていないが、やや拳に力を入れたように見える。

「知ってますよ。さっき会ったかりですから。ですが、元凶を潰さ

ないことには、意味がない。頭をとれば、この戦いに勝てますしね。それに、息子が戦っているんです。父親の俺が、戦わないわけにはいかないでしょう」

ニツクは、飄々と応えた。手元で、銃を遊ばせている。ミッドハイムが額にシワを寄せた。

「父親、ですか。そういった、つながりの力というのは、大嫌いなのですがね」

「でしょうね。貴方は、頂点であるがために、独りを徹底してきた。つながりなんて、貴方には必要なかったから。自分の認めない力には、嫌悪を持つものです。俺が、貴方の考え方を嫌っているように」
「さらりと返す。自分の組織の頂点に対し、ニツクは遠慮などしなかった。敵は、軽く息を吐き、微笑をまた自分に張り付ける。」

「よくお分かりで。軍人よりも、精神分析の学者になられてはどうです」

「遠慮しておきます。学者になったら、自分で誰かを直接護れませんから」

提案を簡単に蹴る。ミッドハイムから目を離し、カリクの横の方にいるシルラに合わせた。

「あんたが、シルラ中尉だな」

「ええ、そうですが」

突然、話を振られた彼女は、首を横に傾けながら、言葉を返した。「すぐ、車に乗って、中央通りに行け。お前の大切な奴が、面倒な心境になつてる。説得してきてくれ」

「はい？」

ニツクのざつくりした説明に、シルラは顔をしかめた。カリクも事情がさっぱり飲み込めない。

「端的に言つと、ガヌ中尉がレインに殺されようとしてる。償いつて称してな」

次の発言に、彼女は目を見開いて固まった。軍人とは思えないくらい、大きな隙を作るほどに。他に味方がいなければ、致命的なレ

ベルだった。

「ガ又って、昨日レインが話題に上げた奴の名前だな。殺されようとしてるって、どういうことだ？ 話が読めないぞ」

動揺した彼女より先に、カリクが尋ねた。昨晚のやりとりで、何かしらの因縁があるのは感じ取れていたが、こちらを放置するほどの何かだとは思っていなかった。

「詳しい説明は面倒だから、しない。予測だが、シルラ中尉、あんたはガ又中尉が何かを腹に抱えていたことに感じていたんじゃないか。その原因が、レインだったのさ」

だが、適当に流されてしまった。代わりにニツクは、シルラへ話す。彼女は、唇を噛み、うつむいた。つぶやくように、言う。

「しかし、それはガ又の問題でしょう。私が首を突っ込めることでは……」

「そんなもんは、どうでもいい」

ニツクが遮った。

「俺は単に、今戦力として動いてほしいから、あんたに奴の説得を頼んでいるが、あんた自身はそうじゃないだろ。奴は自分勝手なことを言ってるんだから、あんたも自分勝手言ってこい。それだけだ」
強引な言い分だったが、シルラの心に届いた。顔を上げ、車へと走る。カリクとニツクが牽制をかけていたので、ミッドハイムの妨害は入らなかった。

彼女は、車に乗り込むと、すぐさま走り去った。人が入れ替わり、駐車場には再び三人が立つ。

「ほとほと、あなた方は戦力分散が好きなのですね。私は楽で助かりますが」

ミッドハイムが口を開いた。わざとらしく、肩をすくめてみせる。「好きでしてるわけじゃない。ただ、最善がそういう結果になるだけの話だ」

応えながら、ニツクは首をならし、敵を見据えた。

「カリク、当然まだやれるよな。じいちゃんの鍛錬を受けてきたん

だから」

「当たり前だろ。そう簡単にくたばるかよ」

父の問いに呼応した。両手に銃を構える。

「新ラウンドだ。ぶっ潰してやるよ」

「冗談としては、現実味に欠けすぎてイマイチですね。面白くない
こともないですが」

ミッドハイムが冷笑を浮かべた。

「今のが冗談だと思うなら、軍王ってというのは、国のトップにしち
やあ、ずいぶんと頭が足りないみたいだな」

「その言葉、そのままお返ししますよ。勝ち目のない戦いに臨んで
いる貴方にね」

舌戦を繰り広げ、互いに神経を尖らせていく。会話に加わってい
なかつたニツクも、武器を構えて、集中する。

まだまだ、長引きそうな様相だった。

十七章『懺悔と後悔と想い』

中央通りでは、レインとニックの部下である男が交戦していた。レインの狙いはガ又なのだが、サリアが間に入って、直接攻撃をさせないようにしていたのである。

「どうして、お兄さんを殺そうとするんですか。肉親なのに」

目の前で刃が合わされるのを見ながら、サリアはレインに尋ねた。「どうしだあ？」

彼は距離をとりつつ、甲高い声を上げた。怒りを含んで続ける。

「なら、あんたなら許せるのか。そいつは、唯一の肉親を研究材料として軍に提供することで、自分の人生を安寧なものにしたんだ。

こっちは、意味の分からない実験されて、血へド吐くような思いをしたって言うのに、そいつは軍の温い訓練を受けるだけで表の世界を生きてたんだぞ！」

軍王と戦っていたときすら保っていた、飄々とした態度はなりを潜めていた。それだけでも、彼がどれほどの憎しみを兄に抱いていたのかが垣間見えている。

「そうなんですか、ガ又さん」

サリアはガ又に答えを求めた。弟を犠牲に自分を助けるという行為は、彼に対して抱いていた印象とかけ離れていたからである。

彼は地面を見つめながら、

「ああ、間違いない」

ポツリとつぶやいた。全面的な肯定だった。

「ほら、そいつも認めてるじゃないか！ だから、俺っちにはそいつに復讐する権利がある！」

鬼の首を取ったかのごとく、レインが叫ぶ。ガ又は、うつむいたままだった。

「でも、今のガ又さんの態度を見てくださいよ。きつとずっと後悔していたはずです。許せはしなくても、命をとったりまではしなく

「ていいじゃないですか」

「だからどうした。反省なんて当然だろ。でもな、それだけだ。行動が伴なわれないなら、意味はない。俺っちに手を差し伸べたりしなかつたんだからな」

説得を試みるが、聞き入れる気配がなかった。唇を噛み締める。

サリアとしては、ガ又に対話してほしかった。弟を気にかけていたのは、異常なまでの潔さから明らかだからこそ、彼に自身の想いを語ってほしかった。しかし、実際は口を閉ざしたまま、成り行きをただ見守っている。

「ガ又さん、何か言うことはないんですか」

望み薄ながら、もう一度、話を振ってみた。反応は薄い。

「何も。言ったところで、言い訳にしかならない。意味がないんだ」「言い訳でも、なんでもいいじゃないですか。まずは、形にしなきゃ、何も伝わらないですよ！」

身振りを交えて訴えるが、彼は首を振るだけだった。

「ほら、サリアちゃん。そいつも俺っちにも、もう言うことはないんだ。そこを、どいてくれ」

レインがまくし立ててくるが、どくわけにはいかなかった。まだ、希望はある。時間を稼がなければならぬ。

「いいえ。私は、どきません」

「なら、怪我は覚悟しておけよ」

サリアの返答を聞き、レインは軽く息を吐いた後、目を鋭くした。部下の男が、つぶやく。

「あの年齢で、あんなに暗い目ができるなんて。ジーニアスというのは、よっぽど非人道的なところらしいな」

ジーニアスという単語の意味は分からなかったが、レインの過ごした場所であることはサリアにも分かった。そこでの生活を強いたのがガ又ということなのだ。つぶやきはレインにも届いたようで、反応を示す。

「ああ、あそこは最悪なところだったよ。毎日、馬鹿みたいに実験

か訓練だ。人権なんてなければ、自由もない。すべては研究所の管理下だ。訓練も施設内の設備で済まされて、外にも出られなかったから、気が狂いそうだったぜ。そのうちに、慣れちまったけどな」
自嘲の笑みを浮かべた。怒りと悲しみの混じった、複雑な表情であった。

「どうして、どうしてそんなことになったんですか。それに、ガヌさんが貴方を犠牲にしたというのは、どういうことなんですか」

底の知れない感情を表に出す彼へ、そう尋ねた。時間稼ぎというよりは、訊かずにはいられなかったのだ。彼が歩んできた道を。

「そんなに難しい話じゃないさ。俺っちが六歳のときに、親が亡くなっちまってな。そこで兄貴共々軍に拾われたんだ」

微笑を浮かべながら、語り出した。

「詳しい経緯は知らないが、俺っちは特別研究所に入れられたのに、兄貴は普通に士官学校通いになった。おかしいと思うだろ。いきなり、見知らぬ人間に手を引かれて、兄貴とは離されて、誰も俺っちの疑問には答えなかった」

淡々としていた。彼としては、意味も分からないうちに兄と離れ離れになったのである。おまけに、引き取られた先が、特殊な施設と普通の士官学校というのは、落差が大きかった。

「そのまま、俺っちは地獄の生活さ。けど、まだ兄貴を恨んじやいなかった。そのうちに、助けしてくれると思ったからな。裏切られたことを知ったのは、ジーニアスに来てから五年くらいした頃だ」

「裏切られた？」

サリアが繰り返した。レインが、口元を歪に緩め、うなづく。

「ああ。本当に偶然だったんだが、研究所で顔を会わせたことがあったんだ。俺っちは、感激したね。長かったけど、やっぱり助けに来てくれたんだってな。『兄さん』って、駆け寄ったぐらいだ。でも、幻想だったんだよ。俺っちを助けてくれるなんていうのはな」
「何があつたんですか」

臆することなく尋ねた。兄を殺したくなるような出来事とは、な

んだったのか。

「なーに、そんなに難しいことじゃないぜ。そこにいるガ又くんはな、近寄った俺っちを見て、『俺に近づくな!』って言うと、突き飛ばしてきたんだ。目が飛び出そうなくらい、まぶたを開いてな」
話し方は軽いが、目の奥にある悲しみの色から、彼にとつては非常に衝撃的な出来事だったことが読み取れた。

「わけが分からなかったね。信頼していた兄貴と再開できたと思ったら、いきなり拒絶されて、そのまま放置だ。背中向けて、行っちゃまったんだぜ。理解しろって方が無理だ。そこで悟ったのさ。兄さんは軍服を着ていた。ああ、きつと自分の生活を手に入れたんだってな。俺っちのことを犠牲にしてなあ!」

最後は、怒りから、叫ぶように言った。サリア越しにガ又を見ているのだろう瞳は、感情が混ざり合っている。

それだけ大きな感情を向けられてなお、ガ又は唇を真一文字に結んだまま、何一つしゃべろうとしなかった。否定も肯定もしない。

(ガ又さん、何か隠してる、でも、一体何を……)

黙りこくるばかりの彼を見て、サリアは確信と同時に、疑問を抱いた。なぜガ又は黙っているのか、分からなかった。

「それから俺っちは、そいつと再開できる日を心待ちにしたのさ。俺っちの自由を引き換えに、外で生きているそいつに復讐しようってな!」

言い終えるが早いか、レインはサリアの方へ踏み込んできた。部下の男とつば迫り合いになる。

「なあ、どいてくれよ、サリアちゃん。ジーニアスを脱出した今、本当の意味で自由を手に入れるには、後はもうそいつを殺すだけなんだよ」

男の肩越しに、訴えかけてきた。攻撃的なのに、懇願のようだった。ただ、首を縦に振ったりはしない。

「あくまで、譲らないか。なら、怪我くらいは覚悟してくれよ」
剣を弾き、レインは後ろに下がった。目が据わっている。

と、そこに一台の車が飛び込んできた。ボロボロで満身創痍の外見から、ニツクが乗っていったものに間違いなかった。ただ、運転席に乗っている人間は、異なっている。

希望が、間に合った。

「なんで、お前が……」

レインの様子には大きな反応を見せなかったガ又が、明らかに動揺していた。目を見開いている。車が止まり、中から軍服に身を包んだ、金髪の女性が降りてきた。表情は、凜々しい。

シルラ「マルノルフだった。」

「おいおい、今度はあんたかよ。邪魔が多すぎて泣けるねえ」

レインが、大げさに手を広げる。シルラは、彼を睨んだ。

「それは悪かった。だが、私も譲れないものがあるものでな。我慢しろ」

上辺では謝っているものの、心がこもっているのは後半部分だった。レインから目をはずし、彼女はガ又の方へ歩いていく。うつむく彼の前で、足を止めた。

「おい、ガ又。貴様、何をしている」

返答はない。もう一度、シルラが問いかける。

「何をしていると訊いている」

厳しい口調だった。サリアは、ただやりとりを見守った。レインは、目を点にしてまばたきしている。

「サリアを助けると、そう決めたはずだな。そのはずなのに、貴様はどこで今、何をしている」

肩に手を置き、顔を見てもなお、ガ又は口を開かなかった。それどころか、そつぽを向く。

バチンと、乾いた音がした。シルラが、平手打ちをしたのだ。

「せめて言い訳くらいしてみる！ 詳しい事情は知らんが、あのレインが、ずっと貴様の心に引っかかっていた人間なのだろう！ 必要以上に他人を踏み込ませなかった、理由なのだろう！」

自分よりも背の高いガ又の首根っこを掴み、吠える。その剣幕に、

他の面々はサリアを含めて固まっていた。

「……お前」

ガヌが、つぶやくように口を開いた。

「お前、なんで来ちまうかな。いないから、決心できたのに、来たら揺らいじまうじゃねーか」

小さいが、サリアにもしつかりと聞こえた。レインにも届いたらしく、眉をひそめて、割り込む。

「揺らぐだあ？ ふざけたこと言わないでくれよ、兄貴。あんたは俺に償わないといけないだろうが。幸せな未来なんて、描いていいとでも思ってたのか！」

「いいに決まってる！」

シルラが、はっきりと言い切った。

「お前は知らない。こいつが、何をしてきたのか。どれだけお前を気にかけてきたのかを。お前よりも、私の方がよっぽどこいつのことを知っている！」

驚きを示したのは、ガヌだった。顔色を変えている。

「待て、シルラ。お前、“どこまで知ってる”？」

「貴様と、士官学校時代から一緒なんだ。大抵のことは把握している。お前が、弟のためにしてきたこともな」

対照的に、シルラは表情を崩していなかった。淡々と、話を続ける。

「士官学校時代から、こいつは他人を必要以上に内面へ踏み込ませなかった。上つ面の友人は多かったが、背中を預けるような奴は、間違いなくいなかった。それは、軍属になってからも変わっていない。どうしてだと思っ？」

レインに対し、問いかけた。彼は、戸惑いながらも言葉を返す。

「知るかよ、そんなの。性格の問題なんじゃないか。人を裏切るような奴だからな」

「違う。本当に、貴様は何も知らないのだな。こいつが深い友人を作らなかつたのは、お前がジーニアスにいるのに、自分につながり

を作つてはいけないという強迫観念のせいだ」

レインの意見に、シルラは首を横に振った。目を見据え、語る。

「あいつは、常に貴様のことを考えていた。本当に、言葉どおり常だ。自分のことなんて、ほとんど考えていなかったと言っている」「嘘つけ。そんなこと、あるはずがない。もし、そいつが俺っちのことを考えていたなら、どうして助けてくれなかったんだ。それどころか、助けを求めて伸ばした手を、こいつは弾いたんだぞ」

彼女の話に、レインは強く反発した。彼女は聞いていなかったことだが、ガ又に突き飛ばされた一件のことを挙げる。

「簡単なことだ。貴様に手を差し伸べれば、貴様が危なかったからだ」

詳細を知らないはずなのに、彼女はすぐに行動の答えを口にした。サリアたちは意味を捉えられず、眉をひそめていたが、ガ又は違った。目を大きく広げている。

「……シルラ、お前どうしてそこまで知ってるんだ」

「貴様が何を背負っているのか知りたくなったことがあってな、そのときに調べた。貴様のそばに、長いこといたのだから、情報さえ揃えば推理するのはたやすい」

「それは、お前の胸の内に秘めておいてくれないか。結局は、言い訳にしかすぎないんだ」

「できない相談だな」

彼の懇願を、シルラは明拒絶した。強い口調で続ける。

「貴様がかまわないかもしれないが、苦しむ姿を長く見てきた私は、貴様に報われてほしいのだ。真実を伝えることで、奴が止まるかもしれないなら、私は話さざるをえない。生きていてほしいから」

ガ又の方は向かなかつたが、想いの溢れた言葉だった。

「いいか、レイン＝ロード」

対象を、彼女はレインへ移した。彼は、不機嫌な声で応える。

「なんだよ。勝手にそっちだけで話を進めたりして。何言ってるのか、さっぱりだ」

「悪かったな。今から、きつちり話してやるから、安心しろ」
動揺することなく、話を続ける。

「結論から言うと、ガヌが貴様を助けられなかったのは、軍の圧力が原因だ。事実、ガヌは何度も貴様と接触を計ろうとしていた」

「俺と接触を？ デタラメ言うなよ。そんな記憶はないぜ」

「貴様が気づいていなかったただけだ。ガヌは軍の人間に邪魔されて、近寄ることができなかった。それどころか、脅しを受けてしまったのだ」

「はあ？ なんだよそれ」

レインが、素っ頓狂な声を出した。そんな反応にもシルラの様子は変わらない。

「簡単なことだ。貴様を拒絶したのではない。“拒絶せざるを得なかった”のだ。そうしなければ、貴様の身に何が起こるか分からなかったから」

救いを求めた手を、どうして振り払ったのか。ガヌの行動の理由が、ひっくり返る話だった。

「嘘だ。そんなわけがない。もう少し、マシな嘘をつけよ」

レインは、受け入れない。首を横に振った。

「嘘ではないのだがな。現に、貴様がジーニアスから逃げ出せたのは、こいつのおかげだ」

軽いため息をつき、シルラは話を移す。これにも、レインは反発した。

「あれは、俺たちが自分の力で逃げ出したんだ！ そいつは関係ない！」

先ほどよりも、言い方がきつくなっていた。

「関係あるから、言っているのだ。貴様は、ジーニアスからどう逃げ出した」

「施設での火事だ。あれをきっかけに、所内の混乱に乗じて逃げた。そいつは、何一つ関係ない」

問いかけに、攻撃的に答えた。サリアは、そばに立つニックの部

下に話しかける。

「火事って、なんですか？」

「何ヶ月か前に、首都の中央研究所で起きた、ぼや騒ぎのことです。原因は、表向き火の周りの不始末だという報告が上がってきたのですが、ニツク少将は何か裏があるのではと、疑っていましたね」

「裏……」

その単語をつぶやく。ガヌが、関わっているのだろうか。

「二つほど尋ねる。まず、火事の原因を知っているか」

レインに対し、シルラが指を二本立てた。首を横に振られる。

「知るわけないだろ。俺たちは、そのまま首都を出たんだ」

「そうだろうな。公式な発表では火の不始末と言われているが、本当は放火だった。犯人は、分かっていないがな。だが、私はこいつの手によるものだと確信している」

「なんで、そう言い切れる」

レインが問いかけた。サリアも、疑問に思ったところである。

「火事前後の動きだな。ふとしたときに、ガヌはジーニアスのものと思しき資料を見ていたことがあったし、火事後にその展開を妙に気にしていた」

「……よく見てるもんだな」

ガヌが、苦笑した。シルラが、鼻をならす。

「貴様が隙だらけなのだ」

「……確かに、そうかもな」

否定は、しなかった。

「二つ目の問いだ。どうして、貴様は誰にも見つからずに施設を出ることができた？」

「そんなの、運がよかったからに決まってるだろ」

次の問いに、レインは吐き捨てるように言った。

「違う。偶然じゃない。あれは、時間帯と警備、何かあったときの動き、すべてを計算してのことだ。偶然で、所内の人間を逃がすわけがない。事実、何者かに襲われた人間が出ている」

彼の主張と、真つ向から対立する話だった。

「自分が罰せられるリスクを犯して、そんなことをする理由があったのは、こいつしかいない。貴様は、ガ又に逃がされたのだ」

「そんなこと、あるわけない。もしそうなら、どうしてこいつは処分されてないんだ。軍王は心を読めるんだから、隠すことなんてできないはずだろ」

大きな身振りを交え、おかしなところを指摘した。シルラは、淀むことなく答える。

「サリアが見つかったから、処分するよりも、利用する方がいいと判断したのだろう。事実、ガ又と私は誘拐任務に就いた。それだけのことだ」

「嘘だ。そんなわけない。嘘だ。嘘だ！」

耳を塞ぎ、レインはわめき散らした。だが、シルラは口を閉じない。

「嘘ではない。真実だ。冷静に考える。貴様は、こいつの手で軍に売られたと言うが、軍がこいつと取引などするわけがない。両方も、ジーニアスに入れるはずだ。なのに、そうはなっていない。その理由を考える。研究者たちは、お前でどんな実験をしていたのだ。声を荒げることなく、一言一言を紡ぎ、与えていく。

「後天的な、力の発現の有無だ。だから、身体に軍王の血を入れて

……」

言葉を返していたレインが、固まった。シルラが、しゃべりだす。「貴様が実験の対象とされたのは、“軍王と血液型が同じ”だからだ。では、ガ又はどうだ。お前の兄と軍王は、血液型が違うはずだ。それが解答だった。血液型の違い。ジーニアスと士官学校に兄弟を分けたのは、ただそれだけのことだった。

「必要だったのは、弟の貴様だけだったが、軍が裏で何かしていることを感づいた兄を、放って置くわけにはいかなかった。だから、ガ又の方は士官学校に入ったのだ。秘密を知る者を、内部に捕まえておくために」

一旦切り、告げる。

「貴様は、捨てられてなど、いない」

それを最後に、彼女は口を閉ざした。誰も何も言わない。沈黙が、長かった。

やがて、レインが静かにつぶやいた。

「本当なのか、兄貴」

ガヌへの、問いだった。受けた兄は、うつむいたままだったが、一度息を吐き、

「ああ」

と、短く答えた。

「……今度こそ、信じていいことなんだな」

「ああ」

同じ調子で繰り返す。表情は、サリアからは見えない。

「まあ、正直まだ信じ切れないが、この場は退くくらいはしてやるよ」

小さな声だったが、一度大きな不信感を持った彼としては、大きな譲歩だった。張り詰めた空気が、緩む。

「ガヌ、なぜ貴様は、本当のことを言わなかった」

「仕方がないだろ。俺が自分から言っただって、信じてもらえるわけがない。それに、言い訳だからな。長いこと助けてやれなかったのは、本当のことだ」

シルラが訊くと、ガヌはうつむいたままそう答えた。

「馬鹿が。それで、殺されても仕方がないとも思っただのか。甘い奴だ」

ため息をつき、呆れたというような目線を送った。反応はない。

「私は、お前に死んでほしくはないというのに」

ただ、少し声量を抑えての言葉には、やや顔を上げた。

「今、お前なんて……」

「二度は言わん。それよりも、大事なのはこの後だ。何をすべきか、分かっているだろう」

ガヌの追求をかわし、シルラは次を促した。すべきことは、まだ終わっていない。

「分かってるさ。自分のすべきことくらいはな」

微笑とともにそう返し、サリアの方を向いてきた。

「悪かったな、サリアちゃん。あいつは、死なせない。約束する」

「……はいっ」

勢いよく、うなずいた。

「貴様はどうするのだ、レイン」

シルラが尋ねた。彼もまた微笑する。

「行くさ。カリク君にはわかり、いい格好はさせられないからな」

「ならば、ついてこい。いくら軍王といえども、この数を相手には

できまい。サリアのためにも、奴はここで討ち取る」

「いいねえ、その燃える展開。そっいうのは好きだぜ」

レインは両手をパシンと打った。拳と掌を合わせた形である。それを見て、シルラが微笑む。

「ところで、貴方はどなたでしょうか。軍服で、サリアを庇っていたことから、味方であるのは、分かりますが」

続いて彼女は、ニツクの部下へと顔を向ける。

「ニツク少尉の部下の、マルク＝ゲネーラ少尉であります」

彼は律儀に敬礼して、名乗った。

「シルラ＝マルノルフ中尉だ。サリアを護っていただいで、感謝する。引き続き、サリアのことを頼む」

「心得ております」

シルラから敬礼と共に返ってきた言葉に、彼はうなずいた。サリアへと視線を移す。

「それじゃあ、行きましょう。皆さんのためにも、早く安全なところに行かないと」

語りかけられた内容に、サリアは唇をかんだ。予期していたことではあるものの、やはり心に引っかかる。

カリクのそばに、いたかった。

足手まといになるであろうことも、重々承知していた。それでも、一緒にいたかった。彼のいないところで、待っているだけなのは、嫌なのだ。

それでも、目の前のシルラたちを、誰よりもカリクを信じ、想いを抑え、受け入れた。

「はい、行きましょう。シルラさん。カリクのこと、絶対に、助けてください」

静かに、しかし心を込めて、腰を曲げ頼んだ。近づいてくる足音がし、ポンポンと優しく頭を叩かれる。

「ああ、信じてくれ。必ず、貴女に平和を戻す」

シルラだった。「はい」とサリアが返すと、手が離れる。

「よし。さあ、行こう」

シルラは、ロード兄弟に呼びかけた。両方が、力強く応える。

「ああ。絶対に助けてみせる」

「おう。やってやるぜ！」

車へ向かう三人の背を見送り、サリアはニックの部下と共に、もう一台の車へと乗り込んだ。

(カリク……)

大切な人の無事を祈り、両手を結んだ。

サリアと別れ、ガヌ、シルラ、レインの三人はカリクたちが交戦している駐車場へと車を走らせていた。ガヌがハンドルを握り、助手席にはレインが、後部座席にはシルラが座っている。

(シルラの奴、わざとレインを助手席に乗せやがって。気まずいっての。和解したって言ったって、まだ嫌われたまんまなんだぞ)

ガヌは直線でアクセルを踏み込みながら、内心で文句をつらつらと並べていた。こちらから話しかけるのは気が引けるし、レインは口を開かないので、空気が重かった。かといって、シルラが助け舟

を出してくれそうな様子もない。

(というか、もし話すとして、何を話せばいいかさっぱりだ。このまま、黙っていた方がいいのかもしれないな)

そうだそうだと、一人納得したところで、

「兄貴」

見事に考えは壊された。弟の方から切り出され、動揺を覚えたが、なんとか平静を装って言葉を返す。

「どうかしたか、レイン」

「俺っちは、正直に言っただあんだへの嫌悪感が拭えてない。謂われのない憎しみだっけ分かったとはいえ、持っていた感情は簡単に消せないんだ」

「そうか」

短く応える。別に、仕方のないことだと捉えていた。当然だとも思っている。長期間、弟に何もしてやれなかったのは事実だった。

「でも、これから薄めていくことはできる。消すことも、きっとできる。今までと違って、近くで助けてくれるんだろ？」

レインは、ぎこちなく笑った。まだ、自分に対して素直に笑えないということ、ガ又は察する。しかし、希望は持てた。

「ああ、唯一の“家族”だからな。今度は、ちゃんとそばで護つてやるさ」

自然と口元が緩んでいた。バックミラーに映るシルラムも、かすかに口角を上げたような気がした。

十八章 『血舞う紅夜』

気づけば首都セルゲンティスは、夜の闇にとっぴり浸かっていた。カリクとニックがいる駐車場も、例外ではない。臆気なガス灯の灯りが頼りだった。

「まったく。貴方がたは、粘るのも大概にしてはいかがですか。戦況が把握できなくて、困ります」

ミッドハイムが、わざとらしくため息をついた。カリクは、そんな彼を睨む。傷だらけの身体で。息も荒かった。

「大丈夫か、カリク」

ニックが訊いてきた。そんな彼も、軍服があちこち裂かれ、全体的に赤く滲んでいる。

「当たり前だろ」

強気に言うものの、かなり厳しい状態だった。もうとっくに限界は超えている感覚がある。意識を保つのもやっとなのだ。

満身創痍の二人に対し、ミッドハイムは辟易とした表情を浮かべていた。こちらは必死に戦っているのに、あちらは飽きているのだ。このことだけでも、力の差は歴然だった。少将であり、軍内でもかなりの実力派であるはずのニックをしても、まったく届いていない。カリクたちも、致命傷はもらっていないが、それだけだった。勝ち目は、一ミリも見いだせない。

「戦況の報告も入ってきませんし、退屈で仕方ありませんね。私を相手に、倒されないというのは立派ですが、一方的すぎて、緊張感に欠けていますし」

戦う姿勢を崩さない二人から目をはずし、本部基地を見上げた。門の方からの戦いの音は未だに聞こえていたが、基地内は静かだった。

「というか、どうして誰もあなたを探しに来ないんだ。親父は、突飛な判断が常だからともかく、戦闘中に指揮官が席をこんだけ長時

間離れているってのは、普通おかしいだろ」

カリクは、ずっと訝しんでいたことを訊いた。ミッドハイムが一人で現れたのはともかくとして、既に何時間も戦っているにもかかわらず、他の兵士なりなんなりが現れないのは、疑問だった。

「サリアを巻き込むのが嫌で、ここに近づかないように伝えて出てきましたからね。余程のことがないと、誰も来ないでしょう。サリアを逃がしてしまった今、貴方がたを一人で相手する必要性は皆無ですが、呼びに行く間に逃がしたくはないのですよ。ここで殺しておかないと、面倒ですからね」

ミッドハイムが首を左右に曲げた。体勢を整え、次の攻撃の準備を整える。

増援が来ないのはありがたいが、さすがに長引きすぎた現状では、いつミッドハイムの部下がここにやってくるか分からなかった。もしそうになったら、サリアがいないことも相まって数で押しつけてくるのは明白だった。

「本当は、私一人で充分と思っていたのですが、さすがにここまで手間取ると、協力が欲しくなってくるものですね。時間がかりすぎていけない」

大袈裟に肩をすくめてみせた。小馬鹿にした態度がかんに障るが、カリクは何も言わない。だんだんと濃くなる絶望の色に、呑まれないように踏ん張っていた。

ミッドハイムが、「はっ」というかけ声とともに、ガ又との間合いを詰めてきた。反射的に撃ち込むが、軽く身体をひねられかわされる。続けて、連撃が襲いかかる。もう何度も見ているため、太刀筋は見極められるが、実際には避けきれない。互いに長時間戦っているにもかかわらず、彼の剣の振りは遅くなるどころか、どんどん早くなっているように感じた。

また、鮮血が飛ぶ。大ダメージを受けないようにするので、精一杯であった。ありとあらゆる方向から、刃が襲ってくる。ニックが横から仕掛けても、連撃は止まらない。

「動きが目に見えて落ちていますよ。おとなしく切られたらどうです」

「悪いな、断る」

右手のナイフで、片方の剣を受け止めた。キーンと、甲高い音が響く。

そこに、声が割り込んできた。

「軍王様、これは……？」

他の兵士が、来てしまったのだ。ニックが、素早く口封じにかかると。銃口を向け、間髪入れずに撃つ。「うあっ」と言って、胸を押さえて倒れた。後ろから、「お、おい、大丈夫か！」などと聞こえてきたので、他にもいるようだった。舌打ちをする。逆にミッドハイムは、意地悪く笑う。

「いいところに来ましたね。見ての通り、敵ですよ。もう、加勢していただいて結構ですよ。強い相手ですか、何十人が集めて、手伝ってください」

「ぐ、軍王様。分かりました。直ちに！」

部下の兵士は、他の一人に人集めを命じると、三人の仲間を連れ立って駐車場に出てきた。ミッドハイムが、目を細める。

「どうしますか、ニック少将、カリク＝シェード。これでも、まだ戦いますか」

挑発的な問いかけだった。答えは、決まっている。目の前の敵を、カリクは睨みつけた。

「やめるわけないだろ。最後の最後まで戦ってやる」

「それだけ出血していながら、まだ血の気が多いようですね。貴方はどうです、ニック少将」

「右に同じだ。だいたい、子供より先に逃げられるわけないだろ」
「なるほど。あくまで、無駄な抵抗を続けるわけですか。いいでしょう。呆気ない幕切れを、与えてあげますよ」

呼ばれた人間からどんどん出てきているのか、徐々に敵兵の数が増えていく。カリクにはもう、何人いるのか分からなかった。

「だとよ、親父。辞世の句でも考えるか」

「そんなもの考える暇があったら、生きることに関力を注ぐな、俺は」

「そりゃいい。俺も一緒の意見だ」

カリクは父と軽口をかわし、バックスステップでミッドハイムから距離をとった。不思議と、恐怖は感じていない。

「さあ、惨めに散るがいい。総員、攻撃始め！」

ミッドハイムのかげ声とともに、彼の後方に集まった兵たちが雄叫びを上げた。前衛部隊と後衛部隊に分かれ、カリクたちへと襲いかかる。二人は、無言のまま迎え撃った。軍王の力に屈しなかったのに、数に屈するわけもない。

相手が少ないからか、同士討ちを恐れて威勢の割に攻撃の手は緩めだった。カリクは、複数方向からくる攻撃に対応しながら、一人撃ち殺していく。躊躇う余裕は、なかった。迷いなく、急所に鉛玉をぶち込んでいく。人の壁でニツクは見えなかったが、敵の攻撃の音が止まらないことから、彼も充分に戦えているようだった。

「まあ、彼らだけなら、まだ抵抗可能かもしれませんね」

だが、保つかもしいないという見込みを、絶望が奪いさる。声と共に、ミッドハイムが攻撃の飛び交う中へ飛び込んできたのだ。顔が自然と引きつる。

「いい加減、楽になりなさい」

刃が、一閃を刻む。腹部がパクリと口を開け、赤い液体が、溢れた。

「がああああああ!？」

カリクが、痛みで叫んだ。腹を押さえ膝をつく。苦悶で、表情を大きく歪める。

「それでも致命傷はさけますか。しかし、もう限界でしょう。あきらめなさい」

ミッドハイムは剣の血を払うと、周囲の兵士たちに目配せした。後は任せるといふような仕草だった。

「くそっ……」

流れ出る血が、あまりに重い。視界が、狭まっていく。

そんな状態だったので車のクラクションが聞こえたときも、最初は幻聴だと思った。

「なんですか、あれは？」

しかし、ミッドハイムの反応と、再度聞こえたプーという甲高い音から、現実であることを感じとった。さらに、声が耳に届いた。「へばってちゃ、格好悪いぜ、カリク君！」

間違いないく、“彼”のものだった。偶然に出会った、ナイフ使いの相棒である。口元に、笑みが浮かぶ。

「心強い増援だな、まったく。ちよっと、遅すぎるが」
ひそかに、つぶやいた。

車は、容赦なく敵陣へ突っ込み暴れ回る。窓からも、銃弾が飛んでいた。

「何をしてるのですか！ 運転手なりタイヤなりを狙って、早く止めなさい！」

ミッドハイムが命じると、逃げ惑っていた部下たちはようやく反攻に出た。タイヤが撃たれ、車はスリップして止まる。

「意外と、早く止められたな！。もう少し、暴れるつもりだったんだけど」

前座席の扉から、レインがぼやきながら降りてきた。狙ってくれと言わんばかりの登場の仕方だったが、銃を向けたり、斬りかかったりした人間は、ことごとく倒された。攻撃が届く前に、撃たれたのだ。女性の声がある。

「もう少し、考えて降りろ」

「考えて降りたぜ？ 援護があると思ってね」

レインがいたずらっぽく笑った。ため息の後、警戒しながら姿を見せたのは、シルラだった。

「貴様は、どんな教育をしてきたのだ、ガヌ」

「ジーニアスの奴らに言ってくれ。昔から破天荒だったけど、ここ

までじゃなかった」

さらに続けて現れたのは、サリアを攫った男だった。思わず目を見開く。

「もしかして、ガ又つてあんただったのか」

「ん、久しぶりな顔があるな。その節は、悪かったな、カリク＝シエード」

「謝罪の言葉はいらねえ。シルラと一緒にいるなら、味方してくれるんだろ。戦ってくれる方が、よっぽど助けになる」

「了解」

ガ又は気持ちよく笑った。銃を手元で遊ばせる。贖罪する気満々のようだった。

「あなた方ですか。ずいぶんと、早く解決したようですね。ただでさえ、時間がかかるというのに、まだ面倒を増やしますか」

一方のミッドハイムは、顔を露骨にしかめていた。レインが言い返す。

「いくらでも増やすさ。あんたには、勝たないといけないからな」

「戯れ言を。この数を相手にして、勝ちなどありません」

吐き捨てられた。だが、彼は余裕を崩さない。

「ありえるさ。ありえないなんて、誰もまだ証明してないんだからな」

「なら、今から証明してさしあげますよ」

ミッドハイムは右手を顔の前上げた。空気が、凍る。

「カリク君。まだ、やれるよな」

そんな中で、レインが尋ねてきた。カリクはしっかりと立ち上がり、武器を構え直す。本当なら、動くのも難しい。息は乱れ、視界は霞む。それでも、戦う意志は失っていないかった。

「当たり前前のことを、わざわざ訊くな。どいつもこいつも」

堂々と言い放った。まだ、戦える。戦えなくなるまで、止まらない。サリアの幸せのためにも、止まるわけにはいかなかった。

「いくらでも戦ってやるさ。で、笑顔で帰ってやる」

カリクが言い終わると共に、ミッドハイムの命令が飛んだ。

「侵入者を、全員駆逐しなさい！ 攻撃再開！」

また、雄叫びが上がる。レインが、負けじと叫ぶ。

「さあ、カリク君！ 味方は勢揃い、敵は盛り沢山！ 最高潮の見せ場だ！ 決めてやろうぜ！！」

「乗った！」

カリクが呼応し、乱戦が始まった。たった五人での、戦いだっただが、カリクたちの力は、凄まじかった。訓練を積んできたはずの兵士たちが、手負いの人間を含んだ面子に、苦戦しているのである。

カリクの攻撃後の隙を狙い、敵の一人が剣を振り上げる。しかし、その剣を降ろす前に、銃弾が腹を貫き、彼は地面に倒れ込んだ。

「カリク、敵に背を見せすぎだ」

攻撃はニツクのものだった。背中合わせの位置にくる。

「知らねえよ。親父が、そこらへんはなんとかしてくれるんだろ。代わりに、あんたが危ないときはフォローしてやるよ」

「ふん、生意気に育ったもんだ」

「なんせ、あんたの息子だからな」

カリクは、ニヤリとした。ニツクも「違いない」と、同調する。

「死ぬなよ」

「そっちなよ」

合わせていた背中を離した。だが、つながっている。お互いに、相手の武運を祈った。

視界の端に映るガヌとシルラも、多くの敵と対しながら、まったく遅れをとることなく戦っていた。カリクたち以上に、連携がとれている。

どちらも、とにかく片っ端から狙い撃っているように一見思えるが、そうではない。ガヌは、シルラの死角にいるのと、狙いをつけている人間を目ざとく見つけて、処理していた。シルラは、その逆である。お互いに、第三の目として機能していた。二人なのに、さ

ながら一つの媒介でつながっているようだった。

「シルラ、お前と共闘するのって、いつ以来だ？」

こちらも背中を合わせ、しゃべり出す。

「正確には思い出しかねるな。戦線に駆り出されたりはしなかったし、部隊も違ったから、訓練でもなかなか会わなかったからな。半年前の合同訓練のときではないか？」

「ああ、あれが最後か。でも、あのときよりもなんか、お前がどう動くかよく分かるんだけどな」

「ふん、奇遇だな。私もだ。お前という人間を、よく知っているからな」

シルラは勇ましく口角を上げた。ガヌの背を肘でつつく。

「死ぬなよ。お前には、言いたいことがたくさんある」

「お前もな。お前がいないと、生活がつまらない」

ガヌが言い終わると、沈黙し、やがてシルラが声を立てて笑い出した。ガヌもつられて笑う。周囲の敵が、何事かと動きを止めた。

「生き残るぞ、ガヌ」

「了解、了解！」

それぞれ、前へ踏み出した。四方八方からの攻撃にも、戸惑うことはない。

一人、サポートなしで戦っているレインは、異常な視野の広さを発揮していた。自身は一人であるのに、他四人の援護をしていたのだ。特に、弾倉替えをしているときのサポートは、かなり大きかった。

「隙を狙ってるあんたが、隙だらけだぜ」

弾を込め直しているカリクを狙った兵を、先んじてナイフを飛ばして片付けた。ニケアで見せたような、波状攻撃もする。

一人、また一人と、たった五人で、どんどん敵の数を削っていく。死体と怪我人が、山をなし始めていた。

勢いと流れは、完全にカリク達の方へ傾いていた。しかし、押し切るのは、難しい。

「情けないですね。実力派が出てこれないのは、戦闘指揮等々で仕方ないとはいえ、さすがに弱すぎる」

軍王という、最強のカードがあった。しびれを切らし、自らまた出てきたのだ。

「結局、あんたが出るのか。年寄りなら、後ろの方で休んでたらどうだ」

対峙したカリクが、嫌みっぽく言った。ミッドハイムは、顔色を変えずに応える。

「そうしたいのは山々ですがね。残念ながら、私の部下は休ませてくれる気がないようにですから」

「ああ、そうかい」
気づくと、冷や汗が出ていた。威圧感と、絶望感が一気に襲ってくる。

「まったく、面倒で仕方ありませんね」

一瞬で懐に入られるのはもう慣れていたが、今は周囲の環境が違っていた。敵だらけのために、追撃がどこから来るのか、分からないのである。

「面倒なのは、こつちだよ」

剣が起こした小さな風を頬に受けながら、ぼやく。視界の端で、カリクを狙っていた兵士がナイフをこめかみにくらい、倒れたのが見えたが、このフォローもいつまで保つか分からなかった。

ただ、ここが正念場なのは明らかだった。カリクが軍王相手に粘り、周りの兵を他が片付ければ、五対一で圧倒的に有利になる。

(絶対に、倒れない……！)

精神力は、まだ尽きない。

「親父！ レイン！ シルラ！ ガヌ！」

この場にいる味方全員の名前を呼ぶ。顔を向けてきたのはレインだけだったが、他も耳を傾けてくれていることを信じて、続ける。

「俺は“耐える”！ だから、他は任せた！」

力強い宣言だった。ミッドハイムを全面的に引き受ける代わりに、

周りを任せる。他の人間を信頼しての言葉だった。

「なかなか、貴方は素晴らしい人間性をお持ちのようですね、カリクシエード。ですが、その勇気が仇になると思えますよ」

それを、ミッドハイムは嘲り笑う。だが、カリクは怯まない。

「言ってる。最後に笑うのは、こつちだ」

「血塗れの身体で、よく吼えるものですね」

どちらも、姿勢を崩さなかった。睨み合いになる。

勝負の分かれ目を迎えていた。

周囲の敵に気を払うことをやめ、ミッドハイムに神経を集中させる。攻撃は最低限にし、回避に専念するつもりだった。

「いい判断です。ただ、今の貴方に、それが可能ですかね」

心を読まれたのか、そんなことを言われた。睨みつけることで、意志を示す。

「よろしい。ならば、望みどおり死をあげましょう」

ミッドハイムは笑みを消し、冷めた表情になった。

「貴方は強い。認めざるを得ません。ただ、私に勝てるとういうわけではありません。まだ踊るのは勝手ですが、手にするのは、絶望だけですよ」

それを最後に口を閉ざし、大きく息を吐いた。両手の剣身を合わせる。

空気が、震える。恐怖が、強さが、漂っていた。

ミッドハイムの身体が、風のごとく駆けた。カリクが、牽制で一発放つが、剣で弾かれる。右手に、ナイフを持った。

左から、斬撃が飛んでくる。ひらりとかわし、もう片方の腹部を狙ってきた剣の軌道をナイフで逸らす。そこから斜め上に払ってこようとしてきたが、同じナイフで、押し止めた。最初に避けた剣が返す形で振り払われたが、完全に見切った。

至近距離で、拳銃を腹部に向ける。今までなら、一本の剣が防御にきていたが、なかった。代わりにミッドハイムは、身体ごとカリクの左側に移動した。照準をすぐにそちらへ動かすが、

「遅い！」

上方向に剣を振り抜かれ、銃を手放させられてしまった。腕ごと持っていかれるのは回避したが、貴重な武器の一つを、失ってしまった。

しかし、動揺している余裕はない。次の攻撃がくる。二本で繰り出される突きを、ギリギリの状態でさけた。続けて上、右、左、下、左と次々に剣が動く。受け止めはせず、すべて回避を行った。ただ、完全には避けきれずに、また生傷が増える。

ミッドハイムは止まらなかった。息をつく暇すら与えてくれない。剣撃に加え、足払いまでされた。上に飛ぶと隙を生んでしまうので、後ろに下がりざるを得ない。

左手に、先ほど飛ばされたのとは、別の銃を握る。距離を詰めてこようとしていたミッドハイムに、牽制で一発撃つ。剣で弾かれるが、想定内だった。カリクに今必要なのは、少しでも時間を稼ぐことなのだ。

右側に見えている剣が、下方から上がってくる。右足を下げ、身体を左に動かした。空を斬る音が、耳のすぐ近くで聞こえた。髪の毛が、いくらか落ちていく。

と、左足に嫌な感覚が走った。瞬時に動かそうとしたが、動けないばかりか、痛みを伴った。

剣が、左足を貫通し、地面に達していた。

「ぐっ……」

痛みはここまで比べれば、さほどたいしたものではなかった。だが、それよりも足を固定してしまったことが危険だった。

「やっと捕まえましたよ。貴方はふらふらと捉え切れませんでしたから、困っていたんです」

凶悪な笑みが、ミッドハイムの顔に浮かんだ。次の瞬間には、首に剣が迫ってきた。ギリギリ、ナイフで止める。

「まだ粘れますか。本当に、面倒な方だ」

「生憎と、打たれ強さは自信があつてな。それに、散々簡単に倒れ

ないことは見せてきたはずだ」

腕を震わせながら、相手の押しに耐える。互いに消耗しているはずだが、向こうの力の方が、強く感じた。

「そうでしたね。時間稼ぎには、ちょうどいい能力を持っていましたね、貴方は」

ギリギリと、力の押し合いが続く。足が熱く、血がどんどん地面を赤くしていく。銃を突きつけることも考えるが、引き金を引くタイミングを読まれるため、実行するには難しかった。

「さあ、どうしますか、カリク」シールド。“拮抗”とは言えないことは分かっているはずですよ」

カリクも気づいていることのため、ミッドハイムも気づいていて当然だった。だが、今の状況では、圧倒的に不利とは言い切れない。「それが分かっているなら、他のことも分かっているのだ。競り負けるのは確実でも、時間を稼ぐことはできる」

そう、今はいかに耐えるかが問題なのだ。押し負けることが確実でも、時間を稼げれば、今は勝ちに近づく。

「ええ、分かっています。ですが、ここは貴方を確実に斬る絶好の機会。みすみす逃すわけにはいきません。斬るが早いか、援護が早いか、天に委ねるのみですね」

そこで、ミッドハイムへ銃弾が二方向から飛んできたが、素早くカリクのナイフから剣を離し、目にも止まらぬスピードで防ぎきった。続けてきた計五発も、捌ききる。ガ又とシルラによる攻撃だったのだが、効果はほとんどなく、数秒後には、つばぜり合いが再開された。

手を出さなくてくれと、カリクは思ったが、口には出さなかった。察してくれるだろうなどという信頼が故ではない。そんなことを言う余裕がなかったのだ。ミッドハイムから、集中をはずすわけにはいかなかった。

敵も、口を閉ざしたまま、ただ強い力を加え続けてくる。カタカタと揺れながら、二人の刃の接点は徐々にカリクの方へと近づいて

いた。

頭が、正常に働いていなかった。とにかく目の前の敵にやられないという決意と、サリアへの想いだけがカリクを立たせていた。

カリクの様子で内心を悟ってくれたのか、それ以降は横槍が入ってこなかった。二人だけの我慢比べになる。

刃越しに、敵を睨む。笑みはない。あちらも、神経を集中していた。

腕が軋み、悲鳴を上げていた。足からは血が流れ出ている。とつくに、限界は越えていた。それでも、ナイフを握る力は緩ませない。剣身が徐々に近づいてきていたが、時間は確実に進んでいた。日は完全に見えなくなっており、暗闇が駐車場を包んでいる。

と、

「これで、どうですか」

一瞬、つばぜり合いが離され、ナイフに強く剣をぶつけられた。

衝撃に、弱っていた握力は耐えられず、カリクはナイフを落としてしまった。

「しまっ……」

反応する間もなく、剣がカリクの身体に下ろされる。

「カリクーー!!」

父親の声が、耳に届いた。だが、カリクの頭に浮かんでいたのは、

一人の大事な少女の姿だった。

(サリア)

その名を、人知れず呼んだ。

首都の出口付近で、門での戦いの様子を伺う人間の姿があった。

ニツクの部下の男である。助手席に、サリアはいた。他の門は、門兵と騒動を起こさないと通れないことと、戦いの最中に突っ込むのはあまりに危険であることから、サリアたちは門から離れた位置で

脱出の機会を計っていた。

戦いは、部下の男が見たかぎり、ニツクの勢力の方がわずかに押しているとのことだった。たた、首都側の戦力が、本来の半分もいっていないらしく、これからその部分が増援で出てくると、一気に苦しくなるらしい。

車内の空気は重い。サリアは、カリクたちのことが心配でたまらなかった。もしもという不安が身体を包み込み、窒息してしまいそうな気分だった。部下の男の方も、仲間たちに協力することができず、ニツクの援護もできないためか、終始苦い顔をしていた。

そんなときだった。

「カリク……？」

彼に、名前を呼ばれたような気がした。辺りをゆっくり見回すが、いるはずもない。だが、ただの幻聴と切り捨てられない何かがあった。

「どうしました？」

首を動かすサリアを見て、不思議そうに部下の男が尋ねてきた。切れ切れに答える。

「カリクの、カリクの声が聞こえたんです。消えてしまいそうな声で、私を呼んできて……」

「カリク君の？ 聞き間違いじゃないですか？」

彼は、訝しげに眉をひそめた。サリアの感じた“何か”が分からないために、はなっから信じる気がなさそうだった。

「私も、そうかと思っただんですけど、違うんです。私の“心”が、間違いのないって訴えているんです」

特別をどう伝えればいいか分からないため、とにかく主張する他なかった。

「カリクが、私を呼んでるんです。何かあったのかもしれないんです。力になれることがあるかもしれない」

どうすべきかは、自然と浮かんできていた。カリクの声が聞こえた、その意味。

「私を、カリクのところに入れていってください」

「自分も、ミッドハイムとの戦いの場に行かなければならない。そうとしか、思えなかった。」

「何を言っているんですか。せつかく逃げてきたのに、みすみす貴女をミッドハイムのところに戻せませんよ」

だが、部下の男から強い反発を受けた。当たり前だ。敵から狙われているサリアは、戦場から離れなければいけない人間だった。ミッドハイムの前に行かせてくれと言ったところで、受け入れてもらえるわけがなかった。それでも、心に反したりするわけにはいかない。強い確信があった。行かなければならないのだ。

「それは分かっています。それでも、私は私の心に従いたいんです。貴方が協力してくれないのなら、私一人でも行きます」

自然と、姿勢が前のめりになる。逆に、部下の男は身体を引かせている。

「うーん。そう言われましてもね……」

渋い表情で、頬をかいた。少しだけ、揺れているように見えた。サリアは好機と捉える。

「迷ってる時間が惜しいです。もう、行きますね」

車のドアを開け、降りようとした。狙い通り、慌てた声が後ろから飛んでくる。

「ちよっ、ちよっと待ってください。分かりました。彼らのところに行きましょう」

「本当ですか！ ありがとうございます」

自分でも現金だとは思ったものの、今はそれを気にする暇はない。頭を下げ、席に戻る。

「本当に、言い出したら強情みたいですね、貴女は。護衛するのも一苦労ですよ」

「……ごめんなさい」

素直に謝った。本当は、できるだけ迷惑はかけたくはないのだ。ただ、優先順位が違うだけのことだった。

「構いませんよ。僕も、待っているだけは落ち着きませんでしたから。みんなが戦っている中、自分一人だけ外にいるのは性に合いませんし」

部下の男は笑みを見せ、エンジンをかけた。けたたましい音の後、ゆっくりと車を動かし始める。

「さあ、行きますよ」

「はい」

サリアは大きくうなずいた。

（待っててね、カリク）

まだはつきりとは分からない、自分のすべきことをするために、大切な少年の元へ向かった。

十九章 『つながり』

左の肩口から、右の脇腹付近まで、三日月のような形で切り込みができていた。カリクの身体にである。赤黒い血が、吹き出した。右膝をつく。地面に転がってしまいたかったが、左足を貫いている剣が、それを許さない。両手について、うつむく。もう、痛みなどという感覚を通り過ぎていた。呼吸が、うまくできない。リズムが崩れていた。

「まだ生きていますか。ずいぶんな生命力ですね。もう、尽きかけですが」

頭上から、ミッドハイムの声が降ってきた。今までのように、言い返すことができない。顔を上げることすら、ままならなかった。

「カリク！」

少年の、鋭い声上がる。レインが、ミッドハイムの方に突っ込んできたのだ。怒涛の連撃を見せるが、ミッドハイムは片手だけで渡り合ってみせた。カリクの足から、剣はずれない。

「太刀筋が、単純ですよ。小振りの強みである機動力すら削がれています。感情だけで、私を倒すことはできませんよ」

一本だけで、次々と攻撃をいなしていく。レインは歯ぎしりするが、どれだけ攻撃しても、届かない。

カリクも攻撃に加わりたかったが、とてもそんな余裕はなかった。自分の状態すら、満足に把握できないのだ。戦闘など、できるわけがない。

「ずいぶん必死ですね、レインロード。私に勝ちたいのなら、カリクシエードは時間稼ぎに切り捨て、少しでも他の兵を削るべきでしょうに。何をそんなに、この少年にこだわるのですか」

届かない刃を振り回すレインに、ミッドハイムが問いかけた。確かに、ニツクならまだしも、レインが必死になる理由はない。

「そんなに難しいことじゃない。カリクは俺たちを、“レイン”と

して見てくれた。長い間、実験用の人間の一人として扱われてた方としては、感涙ものでね。そんな奴を、簡単に切り捨てられる人間がいたら、殴つてやりたいくらいだ」

だが、なんてことのない理由を、彼は語った。打算や理論を度外視した、真つ直ぐな感情だった。

「なるほど。なんとも素晴らしくて、吐き気のする考えですね」
ミッドハイムは、冷めた顔をして、レインを弾き飛ばした。

「感情では、何も変えられはしません。変えられるのは、ただ力で。私には、力がある。私は選ばれた特別な人間なのです。感情ごときに、負けるはずがない」

吐き捨てるように言った。体勢を直したレインが、再び突っ込む。「知らねえよ、あんたの考えは。勝つた方が強い。それだけだろ」
「それは違くないですね」

刃と顔突き合わせ、言葉を交わした。膠着する。
「そう思っているのなら、私に勝ってみせなさい。無理でしょうがね」

「抜かせ。こういうとき勝つのは、大抵が俺たちちみみたいな方さ」
互いに強気な言葉を口にし、レインの方が距離を取った。カリクがすぐにでもとどめを刺されるような状態なので、間髪入れずに、レインは攻撃を繰り返す。しかし、何度やっても、傷一つつけられなかった。

「大口を叩いたわりには、私に刃一つ届いていないではないですか。呆れてしまいますね」

ミッドハイムが、嘲りの表情を浮かべる。レインは、歯を食いしばって挑発を聞き流していた。

感覚すらはつきりしない中、カリクは必死に自分の生をつなぎ止めていた。限界を優に越えた出血量ながら、気絶せずにいるのは、ただただサリアへの想いだった。彼女のために、死ぬわけにはいかなかった。もう一丁手元にある拳銃のことが、頭によぎる。すると、左足を固定している剣が、さらに深くめり込んだ。悲鳴は出ず、静

かに「ぐう……」という呻きだけを漏らす。

「無駄な抵抗はしない方が身のためですよ。苦痛が増えるだけです」
心を読んだミッドハイムが、冷たく言い放ってきた。だが、やめるつもりはなかった。もし、レインと戦いながらもカリクを斬れるなら、とつくに足に刺してある方の剣の方を抜いて、それで命を断たれているはずである。実際はそうなっていないことから、気が削がれ、とどめを刺す余裕がないのだと判断していた。

「瀕死でありながら、そこまで考えを組めるとは。本当に、貴方がたは面倒です。忌々しい」

ミッドハイムはレインのナイフに対応しながら、舌打ちしてきた。遠慮なく、そんな彼に銃を向ける。

「いいぜ、カリク君。一発ぶち込んでやれ！」

レインの顔に獰猛な笑みが浮かぶ。返事はできなかった。代わりに、行動で示す。無言で、銃弾を放った。

瞬間、左足から一気に剣が抜かれた。なけなしの力で、ミッドハイムとなんとか距離をとる。弾は、カリクの足から離れられた剣で弾かれた。

そこでもう限界だった。カリクは仰向けに地面へ転がった。歪む視界の中に、星の瞬く空がある。

緩やかに首を動かし、周囲の状況を見た。敵の数は、かなり減っている。時間稼ぎが効いていた。ただし、味方もかなり体力を消耗している様子だった。レインは必死にミッドハイムとぶつかっているが、動きが鈍い。ガヌとシルラは、自分と互いのことで精一杯になっていた。ニックは他のメンバーのフォローをこなしているが、時折浮かべる苦悶の表情から、かなり厳しいことがうかがい知れた。全員が、必死に戦いを続けている。なのに、カリクは動くことすらままならなかった。銃は右手に掴んでいるが、撃てそうにない。

「情けないな」

一人つぶやく。首都に意気揚々と乗り込み、サリアを助けるために奔走してきた。彼女のために、軍王に戦いを挑んだ。その結果が、

今の体たらくだ。何も、完遂できていない。中途半端だった。終われないとは思うものの、意識は遠退いていく。

(サリア……)

幼なじみの名前を頭の中で呼び、目を閉じていく。このまま眠ってしまうつもりだった。落ちるまぶたへ抵抗することもできなかった。

その声が聞こえるまでは。

『カリク!』

強い呼びかけが、心に響いた。頭から、爪先まで染み渡る。

「サリア……?」

閉じかけていた目を開ける。気のせいかと思ったが、

『カリク! しっかりして!』

もう一度聞こえた声に、意識がはつきりと引き戻された。間違いなく、彼女の“力”によるものだった。周囲のざわめきからも、幻聴ではないことは確かだった。なんとか身体を起こし、後ろを見る。一台の車が、乗り込んできていた。速度を下げてきているとはいえ、止まり切っていない状態で助手席から少女が飛び降りてくる。

「カリク!」

今度は、肉声だった。どんどんこちらに近づいてくる。

「なんだ、あいつは!」

一人の兵士が、場違いな少女に銃口を向けた。瞬間、その兵士の右腕が身体から離れる。背後に軍王が立っていた。

「あの少女は、私の計画の最重要人物ですよ。銃口を向けるなんて、とんでもない」

痛みで悲鳴を上げる部下をまったく気に留めず、他の兵士たちにサリアを狙わないよう命を飛ばす。

「傷つけずに捕らえなさい。流れ弾でも、当たったらことです。全員、近接戦闘に切り替えなさい」

明らかに、首都軍の方に動揺が広がった。人数差を持って押し切れていないのだ。近接だけで勝てるとは思えなかったのだろう。

「カリク、大丈夫!？」

件の少女が、カリクへ駆け寄り寄ってきた。そばにしゃがんだ彼女に、上半身を支えられる。

「サリア、なんで戻って……」

「声が、聞こえたから」

「声……?」

意味が分からなかった。それは、サリアの力のはずだ。

「カリクが私を呼んだ声が、確かに聞こえたの。耳にじゃなくて、私の心に」

確かに、瀕死の傷を負い、何度も彼女のことを思った。その名前を頭の中で呼んだ。だが、カリクにその想いを届けることは不可能なはずだった。

けれど、

「……そうか。ありがとう、サリア」

そんな疑問は些細なことだった。想いが届いた。ただ、それだけのことだった。

来てほしくなかったという感情もあった。危険な場所に、大切な少女をいさせたくなかった。それでも、今、目の前に彼女がいること。それは、カリクにとって、大きな活力になる。

「来たんなら、護ってやらないとな」

さつきまで、起き上がることにすらままたまなかった身体が、意志の通りに動く。霞んでいた視界が、開けてくる。身体の熱さは、傷の痛みによるものだけではなくなっていた。

「馬鹿な……」

軍王ですら、額にしわを寄せた。本来なら、カリクはもう動ける状態ではなかったのだ。カリクも自覚があったが、今はそんなことはどうでもよかった。サリアを護りきる。それが、すべてだった。ゆっくりと、腕を上げていく。

「ちよつとばかり居眠りしちゃった。悪かったな。もう一回、仕切り直した。サリアは、絶対に渡さない」

銃口を敵へ向けたところで、自然と笑みが出る。いよいよもって、限界を超えていた。

「どうやら貴方は、すっかり首をはねないとならなそうですね」

軍王が、目を据えて睨みつけてきた。カリクの異常とも言える戦線復帰に、気を立てている。

「いい加減、死になさい。勲章くらいは差し上げましょう」

「いらねえよ、そんなもの。欲しいのは、あんたのいない、サリアとの未来だ」

サリアを庇うように左手を伸ばす。カリクにとって、戦いのすべては彼女にある。

「あんたの野望は、ここで終幕だ」

不死鳥のごとく、またも軍王の前へと立ちはだかる。さっきまでと違うのは護るべきものが、すぐそばにあることだった。

ただ、彼女のために、何もかもを超越する。

「マルク！ これは、どういうことだ」

軍王と向き合った息子と、娘に等しい少女を横目に、ニックは護衛を命じたはずの部下に呼びかけた。彼も車から降りており、武器の剣を振るっている。

「彼女の心に従ったまでです。カリク君からの呼びかけが届いたそうでした。 “力” のこともありますし、それに従ったんです」

「よし、建前は理解した。本音はなんだ」

「皆が戦っているのに、一人傍観なんてまっぴらです。命令違反なのは承知の上ですが、処分は後でお願いします」

部下は、迷わず本音を口にした。ニックは、口元を緩める。

「何を言っただ。俺は、“サリアの護衛” を命じたんだ。あの子を護っているなら、命令違反でもなんでもない」

さらりと言っただけのけた。部下の口角が上がる。

「それでこそ、ニック少将です。さすが、分かっているらしい」

「何を感謝してるか知らないが、しっかり戦えよ。まだ、何も終わ

「つちやいねえ」

「分かってますよ。失望はさせません」

「そうか。期待させてもらうぞ」

「ええ、どうぞ」

そこで会話を切り、二人は戦いに集中し直す。敵の数は、かなり減っていた。

敵を立て続けに撃ち、弾をこめ直しているところで、ニックは視界の端に、先ほどカリクの手から飛んでいった拳銃が映った。敵に阻まれてとれそうにはなかったが、誰も拾う気配を見せなかった。

サリアを背に、カリクは考える。まともにより合っても、同じ轍を踏むだけになってしまふ。ただ攻撃を打ち合うだけでは、意味がなかった。ゆえに、考えている。どうすれば、勝てるのか。

「カリク……」

サリアが、不安げに声をかけてきた。心配させまいと、力強く返す。

「大丈夫だ。絶対に負けないから」

軍王の強さは、なんとといってもこちらの考えを読み取り、瞬時に対策を立てて実行できることにある。推測を必要としない能力と、戦場で養ってきたのである。この判断力によって、驚異的な速度で対応されてしまうのである。こちらの動きを読ませない、もしくは対応させない方法が必須だった。だが、そんなものは思いつかない。あれば、とうの昔に使っている。

「考えても無駄ですよ、カリク。シールド。そんなものは、存在しません。貴方は、ただ自分の死を受け入れればいいのです」

冷めた声で、ミッドハイムが告げてくる。負けの要素がないために、彼の自信は揺るがない。

どうしても、崩す必要があった。負けるはずがないという、自信と事実を。

「考えることをやめたら、それこそ本当に負けだ。だから、ただ受

け入れるなんてのは、ありえないな」

「そうですか。まあ、再三の忠告にも曲がらない貴方ですからね。もう私も言うのをやめましょうか」

言葉に続けて浮かぶ、余裕の笑み。傷一つ負っていない彼から、どうすればその表情を奪えるか。考えるしかなかった。

これまでと違い、ミッドハイムはゆっくりと歩み寄ってきていた。死の足音が近づいてくる。思案に割ける時間は、短かった。

驚異的な反応を潰すには、集中を乱すか、他のものに向けさせるのが一番有効だった。しかし、その他のものが存在しなかった。目の前にいる権力者は、自分の決めたターゲットがいれば、何が見えようとも、何が聞こえようとも、気を取られたりはしない。意図的に、シャツアウトしてしまうに違いない。

なら、シャツアウトできない“声”なら、どうなのか。

不意に落ちてきた事柄に、カリクは目を見開いた。意図せざるを得ないとしたら、集中は割けるかもしれない。

「サリア！」

うまくいく自信はなかったが、策の見つからない今、思いついたことはすぐに実行するほかなかった。後ろは向かずに、そこにいるサリアへ呼びかける。

「な、何？」

「“力”を使つてほしい」

「“力”を？」

唐突な頼みに、彼女は戸惑いを見せた。無理ない反応である。

「軍王に対して、無意味なことを“力”で言い続けてほしい。あいつの集中を、削げるかもしれない」

カリクの思いついた案とは、サリアの“力”で直接相手の心に干渉すれば、集中を乱せるのではないかというものだった。耳元で叫ばれているに等しいため、気に留めないというのが難しいことのはずなのだ。

「……分かった。やってみる」

「頼む」

短いやりとりを挟み、作戦を実行に移す。軍王の顔は、渋かった。「じゃあ、いくよ」

サリアがそう言っつて、目を閉じた。ミッドハイムだけを対象に、“力”を発動させる。カリクには、本当に発動しているかどうかを確認できなかったが、黙り込んだサリアを見て、信じる。

「無駄なことを」

ミッドハイムは、せせら笑っていた。一見、余裕である。だが、外見からだけで判断するのは尚早だった。実際に戦ってみなければ、分からない部分がある。ゆえに、銃を構え直す。

「無駄かどうかは、今から俺が判断する。あんたが決めることじゃない」

カリクは言い終わると同時に、立て続けに二発撃ち込んだ。ミッドハイムは、なんのこともなしに防いだが、微妙な違和感があった。勘違いもありえるため、さらに攻撃する。次の一発を、彼は右に身体を逸らして避けた。

わずかに、動きが鈍い。

かなり巧妙に隠そうとしているのだが、カリクの目は誤魔化されなかった。ほんの少しながらも、勝機を見いだすことができる、わずかな希望。サリアの“力”によって、思考を邪魔されているに違いなかった。

攻める、攻める。引き金を、どんどん引いた。狙いはあまり正確に定めない。必要なのは、手数だった。

「そもそも、あんたの力も“オモイノチカラ”だ。あんたが情報を得るのも心で、サリアが干渉するのも心だ。同じ心で、物事を二つ同時には処理できないみたいだな。動きが鈍ってる」

ミッドハイムの肩に銃弾がかすり、かすかな血が出る。ついに、傷を負わせることに成功したのだ。

「証明には、充分だろ」

煙を上げる銃の先に、鋭くこちらを睨むミッドハイムの姿が映る。

怒りが、そこには見えていた。

「確かに、動きは鈍っていますね。迷惑なことに、貴方の幼なじみが、先ほどから無意味な言葉を羅列しているものですから」

自分の状態を認めた上で、彼は堂々と言い放つ。

「ですが、何も私は“力”だけの人間ではありません。それなしでも、貴方程度は、倒せます」

「軍王は伊達じゃないってか。上等だ。俺は、あんたに勝つ。サリアのために」

手元で弾倉を替えながら、カリクは言い返した。負けない意志が、先ほどよりも大きく胸の中で燃え上がる。

二人は睨み合い、戦いの空気をうかがう。カリクはもう、頭では考えていなかった。事前にどんな風に戦うかシミュレーションしても、軍王相手には意味がないと思ったからである。自分の経験と勘そして運に任せるしかなかった。

周りの音はすでになかった。カリクの集中は、最高潮に達している。対峙している、ミッドハイムだけを見据えていた。サリアのことも気になっているのだが、他のメンバーを信頼して、そちらに気は割かない。自分の役割は、眼前の敵を倒すことだった。

トンと、軽い足音が鳴る。ミッドハイムが、踏み込んできた。右から左へ、剣が流れる。カリクは至近距離から頭部を狙って発砲したが、もう一方の剣で防がれた。さらにもう一発いく。今度は首だけの動きで狙いはずされたが、頭皮をかすり、赤い液が一筋、ミッドハイムの眉へと流れ落ちる。

その光景に目を凝らす余裕なく、刃が下から襲ってきた。紙一重でかわす。それだけではなく、銃弾を返してやった。今度は、耳をかすめた。そこから、血が出る。

ミッドハイムは舌打ちし、右払いを出してきてから、距離をとった。攻撃を避けたカリクは、好機と捉える。遠距離武器を持っているこちらに対し、近距離の武器を持った敵が一度引いたのだ。逃すわけにいなかった。

反動のタイムラグを挟みつつ、とにかく撃つ。撃ちまくる。弾かれても、避けられても、止めない。ほんの少しの集中の欠けが、ミッドハイムに攻撃を届かせる。足に、腕に、頬に、弾がかかる。ただ、致命傷には程遠い。まだ、手が足りなかった。絶対的な決め手が、足りないのだ。

このまま攻め続けても、ふとした拍子に形成をひっくり返される。そう危惧したカリクは、もう一手がほしかった。ミッドハイムに向けていた注意を、幾秒か周囲へ広げる。五人の人間が、カリクを集中させるために、必死に他の兵士と戦っていた。

その面々の中の一人が、カリクをちらりと見た。すぐに、別の場所へ目を移す。その後は、また自分の敵へと向き直った。一瞬のことだったが、カリクは理解した。試す価値は、充分にある。今のミッドハイムは、効率的に力を行使できていないのだ。

重要なのは、カリクが求めるタイミングだった。それを見極めなければ、空振りに終わる。心を読む力を出し切れないとはいえ、ミッドハイムの地力は、かなり高い。間違えてしまったら、策が無駄になってしまう。

弾を撃ち尽くし、入れ替えをするために隙が生まれる。かすり傷の増えたミッドハイムが、襲いかかってくる。胸部に突きを出してきた。右手にナイフを持ち、軌道を逸らす。脇腹をかすったが、気にならなかった。銃を横に振って弾倉を戻し、敵の顔面に向ける。容赦なく、引き金を引いた。放たれた弾丸は、額にこそ当たらなかったものの、また顔に傷を増やした。相手の攻撃をかわすため、後ろに下がる。

「どうしたよ。目に見えて動きが悪いぜ」

「言われなくても、自覚してます。余計な口を聞いていると、死に方が悲惨なものになりますよ」

距離を置いたところで、カリクは軽口を叩いた。ミッドハイムが忌々しそうに表情を歪める。

「ごめん被るな。それに、まず俺はあんたに殺されやしない」

負けん気を完全に取り戻し、銃とナイフを手元で遊ばせる。勝ちを、先ほどよりは引き寄せている気がした。しかし、まだ油断はできない。

「たかだか、この程度で調子に乗りますか。まだかすり傷しか負わせてられてないでしょうに」

ミッドハイムが、機嫌悪く言う。確かに、致命傷に足るものは、なかなか負わせられそうになかった。だが、退きはしない。

「さっきまでと比べれば、大きな進歩だ。進歩するのは、止まることがない。だから、あんたにも勝てる」

「屁理屈を。貴方は退化する方でしょう」

「いや、退化するのはあんたの方だろ」

互いに、口角を上げる。ギスギスとした笑みだった。

「それに、周りを見てみる」

カリクがそう促すと、ミッドハイムはためらいがちに周囲へ目を向けた。

「形成は、圧倒的にこっちが有利だ」

彼の部下は、もうほとんどが倒れていた。今のペースでいけば、全員を片づけるまで、そこまで時間はかからなそうだった。

「まさか、たった六人でここまで……」

さすがに動揺が隠せないようで、目を見開いた。カリクは、銃を向け告げる。

「言っただろ。あんたの野望は、終わらせるって」

「貴様……!!」

ミッドハイムの口調が、一気に尖った。

「私の野望は、こんなところで終わりはしない! やっと、心に干渉できる人間を手中に収めたのだぞ! 貴様らごときに、つぶさせるものか!」

荒っぽく声を上げる。頭に血が上っていた。

「だったら、せいぜいあがけよ、軍王様。俺すらも倒せないあんたの野望なんざ、何百年かけても叶いやしない」

「なめるな、カリクシード！ 私の野望は、終わらん！」

叫ぶように言い、剣を威嚇的に振り下ろす。ついていた血が、地面に飛んだ。

「終わるんだよ、絶対に。俺が、そう決めた。サリアのためにそうしないとならないから。俺は、あいつのためならなんだってできる」
あきらめる様子のないミッドハイムと真つ向から睨み合い、カリクは断言する。サリアのために。その想いを心の真ん中に打ち立てたから、ここにいるのだ。

「あんたには分からないだろうな。自分のためにしか戦ってこなかったあんたには、誰かのために戦う意志の強さが」

カリクたちは、全員が誰かのために戦っていた。一緒にいる未来を掴むために、必死に生き残ろうとしている。自分の野望のために生きるミッドハイムとは対照的だった。

「綺麗事を。分かりたくもありませんね、そんなものは」

「そうかい」

突っぱねられたものの、わざわざ説得する気はなかった。軽く流し、会話を終わらせる。訪れた沈黙は、重たかった。

怪我の痛みは、まったく感じなかった。呼吸すら、乱れていない。ミッドハイムに、致命的な傷を与える準備は整っている。後は、タイミングだった。

カリクは、迷うことなくこちらから攻めに出た。銃弾をどんどん撃ち込んでいく。ミッドハイムは、すべてを防ぎきる。

「単発で倒されるほど、弱体化してませんよ」

「みただいな」

カリクが肩をすくめる。そんなことをしていると、あちらが踏み込んできた。もう何度と見てきた太刀筋を、完全に見切る。疲れを感じさせないほど、身体を逸らせた動きは、素早かった。

上からの剣撃も、ナイフを力強く振って、弾き返す。腹部を狙って、撃ち込んだ。ミッドハイムは身体をひねって回避しようとしたが、脇腹に当たった。苦悶の表情を浮かべ、「ぐう……」と呻く。

「さつきまで、遅いのはあんただだったのにな。哀れなもんだ」

「調子に乗るなど、言っているはずです。カリク＝シールド！」

叫ぶように言い放ち、彼は最速で剣を下から上へ振り切った。カリクの左肩から、血が迸る。だが、

「なんかしたかよ、軍王様」

カリクはまるで、なんのダメージも負っていないかのような反応だった。

「なっ……」

「ボーっとしていいのか」

傷を気にせず、右手のナイフを相手の腹部に突き立てようとする。しかし、身体の前に回された剣に阻まれ、届かなかった。ひるまず、銃口を向ける。撃ち出された弾は、もう一方の剣で軌道を変えられたものの、軍王の腕にかすった。

「このっ……！」

十字のような形の持ち方から、ミッドハイムは剣を内に引き、一気に左から右に払う。カリクの身体には届かない。逆に、脇腹目掛けて一発くれてやった。位置をずらしてきたので、よけられてしまったが。舌打ちする。

と、ナイフを止めていた剣を急に放してきた。カリクは対応できずに、つんのめる。腕を持っていかれると思ひ引いたが、振り上げられた剣に、ナイフを飛ばされた。

「ちっ！」

ひとまず間を置こうと、重心を元に戻し、後ろへさがる。だが、ミッドハイムは見逃してくれない。ここぞとばかりに、踏み込んできた。斬り合いに対応できない。避けるしかなかった。

「どうしました、カリク＝シールド？ 先ほどまでの威勢は、どこにいったのですか！」

集中を欠いてなお、振るう剣の軌道は無駄がない。だが、確実に遅くなっていた。

「優勢に戻ったからって、いきがるなよ。トップたる人間に見えな

いぞ」

肘をわずかに曲げ、腰近くから一発放った。攻撃の一つに、ついでのごとく弾かれる。

「人の上に立ったこともない若造が偉そうに。トップたるに必要なのは、ただ力です。貴方も、その力に沈む。この運命は、変えられない！」

叫びとともに、二本の凶器がカリクの胴体を挟むように迫ってくる。

「運命だのなんだの、うるせえよ」

するとカリクは、中に踏み込み、右足を交差しているミッドハイムの両手首の間に突っ込んだ。驚きからか、目を見開かれる。

「そんなもん、自分でどうにでもする。他人からの運命づけなんて、一番信用できないしな」

ミッドハイムが剣を引き、今度は突いてきた。軽く身をかわし、銃口を向ける。瞬間、敵が笑みを見せた。もう片方の剣が振り上げられ、銃を弾かれる。

「油断しましたね。所詮はその程度です！」

突きを繰り返した剣を引き、もう一步踏み込んできた。そこでカリクは、

「あんたがな」

突きをかわした瞬間に、“ニックが拾っていて、カリクに投げ渡されていた銃”を、ミッドハイムの頭部へと構えた。ためらいなく放たれた銃弾は、驚愕が浮かんだ顔へと飛んでいき、額に穴を空けた。

カリクの腰へ向かってきていた剣の速度が遅くなり、やがて止まった。ミッドハイムは「う、あ……」と、言葉にならない音を発し、カリクを仰ぎ見て、倒れた。垣間見える顔の額からは、赤く黒い液体が、ドロリと流れ出ていた。

「これも運命、だろ」

ポツリと、つぶやいた。

二十章 『日常へと』

地面にミッドハイムが倒れた後の静寂は、長かった。その場の全員が、自分たちの戦いを忘れ、額に穴を空けている頂点だった男と、それを見下ろすカリクに目を向けてきていた。だが、カリクはすべてのを無視する。たった一人を除いて。

「サリア」

幼なじみの少女へと、呼びかける。彼女もまた、きよとんところらを見ていた。

「全部、終わりだ。もう、心配しなくていい」

「……うん」

話しかけると、少し間を置いてから、穏やかにうなずいてきた。

自然とカリクは微笑む。それから、彼女のそばへと寄り、

「あれ……？」

その肩に倒れかかった。急に、足の力がなくなってしまったのだ。他の部位も、力が抜けていた。

「カリク！？ 大丈夫！？」

とても近い位置で、彼女の声がする。だが、今度は意識をつなぎ止めてくれなかった。

「カリク、カリク！」

何度も名前を呼んでくれているのが分かった。それでも、視界が霞んでいくのは止まらない。

（サリア。ちゃんと、お前に言わないとな……）
意識が薄れゆく中、そんなことを考えていた。

「カリクッ！！」

サリアの腕の中で、意識を失ったカリクへ駆け寄ったのは、ニックだった。

「ニックさん、カリクが、カリクが」

「分かつてる。とにかく、まずは横にするぞ」

サリアの言葉に、彼は強い口調で返し、カリクの身体を地面へと寝かせた。呼吸や脈を、手早く確認していく。

「呼吸は大丈夫だが、いかんせん血を流しすぎだ。早く、輸血できる設備に入れないとまずい」

カリクの服を破り、大きな傷口の止血のために身体へ縛りつけていった。しかし、地面にはおびただしい量の血が流れていく。

「ガヌ！ この場はお前が掌握しろ！ 誰にも手を出させるな！」
処置をしながら、ニツクは叫んだ。名前を呼ばれ、ガヌは、

「は、はい」

と、彼らしくない生返事を返した。

「全員、武器を置け！ 貴様らの目には、現実が見えているはずだ。軍王は倒れた。もう、勝負は決している！」

そこで声を上げたのは、シルラだった。まばたきを繰り返すガヌを無視して続ける。

「まだ戦うつもりの者はあるか？ もう、意味はないぞ」

敵兵たちは、まだ戸惑っていた。目の前の光景を、受け入れられていないのだ。一人の兵士が、「この……」と、ニツクへ銃を向けたが、その首にナイフが突きつけられた。

「おっと。無駄なことはよした方がいいぜ。こっちも、これ以上のいらぬ殺生は避けたいんでね」

レインが、真剣な表情でその兵士の隣に立っていた。

そのやり取りを見て、他の兵士たちは武器を置いた。地面に、大勢の仲間が転がっていたのも影響している。戦意を、失っていた。

シルラが、様子の変異を見て、また声を上げる。

「よし。まず、門前に誰か伝令へ行け！ もう戦う必要はない、双方共にな」

だが、誰も動かない。周りを見回していた。見かねた彼女は、鼻を鳴らして指示を飛ばす。

「ふん。その三人！ 東門へ行ってこい。そっちの六人は、二人

一組で他の門で待機している兵士たちに伝令へ行け。軍王が落ちた。戦いは終わりだと」

「は、はっ！」

実際のところ、相手の階級がまったく分からなかったのだが、今はそんなことを気にしている余裕はなかった。勝てば官軍なのだ。

「他の兵は、建物内に戻って、一階のホールに集まっておけ。中の兵にも現状を伝えるように。それから救護室を開ける。医療班にも準備をさせておけ。負傷者は分担して連れていくのだぞ。マルク少尉も一緒について行ってくださいませんか」

「構いません。監視は必要ですから」

ニツクの部下の男は簡単に了承し、敗兵の一部と共に基地内に入っていた。他の兵士たちも、まだ現状が理解し切れていない様子で、息のある負傷者を背負い、各々中に入っていく。

駐車場に残ったのは、カリクとサリア、ガ又にシルラ、それからニツク、レイン、後は死体の山だった。

「……お見事」

ガ又が、苦笑いを浮かべて言った。シルラは腕を組んで言葉を返す。

「総督室でのノツクの件のお返しだ。お前に、いつまでも借りは作って置きたくないのでな」

「さいで」

彼女に対し、ガ又は肩をすくめてみせた。それから、真顔になる。シルラも、彼と同じ方を向いた。

「ニツク少将、ご子息の様子は」

控えめに、彼女は尋ねた。ニツクは、振り向かずには答える。

「とにかく、危険な状態だ。だが、俺たちにこれ以上できることはない。医務室に運んで、その後どうなるかは、こいつの活力次第だ」
感情を抑えた声だった。

「それより、お前ら二人も中にいけ。マルク一人じゃあ、心許ない。レインは残って、こいつを運ぶのを手伝ってくれ」

続けて彼は、三人にそれぞれ指示した。ガヌとシルラはうなずき建物の中へと移動する。レインは「分かったぜ」とニツクの横にかがんだ。

「身体は俺が持つから、レインは荷物を持ってやってくれ。それから、頭部が不安なんぞでな。そっちの支えを手伝ってくれ」

「おう」

ニツクの指示に、彼は素直に従った。スムーズに進むやり取りに、不安げにサリアは声を挟む。

「ニツクさん、私はどうしたら……」

すると彼は、静かに言った。

「手でも握つといてやれ。。こいつを、こっちに引き留めておくために」

「……はい」

サリアははつきりと応えた。さっきまで銃を握っていた、カリクの汚れた右手に自分の手を重ね、包み込む。

「よし、医務室に行くぞ」

ニツクは呼びかけると、首の後ろと膝に、下から手の支えを入れて、カリクを抱え上げた。幼なじみの手を握っているサリアは、中途半端な立ち位置になったが、手を離したりはしなかった。周りからも、何も文句は言われない。そのまま、建物へと向かった。多くの死体を、放置して。

軍王のものも、その中であつた。

気がつくと、カリクは故郷の町にいた。ただ、様子がおかしい。大通りに立っているのだが、人っ子一人いないのだ。唐突に、これは夢なのだと自覚する。

「カリク〓シエード」

と、誰かに話しかけられた。後ろを向くと、そこには額に穴を空

けたノーザンとミッドハイムの姿があった。思わず、息を飲む。

「お前の行く先も、“こつち”だろう。俺たちを殺しておいて、お前だけ“あつち”に戻れると思っっているのか」

「そのとおりです。貴方はすでに立派な“人殺し”。そんな貴方が、彼女のそばにいていいとお思いですか」

二人は順に、言葉をかけてきた。カリクの身体に、絡みつく。気づくと、言葉どころか、自分が手をかけた二人が、足に絡みついていた。

「離せ！」

じたばたして叫ぶ。しかし、抜け出せない。

「さあ、一緒にこい。お前は、サリア＝ミュルフとは生きていけはしない」

「我々と同じ場所へ、墮ちるのです」

足元はいつの間にか真つ黒な空間が広がるばかりになっていて、故郷の街並みも消えていた。だんだんと、下へ下へ引つ張られていく。

その時、

『カリク！』

彼女の、澄んだ声が聞こえた。頭上から、細く白い腕が伸びてくる。

「あつちに行けるのか。人殺しのお前が」

「……行けるさ。あいつが、サリアが俺を望むなら」

「望まなかったら、どうするのです」

「望まないなんてことはないな。あいつと俺は、一緒に生きていく。お前らが手出しできるような間柄じゃないんだよ」

まだ足元からは、あれこれと聞こえていたが、すべて無視した。差し伸べられた手を掴む。サリアのいる世界へ、戻るために。

ゆっくりとまぶたが開いた。ぼんやりとした意識の中、最初に見えたのは、見慣れない天井と、自分の顔を覗き込んできている、少女の姿だった。

「カリク！」

サリアが、そこにいた。声を上げ、首もとに抱きつかれる。

「サリア……」

現状が理解できていない中、自分に抱きついてきた少女の名前を口にした。左手を動かし、彼女の頭に触れる。

「どうしたんだ、サリアちゃん」

と、奥の方からまた別の聞き慣れた声が出た。寝たままのカリクは、目線だけをそちらへ向ける。父親であるニックがいた。こちらを見るなり、駆け寄ってくる。

「カリク！ 目が覚めたのか」

サリアと逆側になると、目を見開いた。手をベッドの端に置き、顔を近づけてくる。

「あ、ああ」

今までになく、浮き足だった様子の父親に動揺しながらも、軽くうなずいた。

「よかった。本当によかった……」

サリアが、涙ながらに言い、さらに腕の力を強めた。

「ああ、本当によかった」

ニックも泣きそうなのか、少し高い声で同意する。そこまできくようやくカリクの記憶が蘇った。一瞬、跳ね起きようとして、サリアの腕の力を感じ、やめる。

「ミッドハイムは、戦いは、どうなったんだ？」

ニックへと尋ねた。

「覚えてないのか？ ミッドハイムは、お前がトドメを刺したんだ。我が息子ながら、未恐ろしいこった」

「ちよっと、ニックさん。そんなこと、言わないでください。カリクは、そのせいで死にかけたんですよ」

安心から出たニツクの軽口に、サリアが苦言を呈する。彼は、「悪い」と軽く頭を下げた。そんなやり取りを耳に挟みつつ、カリクは自分の最後の記憶と照合する。

ミッドハイムを倒したところまでは、かろうじて覚えていた。自身の手で、けりをつけたのだ。ただ、その先はまったく覚えていなかった。

「なあ、親父。ミッドハイムに勝ったところまでは覚えてるんだか、その後は、どうなったんだ？ 俺自身のこともそうだけど、東部軍も戦ってたんだろ？」

その補完をしようと、ニツクに尋ねた。

「ああ、まあ、その後、すぐにお前は気を失ったからな。大変だったぜ。なんせ血を流しすぎていたからな。止血はしたものの、輸血して間に合うかは怪しかった。幸い、結構な人数から輸血してもらったから、助かったが、三日も目を覚まさなかったから、心配したんだぞ」

「三日も？」

言われてみると、身体が異常にだるかった。食事もろくにとれておらず、エネルギーが足りないらしい。

「ああ。それだけ、危険な状態だったんだ。気が気でなかったな」「本当に、心配したんだからね。カリクが、もう目を覚まさないんじゃないかと思ったら、不安で仕方なかった」

耳元で、サリアから伝えられた。恥ずかしさから、離れてほしかったのだが、何もできなかった。

「無事に目を覚ましたから、よかったがな。サリアちゃんなんて、ずっとつきつきりでそばにいたんだから、お礼はちゃんと saying おけ」

「ん、ああ。ありがとう、サリア。心配かけたな」「ニツクに促され、カリクは礼を口にした。サリアは、涙声で応える。

「いいよ。ちゃんとこうして、起きてくれたから」

腕の力が強くなる。苦しさを感じるほどだったが、同時に強い想いも感じた。ほどこうとはせず、目を細める。

「で、戦いの方だが、お前がミッドハイムを討ったことで、中央軍は戦闘理由をなくして全員が武器を捨てた。まあ、一部に関しては捨てさせたってところだがな」

ニツクは、微笑を浮かべながらこちらのやり取りを見つつ、話を続けた。

「今は、俺が便宜上リーダーになってる。実際には、首都軍の信頼の置ける高官に表に出てもらってるけどな」

「じゃあ、完全勝利ってわけか」

カリクがそう言うと、彼は一転して顔をしかめた。

「完全な勝利なんて、ない。戦争に比べれば少なくとも、死んだ奴はいるんだ。両陣営にな。死者がいる時点で、完全勝利なんかじゃねえ。寝起きのお前に、こんなことは言いたくないが、言葉には気をつける、カリク」

自分の部下だけでなく、自らが手に掛けた中央軍の人間たちのことすらも悼んでいるようだった。父親の姿に、息を吐いて目を閉じる。

「悪い」

率直に謝った。

「……分かれればいい」

ニツクは、静かに言った。話を戻す。

「とにかく、それで首都は落ちた。ミッドハイムに従っていた上層部の連中は、大半を切ることになるだろうな。みんな、盲目的に軍王についていっていたみたいなんで、この先は役に立たなそうだったから」

「それだけ、奴のカリスマ性が凄まじかったんだろう。それに、世界をとるなんて絵空事が、現実に行えるかもしれない手段を見つけていた。力もあった。必然的なことに近かったんじゃないか」

冷静に、カリクは分析した。サリアを利用するような人間でなけ

れば、自分もあちら側だったかもしれない。偶然に、敵対していただけのことなのだ。

「これから、政治はどうするんだ？　今までは、ミッドハイムが独裁をしてきたんだろ」

「たぶん、議会制にするだろうな。しばらくは、軍で人員は選出するだろうが。ああ、忙しくなりそうで嫌だ」

カリクの問いに答えるニツクは、言葉とは裏腹に楽しげだった。「命を落として、この先の未来をくれた奴らがいるから、不満なんて言ってる暇なんてないんだけどな」

その態度の理由は、すぐに分かった。彼は、すべてを背負っているのだ。敵も味方も、何もかも。

「親父が、先頭に立つのか」
覚悟が見える父親の態度に、カリクはそう問いかけた。うなずきが返ってくる。

「そうなるだろうな。改革の急先鋒だ。前に出ないわけにはいかない。かといって、トップに立つつもりはない。窮屈になって、動けなくなっちゃう」

「具体的に、どう変えていくつもりなんだ？」
「とりあえず、こつちから他国に侵攻したりはしない。あとは未知数だ。国民の反応もあるしな。俺はこれから、大勢に命を狙われることになる」

ニツクは、自嘲気味に微笑んだ。ミッドハイムは、カリクたちにとっては明確な敵だったが、国民からしてみれば、特に害のある君主ではなかった。クーデターが評価されるとは考えがたい。特に戦争の推進派からは、敵対心を向けられる可能性が高かった。

「ニツクさん……」
サリアが、不安げな声を出した。義父ですらないが、父親代わりの人間なのだ。心配するのも、無理はなかった。

「そんな顔するなよ、サリアちゃん。軍王を相手にしても死ななかつたんだ。そう簡単にやられたりしないさ」

しかし、ミッドハイムは彼女の心配をよそに、豪快に笑い飛ばした。

「確かに、殺しても死ななそうだな」

「本当に死にかけてたお前が言うな」

カリクが軽口を叩くと、側頭部をつつかれた。それほど、心配はいらなさそうだった。内心、かなわないと思う。

「まあ、こつから先の始末は、俺ら大人の領域だ。お前らが気にかける必要はない。未来への線路を、しっかり作ってやる」

「そうかよ。期待してるぜ、親父」

どうやら、今回の一件では、もうカリクの出番はないようだった。肩をすくめてみせる。

「ああ、しっかりやってやるよ」

会話が一段落したところで、

「失礼します」

「相変わらず堅いな、シルラは」

「カリク君、目覚めましたー？」

騒がしい声が病室に響いた。

「おっ、お見舞いが大量に来たぞ」

ニツクの目の動きに釣られ、カリクもそちらを見た。声とやり取りで分かっていたが、シルラ、ガヌ、レインがいた。ドタドタとベツドの方に近づいてくる。

「やっと目が覚めたんだ、カリク君。柄にもなく、俺っち心配しちやっただぜ」

レインが、明るくしゃべった。心の底から、喜んでくれているらしい。ただし、カリクはいつもの調子で返す。

「そうかい。そりゃ、ありがとよ」

「……なんか冷たい」

レインは、納得いかないというように、顔をしかめた。

「それより、邪魔しちやっただか？」

弟の様子に苦笑いしつつ、ガヌはカリクにそう問いかけてきた。

意図が掴めず、答えに窮する。

「気にしてないなら別にいいんだが、すごいくつついてるから気になつてな」

その言葉で、カリクは彼が言いたいことを理解した。途端に恥ずかしさが込み上げる。

「いや、これは別に……」

「気にしないでください。こうして、捕まえないと、また離れてしまふ気がして、不安なんです」

カリクが言い訳をしようとする、サリアが上から言葉をかぶせてきた。もう一度、抱きつき直す。

「だから、見逃してください」

「サリア……」

自分がいかに彼女へ心配をかけたのかが、ひしひしと伝わってきた。恥ずかしさなどより、ずっとずっと大事なことだった。

「そつか。なら、気にしない。怖い思いをたくさんしたんだ。誰も咎めやしないさ」

ガ又は、表情を優しい微笑みに変えた。シルラも目を閉じ、似たような笑みを浮かべる。

「ちゃんとそばにいてやるのだぞ、カリク＝シェード」

「……分かつてる」

事件の前まで、サリアを避けていた頃のことを思い出し、誓いを込めて応えた。一人には、もうさせない。

「それより、目が覚めたのなら、一度医師に見せてはいかがです？

何か問題があつたら、大変ですし」

カリクが決意を新たにしたところで、シルラが提案した。ニツクが同意する。

「ん、そうだな。ガ又は、ちょっと呼んできてもらえるか」

「お安いご用です」

頼まれたガ又はは、すぐに病室を後にした。

それから行われた検診で、特におかしな部分は見つからなかった。

ただ、傷がある程度治癒するまでの一週間ほどは、安静を義務づけられた。故郷へと帰るには、まだ時間がかかりそうであった。

「いや、なんとというか、鍛錬したわしですら驚かざるを得んな。本当に、お前が倒したのか」

「わざわざ嘘をつくところじゃないと思いますよ、お義父さん。それにしても、やっぱりあの人の息子ね。サリアちゃんのために、軍王すら倒すなんて」

二日後、祖父と母が首都へとやってきた。カリクが死の瀬戸際にいたので、戦いの後、すぐにニックが迎えを出していたのだ。

「別に、そんな大層なこととはしてない。サリアを取り戻すために立ち回ってたら、結果的にそうなったただけだ。国自体をひっくり返したのは、親父だよ」

未だベッドの上ながら、今のカリクは、上半身を起こして会話していた。医師が言うには、怪我の大きさからは想像できないほどに回復が早いらしい。ただ、動いていなかった分、だるさがあった。

「まあ、確かにそうじゃの。しかし、あやつもさしてお前さんと戦った理由はそう遠くないじゃろう」

「変わらない？」

祖父の発言に、カリクは眉をひそめた。

「そうじゃよ。お前とは違って、ニックは戦いばかりの軍をよとしておらんかったが、戦った一番の理由は、サリアちゃんだったじゃろうからのお」

だが、続けての言葉に、合点がいった。父親もまた、サリアのために動いたのだ。

「そういえば、そのサリアちゃんは、どこにいるの？ 私、まだ顔を合わせてないんだけど」

区切りのいいところを見計らっていたのか、ちょうど会話が切れ

たところで、間にマリーが入り込んできた。

「サリアなら、父さんと一緒にいると思う。あっちはあっちで、色々話があるんだろう」

「あら、嫉妬してる？」

カリクが答えると、彼女はクスクスと笑った。その反応に、顔をしかめる。

「してない」

「そう？ なら、いいけど」

否定を聞くと、余計に笑い方はいやらしくなった。何か言えば言うほど面白がられるのを察し、口を閉ざす。一人、流れが分かっているトルマが、困惑を顔に出し、カリクたちを見比べていた。

そこに、

「マリーさん、トルマさん！」

朗らかな少女の声飛び込んできた。サリアである。

「サリアちゃん！ よかった。心配したのよ」

「ごめんなさい、ご心配かけて」

「謝ることはない。サリアのせいではないからの」

二人と、それぞれ言葉を交わす。サリアの後から、ニックが病室に入ってきた。

「親父、マリー、久しぶりだな」

「おお、ニックか。久しいの。お前から呼び出しをかけておいて、出迎えすらなかったから、困ったわい」

「ああ、別用があつたもんでな。悪かった」

苦笑いとともに、トルマへ軽く謝ると、マリーの方を向いた。

「悪いな。色々負担かけて」

「ううん、大丈夫。貴方が、ちゃんと約束を守ってくれているなら、このくらいの負担、どうってことないから」

マリーは、静かに首を振った。横から、サリアが問いを投げかける。

「約束って、なんですか？」

ニックとマリーは、一度目を見合わせ、「秘密だ」「秘密ね」

と、調子を合わせた。

「二人だけの秘密、ってわけですか」

「そうなるわね。ごめんなさい、これは私とニックだけのものにしておきたいから」

サリアの言葉に、マリーははにかんだ。

「いえ、全然大丈夫です。すぐく素敵だと思います。むしろ、無粋なことを訊いてしまつてすみません」

身体の前で両手を大きく振り、サリアは謝り返した。

「気にしないで。それに、貴女もそういう特別な約束を、結んでるでしょう?」

そんな彼女に、マリーは優しく微笑む。一瞬だけ、チラツとカリクにも視線を向けてきた。思い当たる事柄があつたが、カリクからは何も言わない。

「あつ、えつと。まあ、はい」

一方のサリアは、しどろもどろだった。困つたように、頬をかく。「そういえば、サリアを連れて、何をしておつたんじゃ?」

一度、会話が切れたところで、やり取りの流れについてこられていなかったトルマが、話題をがらりと変えた。

「ちよつとした息抜きだ。色々、確認しておきたいこともあつたから、街の被害状況の視察がてら、散歩してたんだよ」

「なるほどのお。わしらを放つておいて、サリアといたわけか」

「言いたいことは分かるけど、視察自体は仕事だつたんでね。そうでもないと、マリーが来てるのに、そつちに行かないわけないだろ」トルマの嫌味を、軽く流す。さり気ないマリーへの言及が引つかつたものの、カリクは何も言わなかつた。

「それより、親父とも話しておきたいことがあんだよな。後でちよつと時間くれ」

「ええぞい」

ニツクが続けると、トルマは簡単に承諾した。

「それと、余計な世話じゃろうが、マリーと話す時間も作るんじゃないぞ。お前は、心配をかけすぎとるんじゃないから」

加えて、マリーへの配慮を見せた。トルマは首都住まいなのだが、ニツクよりもキュールに顔を出していた。ゆえに、気にしていたのだろう。

「……ああ。そうする」

言われたニツクは、肩をすくめながらも、そう返した。彼にも、思うところがあるのだろう。

その後は、カリクが今回の旅路を根掘り葉掘り尋ねられることになった。

質問攻めにあう最中、合間を見てカリクは、気になっていたことをサリアに尋ねた。

「なあ、サリア」

「何？」

「軍王に、どんな言葉を送ってたんだ？ ちょっと気になってさ」

戦いの最後で、軍王に仕掛けていた“オモイノチカラ”の中身に
関してだった。

「ああ、あれね。たいしたことは言っていないよ」

彼女は気恥ずかしそうに口元を緩めた。

「数字をずっと数えてただけ。一からずっとね」

カリクの病室を出て、ニツクはトルマを伴い、本部基地の屋上へと向かった。

「で、話というのはなんじゃ」

「率直に話そう。軍王の死体が、消えた」

「何……？ 詳しく話せ」

トルマは、大きく顔を歪ませた。強い口調で、先を促す。

「詳細は、俺にもよく分からない。なにせ、カリクを医務室に運んで、死体があつた駐車場に戻つたら、なくなつてたんでね」

「死体がなくなつていた、か。ずいぶんと、嫌な出来事じゃのう」

「全面的に同意するね。誰かが運んだに違いない。ミッドハイムは、脳天をぶち抜かれていたんだ。絶対に死んでいた。自分じゃ動けない」

「……もう一波乱、あるかもしれんの」

「ああ。だから、気は張つておいてくれ」

「分かった」

トルマの首肯を見て、ニックは真つ青な空を見上げた。静かに、つぶやく。

「ただ、せめて今だけは穏やかな時間をあいつらにやってくれ」

“二人の父”として、願わずにはいられなかった。

エピローグ『想いの力』

カリクが目を覚ましてから一週間。ようやく帰宅が許される程度になり、サリア、マリー、トルマと共に、キュールへと帰ることになった。ニツクの手配した車に乗り、西門までやってきた。そこには、首都に残る面子がいた。車を止めてもらい、挨拶を交わす。他とも会話していたが、カリクにかけられた言葉は、

「また、しばらくお別れだ。今月中に、一回は帰れるかもしれないが、いかんせん移行時期になるから厳しいと思う。母さんを頼むぞ、カリク」

「じゃあな、カリク君。俺っちは俺っちなりに頑張るから、そっちも頑張れよー」

「なんていうか、色々悪かったな。でも、軍王に勝ったとはいえ、俺はお前に勝ってるから、俺が暫定一位な。リベンジは歓迎だぜ」
「正直、ここまでとは思っていなかった。おかげで、私は今ここにいられる。礼を言う。ありがとう。ただし、サリアを泣かせたら、容赦しないぞ」

「だいたいこんな感じだった。カリクは、肩をすくめたり、言い返したりと、個別に応えた。」

「じゃあ、また会いましょうね。本当にありがとうございました！」
最後にサリアがそう伝えて、カリクたちは、首都組と別れた。

どんどん小さくなっていくカリクたちの乗る車を、門外に出て見送っていると、ガヌが口を開いた。

「いいんですか、ニツク少将。自分の目の届く範囲にご家族を置かないで。軍王はもういないですから、人質にされる心配ももうないでしょうに」

「……いいのさ。首都にいてほしいっていうのはあるんだが、サリアの能力は、あまり広めたくないんだ。今回の一件でかなり流布し

ちまうだろうが、それでもこれ以上知られるのは避けたいのさ。それに、一緒にいることはすべてじゃない。家族のために、できることをやるだけだ」

彼の問いに、ニツクは淀みなく答えた。強い信念が、心にある。「家族ね」

ガ又は、唯一の肉親である弟のレインへ目をやった。ジーニアスの事後処理への協力を申し出たため、首都に残ったのである。

「なんだよ、兄貴」

「いや、なんでもない」

まだ完全に関係が回復したわけではないため、ぎこちないやり取りになる。

「……まだ、完全には心は許し切れてないけど、たぶんまた兄弟になれると思うぜ。今度は、裏切らないでくれよ、兄貴」

すると、レインが淡白に言っつて、兄の脇腹を叩いた。態度以上に、そこには想いが詰まっていた。

「ああ。二度は間違えない」

受け取ったガ又は、大きくうなずいた。苦しい思いは、もうさせない。

「……なら、もう一度だけ、信じてやるよ、兄貴」

「おう」

そこにいたのは、確かに“兄弟”だった。

「それにしても……」

ポツリと、シルラが口を開く。

「ん、どうかしたのか、シルラ」

尋ねたのは、ガオだった。シルラは、顎に手を当てながら、答える。

「サリアは、どうしてカリクの危険を察知できたのだろう。“力”を持ってるのは、サリアの方なのに」

彼女が引っかけかかっていたのは、そこだった。サリアから、カリクが瀕死に陥ったとき、彼の声が聞こえたという話を聞いていたので

ある。

「なんだ。そんなことか。さして難しいことじゃない」

軽く言ってみせたのは、ニツクである。穏やかな表情で、続ける。「想いさ。互いに互いを想い合った結果だろ。“力”なんてなくても、本当は声は届くのさ。誰かを想う声はな」

頭に、カリクとサリアの姿が映し出される。仲良く、笑いあっていた。続けて、マリーが浮かぶ。彼女への言葉が届いている自信が、ニツクにはあった。カリクたちにも、その関係が当てはまるに違いない。

「さてと、そろそろ戻らないとな。これからは、本当の試練だ。ついてくる自信はあるか」

話題を移し、三人の方へと振り返って問いかける。覚悟を、問うていた。

「あるよ。絶対に、俺たちは折れない」

「もちろん。やり遂げてみせますよ」

「私事です。この二人に、後れをとるわけにもいきませんしね」

すると三人は、三者三様に強い意志を見せた。満足し、唇の端を持ち上げる。

「いい返事だ。しっかり、やり遂げてみせろよ」

「はっ！」「はっ」

揃って、敬礼をした。

軍を変えるため、ニツクは彼らとともに新たな歩みを始める。

門前でカリクを見送ったのち、シルラはガ又に連れられ、基地内の誰もいない訓練場にいた。

「なあ、シルラ」

「なんだ。さつき、ニツク少将に意気込みを問われたばかりだろう。息抜きをしている場合ではない」

彼の意図を察しながら、わざと厳しい言葉を浴びせる。それが、いつものことだから。

「分かってるよ。だけど、今だけは見逃してくれ。すぐに終わる」
彼は、苦笑していた。シルラの性格は、よく熟知されている。ずっと、意識し合っていたためである。

「お前、俺と初めて会ったときのこと、覚えてるか」

「……ああ、覚えている。ずいぶんと騒がしくて、言ってることは馬鹿馬鹿しいことばかり。第一印象は最悪だったな」

遠慮なく、当時のことを思い出して応える。心音が、知らぬ間に身体全体に伝わり始めていた。

「奇遇だな。俺も、真面目で融通のきかない、お節いな女だと思っただから、印象は悪かった」

ガヌも、似たようなことを返してくる。互いに、第一印象は評価が悪かった。

今でも、記憶ははっきりしている。彼と最初に話したのは、この訓練場だった。同じ班になったのである。当初は性格が合わず、いがみ合っていた。

「まあ、そうだろうな。あれから、どれだけ辛辣なことを言われたのか、数えだしたらきりがねーや」

だが、今だにこうして共にいる。嫌ならば、離ればいいのに。

「でも、変に弱いところがあって、放っておけなかつたんだよな。すぐへこむし」

「貴様は逆に、何があっても元気だったな。私のミスを肩代わりしたときは何事かと思っただぞ」

士官学校時代に、訓練中にシルラがへまをしたとき、彼は自分のせいだと主張したことがあった。教官に叱られる彼の背中を見ていたシルラは、まず啞然とし、気づけば彼の隣にいつて、教官へ頭を下げていた。

「それなのに、お前は馬鹿正直に本当のこと言っちゃまってさ。結局二人で大目玉だ。あれは恥ずかしかつたね」

ガ又は、懐かしそうに目を細め、訓練場を見渡す。シルラからは、横顔が見えていた。

「俺はな、シルラ。あのあたりから、ずっと言いたいことがあったんだ。事情があつて、言えなかつたけどな」

「だろうな。いつもは、何も悩みなどなさそうに振る舞っているくせに、貴様はいつも影を背負っていた。この私とすら、一線を引くほどのな」

だから、こちらから近寄ることもできなかった。あちらが、離れていってしまうから。踏み込むことも、できなかった。

「的確なこつた。その通りだ。俺は、幸せになつちゃいけなかつた」からな」

「……レインか」

彼の弟の名を上げる。幸せを拒んでいた理由は、それしかなかった。

「ああ。あいつが、ジーニアスで非人道的な実験に協力させられるのに、俺が幸せになるなんて、考えられなかつたんだ。だから、深くは関わらないようにした。後々、迷惑かけるのも嫌だつたからな」

境遇の差による罪悪感から、彼は幸せを拒んでいたのだ。

「なるほど。お前らしい」

シルラは肩をすくめた。軽い態度に反して、責任感の強い彼らしい考え方であった。

「けど、あいつは俺を許してくれた。だから、もう迷う必要もないのさ」

そう言つて、彼はこちらを向いてきた。苦惱から解き放たれた不敵な笑みを浮かべていた。全身が、ゾクリと冷える。恐怖ではなく、心地よい感覚だった。

「シルラ。信念が揺らくほどに、お前が好きだ。一緒に歩いていきたいと思つてる。今までも、これからも」

余計なものがない、シンプルな言葉だった。心の奥深くに、染み

入ってくる。余韻に浸るかのように、目を閉じた。彼が自分を待っていることを知りつつ、黙り込む。

「……お前は、どうなんだ、シルラ。答えは、今でなくてもいいんだが」

それに耐えかねて出た彼の言葉に、ため息をついた。言わなくても、分かるだろうと。目を開け、彼へ近づいていく。

そのまま、彼に抱きついた。

「シ、シルラさん……？」

いきなりすることに、戸惑っていた。彼の鼓動を、そして匂いを感じながら、また息を吐く。

「これが私の答えだ。まだ足りないか、ガヌ」

呆れ気味に言った。背中に回した腕の力を強める。ガヌは、長く言葉を失っていたが、

「いや、充分だ。ありがとう」

言葉と共に、抱きしめ返してきた。彼の腕が、背中に回される。今まで越えることのできなかつた一線を、越えていた。

ずっと、想い続けてきた存在が、手中にある。超えられなかつた壁の、内側にいる。その事実が、ただ嬉しかった。

「悪かつたな、シルラ」

「言っな。しばらく黙っている。それだけでいい」

「……分かつた」

戦いが終わったこれからが大変だろうというのは重々承知していたが、何も不安はなかつた。歩みたい人間と、共に歩んでいけるから。

二人だけがいる訓練場は、静かな時を与え続ける。ほんのわずかながらも、濃く優しい時間を。

カリクたちは、三日間かけて、ようやくキュールへと帰ってきた。

故郷たる街は、出る前より空気が少し浮わついている。軍王が討たれたという話が、すでに伝わっているらしい。今乗っているのが軍用車だったら、囲まれていたかもしれないが、ニツクの計らいで一般車だったため、誰からも気に留められる様子はなかった。

街並みを横目に、サリアが言葉を漏らす。

「なんだか、久しぶりに感じるな。そんなにたいした期間離れてたわけじゃないのに、一年ぶりくらいの気分」

「まあ、色々あったからな。そんな気持ちになるのもしょうがないさ。俺も、似たような気分だし」

カリクも同調した。町を離れてから、あまりにも色々なことがあったのだから、無理もない。

「そういえば、お母さんたちはどうしてますか？ 来なかった理由は想像できるからいいんですけど、元気になってますか」

サリアが目線を落としながら、マリーとトルマに対して尋ねた。両親から嫌われていることを自覚しつつも、彼女は文句一つ口にしたことがなかった。

「元気にしてるだろうさ。厄介な奴がいなくなったとも思ってるだろ。胸くそ悪い」

彼女に代わって、カリクが悪態をつく。彼女の両親のことは、かなり昔から嫌っていた。

「カリク、そう悪く言わないで。私のこと、育ててくれた人たちの」

サリアから、穏やかにたしなめられる。腕組みをして、シートにもたれた。マリーとトルマが答えるだろうと、彼らへ目をやったのだが、なぜか黙り込んでいた。

「マリーさん？」

予想外の反応に、サリアは不安げに眉を下げた。保護者二人が、意味ありげな表情を浮かべていたのである。

「……何かあったのか」

カリクが尋ねると、二人は目を合わせた。それから、マリーがゆ

つくりと口を開く。

「……ええ。カリクがキュールを出てからしばらくして、行方不明になったの。家の鍵がかかっていなかったから、旅行というのはありえないわ」

「行方不明……？」

サリアの顔が一気に青ざめた。

「軍にでも連れていかれたか」

対照的にカリクは、軽い口調だった。どうなっていようと、構いはしなかった。

「分からない。何も情報がないから」

マリーは首を横に振った。続けてカリクは、軍の内情に詳しいであろうトルマへ視線を移す。

「わしを見られても、何も答えられん。ニツクも知らんと言っておつたしの」

しかし、彼も肩をすくめただけだった。本当に、何も分からないらしい。

「そんな……」

サリアは、そう言ったきり、うつむいて黙り込んだ。彼女の様子を心配しつつ、カリクは他の二人に尋ねる。

「サリアの家に、何も残されてなかったのか？」

「……何もなかった」

かすかに間を空け、トルマが絞り出すように答えた。本当かどうか怪しんだものの、

「そうか」

追及はしなかった。

「そういえば、そしたらサリアは家に一人ってことか？」

ふと頭に浮かんだ、別の疑問を口にした。家に一人というのは、やや不安があった。

「いいえ。女の子が一人暮らしっていうのも心配だから、うちに来てもらうことにしたわ」

「ふーん。うちにね」

あっさりとしたマリーの言葉を、一瞬、簡単に受け入れかけて、すぐにおかしなことに気づく。

「えっ、うちに?」

「そう、うちに」

その意味をもう一度、脳内で噛み砕く。完全に理解したとき、

「はあああああ!?!」

さすがのカリクも、大声を上げた。

「だって、ご飯や家事のこともあるのよ。サリアちゃんはまだ学生だし、そんなに無理はさせられないわ。そしたら、うちに来てもらうのが一番いいじゃない」

驚くカリクに対し、マリーは当然と言わんばかりにあっさりとしていた。サリアも、ポカンとしている。

「ちよつと待て。なんでそんなこと勝手に決めてるんだ」

「勝手について言われても、私はあなたたちの保護者だもの。最善策を実行する義務があるわ」

反論にも、マリーはまったく揺るがない。矛先をトルマへ向ける。

「おい、じいちゃん。あんたも保護者だろ。なんとか言ってくれよ」

「わしからは何も無いわい。お前らのことに関しては、マリーを信頼しとるからの。それに、サリアと住むのは嫌か?」

「んなっ……」

彼の返しに、カリクは言葉を詰まらせた。話を振る相手を間違えたと、心の平静を保ち直して、攻め方を変える。

「けど、サリアの意見が一番大事だろ。それを訊かないで決定するのは、よくないと思うぞ」

「それは確かにそうね。サリアちゃん、うちで暮らすのは、嫌?」

マリーは、すぐさま本人に確認した。少し、戸惑う様子を見せてから、サリアは答える。

「皆さんがよければ、私は全然構わないです」

了承だった。彼女がいいのなら、もうカリクに反対する理由はな

かった。

「……分かった。母さんの提案どおりでいいよ。俺も構わないしな」
「はい、決定ね」

マリーは、優しい口調とともに、目尻を下げた。最初から、まとまるのが分かっていたようだった。

「それにしても、お母さんたちはどこに行ってしまったんでしょう……」

サリアの言葉で、明るくなっていた空気が冷める。明るくしろと言う方が、無理な話だった。彼女は、優しいのだ。

「……見つかるわ、きっと」

「マリーさん……。ありがとうございます」
そう言うのが、精一杯だった。

家に戻ったカリクは、荷物を置くと、サリアの元へ向かった。彼女は、マリーに二階の空き部屋へ案内されていた。今は、半ば物置にされている。

「ここは、余ってた部屋なのよ。今日は一回私と同じ部屋で寝てもらって、明日空けるわ」

「分かりました。明日、私も手伝いますね」

「ありがとう。とりあえず、今日はよく休んで、荷物を取りに行くのも明日にするといいわ」

「はい。そうさせてもらいますね」

二人が部屋を離れようとしたところで、

「サリア」

カリクはサリアを捕まえた。

「カリク。どうかした？」

振り向いた彼女は、わずかに首をかしげた。長い黒髪が、揺れる。「疲れてるところ悪いんだが、ちょっとついてきてくれるか」

「……どこまで？」

尋ねてきた彼女の表情は、少しいたずらっぽかった。

「いつものところだ」

ぶっきらぼうに答えた。隣で穏やかに微笑む母親も煩わしい。

「ほら、行くぞサリア」

だが、そこで目線を気にはかけはしない。もう、周囲を気にするのはやめようと誓っていた。サリアを、一人にしないために。だから、彼女の手をとった。

「……うん」

彼女は、少し驚いた様子を見せたものの、すぐに頬を緩ませた。こちらが引つ張ってやると、逆らわずについてきた。一緒に、外へと向かう。

助け出した少女の小さな手の温もりが、確かにカリクの手の中にあつた。

カリクとサリアが去った後、マリーは居間へと足を運んだ。二人のことは微笑ましかつたが、ある件のことか頭にあり、心から喜ぶことができなかった。

居間では、トルマがテーブルに置いたお茶を前に、腕を組んで黙り込んでいた。

「お義父さん。あのことは、サリアちゃんには……？」

向かい側に腰掛けながら、尋ねる。トルマは、一度唸ってから、口を開いた。

「話すべき、じゃろうな。早いうちに。警察から聞くよりは、わしから話しておいた方がいい。それに、あの子は察しい。すでに、わしらが何かを隠していることには、感じているじゃろうしな。カリクも嗅ぎ取ってるじゃろ」

口調は、重々しい。サリアの義理の両親が消えたのは本当だが、

それ以上の事実がある。

「サリアの両親は、おそらく生きておらん。あれだけ、大量の“血痕”を見ている身としては、そう言わざるを得んわい」

サリアの家のリビングが、血で真っ赤に彩られていたのだ。警察の現場検証もすでに終わっている。サリアのことは、旅行中ということと誤魔化したのだが、ほどなく彼女にも警察からの問いかけがくるだろう。首都にいたのは事実なので、ガヌとシルラがいれば、疑いが向くことはない。だが、サリアが受ける精神的なショックは、計れない。

「おまけに、荒らされているのに金目のものは手つかずとなると、目当てはサリアだった可能性が高い。何か手に入れられたのかどうかは、分かんが」

目を閉じ、唇を結んで考え込む。いったい、どんな目的を持っていたのか。

「軍王の仕業ということはないんでしょうか。サリアちゃんが関わっているのなら、そういうこともありえるんじゃないでしょうか」

マリーが、一つ推測を挙げる。だが、トルマは否定的だった。

「いや、それはないとわしは思う。奴にとって大事だったのは、サリアの力じゃ。あの両親が義理だと知っておったようじゃし、殺す必要性がない」

真つ当な意見だった。それに、もし何かしらの行動を嫌がったのなら、マリーたちに何も起きなかったのは不自然である。

「なら、誰が……」

「分からん。ただ、軍王以外の何者かがいると考えておいた方が、無難じゃろうな」

トルマが結論を言うと、沈黙が訪れた。重くのしかかる。大きな脅威は越えたというのに、今度は謎の脅威が現れたのかもしれないのだ。

「せめて……」

マリーが、絞り出すように声を発した。トルマが目を開けて、こ

ちらを見てくる。

「せめて、今だけは幸せな時間を過ごさせてあげたいですね」

「そこは、わしらが心配するところじゃないのう。あの子にとつては、カリクと一緒にいてくれることが、一番の支えになるはずじゃ」

眼前の義父は、口元を少しだけ緩めた。マリーも釣られる。

「そうですね。カリクも、今回の事件で、心構えを改めたみたいですし、あの子たちなら、きつと……」

どんなことがあっても、乗り越えられる。そう信じられることが、救いだつた。

心の底にこれからの不安を抱えながらも、今は忘れてカリクはサリアの手を引いていた。外は、夕日の橙色に包まれている。親子連れや小さい子どもたちとすれ違いながら、噴水のある広場へとたどり着いた。暗くなり始めているので、人の姿はまばらだつた。水しぶきの上がる噴水の前で、カリクは足を止めた。サリアも、それにならう。手を握り替えて、カリクは振り返つた。

「サリア」

「何？」

そこには、綺麗な黒髪を持った、穏やかな笑みの幼なじみが立っていた。彼女の瞳が、唇が、声が、雰囲気、心を捕らえて放してくれない。先走る想いを抑え、真っ先に言わなければならぬことを口にした。

「今まで、悪かった。本当は、そばにいてやるべきだつたのに。嫌な思いさせて、すまない」

視線を斜め下へ放る。まともに、彼女を見られなかった。自分が出したことの残酷さを考えると、どれだけ謝つても、足りないくらいなのだ。どんな反応がきても、受け入れるつもりだつた。

だが、

「そんなの別にいいよ」

返ってきたのは、至極穏やかな声だった。

「カリクらしいとは思っけど、ね。私が欲しい言葉は、そういうのじゃないよ」

加えて、そんな要求をされた。顔を上げて彼女を見ると、変わらぬ微笑を湛えていた。謝罪ではなく、自分から言っただけという自信もあつたが、すぐに思いついたし、それに違いないという自信もあつたが、ためらいが喉を開かせてくれなかった。

彼女は、何も言わずに待っていた。カリクは、喉で止まっている言葉をどうにか引つ張り上げる。

「俺が言いたいことで、合ってるよな」

大切なことは、まだ深く沈んでいるので、まずそんな問いから入る。ほぼ言っているに等しいのだが、直接口にするのは別物なのだ。「合つてると思うけど、確かめたいならちゃんと言葉にしないと分からないよ。大変だと思うけど、ね」

カリクの苦勞を察して、彼女が気遣いを見せてくる。ただ、この場で必ず話させるという意志が底にあった。

「大変なんてもんじゃないんだが……」

頭をかき、一息入れた。気合いを入れ直し、伝えるべき想いを絞り出す。

「俺はずっとサリアと一緒にいた。小さい頃からずっとだ。誰よりも、理解してる自信がある」

一度、切った。そこで間が生まれたものの、サリアは何も言わない。静かに耳を傾けている。

「高校に上がったあたりからは、あまり一緒にいなくなったが、嫌いになったからじゃない。ただ、周りの目が気になったんだ。誰が見ても、関係ないのに。そのせいで、寂しい思いをさせてたと思う。だから、サリアが攫われたとき、すごく今までの態度を後悔した。周りを気にして、自分の中の一番大事な感情を、隠しちまったんだからな」

気持ち、彼女との距離を詰める。喉で止まっていた想いは、今やむしろ止まらなくなっていた。

「サリア」

「……はい」

名前を呼ぶと、黙っていたサリアが、応えてくれた。高ぶった感情を、言葉に乗せて、伝える。

「親父や母さんよりも誰よりも、君が好きだ。もう、放れない。放しもしない。ずっと一緒だ。今までも、これからも」

余すことなく、思いの丈をぶつけた。唇を結び、目の前の幼なじみを見つめる。他の何よりも大切な、かけがいのない異性を。本当に、世界に等しい人間を相手にしたくらい、大事で大事で堪らない存在だった。

サリアは、自身の心へカリクの言葉を染み込ませているかのよう
に、目を閉じ、穏やかな表情で黙っていた。やがて、まぶたをゆっ
くりと持ち上げ、カリクへと微笑んできた。心へと、言葉が飛び込
んでくる。

『私も同じだよ、カリク』

瞬間、彼女を強引に抱き寄せた。耳元で囁く。

「“力”じゃなくて、ちゃんと、“声”で、聞かせてくれ」

「……えっ」

驚きと恥じらいの混じった声が漏れる。

「言わないとダメ？」

「ああ。言ってくれないと放さない」

言っても放さなくせに、というつぶやきが聞こえたが、譲歩する気はなかった。やがて、小さな声で、でもはっきりとした言葉が聞こえた。

「好きだよ、カリク」

彼女をさらに強く抱きしめる。これから起きるかもしれない悪い予感はずべて忘れ、幸せを噛み締めた。

必ず守り通す。どれだけ、手を汚してでも。幸せの代償を払うこ

とに、抵抗はなかった。

- 完 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1004x/>

オモイノチカラ

2011年12月20日12時56分発行